

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書10

—長野市内 その8—

かわだじょうり
川田条里遺跡

第2分冊（遺物編）

2000.3

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書10

—長野市内 その8—

かわ だじょうり
川田条里遺跡

第2分冊（遺物編）

2000.3

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター



珠文鏡（古墳前期）



管玉・勾玉・ガラス玉（弥生後期～古墳前期）



ベンガラが付着する磨製石斧（左：弥生中期、右：弥生後期）

第2分冊（遺物編）目次

巻頭図版

凡例

第1章 遺物の概要	1
1 出土遺物の概要 2 遺物出土状況の概要	
第2章 土器・陶磁器	
第1節 縄文時代.....	3
1 概要 2 晩期前半の土器 3 晩期後半の土器	
第2節 弥生時代.....	3
1 概要 2 壺形土器・広口短頸壺形土器 3 高坏・鉢形土器・蓋形土器 4 甕形土器	
第3節 古墳時代.....	6
1 概要 2 土師器 3 須恵器	
第4節 奈良・平安時代.....	7
1 概要 2 須恵器・土師器・灰釉陶器 3 篋書土器・墨書土器・墨痕	
第5節 中世・近世以降.....	9
1 概要 2 カワラケ・内耳鍋 3 陶磁器	
第3章 石器・土製品・石製品・金属器	
第1節 石器.....	11
1 縄文時代・弥生時代の石器 2 古墳時代以降の石器	
第2節 土製品・石製品・金属器.....	14
1 土製品・石製品・ガラス玉 2 金属器	
第4章 木製品	
第1節 木製品の概要.....	16
1 木製品の分類 2 木製品の概要と出土状況	
第2節 農具.....	18
1 鋤 2 鋤 3 扶（柄振） 4 農具の柄 5 馬鍬 6 田下駄（大足） 7 横楯	
8 編具 9 主な用途不明木製品	
第3節 武具・祭祀具.....	25
1 弓・矢・盾 2 祭祀具	
第4節 服飾具.....	26
1 下駄 2 櫛	
第5節 容器.....	27
1 刳物 2 挽物 3 曲物 4 その他の容器	
第6節 用途不明木製品および加工材.....	31
1 有頭状木製品 2 弓状木製品 3 棒状木製品および加工材	
4 板状木製品（含む加工材） 5 有孔棒・有孔板木製品（含む加工材） 6 その他	
第7節 建築部材.....	35
1 建築部材の分類 2 縦材（竪材） 3 横架材 4 屋根材 5 付属材	
第8節 小 結.....	43
1 農具について 2 建築部材について	
土器観察表	52
石器観察表	64
木製器観察表	66
遺物図版	73
写真図版	

遺物図版目次

縄文時代晩期の土器	図版 1・2
弥生時代の土器	図版 3～18
古墳時代の土器	図版19～22
奈良・平安時代の土器	図版23～25
中世・近世の焼物	図版26～29
石器	図版30～38
金属器・土製品・石製品	図版39～41
木製品（農具）	図版42～54
木製品（武具・祭祀具）	図版55・56
木製品（服飾具）	図版57
木製品（容器）	図版58～65
木製品（用途不明木製品および加工材）	図版66～81
木製品（建築部材）	図版82～113
木製品（加工材・杭）	図版114～118

写真図版目次

縄文時代土器	PL 1～2
弥生時代土器	PL 3～6
古墳時代土器	PL 6
須恵器・陶磁器・カワラケ	PL 7
石器	PL 8～10
金属器・土製品・石製品	PL 11～12
木製品（農具）	PL 13～23
木製品（武具・祭祀具）	PL 24～25
木製品（服飾具）	PL 26
木製品（容器）	PL 27～33
木製品（用途不明木製品および加工材）	PL 34～46
木製品（建築部材）	PL 47～75
骨	PL 76

挿図・挿表目次

第1図 農耕具（鋏・鋤・袂）の分類	第1表 A 2地区遺構別土器破片数
第2図 主要農具の細部名称	第2表 出土銭貨一覧表
第3図 白形木製品略図	第3表 木製品の時期別点数
第4図 柱仕口加工の比較	第4表 農具の時期別出土点数
第5図 榫・蹴放材の比較	
第6図 垂木仕口加工部の比較	
第7図 有頭状垂木仕口加工部の比較	
第8図 梯子の比較	

第1章 遺物の概要

1 出土遺物の概要

中世の居住域であるA2地区以外はほとんどが水田関連遺構であり、水田域から土器、石器、土製品、石製品、木製品、金属器が出土した。水田畦畔と水路より6000点の木製遺物が出土しており、農具や建築部材などの木製品が多数出土した。建築部材は弥生時代後期から古墳時代のものが多く、農具などの小形の木製品は弥生時代後期から近世に至るものが出土した。第2分冊「第4章木製品」で報告したものの以外にも建築部材と思われる板状の加工材などが認められ、それらについては、第3分冊第12章に概要をまとめた。また、木製遺物の分類・樹種・法量などの属性を、添付したフロッピーディスクに収録した。

土器は縄文時代晩期から近世陶磁器まで各時期のものが出土した。縄文時代晩期はA地区とD地区に集中して出土した。弥生時代中期は出土土器が少なく、弥生時代後期には中期と比べ多量の土器が出土した。後期土器の多くは集落域に近いE2地区で出土したものである。古墳時代に入ると遺物は少なくなり、特に中期、後期の遺物は極めて少ない。奈良時代以降も水田域の土器は少なく、おもに溝内より出土する。水田耕作土（水田層）からの遺物採取を行っていないので、厳密さを欠くが、水田に残された土器の量は、弥生時代中期、後期には比較的多く見られるのに対し、古墳時代中期以降極めて少なくなる。B地区SD103より古墳時代から平安時代前半期の土器が多量に出土し、古代においては出土した土器の大半はB地区SD103の遺物である。また、中世では、出土遺物の9割以上はA2地区の集落域から出土したもので、水田域より出土したものは極めて少ない。

土器は時代別にまとめて報告したが、時代の境界部分でどちらの時代に含めてよいか迷うようなものは古い時代の項で報告した。なお、土器の実測図において、器面調整のミガキとナデの表現に矢印を用いたものがある。矢印はミガキ又はナデの方向を示しており、詳細は遺物観察表の記載を参照して頂きたい。

石器では縄文時代晩期から弥生時代中期のものが多く出土しており、打製石斧、打製石包丁と考えられる刃器、磨製石包丁など水田に関わる石器が出土した。また、中世以降の石臼、石鉢などがA2地区の集落域より多く出土した。

この他に、人骨、獣骨、種子などの自然遺物が多数出土した。これらについては第3分冊第9章、第13章を参照して頂きたい。

2 遺物出土状況の概要

本分冊では個々の遺物の特徴について記述し、遺物出土状況は第1分冊当該遺構で記述した。なお、埋納などの人為的な設置状況が想定されるものなど、特異な出土状況のものを以下に列挙する。

木製品では以下の事例がある。

- ・C地区第4水田の下層より馬鋸が出土。（古墳時代後期から奈良時代）
- ・畦畔の構造材として用いられた木製品。畦畔内の木材の敷設は、弥生時代後期から古代まで確認されるが、弥生時代後期から古墳時代にかけて、大形の建築部材が転用される例が多い。また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて多量の杭の打設を伴う畦畔が見られる。（C地区SA01、D地区SC

1001など)

- ・D地区第6A水田上面より白形木製品が出土。(弥生時代後期)
- ・B地区SD103より大量の土器と共に甕と馬形が出土。土器には墨書土器が含まれる。(奈良・平安時代)

石製品・土製品・金属器では以下の事例がある。

- ・D地区SC1001(杭列群)内より赤彩されていたと思われる偏平片刃石斧と、勾玉が出土。(弥生時代後期埋没)
- ・C地区SA01(杭列群)内より勾玉、管玉、ミニチュア土器などが出土した。(古墳時代初頭)
- ・D地区の第6調査面に軽石が多く出土する。(古墳時代初頭埋没)
- ・E2地区第2水田大畦畔(SC38)の盛土内より珠文鏡が出土。(古墳時代前期埋没)

土器では以下の事例がある。

- ・畦畔内にはほぼ完形の土器が単独で出土した。古墳時代ではB地区SC1005、C地区SC52、C地区SC02、弥生時代後期ではC地区SC41、D地区SC110などの事例がある
- ・E2地区第4調査面に弥生時代後期の壺・甕が集中して出土した。
- ・E2地区の井戸址(SK01)より多量の土器が出土した。

これらの他に鳥形土製品、密教法具の鈴など特殊な遺物が出土したが、出土状況が明らかでない。

第2章 土器・陶磁器

第1節 縄文時代

1 概要

縄文時代は晩期の遺物のみである。縄文晩期の遺物はA4地区で水Ⅱ式、D地区では佐野Ⅱ式の土器群が出土した。A地区で焼土址が伴った以外遺構は検出されず、約20mほどの範囲にまとまって出土したのみで、遺物量も少ない。キャンプサイトのな性格の遺跡であろう。

晩期の調査面は地表下1.5m～2.3mほどの深さであり、更に下層の調査は行っていない。長野市松原遺跡、長野市石川条里遺跡、更埴市屋代遺跡群¹¹⁾などの沖積地に立地する縄文時代の調査例から、更に下層に縄文時代後期以前の包含層が存在する可能性を否定できない。

なお、個々の土器の記載は土器観察表に記す。

2 晩期前半の土器 (図版1-1～27)

1～27はD3地区27-1層よりブロック状にまとまって出土したものである。5・13・23・26は弥生時代中期の溝(SD11)より出土したものであるが、これらは下層の包含層から巻き上げられたものであり、他の土器と一括遺物と考えられる。いずれも佐野Ⅱ式であり、8・16・17は口縁部に縄文施文の後、赤色の顔料が塗られている。15は赤漆と思われる塗料が塗布される。提示していないが赤漆が塗られた土器片が数点確認される。底部7点中4点には網代痕が認められる。

なお、図示はしていないが、D1地区第8調査面より縄文時代晩期前半の無文土器が数点出土した。

3 晩期後半の土器 (図版1-28・図版2-29～55)

A4地区とD2地区から出土した。28はD2地区出土で、佐野Ⅱ式の遺物集中区とは別地点であり、肩部に段を有し、口縁に向かって外湾する器形から晩期後半のものと判断した。胴部はナデ調整であり、条痕が顕著であるA4地区のものとは異なる。29～55はA4地区のSQ01とした直径20mほどの範囲に集中して出土し、一括遺物と判断される。なお、土器の多くは水Ⅱ式に対比され、細密条痕の施された変形土器である。細密条痕は木口によると思われる条の整ったもので、遺物観察表ではハケメと表記した。

第2節 弥生時代

1 概要

水田の時期を示すために、弥生時代を以下のように4期区分した(第1分冊第3章4節参照)。遺物観察表はこの時期区分に従う。弥生Ⅰ期は栗林式より古い段階、弥生Ⅱ期は栗林式の時期、弥生Ⅲ期は後期

前半の吉田式の時期、弥生Ⅳ期は箱清水式の時期に概ね対応する。水Ⅱ式並行を弥生時代に含める見解もあるが、本書では水Ⅱ式並行の土器（29～55）は縄文時代晩期の節で提示した。これらはA4地区で焼土と共に纏って出土したものである。これらの他に川田条里時期区分弥生Ⅰ期と考えられるものが同じA4地区より2点出土した（262・263）。この2点は条痕による文様が認められ、胎土も類似する。これらは水田区画に伴うものではなく、当該期の水田の存在を示す資料は今回の発掘調査では得られていない。

弥生Ⅱ期の土器は畦畔内や水田面から出土したもので、特にB地区、D地区に纏ってみられるが、その数はあまり多くない。これに対し弥生Ⅲ・Ⅳ期になると全地区に遺物が出土し、E1・E2地区を中心に、完形品及びほぼ器形が復元できる土器が比較的多数得られた。これらの土器は水田域以外の微高地上及び水路や井戸の中から出土したものが多い。

図版は器種毎に遺物を提示し、概ね時期的な変遷を考慮して配置した。壺形土器（56～129・235・242～260）、外来系の壺形土器（130～132）、広口短頸壺（133～148・261）、高坏（149～185・187）、鉢形土器（145・147・186・188～191）、蓋形土器（192・193）、甕形土器（194～234・236～241・262～331）の順に示した。

土器の器面調整、使用痕跡などの項目は土器観察表に記した。なお、甕形土器・壺形土器には焦げ付きのような炭化した黒色付着物と、光沢のある薄い膜のようなタール状の黒色付着物が観察された。前者は「黒色付着物」、後者は「タール状の黒色付着物」と表記した。「黒色付着物」は煮沸に伴う焦げ付き、「タール状の黒色付着物」は漆の痕跡と判断したが、理化学的な分析は行っていない。「タール状の黒色付着物」は壺形土器と高坏のみに見られ、「黒色付着物」は甕形土器に多く見られる。

2 壺形土器・広口短頸壺形土器

壺形土器（図版3～図版10-56～129、図版16-235・242～260）

56～66・242～253は弥生時代中期（弥生Ⅱ期）、67～120・254～260は弥生時代後期（弥生Ⅲ期・Ⅳ期）、121～129は弥生時代後期末～古墳時代初頭（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）である。65・66は口唇部が細かな波状で、65は口縁部内面のみ赤彩され、後期前半の壺形土器の特徴を持つ。67～81・116～118は小形、82～115・119・120は大形のもので、小形ものは後期前半のものが多い。75は小破片であり、古墳時代土器の可能性もある。

69・71には漆と思われるタール状の黒色付着物が見られ、71は胴部下半に大きな穿孔部がある。タール状の付着物は112・120などの大形の壺にも認められる。112は輪積痕跡に沿って帯状に付着しており、割れ口にも付着している。120も同様に割れ口に付着しており、タール状の付着物は接着材として用いられたものであろうか。タール状の黒色付着物が見られる小形の壺は接着剤の容器として用いられたと考えられる。141などの広口短頸壺にも同様の付着物が見られる。72は頸部T字文の横位と縦位の施文具が異なっており、90・100・103・258などにも異なった施文具によるT字文が見られる。74・82・96・97・99・106は赤彩がなく、頸部文様が簡描直線文又は簡描籐文のものにはハケメが顕著に残り、T字文のものにはハケメは認められない。また、口縁内面のみ赤彩されるものにもハケメが顕著なものが見られる（84・86・90）。67・260は頸部文様帯の下部に鋸歯文が見られる。また、85・101などは赤彩による文様表現が伺われるが、欠損部が多く確証はない。74・259などは焦げ付き状の黒色付着物が見られ、煮沸に用いられた壺形土器の存在を示唆する。112は大形で復元に歪みが生じているが、T字文のボタン状貼付は本遺跡で希な例である。

121～124・127～129は胴部下半に稜を有する箱清水式の特徴を残しつつ胴部が球胴化したものである。赤彩がなされないもの、T字文が無いものなどが見られる。これらは頸部が屈曲しており、弥生時代終末

から古墳時代初頭（弥生IV期末～古墳I期）の特徴を示している。125・126は同一個体と推定され、出土層位から弥生時代終末～古墳時代初頭（弥生IV期末～古墳I期）のものとして判断される。

外来系の壺形土器（図版10—130～132）

130は肩部に二列の刺突列が巡り、132と共に北陸系の壺である。131は弥生時代中期（弥生II期）の土器と共に出土したもので、赤彩と細かな櫛描波状文が見られるが器形が不明である。外来系の土器は図示した3点のみである。

広口短頸壺（図版11—133～144・146・148、図版16—261）

133は弥生時代中期（弥生II期）、134～139は弥生時代中期末から後期前半（弥生II期末～弥生III期）、140～148は弥生時代後期（弥生III期・IV期）のものであろうか。

3 高環・鉢形土器・蓋形土器

高環（図版11・12—149～185）

149・150は中期（弥生II期）、153・162・169・170などは中期末～後期前半（弥生II期末～弥生III期）の土器と伴出しており、後期の中でも古い様相を示すものである。162は坏部内面のみ赤彩され外面はハケメがのこり、脚部が弥生IV期のものに比べ短い。167・184・185は後期末～古墳時代初頭（弥生IV期末～古墳I期）のものである。器形が復元できるもののは大半はD地区、E地区に集中し、E地区の土器集中（SQ）は弥生III期の水田面の上層に形成されたものである。

鉢形土器（図版11—145・147、図版12—186～191、図版19—332～336）

145と147は底部内面にも赤彩があり、鉢形土器であろう。186は中期（弥生II期）、他は後期（弥生III・IV期）の所産である。147・188・191は後期前半（弥生III期）、190は中期～後期前半（弥生II期～弥生III期）の土器と伴出する。なお、332～336はいずれも赤彩が無く、赤彩された鉢形土器とは形態が異なるが、弥生時代の鉢形土器とした。332、336は後期前半（弥生III期）の土器と伴出し、333と334は遺構の検出層位から、弥生時代後期の遺物と認識した。なお、187は高環の可能性がある。

蓋形土器（図版12—192・193）

192は古墳時代前期の水田の被覆層、193は弥生時代後期の水田面より出土したものである。本遺跡で蓋形土器はこの2点のみである。

4 甕形土器

甕形土器（図版13～図版16—194～234・236～241、図版17・図版18—262～331）

194～197・241・262～275・280・284・285は中期（弥生II期）、198・277・279・281～283・288・289は中期末～後期前半（弥生II期末～弥生III期）、他は後期（弥生III・IV期）のものと思われる。

中期の甕形土器では、194と196が畦畔の構造材として埋め込まれていたものである。197は水式の甕形土器（28）、弥生I期の壺形土器（59）と同一層位（27-1層）で出土し、27-1層では中期（弥生II期）の溝（SD2005）が検出されている。中期の甕の大半は粟林式であるが、262・263は粟林式以前のもので、本報告書では弥生I期としたものである。当該期の土器は少なく、弥生I期の水田遺構は検出されていない。

後期では、より古い様相（弥生III期）を示す198～205・207～209・218～221・286～295・300と、より新しい様相（弥生IV期末～古墳I期）を示す224～226・231などが見られる。他のものはこれらの中間に位置するものである。前者は頸部から口縁が短く、やや内湾するものが多い。頸部の文様が2段の櫛描波状文のもの（219・295）、T字文のもの（200・208・293・294）などが見られ、口縁内面の赤彩（201）な

と特異な例がある。202・203は胴部内面にハケメが顕著で、他の甕形土器の胴部内面がミガキであるのと異なる。また、器面にハケメを残す例(218・221など)が古い段階のものに多く見られる傾向がある。後者の新しい様相を示すものは胴部が球胴化し、頸部の屈曲が顕著となり、櫛描波状文が乱れる。

223・225・226・238は畦畔内より出土しており、ほぼ完形に復元されることから、人為的に埋納したものであると思われる。

第3節 古墳時代

1 概要

水田の時期を示すために、古墳時代を以下の4時期に区分した(第1分冊第3章4節参照)。遺物観察表はこの時期区分に従う。古墳Ⅰ期は箱清水系の土器⁽²⁰⁾が残る時期である。古墳Ⅱ期は箱清水系の土器が姿を消し、土師器・埴輪土器が出現するまでの時期である。なお、古墳Ⅱ期は屈折高坏出現を境に前半期と後半期に区分した。古墳Ⅲ期は土師器・埴輪土器が出現し定着する時期である。古墳Ⅳ期は榎田遺跡の時期区分Ⅲ期以降に相当し、屈折高坏が消滅し、埴輪土器の内面の稜が底部付近に見られる形態が出現し、甕の長胴化が明確になる時期である。

弥生時代に比べ出土土器量は少なく、土器の多くは古墳Ⅰ期～Ⅲ期前半のもので、Ⅲ期後半～Ⅳ期のものは少ない。特に、Ⅳ期の長胴の変形土器はほとんど見られない。338・356・398・399・419・426・427など畦畔に埋納されたと思われる出土状況を示したものがある。

2 土師器

埴輪土器・鉢形土器・甕 (図版19—332—356、図版20—381)

埴輪土器と鉢形土器の区別が明確ではなく、まとめて報告する。332—336は手づくねで、器形もあまり整っていない鉢形土器である。これらは供伴土器、出土層位から弥生時代後期のものである可能性が高い。343—356は内面黒色処理が施されている。350—354は内面の稜が底部付近に認められ、他の埴輪土器より後出の形態である。338・355・356はほぼ完形であるが、他は小破片である。381は甕で、平安時代の水田面より出土した。

高坏・器台 (図版19—357—380)

357・358・360・361は器台、他は高坏である。358は勾玉、管玉などと共に杭列群に伴って出土した。B2地区SD103より多く出土しているが、SD103は弥生時代中期～平安時代前半の遺物が多量に出土した溝である。379・380は埴輪内面黒色処理を施したもので、古墳Ⅳ期の高坏はこの2点が確認されたのみである。

壺形土器 (図版20—382—399)

382—392は小形の壺形土器で、385—387は薄手の小型丸底土器である。386はほぼ完形で、B地区第6水田の畦畔上部から出土しており、埋納した土器であろうか。396は残存部が多く、399はほぼ完形であり、これらも畦畔内に埋納された土器の可能性が高い。396・398など甕形土器との分類が曖昧なものがある。なお、382は出土層位より弥生時代後期のものである可能性が高い。

甕形土器 (図版21・図版22—400—427)

402は無文であるが、箱清水式の甕形土器の器形を示しており、供伴土器から弥生時代の遺物であると

思われる。417・421・424などは焼成が良く、薄手の変形土器である。419はD地区第5水田大畦畔内より出土しており、ほぼ完形であることから埋納した土器であろう。401・407などにタール状の黒色付着物、415・416・418・422・426などに黒色付着物が見られるなど、使用痕跡を残すものがある。破片資料が多く壺形土器との区別が曖昧であるが、変形土器は古墳Ⅰ期・Ⅱ期のものが多く、Ⅲ期・Ⅳ期のものが少ない傾向にある。

3 須恵器（図版22—428～432）

古墳時代の須恵器は428～432の他に返しを有する坏蓋が数点出土したのみである。428・432が坏、430が坏蓋、429と431は壺である。430は軟質で暗灰褐色をであり、他は青灰色で焼成が良く硬質である。428は底部外面に「×」印の寛書がある。429は、破片下端部に屈曲が認められ、そのまま胴部に至り、頸部の短い器形を示す。431は2本の沈線と板状工具の木口による連続刺突文が認められる。

図版25—500・501は内面に青海波紋があり、古墳時代の変形土器である可能性がある。

第4節 奈良・平安時代

1 概要

水田の時期を示すために、以下のように古代Ⅰ期～Ⅳ期の時期区分をした（第1分冊第3章4節参照）。古代Ⅰ期は奈良時代以前の年代を示すが、古代の時期区分の中に含めた。古代Ⅰ期は口縁部に返しを有する須恵器坏蓋が存在する時期である。古代Ⅱ期は蓋受け部分を持つ丸底の須恵器坏が消滅し、須恵器坏が平底のみとなる時期で、前半期は底部へラ切りが主体となり、後半期は底部糸切りが主体となる。古代Ⅲ期は灰釉陶器の出土例が確認され、高台付きの土師器碗が出現する時期である。古代Ⅳ期は一部の貯蔵具を除き須恵器が姿を消す段階から土師器坏や内面黒色の碗などが消滅する段階までの時期である。実年代は概ね以下の通りである。古代Ⅰ期は7世紀後半から7世紀末、古代Ⅱ期は7世紀末から9世紀初頭、古代Ⅲ期は9世紀前半から9世紀末、古代Ⅳ期は10世紀前半から12世紀後半の年代を想定している。

出土遺物の大半はB2地区SD103より出土したものである。この他にA地区第3水田自然流路からも比較的多くの土器が出土したが、水田跡に伴うものは極めて少ない。弥生時代、古墳時代には水田面及び、畦畔内より土器が出土しているが、古代には水田に伴う遺物が少ない。古代の水田跡の調査面積が、弥生時代、古墳時代のものに比べ少ないことを考慮しても、出土遺物は少ないと言える。また、他の時期に見られた煮沸形態である変形土器はほとんど出土していない。弥生時代、古墳時代では水田畦畔や水田面に破片ではあるが、変形土器が多く出土したのと対照的である。なお、変形土器の稀少性は古墳Ⅳ期から見られる現象である。

当該期の遺物が多数出土したB2地区SD103について、出土遺物の概要を記す。SD103は弥生中期から平安時代の遺物が出土しており、特に奈良・平安時代の遺物が多く、古代Ⅱ期・Ⅲ期の須恵器、土師器が多く、古代Ⅳ期の遺物は見られない。墨書・寛書須恵器、墨痕がある須恵器、斎車・馬形などの木製品、牛・馬・鹿の獣骨など、祭祀的様相の遺物が出土した。古代の土師器・須恵器は破片資料が多く、55cm×34cm×15cmのコンテナに4箱分採取された。口縁部及び底部の残存率の累積加算数を最小個体数とした場合、須恵器坏A74個体（底部集計）、須恵器坏Bは14個体（底部集計）、須恵器坏蓋6個体（積み部集計）、須恵器壺蓋1個体、土師器坏4個体（底部集計）、土師器黒色土器坏10個体（口縁部集計）であった

303)。坏類は須恵器が圧倒的に多く、須恵器坏Aの底部糸切りとへら切りの割合は13:10で糸切りが多い。土師器坏は全て底部へら切りで、糸切りは認められない。なお、内面黒色土器坏は破片のため古墳時代のものと区別できず、まとめてカウントした。土師器甕類は11個体（口縁部集計）であるが、小破片のため古墳時代のものを含む。また、須恵器壺・甕類は口縁部の個体識別により最小個体数を出した。須恵器大甕9個体、須恵器短頸壺・甕19個体、須恵器四耳壺3個体である。

2 須恵器・土師器・灰釉陶器

須恵器（図版23～図版25—433～503）

434～440・442～468は坏A、469～480は坏B、441・481・482は坏蓋、483は壺蓋、484・493は短頸壺、433・485～490は長頸壺、491は瓶類、492は高坏、494は横瓶、495～498は甕、499は四耳壺、500～503は大甕である。坏Aは450～453が底部へら切り、454～468が糸切り、墨書土器はいずれも糸切りである。468は口縁端部が外面に屈曲した特異な形状である。473は高台部が摩耗している。479・480は口縁に1条の沈線が巡る。485・486は肩部に凸帯が巡る特異な形態である。499の四耳壺は口縁部の形態が特異な例である。491・492・500・501などは古墳IV期～古代I期の特徴を示す。

黒色土器（図版25—504～516）

504は内面に稜を持ち口縁が外湾する古墳時代的な口縁形態を示すが、平底の底面は丁寧なへらケズリであり、類例が見当たらない。505は口縁外面に浅い沈線が巡る。底面は全面静止へらケズリ、全面糸切り、中央部に糸切り痕を残し外周部のみ静止へらケズリするものがある。512～515は底面にへら記号「×」又は「-」が記されている。

土師器（図版25—517～521）

土師器の出土量は少なく、517は坏、518・519は椀である。いずれもIII期後半から古代IV期のものである。521は甕である。この時期の甕は溝から出土するもののみで、水田面、畦畔などからは出土せず、古墳時代以前とは異なった出土状況である。520は瓶の把手で、古墳時代の遺物であろうか。

灰釉陶器（図版25—522・図版29—656）

522は碗、656は段皿である。いずれも破片であり、特別な出土状況は示さない。656は中世末から近世に埋没した溝より出土したもので、中世の遺物図版に掲載した。656の底部外面には僅かに墨痕が認められ、硯に転用されたものであろうか。

3 筭書土器・墨書土器・墨痕（図版23—433～449）

筭書土器1点・墨書土器12点が出土した。いずれも溝より出土した須恵器である。これらの多くはB2地区SD103より出土した。SD103出土遺物には表面に附着物が見られ、器面観察ができないものもあり、更に多くの墨書土器が含まれている可能性がある。433は壺の胴部に「大」と思われる文字が焼成前に刻まれたものである。墨書土器は坏が多く、434・435は底面に墨書が見られるが、文字が判読できない。441は坏蓋の表面に「几」が記されている。他の墨書土器は坏の胴部表面に記されたもので、「中」「大」などの文字が認められる。434・446～449の内面には墨痕が認められる。

第5節 中世・近世以降

1 概要

中世・近世の遺物はA2地区に集中している。中世から近世には、A2地区が居住域、B地区からE地区は水田域である。B地区、E地区では当該時期の水田の存在は予想されるが、当該層位の調査を行っていないため、出土遺物が無い。図版26～28と図版29の内耳鍋が居住域のA2地区より出土したもので、図版29-649～668が水田域で出土したものである。

2 カワラケ・内耳鍋

カワラケ (図版26・図版27-523～621、図版29-649・650)

器形復元可能なものは、ほとんど図示した。色調が橙褐色のものと、これより白い灰白色の2種類に大別される。525・561・563・571・574～576・591・598・621などが灰白色のもので、全体に占める割合は少ない。黒色付着物が認められ灯明皿と推定されるもの(528・537・538・542・548・553・556・564・584・587・589・595・606・619)、穿孔があるもの(528・531・543・546・547・564・565・590・617)などが見られた。穿孔の多くは体部であるが、590のように底面に穿孔するものがある。528は内面より穿孔を行っているが、貫通していない。

A2地区では遺構別の出土破片数を見ると、SH02・SH03・SH11、SD101、整地面I～VIに多く出土した(第1表)。A2地区のカワラケの口縁部残存率累積加算数^(注4)は33.3、底部残存率累積加算数は142.4である。底部残存率の累積加算数を最小個体数とした場合、A2地区のカワラケは143個体以上存在したことになる。この内、灯明皿と推定されるものが、35個体ある。

内耳鍋 (図版28-641～648、図版29-669～671)

水田域からも少数の内耳鍋の破片が出土するが、器形復元可能なものはA2地区のもののみである。A2地区ではSH02・SH03・SH11・SH14、SK02、整地面などから多く出土した(第1表)。A2地区出土内耳鍋の口縁部残存率累積加算数が8.7、底部残存率累積加算数が7.9であるが、内耳部の破片が47点有り、1個体に2ヵ所の内耳とすると、最小個体数は24点となる。

3 陶磁器 (図版27-622～640、図版29-651～668)

622～640は居住域であるA2地区より出土、649～668はA3地区～D地区の水田域より出土したものである。

A2地区では中世・近世の陶磁器が87点出土した。いずれも破片であり、その内訳は以下の通りである。近世の伊万里が26点。16世紀末～17世紀の唐津の皿5点(638～640)、すり鉢4点(636・637)。香灰

第1表 A2地区遺構別土器破片数

出土地点	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	整	整	整	整	整	中	出	合						
	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	K	K	K	K	K	T	D	地	地	地	地	地	世	土	計					
	01	02	03	06	09	11	12	14	18	19	20	21	23	25	26	27	02	03	36	51	80	99	101	101	101	面	面	面	面	面	面	下	不明	
内耳鍋破片数	33	98	80	11	2	46	3	35	21	1	7	15	6	1	1	5	28	4	4	2	1	10	25	258	21	111	89	122	231	72	46	1389		
カワラケ破片数	11	44	33	4	2	29	1	14	7	1	14	9	4	1	1	2	4	1	1	1	30	79	20	37	78	78	48	54	16	27	651			

2点(632)。青磁皿・碗11点(624~627)。古瀬戸では大窯天目茶碗、腰折皿(628)、瓶類など4点。16世紀~17世紀の瀬戸美濃大窯の志野丸皿、天目茶碗、丸ノミ折縁皿など15点(629~631)。近世の瀬戸美濃本業焼6点。白磁2点(622・623)。近世の肥前系陶器皿・碗8点などである。

水田域では、龍泉系黒蓮弁文碗(651・652)などの青磁、口禿の白磁皿、古瀬戸皿(653)、瀬戸美濃鉄釉碗、瀬戸美濃灰釉碗、瀬戸美濃天目(654)、瀬戸美濃大窯皿(657・658)、瀬戸美濃輪禿皿(659)、志野焼(655)、肥前系陶器碗(660)、伊万里(662)、山茶碗系こね鉢(665)、唐津すり鉢(667)、珠洲焼すり鉢(666・668)などが出土した。663・664は近世末から近代のものである。

註

- 1 石川系里遺跡では地表下2.5mから縄文時代前期初頭の遺物と遺構が検出された。松原遺跡では地表下2.4m~約4mで縄文時代後期、前期末葉から中期初頭、早期末葉から前期後葉の遺物と竪穴住居跡などが検出された。歴代遺跡群では地表下2.8m~5.2mで縄文時代前期後葉から晩期後葉の遺物と遺構が検出された。
- 2 箱清水式土器は壺形土器と甕形土器の器面調整が明確に区別されており、甕には襷掻波状文、襷掻簾状文が施され、壺形土器には赤彩と襷掻T字文が見られる。箱清水式土器の器形、又はこれらの文様の一部を取り入れている土器を箱清水系土器と呼称した。
- 3 器種名は「(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編」による。須恵器環Aは無高台の環、須恵器環Bは箱型の体部に高台を付したものである。黒色土器は器面に意図的に炭素を吸着させたものである。
- 4 残存率累加算数とは口縁もしくは底部の残存率を合計した数値。例えば、口縁部が1/4残存したものが5片あった場合、残存率累加算数は1.25となり、最小個体数は2個体と算定した。

第3章 石器・土製品・石製品・金属器

第1節 石器

1 縄文時代・弥生時代の石器

縄文時代晩期では石鏃、石錐、削器、二次加工を有する剥片、楔形石器、打製石斧、敲石・磨石・凹石が出土した。弥生時代中期では石鏃、刃器、磨製石包丁、偏平片刃磨製石斧、太形蛤刃磨製石斧、敲石・磨石などが出土した。なお、個々の石器については、石器観察表を参照していただきたい。

石鏃 (図版30-1~26)

27点出土した。有茎のものが22点、無茎のものが4点、基部が欠損しており分類不能なもの1点である。1は無茎のように図示しているが、有茎石鏃の返し部が欠損しているものと判断した。石材は珪質頁岩10点、黒曜石7点、チャート5点、安山岩1点、不明4点である。D2・D3地区27-1層、A4地区SQ01出土のものは確実に縄文時代晩期であり、D3地区SD11出土のものは縄文時代晩期の可能性が高い。他は、縄文時代晩期から弥生時代中期のものである。なお、観察表計測値の長さは茎部を除いた、鏃身部の寸法である。

石錐 (図版30-27・28)

2点出土した。27は石材不明、28は珪質頁岩である。いずれも縄文時代晩期佐野Ⅱ式土器に供伴した。

削器 (図版31-36)

刃部に連続的な調整加工が見られる小形のを削器とした。1点出土した。珪質頁岩製で、縄文時代晩期佐野Ⅱ式土器に供伴した。

刃器 (図版32~図版34-42~56)

23点出土した。安山岩・輝石安山岩の剥片の鋭利な縁辺をそのまま刃部とする大形の石器を刃器とした。刃部には微細な剥離痕や光沢痕が認められるものもある。実測図のスクリーントーンは光沢痕を示す。但し、42は腹面に研磨痕が認められ、他の刃器の光沢痕とは異なった使用痕である。刃縁を水平にした時に全体の形状が横長のものをⅠ類、縦長のものをⅡ類とした。Ⅰ類が多いが、平面形状に規格外はなく、刃部以外に調整加工が有るものと無いもの、二側縁に挟りが見られるものなど様々な形状を示す。なお、計測値は刃部を水平に置いた時の縦の寸法を長さ、横の寸法を幅とした。石材は安山岩5点、輝石安山岩18点で、安山岩を用いたものは縄文時代晩期土器に伴う。輝石安山岩を用いた刃器は、大半が弥生中期(弥生Ⅱ期)の土器と供伴しており、輝石安山岩を用いた刃器が弥生Ⅱ期に限定された石器と考えた。図版に示したものでは、42・44は縄文時代晩期、他は弥生時代中期(弥生Ⅱ期)のものである。

二次加工を有する剥片 (図版31-29~35)

調整加工が認められ、定型的な石器でないものを「二次加工を有する剥片」として一括した。石器観察表ではre.F1と表記した。14点出土した。石材はチャート7点、珪質頁岩3点、黒曜石2点、不明2点である。29は尖端部を作り出しており、石鏃又は尖頭器の未製品であろう。30・35は両極打法による剥離が

認められ、楔形石器とされるものである。34は側縁部を切断している。出土層位より、29は弥生時代中期の可能性があるが、30～35は確実に縄文時代晩期の石器である。

打製石斧（図版35—57—62）

6点出土した。石材はいずれも黒色で、板状に剥離するものがある。すべて頁岩としているが、黒色の安山岩と思われるものもあり、石材の断定は保留する。59～61は縄文晩期氷Ⅱ式石器に供伴し、57・58・62はD2地区27-1層上面より出土したもので、図版3—59、図版13—197の栗林式古段階⁽²¹⁾の石器に供伴するものと思われる。川田条里遺跡の発掘調査では、D3地区27-1層の佐野Ⅱ式石器の散布地には打製石斧が供伴しないこと、栗林式中段階以降の土器に打製石斧が供伴しないことが確認された。縄文時代晩期以降の打製石斧の消長は、氷Ⅱ式前後の短期間に限って見られる石器であると推定できる。打製石斧が出土したD2地区27-1層上面では磨製石包丁（64）が出土しており、稲作開始に関わる石器として、水田開発との文脈の中で打製石斧を検討する必要がある。

長野県北部地域では、縄文時代後期に石器組成の重要な位置を占めていた打製石斧が、縄文時代晩期にはほとんど見られなくなる現象が指摘されている⁽²²⁾。近接する縄文晩期の集落跡である宮崎遺跡では打製石斧がほとんど出土していない。縄文時代晩期終末から弥生時代にかけての打製石斧の出現は、水田開発との関わりを想定させる。また、更埴市屋代清水遺跡⁽²³⁾、更埴条里遺跡・屋代遺跡群⁽²⁴⁾などで出土した打製石斧も、本遺跡と同じ文脈の中で評価されるものと考えている。特に、更埴条里遺跡の例は、集落域以外で打製石斧のみが多出しており、本遺跡の出土状況と共通する。更埴条里遺跡は一部未報告であり、今後の資料の蓄積を待って、検討を要する問題である。

磨製石包丁（図版35—63—66）

4点出土した。65は二つに割れていたものが接合したものであり、66は完形で出土した。石材は63～65が安山岩、66が頁岩である。安山岩としたものは全て輝石を含んでおり、刃器に主体的に用いられる石材に近い。頁岩は黒色で、打製石斧の石材に近い。

磨製石斧（図版36—67—73）

7点出土した。石材はいずれも輝緑岩あるいは閃緑岩とされるものである。67は偏平片刃石斧で、敲打痕を多く残し、刃部には使用痕跡と思われる微細な剥離も認められる完形品である。器面全体の細かな窪みにベンガラと思われる赤色顔料が僅かに認められ、全面に赤色顔料が塗布されていた可能性があり、勾玉などと共に大群内より出土した。68～73は太形蛤刃石斧ですべて欠損品である。73は欠損面に摩耗痕が認められ、敲打具として二次転用されたものであろう。71は赤色顔料が付着し、研磨後の剥離が著しい。

敲石・磨石・凹石（図版37—80—91）

敲石12点、磨石1点、凹石5点が出土した。80～87は敲石、88～91は凹石である。これらの石器は弥生時代中期から古墳時代前期の土器と供伴するケースが多い。80～84の棒状礫の端部に敲打面がある敲石は、近接する春山B遺跡からも多く出土する⁽²⁵⁾。これらは安山岩製である。87はチャート製で全面に加工痕が認められ、弥生時代中期の土器と供伴する。

この他に、スタンプ形石器と呼べるものが1点出土した。棒状礫を分割し、分割面に敲打痕が見られる石器であるが、縄文時代早期のものに比して細身である。

その他の石器（図版31—41、図版36—74）

41は石英の結晶で、端部の稜に敲打痕が認められる。氷Ⅱ式石器に伴って出土したものである。74はチャートの円礫で、全面に細かな線条痕が顕著に認められる。石器製作のミガキ調整に用いられたものであろうか。E2地区古墳時代の水田層（7b層）より出土した。

石核・原石 (図版31—37—40)

石核は10点出土した。多くはD3地区出土の佐野II式土器に伴うものである。黒曜石4点、チャート3点、珪質頁岩2点、不明1点である。

D2地区とE2地区第4水田大畦畔上に磨製石斧の石材である輝緑岩の原石が出土した。いずれも弥生時代後期以降のものであり、磨製石斧製作に関わる遺物とは言えない。

剥片

調査区全体で255点の剥片が出土した。D3地区27-1層の縄文時代晩期遺物集中区に114点が出土した。これに対し、A地区の晩期の遺物集中区SQ01では11点と少ない。調査区別の出土点数を比べると、A2地区3点、A3・A4地区47点、B2地区7点、C地区15点、D地区170点、E地区13点となり、縄文時代の遺物が検出されたA3・A4地区とD地区に剥片が集中する。剥片は、概ね縄文時代の遺物と判断できる。

2 古墳時代以降の石器

古墳時代以降用いられた石器では、軽石33点、砥石1点、石鉢3点、石臼21点が出土した。出土層位から、軽石は弥生時代から古墳時代、砥石は古墳時代前期のものと推定される。石鉢、石臼は中世以降の遺物である。なお、軽石は利器とは考え難く、石製品として分類すべきかもしれないが、用途不明であり、特別な加工も認められないため、石器の中で報告する。

軽石 (図版36—75—79)

33点出土した。全てD地区、E地区より出土しており、出土層位から判断すると弥生時代と古墳時代のものが中心となる。特に方形周溝墓が検出されたD2地区の17層直上より出土しているものが多く、水田域と微高地の境界部から微高地に出土していると考えられるが、詳細な出土位置が不明確であるため明言できない。また、E地区は弥生時代後期には水田域と集落域である春山B遺跡との境界域に当たる。

形状は、卵形の整ったものと不整形なものがある。欠損状況の判定に苦慮する資料もあり、石器観察表に欠損としてあるものも、人為的に破損したものかどうかは判断できない。欠損品を含めて、長さ2.3cm～7.4cm、幅1.5cm～6.3cmである。

砥石

D地区SM01の厨溝内より、有溝砥石の小破片が1点出土した。

石鉢・石臼 (図版37・図版38—92—109)

石鉢(92—96)が5点、粉挽臼(97—107)が21点、茶臼(108・109)が3点出土した。92は片口部周辺に黒色付着物が顕著に見られる。93は片口以外の口縁部が欠損している。95・96は底面に孔があく。94—96は水田域の溝内の構造材として用いられたものと思われる。97—103は上臼で、104—107は下臼であり、機能面の刻み目のみを示したものがある。97は上臼上面の縁部に文様を刻む特異な例である。101は割れ面が摩耗(スクリーントーン部)する。104は刻み目がほとんど見られなくなるまで摩耗している。109の上面に黒色付着物(スクリーントーン部)が見られる。粉挽臼・茶臼はすべてA2地区より出土したもので、石列などに転用されたものが多い。

第2節 土製品・石製品・金属器

1 土製品・石製品・ガラス玉

土製品 (図版40-35-44)

35・36・42・43は土釜、37・38は紡錘車、39はミニチュア土器、40・41は鳥形土製品、44は土偶である。出土層位と遺構の時期から、37・40-42は中世・近世、36・43は古墳時代、35・39は弥生時代終末から古墳時代初頭、38は弥生時代後期、44は弥生時代中期の遺物である。35・39は管玉、勾玉、磨製石斧などと共に大畦畔内より出土したものである。40は高さ3.5cm、底面が平坦で、嘴を作り出しており、鳥をかたどったものである。底面に直径4mm程度の孔があり、この孔に棒を刺して立てたものと推定される。41も同様に鳥をかたどったもので、底面は平坦でなく、幅2mm、長さ10mmの長方形の孔があり、尾にあたる部分にも同規模の孔がある。底部の孔は中央に段差が有り、2本の細い板を差し込んでいる。それぞれの孔に板状のものを刺して、鳥の足と尾を表現したと推定される。A4地区第3水田自然流路からは中世の土器と共に平安時代の須恵器・土師器が出土しており、41は中世以前のものであることは明確で、平安時代まで溯る可能性もある。なお、管見到れる限り孔を持つ鳥形土製品の類例は近隣に出土例が無い。山梨県明野村諏訪原遺跡、同村寺前遺跡より中世のものと思われる鳥形土製品が出土している。大きさはほぼ同じであるが、明野村の資料は底面が窪んでおり、川田糸里遺跡のものとは形態は異なる⁽²⁶⁾。44は土偶の足と思われ、沈線による文様が描かれている。

石製品・ガラス玉 (図版40-45-52)

45-47はガラス玉で、直径3.2mm-3.8mm、厚さ2.1mm-2.3mmである。D地区の方形周溝墓主体部より出土したものである。48・49は管玉である。48は滑石で直径3.6mmである。49は碧玉で長さ32.2mm、直径10.3mmである。50-52は勾玉である。50は灰色で石材不明、51はヒスイ、52は黒色で石材不明である。48-50・52は畦畔内より出土したもので、いずれも多量の杭を伴う畦畔であり、畦畔の構造が共通する。51・52が弥生時代後期に埋没した水田跡、45-50は弥生時代終末から古墳時代初頭頃に埋没した水田跡と方形周溝墓より出土したものである。

2 金属器

1-3は鉄釘、4は楔状鉄製品、5-7は用途不明の鉄製品である。5はリング状、6は板状の先端が曲がり、7は針状の先端が曲がる鉄製品である。8の簪、9-11のキセルは銅製品である。12は密教法具の鈴で、真鍮製であろうか。最大径6.2cm、高さ6.6cmである。13は踏鉄で、孔に釘が1本刺さっている(P.L12)。1-11は中世から近世の遺構内及び包含層より出土したものである。12はトレンチ調査の廃土中より採取したもので、出土状況、伴伴遺物の有無は不明である。

銭貨は25点出土しており、整理番号15・16、整理番号24・25はそれぞれ2枚ずつ接着して出土した。その他に特別な出土状況を示したものはない(第2表)。

53は珠文鏡で、E2地区第2水田の道路状遺構(S.C38)より出土した。面径5.6cm、鏡面が僅かに湾曲する。鈕が僅かに欠けているのみで、完形品である。内区には18個の珠文と、細隆起線による櫛歯文が巡る。珠文の間隔は均等でなく、鈕座部分に鑄型の傷と思われる方形の突起が認められる。また、鈕座部の右側で細隆起線が途切れるが、ここは鑄が広がっていた所で、鑄型の傷であったかどうかは疑問である。外区は鋸歯文が巡っており、実測図左側で鋸歯文が途切れる。鋸歯文の三角の窪みが欠けているもの

が2カ所ある。内区に珠文と櫛歯文、外区に鋸歯文を配する鏡式で、長野市川柳將軍塚古墳、飯田市座光寺地区内より出土した珠文鏡と共通する。川柳將軍塚古墳のものは直径7.3cmであり、座光寺出土のものは面径が不明である。長野県内で珠文鏡は17面出土しており、面径が7cm以上のものが多い²⁷⁾。この中で長野市篠ノ井遺跡群SM7016(木棺墓)より出土した珠文鏡は面径4.4cm、内区に珠文と櫛歯文があり、外区に文様はない。篠ノ井遺跡群出土例は小形仿製鏡とされており、本遺跡のものもこれに類するものであろう。川柳將軍塚古墳、篠ノ井遺跡群の例は古墳時代前期に比定されており、本遺跡の珠文鏡の時期を暗示している。53が出土したE2地区第2水田(SC38)の埋没時期は明確でないが、E2地区第2水田がE1地区第1水田と同じ面である可能性があり、古墳Ⅱ期には埋没していたと推定される。出土層位からも古墳時代前期の鏡であると判断される。

第2表 出土銭貨一覧表

図版番号	地区名	出土地点	銭貨名	外径 (cm)	厚さ (cm)	初鋳年代	備考	整理 番号
図版40-14	不明	不明	開元通寶	2.40	0.14	621年		28
図版40-15	C	S D03	嘉祐通寶	2.40	0.13	1056年	真書体	36
図版40-16	A2	不明	熙寧元寶	2.38	0.12	1068年	篆書体	23
図版40-17	C	S D03	元豐通寶	2.49	0.13	1078年	行書体	37
図版40-18	C	不明	元豐通寶	2.43	0.14	1078年	行書体	38
図版40-19	D3	S D03	元豐通寶	2.40	0.11	1078年	行書体	39
図版40-20	A2	整地地下	元祐通寶	2.49	0.12	1086年	篆書体	17
図版40-21	不明	不明	元祐通寶	2.42	0.11	1086年	篆書体	27
図版40-22	A2	S H02	紹聖元寶	2.37	0.14	1094年	行書体	19
図版40-23	C	S D03	紹聖元寶	2.40	0.14	1086年		31
図版40-24	A2	出土地不明	聖宋元寶	2.46	0.11	1101年	行書体	18
図版40-25	A3	道路下(水田面)	洪武通寶	2.28	0.17	1368年	背面右側「一銭」	30
図版40-26	A2	整地地下	永樂通寶		0.10	1408年		15
図版40-27	C	13-1層	永樂通寶(模鑄銭)	2.48	0.14	1408年		25
図版40-28	A2	S D101上面	寛永通寶(流銭)	2.78	0.10	1851年	真鍮銭、4文銭	20
図版40-29	A3西	第1調査面	寛永通寶	2.20	0.11	1740年	背面上部「足」	21
図版40-30	A3西	第1調査面	寛永通寶(流銭)	2.20	0.13	1851年	真鍮銭、4文銭	22
図版40-31	C	13-1層	寛永通寶	2.52	0.11	1668年	背面上部「文」	33
図版40-32	C	13-1層	寛永通寶	2.43	0.12	1636年		34
図版40-33	C	13-1層	寛永通寶	2.52	0.11	1668年	背面上部「文」	35
図版40-34	C	13-1層	雁首銭(模鑄銭)	2.06	0.21	近世		32
	A2	整地地下	不明(模鑄銭)		0.08			16
	C	13-1層	永樂通寶(模鑄銭)	2.37	0.15	1408年		24
	C	13-1層	不明(模鑄銭)		0.12			26
	A1	テラス1整地土中	半銭	2.19	0.11	明治16年		29

註

- 寺島孝典 1999 『長野盆地南部の様相』『長野県の発生土器編年 発表要旨』長野県考古学会発生日会
- 鶴田典昭 1999 『村東山手遺跡の石器群の検討』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8 長野市内その6 村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター他
- 佐藤信之 他 1992 『歴代清水遺跡』長野県教育委員会・更埴市教育委員会
- 上信越自動車道建設に伴ない、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこない、発生時代の遺構・遺物は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 更埴市内その4 更埴泉田遺跡・歴代遺跡群一跡・古墳時代編』1998に報告されており、縄文時代の遺構・遺物は平成12年3月に報告書刊行を予定している。歴代遺跡群③a区では川田泉田遺跡A地区SQ01とはほぼ同時期の遺物集中区が確認され、打製石斧が出土している(前述の報告書に掲載)。また、更埴泉田遺跡では発生時代中期の水路が検出される面の下層に打製石斧が散布しており、川田泉田遺跡D2地区27-1層上面の出土状況に類似する。
- 発生時代中期から後期の集落遺跡。『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11 一長野市内その9 泰山遺跡・泰山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター 1999
- 明野村教育委員会の佐野隆氏のご教示による。
- 岩崎卓也 1988 『4古墳時代の道具(5)青銅鏡』『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』西山克己 1997 『第4章第6節 金属製品について』『中央自動車道長野埋蔵文化財発掘調査報告書 16 一長野市内その4 篠ノ井遺跡群 成果と課題』

第4章 木製品

第1節 木製品の概要

1 木製品の分類

川田条里遺跡の木製遺物は、大半が水田跡より出土した。これらは畦畔の芯材として横木や杭に用いられており、大形の加工材が多数含まれている。これらの加工材には建築部材を転用したと考えられるものが見られ、農具などの小形の木製品にも増して多数の建築部材が出土したことが本遺跡の特徴といえる。しかしながら、建築部材を含む大形の加工材は杭などへの転用が多いため、二次的な加工や欠損に加え変形で当初の形態が不明なもの、遺存状態が悪く細部の観察が困難なものが多い。

本遺跡出土の木製遺物は、畦畔などの芯材に用いられる前に何らかの用途（第一次用途）を持った木製品と、第一次用途がなく、そのまま畦畔の芯材や杭に用いらたものに大別される。この大別は概念上では可能ではあるが、実際の木製遺物を分類する際は、その基準が極めて曖昧なものとなる。すなわち、第一次用途で加工痕跡を残さないもの、加工部分が欠損しているもの、第一次用途の加工痕が杭状のもので加工痕が第一次用途によるものなのか、芯材とするための加工であるのか判断が出来ないものなどは明確に分類できない。便宜的に、加工痕がないもの、加工痕が杭状の先端作出に限定されるものを第一次用途のない「木材」とし、第一次用途の加工が明瞭なものを「木製品」として分類した。第一次用途を有する木製品については、第一次用途の形態における分類を行ない、それ以外のものは本章では対象外とする。

第一次用途を有する木製品の分類は、石川条里遺跡および榎田遺跡の発掘調査報告書⁽²¹⁾を参考とし、下記のとおりとした。

- | | |
|------------|--|
| (1)農具 | 鋏・鋤・挾(柄振)・馬鋏・犁・鎌・田下駄(大足)・臼・杵・横碓・編具・田舟など |
| (2)武器・祭祀具 | 弓・矢・盾・斎串・馬形・その他 |
| (3)服飾具 | 下駄・櫛 |
| (4)容器 | 刳物・挽物・曲物 |
| (5)用途不明木製品 | 有頭状木製品・弓状木製品・棒状木製品および加工材・板状木製品(含む加工材)・有孔棒状、有孔板状木製品(含む加工材)・その他(樹皮製品) |
| (6)建築部材 | 縦材(豎材)……柱・方立・小屋組の垂直材(屋根材には含めない)など
横架材………梁・桁・台輪・壁板・床板・櫓・蹴放(闕)・小屋組の水平材(屋根には含めない)など
屋根材………垂木・屋根板および葺材・扱首・屋根木舞・破風板・屋根飾りなど
付属材………梯子・限柱などの構造材とは区別されるもの
その他 |

なお、図版は以下の器種分類別に配置し、括弧内に出土地点を示した。このため、所属時期別の順序に

は並べていない。また、木製品の時期は、出土層位又は出土遺構に伴出する土器から判断される時期を記した。木製品の大半は畦畔の芯材や杭列などに転用されたもので、遺構の時期がそのまま木製品の製作・使用時期を示すとは限らない。第2節に示した木製品の時期は、厳密には出土した遺構の時期であり、そこより出土した木製品の製作・使用時期はさらに古くなる場合があることを付記しておきたい。

2 木製品の概要と出土状況

農具では鍬16点、鋤4点、抉2点、馬鍬2点、田下駄18点、横楯3点、綱具1点などが出土した。武具・祭祀具では弓3点、矢1点、盾1点、馬形1点、齋串1点などが出土した。服飾具では下駄7点、褌1点が出土した。容器では刳物5点、挽物7点、曲物20点などが出土した。建築部材では柱を中心とした縦材が16点、梁・桁・棟木・台輪・榎・蹴放(闕)などの横架材が76点、垂木などの屋根材が7点、梯子などの付属材が4点出土した。この他に、有頭状木製品、弓状木製品、棒状木製品、板状木製品、有孔棒、有孔板などの用途不明の木製品および部材が137点出土した。用途不明な木製品の中には建築部材と思われるものが含まれており、木製品と判断した373点の内、三分の一以上を建築部材が占めるものと思われる。建築部材の多さが本遺跡の木製品の特徴といえる。

出土した木製品を時期別にまとめたものが、第3表のとおりである。弥生時代後期～古墳時代の木製品が全体の67%を占める。なお、弥生時代中期の建築部材の4点は、D地区SD10の堰に打ち込まれていた矢板であり、建築部材である可能性を指摘するに留めたい。

本遺跡では木製遺物が約6000点出土しており、そのうち373点を木製品と認識し本章で報告した。しかしながら、棒状木製品、板状木製品などについては、整理不十分のため十分な観察が行えず木製品と認定できなかったものもある。第一次用途を持たない「木材」を含め、木製遺物の全容は第3分冊第12章を参照して頂きたい。

前述のとおり、本遺跡出土の木製品は水田域より出土したものである。その大半は畦畔と溝より出土したものである。

第3表 木製品の時期別点数

時期	農具	武具・ 祭祀具	服飾具	綱具	容器	用途不明 木製品	建築部材	合計
近世以降	1		3		2		3	9
中世・近世			5		12	7		24
奈良・平安	7	2			14	7	2	32
古墳中期～奈良	16			1	10	14	9	50
古墳中期～後期	17	2			7	23	23	72
古墳前期	10	1			2	26	36	75
弥生後期～古墳前期	3	3			3	17	21	47
弥生中期～後期	2	1			1	7	2	13
弥生中期	1					27	4	32
不明	2				1	9	3	15
合計	59	9	8	1	52	137	103	369

第2節 農具

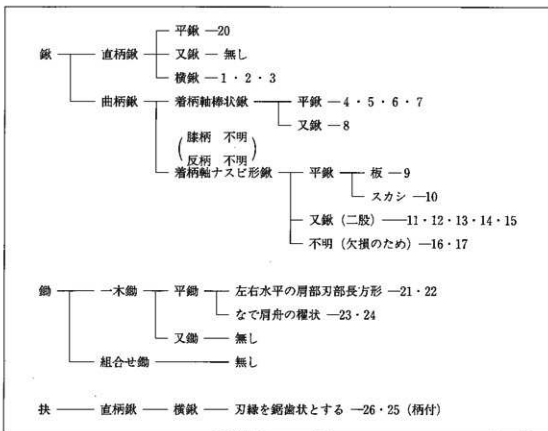
農作業が器械化される以前、農具・農耕具の主流は、鍬（クワ）、鋤（スキ）、扶（エブリ）、鎌、田下駄（クゲタ）、杵（キネ）、横槌に、牛馬を利用した馬鍬（マグワ）や犁（カラスキ）などであった。それに繩具が加わる。川田条里遺跡では鍬、鋤、扶、田下駄、横槌、臼、馬鍬、繩具が出土した。

当時の農事暦がどの様なもので、農具・農耕具との関係がいかなるものであったのか、推察するに足る資料に乏しい。これまでに、発掘調査された水田遺構や農具・農耕具もまた、今日伝えられる史料等の農作業形態を参考としている²²⁾。したがって、本遺跡における農耕具の名称および農作業形態もまたこれらを参考とし、第1図「農耕具（鍬・鋤・扶）」の分類の様に便宜上先学の形態分類を使用する。

1 鍬（図版42～図版45）

鍬は、刃部を持つ身の形態と装着する柄との装着方法により直柄鍬と曲柄鍬に大別される。双方とも柄には別材を要するが、直柄鍬は身に柄を装着する柄穴を持ち通直性のある柄を貫通させる。一方の曲柄鍬は柄穴を設けず、柄には自然木の幹から枝の分かれ目に当たる任意の角度を持つ材を選び出し、加工したものを身に結縛するものである。この曲柄鍬の装着柄は、その形態により「膝柄」と「反柄」に分類されるが、本遺跡ではそれと識別できる柄は認められず、分類していない。

また、鍬は時期的な移り変わりにおいて、身をすべて木質の木鍬から刃縁を鉄刃の装着に替えた風呂鍬、さらに身の全体を鉄とした金鍬へと変遷している。本遺跡より出土した鍬は、刃縁の状況が明瞭なもの木鍬に特定される。ただ、遺存状態の悪い鍬に風呂鍬が含まれている可能性も捨てきれない。含ま



第1図 農耕具（鍬・鋤・扶）の分類

れていたとしても稀な存在であることにはかわらず、主体は木製である。

(1) 直柄鍬

直柄鍬は、身の形状より平鍬、又鍬、横鍬に細分される。「直柄平鍬」は、20の1点が出土し、「直柄横鍬」は、1・2・3の3点が該当する。なお、「直柄又鍬」は出土していない。

直柄平鍬 (20)

20は身部のみで、柄は出土しておらず、身部も半分以上が欠損しており原形を留めていない。身部は縦長であることがわかるが、その形状の詳細は不明瞭である。柄の装着する柄穴周囲に肉厚となる隆起は見られず、両面とも平坦なままである。

時期は、古墳時代後期～奈良時代で、樹種はケヤキである。

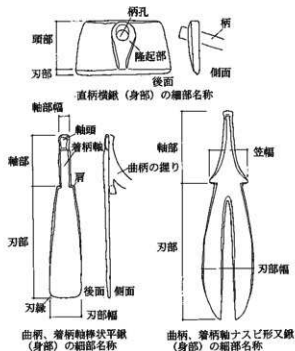
直柄横鍬 (1・2・3)

1は身部と柄が装着した状態で出土した。身部(1a)は、横幅が上方より刃部に向かって両裾を広げた形状にあり、柄との装着箇所の途中より上を覆う部分を欠損するものの、刃部は刃縁にかけて断面を尖らせる形状は読み取れる。柄(1b)は、芯持ち丸太で当初の直径3.1cmを測るが、両端が欠損しており、身部との装着箇所を留める程度である。その全長は約14cmを測る。身部は、横長で上端より刃縁側に広がる台形の形状が想定される。柄の装着する身部の柄穴周囲は隆起して肉厚となる。類似資料より、この隆起部は逆梯形に上の方に開き、欠損部分は半円形であったものと想像される。また、この隆起部は装着柄との関係より柄の持ち手の反対側(外部)に造り出しており、身に柄を装着した角度は鋭角となる。2は身部と柄が近接して出土した。遺存状態が悪く、身部は三片に割れておりいずれも欠損部が大きく、刃部は一片のみしか留めていない。ただ、柄を装着する柄穴部を断片的に残存させており、柄穴周囲には肉厚とする隆起は見られず、両面とも平坦なままである。柄は、芯持ち丸太で直径3.5cmを測り、一端は当初の切断加工を残し全長64.7cmを測るが、もう一端部および中央の一部は欠損し、身部との装着箇所はわからない遺存状態にある。3は、身の端部の欠損が甚だしいが、刃縁に掛けて断面の形状と柄を装着する柄穴があく位置より、直柄横鍬として判断したものである。横長の身部の両端は欠損しているものの柄を装着する柄穴の位置からしてほぼ原形を留めているものと推定される。柄の装着する柄穴周囲は、2と同様に肉厚とする隆起は見られず、両面とも平坦なままである。

時期は、1・2が古墳時代中期～後期、3は古墳時代後期～奈良時代である。樹種は1aがクリ、1bがスイカズラ科タニワヅギ属、2aがクヌギ節、2bがヌルデ、3が不明である。

(2) 曲柄鍬

曲柄鍬は、着柄軸の軸部全体の形状により着柄軸棒状鍬と着柄軸ナスビ形鍬に分類される。着柄軸棒状鍬はさらに、身の形状により平鍬(4～7)と又鍬(8)に分類される。着柄軸ナスビ形鍬はさらに平鍬(9・10)と又鍬(11～15)に分類される。また、平鍬は板状のもの(9)と中央に透かしを持つもの(10)に分けられる。この他に細分できないものがある(16～18)。



第2図 主要農具の細部名称

なお、曲柄鋏に装着する柄には、膝柄と反柄があるが本遺跡においては農具の柄は単品として出土しており、身部との装着関係を対応できるものはない。

曲柄着柄軸棒状平鋏（4・5・6・7）

4点出土した。4は身部のみで、着柄軸の軸部側から刃部側にかけて肩部が両側から直角に折れ曲がるため、はっきりとした区分がなされる形態である。刃部は肩両端より刃縁にかけて広がり、刃縁部両端隅でやや丸くなる。使用時の摩滅であるかはわからない。着柄軸の軸頭にはやや丸みを持たせ、段を設けている。身部はほぼ完全な形状を留めているものと思われる。6は身部の内、刃部のみで、軸部は全体的に欠損しており不明である。ただ、刃部の遺存状態より、着柄軸の軸部の接続する付け根と着柄軸から刃部側にかけて肩部が両側から直角に折れ曲がるため、4に類似するものと思われる。軸部は欠損する。5は着柄軸が欠損しており、軸頭の状況が不明のためその全容は明らかでない。刃部側の肩が、軸部と刃部の境から裾が広がり刃部本体に繋がる。刃縁は、一端隅が欠損するもののその形態は明らかである。7は身部のみで出土し、欠損部が大きく、破片を接合することで辛うじて刃部の形状が読み取れるが、軸部は欠損している。刃部側に残される肩は軸部と刃部の境から裾を広げており、5と同様の形態にある。この刃部は出土した着柄軸棒状平鋏の中では一番面積を持っている。

時期は、5が弥生時代後期～古墳時代前期、4・6が古墳時代前期、7が古墳時代中期～後期である。樹種は4がクリ、5がクヌギ、6がクヌギ節、7は不明である。

曲柄着柄軸棒状又鋏（8）

1点出土した。8は刃縁側の端部と二股に分かれる片側が接合部より欠損しているため、身部の半分以上は留めていないことになる。この欠損は軸部側にもおよぶものの、辛うじて着柄棒状型であることが理解できる。軸部と刃部の境は肩部の両端から直角に折れ曲がる。

時期は古墳時代前期～中期、樹種はアサダである。

曲柄着柄軸ナスピ形平鋏（9・10）

2点出土した。9は、着柄軸より縦に半分、刃縁側もまた欠落しており、その詳細は不明といわざるを得ない。しかし、ナスピ形の着柄軸が認められ、その遺存状態より透かしを持たない板状の着柄軸ナスピ形平鋏と思われる。10は、軸部の笠を残した上部と、その笠の一端側から刃部に掛けて、さらに刃縁の一部が欠損する遺存状態にある。刃部の内部を剥く透かしはその形状を留める着柄軸ナスピ形平鋏と認めた。この身部に装着する曲柄は出土していない。なお、本木製品の軸部については着柄軸から笠にかけて両端部に段を持つため上下に区別することが可能であり、着柄軸に限り見れば着柄軸棒状の鋏に該当する。しかし、身部を軸部と刃部に大別した場合、着柄軸から笠までは軸部にあたるためここでは「着柄軸ナスピ形平鋏」に属するものと解釈した。

時期は、どちらも古墳時代中期～後期で、樹種は10がクヌギ、9は不明である。

曲柄着柄軸ナスピ形又鋏（11～15）

5点出土した。11は、二股に分かれた刃部的一端が先端側から、軸部の着柄軸が笠状に広がり尖る一端部が欠損するものの、左右対称であるため身部全体の形態復元は十分に可能な状態にある。刃縁まで残存する刃部は、軸部境より刃縁にかけて削り込んでいる。着柄軸の軸頭は、上下の変化はないが、左右に若干の膨らみを持たせており区別は容易である。12は、軸部の笠状の広がる左右の裾の尖りは削られ、着柄軸はこの笠の途中から軸頭まで欠損している。また、刃部は二股に分かれた刃部的一端が付け根付近より、もう一端は刃縁の上部より欠損する。13は、二股に分かれる刃部の片側のみで、軸部以上は欠損しておりその詳細は明らかでない。刃縁はその先端より外側にかけて削られる。14は、遺存状態が極めて悪い。軸部は、着柄軸の笠状の一部を留めるのみで、刃部もまた二股に分かれる片側がなく、残存する片側

も刃縁を含めた内部より欠損しておりその詳細は明らかでない。15の遺存状態は極めて悪い。軸部の笠より上部の着柄軸と縦に半分は残存せず、一端に残される刃部にしても刃縁は残存せず、残された刃部にしても幾つにも割れていた。刃縁の形態は、13の先端より外側にかけて削るものと、11の様に軸部境より刃縁にかけて削り込んでいるものがある。

時期は、11・15が古墳時代前期、13・14が古墳時代中期～後期、12が古墳時代中期～平安時代である。樹種は、12・13・14がクヌギ、11・15はアサダである。

(3) 細分不可能なもの (16～19)

遺存状態により特定できる範囲が限られる木製品がある。18は曲柄鎌まで、16と17は着柄軸ナスビ形鎌までは特定できるが、それ以上の分類はかなわなかった。なお、19は農具の身部と推定されるがその詳細はわからない。

時期は、18が弥生時代後期～古墳時代前期、16・17・19が古墳時代中期～後期である。樹種は16・17がクヌギ(節)、19が不明である。

2 鋤 (図版46)

「両手で柄を支え、刃先の付いた床を踏んで田畑を耕起するのが踏鋤」とする。「床」とは、刃部と柄の境から左右に広がる刃部上端のことで、この床があるものが「踏鋤」となる。

鋤は、一木鋤と組合せ鋤に分類されるが、組合せ鋤は出土していない。一木鋤は、把手から刃縁まで途切れることがなく、柄と刃部の部位に大別される。一木鋤はさらに平鋤と又鋤に分けられるが、又鋤は出土していない。「一木平鋤」は、床が左右水平の肩で刃部が長方形であるA類(21・22)と、撫で肩のB類(23・24)がある。

(1) 一木平鋤A類 (21・22)

2点出土した。21は、柄が途中から欠損している。先端の刃縁は丸みを持つ。身部には3箇所欠けがあるが、鉄刃の装着との関係はわからない。22は、柄が刃部との境より欠損し、刃縁も欠損する。出土した当時の所見によれば、水平となる刃部の床の中央部には柄の折れた痕跡が認められているため、鋤と認定している。ただ、柄の付け根部分の厚みが他の鋤と比較してそれほどなく、若干の疑問が残される。

時期は、21が奈良時代～平安時代、22が古墳時代前期である。樹種は21がコナラ節、22がクヌギである。

(2) 一木平鋤B類 (23・24)

2点出土した。23は柄が途中から欠損している。刃部は、柄との境から刃縁にかけて薄くなる。24は柄が欠損し、刃部は柄との境から刃縁にかけて薄くなる。

時期は、23が弥生時代後期、24が弥生時代後期～古墳時代前期である。樹種は、23がカエデ属、24がアサダである。

3 袂(柄振) (図版47-25・26)

袂は田面を平坦に均す道具である。本遺跡より出土した木製品が同形態であるからといって、同じ用途にあったかはわからない。袂を鋤の形態分類に照らせば、直柄横鋤に分類される。が、刃部は成(高さ)に対して幅が広く刃縁を鋸歯状とするため鋤とは用途が異なる農具といえる。26・25の2点が出土した。

26は刃部が欠損し、鋸歯状の刃が見られないが、遺存する成と比較した幅の広さと柄の装着する柄穴の周囲の隆起の形状より決て断定した。柄と刃部との装着角度は、この隆起部側からその裏面に向い傾斜する。25の刃部(25a)には柄(25b)が付属する。刃部は鋸歯状で、柄を装着する柄穴の隆起部は円形である。柄と刃部との装着角度は、平坦面より隆起部側に向い傾斜する。田面を平坦に均す用途に使用された道具とすれば、柄と刃部との装着角度は持ち手側に鈍角となる。このことを前提とし、25と26の刃部側に残る柄の装着角度を持つ柄穴を観察すると、26は刃部に柄を装着する柄穴周囲の隆起部は持ち手の外側に、25の刃部は内側に付くことになる。この木製農具が、鋸と同じく田畑を耕すあるいはそれに準ずる用途に使用された道具とすれば、柄は逆に付き刃部との装着角度は持ち手側に鋭角となる。が、双方の形態が異なることから見ても同じ用途とはいえない。

時期は、25が弥生時代後期～古墳時代前期、26は古墳時代後期である。樹種は25aがクヌギ節、25bがヌルデ、26がクヌギである。

4 農具の柄(図版47・図版48-27～31・33)

27は一端部が丸みを持たせた加工がなされ、刃部との接合部は欠損する。全長は、60.4cmを測り、やや反りを持つ。鋸の柄であろうか。28は両端が欠損し、全長22.9cmを測る。29は両端が欠損し、全長14.7cmを測る。いずれも、反りはなく、曲柄鋸の装着柄には該当しない。30は一端部が丸みを持つ加工がなされる。刃部を付けるもう一端部は欠損しているが、刃部との境(付け根)かはわからない。全長は、48.0cmを測る。反りはない。31は両端が欠損し、全長39.8cmを測る。反りはなく、曲柄鋸の装着柄には該当しない。33は一端部が丸みを持つ加工がなされ、刃部を付けるもう一端部へ厚みを持ち、刃部との装着部分で段差を付ける特徴がある。幅は、元端部からほぼ同じ4.4cmを測り、変化が少ない。

鋸においては、直柄鋸は身部に柄を装着する柄穴を持ち通直性のある柄を貫通させる。が、曲柄鋸は柄穴を設けず、柄には自然木の幹から枝の分かれ目に当たる任意の角度を持つ材を選び出し加工し、身部に結縛するものである。また、この曲柄鋸の装着柄は、「膝柄」と「反柄」に分類されるが、いずれも曲柄の形態にあり、柄に通直性はない。これらより、全長が足りず判断できない28と29、曲柄鋸でないとして断定されるものに、27・30・31・33がある。この内、27は鋸の柄の可能性があり、33は鋸や鋸でもない農具の可能性が持たれるのかもしれない。

時期は、33は弥生時代中期、31は弥生時代後期、28・30は古墳時代前期、27・29は古墳時代中期～後期である。樹種は27と29がケンボナシ属、28がチドリノキ、30がアサダ、31と33がクリである。

5 馬鋸(図版49・図版50-35～37・40)

35～37はC1地区の第4水田の下層(21層又は24層)より接近して出土したが、詳細な出土状況は不明である。曳綱により牛馬に繋ぎ止め曳かせる左右2本の引棒と馬鋸を操る把手とそれを結び付ける柄は出土していない。第4水田は8C前半には開始されており、馬鋸の時期は、古墳時代後期～8C前半と判断される。35は台木で、全長65.0cm、幅6.0cm、厚7.0cmを測り、端部が反る。歯の装着柄穴が5箇所に上下に貫通し、側面に3箇所(両端部の孔は台木先端部側が欠損する)の腕木状の部材を装着する柄穴が左右に貫通しさらに小孔が2箇所(1箇所は一部欠損する)にあく。両端部が欠損しておりその全容は明らかでないが、台木は長軸方向に左右対称の形態が一般的であることから推定すると、本材は一端が引棒の柄穴で、一端が馬鋸を操る人物が押さえる機能を持つ部材の柄穴と思われる。両端ともその先を欠くことになる。この場合、台木両端は反り返り中央部が湾曲舟形の形状を呈することになる。左右引棒の心々間の寸法は推定で47×2cm=94cmを測り、一頭の牛馬が曳くために損傷のない幅といえる。また、台木の前

後に貫通する柄穴は、腕木状の部材を装着させるものと思われ、その間隔は柄穴の心々間で約26cmを測る。この柄穴の内側には小孔が2箇所にあき、これも左右対称に位置する。歯の装着柄穴の心々間で10.5～11.7cmを測る。なお、図版49には台木と歯の装着推定図を示した。36・37は馬銜の歯と推定され、36は全長53.7cm、3.0cm、厚3.7cm、37は全長41.5cm、幅3.7cm、厚2.3cmを測る。この内、全長の短い37は状態が悪いため断定はできないが、両端が先細りし、一端側に柄穴らしき孔があるため馬銜に係わる他の付属部材の可能性も残される。

40は、柁目の板材で、一端部は若干の欠損が見られる。また、片側の木端面より剥がれ鍵状に加工が施されている。その剥がき先端部より先は木口まで片面にくぼみを持つ。端部の突起状の柄が欠損しているが、当地方の民具にこれと同型の馬銜の引棒がある。

時期は35～37が古墳時代後期～奈良時代、40が近世である。樹種は35～37がクリ、40がブナ属である。

水田耕作に家畜を利用したことは、C1地区出土の馬銜やC地区の8世紀末～9世紀初頭にあたる水田面の牛の足跡からも明らかとなった。この足跡が田起こし、碎土から代掻き、はたまた刈敷作業等のどの行程に該当させられるのかは特定できないが、牛馬に田を踏ませた事実は無視できないことになる。

なお、C1地区の平安面上からは、牛の足跡が認められているが、その下層の古墳時代後期の水田面からは認められていない。このため、馬銜は出土したが、それに対応する牛馬耕跡は認められていない。

6 田下駄（大足）（図版51～53-41～58）

昭和初期頃の田下駄は、泥土に足を取られないために履く履物で、大足（オオアシ）は雪の中を沈まずに歩くカンジキの様に足に取り付けて使う道具とする。この時の大足の用途は、代掻き後に草や葉を肥料として泥土化した田に敷き込む刈敷（カリシキ：あるいは緑肥という）に使用したり、田面を平坦に均したりする道具で、単に履く田下駄とはその用途は異なり一般的には区別されている。本遺跡の出土品については、このような用途の違いは区別できず、「田下駄」の名称を用い、形態による以下の様な分類を便宜上行った。なお、図版はすべて形態の比較を考慮し長軸方向に組んでいる。

I類…板の四隅が比較的に角張る。板上の中央の3孔を結び三角形となる。ほかに孔は認められない。

(41)

II類…板の四隅を丸める。板上の中央の3孔を結び三角形となり、板の両端木口沿いに2～4孔が設けられているもの。孔は42・43・45の四隅側と44の様に一対の孔とするものがある。(42～45)

III類…板の中央の3孔を結び三角形となり、板の両端木口沿いに1孔が設けられるもの。板の形状によりAとBに大別する。

A 板の木口部両端あるいは一端をやや尖らせる。(46～50)

B 板の木口部両端に丸みを持たせる。(51・52)

IV類…一部欠損のためその詳細は明らかではないが、左右対称として想定する。全体的に楕円形の形状を示し中央に透かし部を設けるもの。(53)

V類…その他。欠損等によりその詳細が掴めないもの。(54～58)

I類の41は、ほかの部材との接合痕跡は認められない。III類-Aの板の木口沿いの1孔は、ほかの孔にはない力が加わったことが読み取れる。ほかの部材との接合が想定されるならばこの材は大足の足板ということになる。III類-Bにあくすべての孔はほかの田下駄の孔に比べ径が小さい。IV類の53では、孔は木口部両端2孔、木端面両側に2孔、楕円透かしの上側に1孔がある。

時期は、41が古墳時代中期～後期、45が古墳時代中期～平安時代、53・57が古墳時代後期、50・52・55・56が古墳時代後期～奈良時代、44・46～48が古墳時代後期～奈良時代、42・49・51・54が奈良時代～平安時代、43・58は不明である。樹種は41・51・54がサワラ、42・49がモミで、43・47・52・55・56がモミ属、44がトネリコ属、45が五葉松類、46・48・50がケンボナシ属、53がクヌギ、57がスギ、58がヒノキである。

7 横槌 (図版54-59-61)

横槌は、敲打部を頭として重心を持ち付属する柄を使い手が握って、水平位置に置かれた対象物に対して振り降して叩く道具であり、敲打部と把手部とから成る。敲打部は円筒形が多く、中心部に凹みや括れがあれば敲打した痕跡といえる。

59は敲打部を摩滅したものと思われ、瘦せている。敲打部と把手部との境は、敲打部側から緩やかに削り込むため肩部ははっきりとしない。60は、把手部側から敲打部にかけての一部分が遺存するのみである。敲打部側がほとんど欠損しているが、肩部が明瞭で、敲打部と把手部の境が明確に区分できる。61は、断面円形の柄が根元から欠損している。敲打部の把手側の端面は、先端部面とは異なり細かく削り込んでいる。敲打部は円筒形で、敲打面に残される敲打痕跡は四方に確認される。把手部側と敲打部の境が敲打部側から緩やかに削り込む59と、敲打部側に肩部をはっきりと持つ60と61に区分できる。

時期は、59が古墳時代前期、60・61が奈良時代～平安時代(?)である。樹種は59がクヌギ、60がイヌシデ節、61がカエデ属と一様ではない。

8 編具 (編台の一部) (図版50-38)

藁などを束ね、糸を使い簾状に横方向から交互に編み込む編み方を「もじり編み」という。この編み方をする編具は、基本的には編台と木錘とで構成される。編台は、細長い板材と、その板を横に寝かせ両端を橋状に支える脚部とで構成される。

出土した板状の材は欠損部分が大きく、その全容は明らかでないが、端部は、両木端面側および一方の板面より角を欠き取られ、柄状に造り出されている。また、片方の端面は両側より山形に削り、その上を板目方向に直行する様に溝が切られている。この溝は、端部より3.4、3.3、3.7cmの間隔を隔てて4箇所1～2mmほどの深さに切り込まれている。

溝を切る木端面を上に向け、柄の造り出しは脚部に設けられた柄穴に接合する「目盛板(コモゲタ)」と推定されるが、溝周辺には紐の類により擦れて摩滅した使用痕跡が認められない。

目盛板は全国的にもその出土例は乏しく、長野県内では古代のものは初見である³³⁾。この目盛板と推定される板材は、特に奈良国立文化財研究所「木器集成図録 近畿原始編」を参考として判断した。ここでは、大阪府西ノ辻遺跡より出土した13世紀の編台を例として取り上げており、目盛板の刻みの間隔は細かく、川田条里遺跡出土の38の様等に間隔を保つものではない。西ノ辻遺跡の編台は「もじり編み」の対象とする材料とその編み方により、間隔の調整は自由に設定されたとされる。

時期は、古墳時代後期～奈良時代で、樹種はモミである。

なお、当初本製品は110とともに容器の底板材と組合さる枠板と判断しており、写真図版は「容器」に含まれている。

9 用途不明木製品 (図版48・50-32・34・39)

以下には農具に分類されるものの用途不明の木製品について記述する。

32は柄穴を持つ削り出しの棒状木製品。39は一端部が膨らみ先端を丸く削り、もう一方の端部は欠損している。整杵の未製品であろうか。34は丸太材の両端部を把手状に加工した棒状の木製品。加工は横楕の把手部に類似するが、本製品は両端に施される。

時期は、39は弥生時代後期、34は古墳時代前期、32は古墳時代中期～後期である。樹種は32がモミ属、34がヤマグワ、39がクリである。

第3節 武具・祭祀具

武具では、弓3点、矢1点、盾（タテ）1点が出土し、祭祀具では畜串（イグシ）1点、馬形1点が出土した。

1 弓・矢・盾（図版55・56）

(1) 弓（62～64）

弓は、棒状の両端部の弓筈（ユハズ）に弦（ツル）などを掛け渡し、鳥打を持たず「く」の字に反らせ弾力性を持たせる。製材の性質を考慮して製作されるため、この時点で使用時の天地が決められる。このため、弓筈加工は上端部を末筈（ウラハズ）、下端部を本筈（モトハズ）とされる。末筈と本筈は、木材の末口側と元口側に相当しており、末口を上向きに元口を下向きの天地にして使用する。末口側と元口側は木材の直径に表われ、元口側を削り込んだり溝「樋（ヒ）」を切ることで上下端部の弾力を均等に配分させる調整を図る。

62は棒状で、片側に若干反り、両端部に弓筈が施されている。弓筈は、両端部とも先端から両側を削り込み板状に造り出している。弓筈と全体の反りから、弓手側の裏面に相当する面に一筋の溝が両端に渡って刻まれているが、これは上下端部を調整する樋ではない。また、両端部の上下関係は、弓筈を除いた先端部の直径の規模より結論付けるべきかは今後の研究に委ねたい。64は一端部が欠損するためその全容は明らかではないものの、一端部に弓筈の加工が施されており、弓の主体部の一部と判断された。弓筈は、弓状の反りと同方向に先端から両側を削り板状に造り出しており、一端面を一部で欠いている。樋は見られない。62・64はいずれも矢摺（ヤズリ）の痕跡は認められず、64は62より内弧を描く状態にある。63は一端部が杭状に尖らせる加工が施され、転用後の遺存状態にある。芯を有するが、幅に比べ厚さを持たず、弓なりの僅かな反りがある。端部に残された有頭状の加工が弓筈とすれば弓の主体部となる。しかし、上記62と64とは異なる形態を呈する。樋は見られない。

時期は、63が弥生時代後期、62・64が古墳時代中期～後期である。62・63・64の樹種は、いずれもイヌガヤである。なお、イヌガヤは、石川条里遺跡においても弓の主体部として使用されている。

(2) 矢（65）

65は内部が空洞となり、竹笹類の植物繊維（65b）を一端部に巻付ける。篋（矢柄）の元端部、すなわち筈（はず）と推定されている。矢の筈と思われる65の全容はわからない。

時期は古墳時代前期で、樹種は竹笹類である。

(3) 盾（66）

66は数点の破片の片面の所々に朱塗りされる状態から、片面全体に赤色塗彩が施されていたことがわか

る。このため、朱塗りの有無により表裏が判断される。周縁は、全体的に欠損しているため、その全容は明らかにはできないが、破片の接合によりやや曲線の断面を持つことが判明した。ただ、これだけでは盾と結論付けられない。時期は弥生時代後期で、樹種はサワグルミである。

2 祭祀具 (図版56)

(1) 馬形・斎串 (67・69)

人形、木筒などは出土していない。67は両端部の欠損が大きくその全容は不明となるが、鞍を備える飾り馬の形態に類似していることから馬形の胴部と判断した。鞍の下に位置する腹部には脚部に相当する材を串状に差し込む切込み痕は認められていない。なお、材は厚さをあまり持たない柾目板材である。

69は一端部が欠損しておりその全容は明らかではない。端部が山形の圭頭状に加工する斎串に形態類似していることからそれと判断した。材は、厚さをあまり持たない柾目板材で、乾燥の影響かやや歪みがある。

双方とも欠損が大きい遺存状態より、流れ込み遺物の可能性が持たれるが、その出土状況は記録されておりおらずわからない。ただ、この溝からは墨書土器が数点の出土を見ておりその関連性が注目される。

時期は、どちらも奈良時代～平安時代であり、樹種はヒノキである。

(2) その他 (68・70)

以下は、この項にて分類することが必ずしも適当であるとはいえないが、あえて含める。

68は木の皮のみの出土であるが、空洞化した内側より棒状の製品に巻き付けた可能性がある。70は一部が欠損しその全容は明らかでない。赤色塗彩されていた痕跡がある木製品である。赤色塗彩は盾以外には見られないため、本項に分類した。

時期は、68が弥生時代中期～後期、70が弥生時代後期である。樹種は、68が不明、70がモミ属である。

第4節 服飾具

1 下駄 (図版57-71-77)

下駄は、農具の田下駄(本報告書においては大足の足板を含める)とは形態もその用途も異なるために区分される。

足を載せる板の厚さと、その裏面側に歯を付けるか付けないかで区分した。この歯が足を載せる板とを一木で造りだしたものを「連歯下駄」とし、歯と板を別材にて造り、柄差しにより接合し組合せたものを「差歯下駄」とする。

(1) 差歯下駄 (73・74)

73は、足を載せる台板のみ出土している。先端縁から欠損しているが、隅円から楕円形に近い平面形状を呈している。この板は、前後端部に反る。緒孔は前方に1孔、後方に2孔がある。この後方の孔の丁度裏面には横方向に溝を切り込む。この溝がここに装着する歯部の柄穴に相当するものと解釈し、差歯下駄と判断した。ただ、前面にはその痕跡がない。

74は、台が隅円で側面部縁を楕円形の曲線とし、断面逆三角形を呈する。前先端部の一部と上面左側が

欠損する。緒孔は前に1孔、後ろに2孔あく。この2対の孔は、側面に切られる。歯を装着させる柄穴は四角形にあけられる。この柄穴は、いずれも緒孔の下方に位置する。1枚残された歯は端部の一部分が欠損するものの、上部に台と接合させる柄があり、地面と接する方向に台形状に広がる撥形を呈する。この歯は、台板との接合角度が外側に開いている。もう一方の歯は残されていないが、穴より見た柄の接合角度よりこちらやや外側に傾き、2枚の歯は側面より見ればハの字形に下方に開く状態であったと推定される。この歯が装着された下駄は、本遺跡より出土した連歯下駄の成りより比較的高いことがわかる。

時期は、74は近世、73は近世以降である。樹種は74がアナ属、73が不明である。

(2) 連歯下駄 (71・72・75~77)

72は、前方の緒孔は周囲が欠損するものの場所の特定は可能であるが、後方の緒孔は両側縁から欠損している。D地区第1水田水口より出土した。76は縦に半分程が欠損しているが、緒孔の位置より前後関係が明らかである。なお、71および75の遺存状態は、72よりも悪いが、台に備わる歯部が残存しており、連歯下駄と判断できる。77は下駄の歯部で、欠損部が板部との接合面であろうか。

時期は、71・75が近世以降、72・76・77が近世である。樹種は72がヒノキ、76がサワラ、77がハリギリで、71と75は不明である。

2 櫛 (図版57-78)

78は、その大半が欠損しておりその詳細は不明である。一端部の遺存状態より、横長の櫛と思われる。歯は、中心部に向かって深く切り込み山形となる。個々の歯部は根元付近から先端が欠損するものの、疎らな間隔にあることがわかる。

時期は中世で、この時期としては装飾性に乏しい櫛といえる。樹種はサクラ属である。

第5節 容器

木製容器は、製作技法とその形態によって、剝物(クリモノ)・挽物(ヒキモノ)・曲物・指物(組物)・粘物に大別される。本遺跡では、剝物・挽物・曲物が出土した。

1 剝物 (図版58)

剝物は、製材の内部を手斧などの刃物により剝き、轆轤を使わずに外形を成形するため回転体とならない容器とする。周縁を残して剝き、口径(口縁長)に対して高さが小さい。重量が有り設置して使用する頻度が高い容器と、比較的軽量で皿状の容器とに大別した。

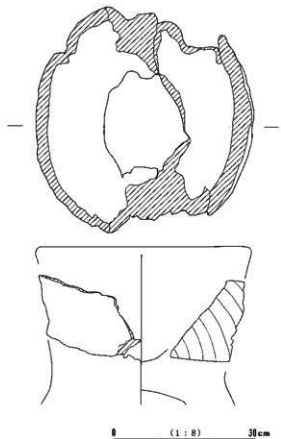
(1) 設置式の剝物 (79・82)

79は、一端部が欠損するが、遺存する長軸方向に周縁部より剝けく境界が復元可能で、表面には低い脚を作り付ける。木取りから、欠損する片側片を含めても長軸方向は変わらないものと推定される。82は、剝物の隅の一部と思われ、周縁より剝き境が曲線を描いている。剝き面の裏面は欠損しており、田舟の一部との推定もなされているが、舟とすれば周縁部の剝き方が浅く、造り出した突起部には縄等により繋ぎ止める曳くための加工は施されておらず、むしろ把手として適当な形態といえるため、大型の剝物と判断した。この把手は、剝物の隅の一部に取り付くものと思われ、一端に2本が備わり、反対側も同様な

二対が備わっている形態として復元できる。

時期は、79が古墳時代～平安時代、82が平安時代である。樹種は、79がヒノキ、82がスギである。

この他に、D地区第6A水田（弥生時代後期前半）面より白形木製品（第3図）が出土した。遺存状況が悪く、脚部を有する形状と推定されるが、脚部を欠損し、胴部も半分が欠損している。口径は45cm、残存部の高さは21.2cmである。横木取りであり、底が抜けた状態となっている。樹種はトチノキである。



第3図 白形木製品略図

(2) 皿状の刳物 (80・81)

80・81は、皿状の容器と思われ刳物の皿状容器に類似させられるが、轆轤を使う円形の回転体ではないため刳物に属する。いずれも、周縁部を隆起させているが、欠損が甚だしいためその全容は明らかではない。なお、81は2箇所に孔があげられており、蓋の可能性がある。いずれも木材を切断した製材の木口面に対する垂直面に口縁部を向けた方向に心去りで加工されている。82は木裏（心）側を刳抜いているが、そのほかは木表（樹皮）側を刳抜いていることがわかる。いずれも白木のままで仕上げられている。

時期は80が中世、81が古墳時代後期である。樹種は80がエノキ属、81がクヌギ節である。

2 刳物 (図版59)

刳物は、轆轤により回転加工され、回転体に整形された容器である。皿形容器 (83・84・85) と、椀形容器 (86・87・88・89) に分類した。椀形容器は轆轤にて加工仕上げの後、漆塗りされた漆器であり、これに対して皿形の容器は漆塗りをしない白木のままである。

(1) 皿形容器 (83～85)

83は細かく欠けるものの接合は可能で、皿形の容器としての形態は明らかであるが、84と85は縁辺部の立ち上がりが確認され、皿形容器と判断されるが、大半が欠損しているためその全容は掴めない。

時期は、85が古墳時代後期～奈良時代、83・84が奈良時代～平安時代であり、樹種は、83と84がケヤキ、85がニレ科である。

(2) 椀形容器 (86～89)

86～89は全て漆器である。88は、椀の口縁が欠損し底部のみの遺存状態にあり、漆塗りの表面は残存しておらず、その詳細はわからない。86・87・89は、外面が黒漆上に赤漆塗の植物紋の模様を描く。86・87は、同一模様の連続文を装飾模様としている。内面は、86と87が黒漆に赤漆、89はさらに底部中心部に黒の円模様を施すと思われるが、いずれもその遺存状態が悪くはっきりしない。なお、86・87・89の実測図

では、黒漆を除き赤漆絵のみ網掛けとした。

時期は、86・88・89が中世、87が中世以降である。樹種は87・88・89がブナ属、86が不明である。ブナあるいはトチなどを使用した漆器は、高級漆器に多用されたケヤキとは異なり、生活容器として広く浸透したとされる。

3 曲物 (図版60～図版62)

曲物は、薄く割いた薄板を側板として、底に位置する円形や楕円形に加工した底板の形状に合わせて巻き、互いの合わせ目を桜あるいは樺皮等の樹皮を帯か紐状に編み込んだものや木釘にて接合したもので、蓋を有するものもある容器である。この上下に位置する蓋と底板の形状により、円筒形・楕円形・方形あるいは長方形の曲物に分類される。本遺跡において曲物は完形で出土例に乏しいため、単品としての分類に成らざるを得ない。この場合、側板・底板・蓋板に分割されるが、底板と蓋板との区分が明確に表わせるのは難しい。側板と組合さる段を周縁に持ち、樹皮あるいは編み込みの孔が残され、それにより開閉しない完全な「はめ殺し」状態を想定されるものは底板とされる。しかし、板の内側に孔があくからといって蓋と解釈するべきではない。最近は飯の板としたり、転用品とする説も出されているからである。このため、側板との接合部を一段低く削るカキソコ板とそれ以外の板に区分した。

なお、楕円形や長方形の曲物は、使用用途が異なるとされるため区分した。また、底板が藤や竹等による網目を張る篩（フルイ）は農具であるが、それと特定できるものは出土していない。

(1) 円形 (円筒形) 曲物 (90～93・95～100・102～108)

97は側板と底板が組合さって出土した唯一のものである。97aが側板、97bは底板である。底板は、側板との接合部を一段低く加工したカキソコであり、1箇所において樹皮により双方の編み込みが遺存しその様子は明瞭である。これ以外は全て底板のみが単独で出土した。底板はカキソコ板とカキソコでないものに分類される。

カキソコ板 (90～93・95・96・97b)

90～92は、側板との接合部として一段低く整形するカキソコで、この面を内面とし、側板との組合せを樹皮により編み込んだ板である。90と92の樹皮による編み込みは、正方形の四隅に位置し、91は半分を欠損するものの2隅の位置に残存し、同様に4箇所の樺紐止めと推定される。この3点の樺紐止めの方法は、一様に一段欠き取る周縁部境に側板端を巻付け、樺紐を上段の底板内面に固定した後、側板を通して下段を貫通させて裏面にて板に巻き込み調整を行い端部を固定する。ただ、92は樺紐を底板の内面から下段に一周させるが、90は樺紐の内面巻始め止めに板に貫通させずに巻き込み止め、91は貫通させた裏面の樺紐端部をだま状に膨らませて固定する3点が三様であることがわかる。95と96は、大半が欠損しており全容は明らかでないが、周縁部の段の整形が見られる。ただ、95は裏面の周縁が反り返ることと、樹皮の編み込み痕が残存片のみでは窺い知ることができず、側板との接合部に斜面を設けることなど結論付られない不確定要素がある。なお、91には裏面に線状痕が無数残されている。また、90には内面のほぼ中央に楕円形の輪がゲルマ状に連なる模様認められる。これは、刃物により刻まれた線刻ではなく、焼鍛による烙印と思われ、奈良時代に属する木製品としては注目される。

カキソコ以外の板 (98～100・102～108)

99と102は、板の中央に大小の相違はあるが孔があく。102の側面の数カ所には、側板と組合せた差し込み込みが残存する。99は中心部の孔の周囲に小孔がつけられた痕跡がある。98は板面に炭化痕が残る。105と107は、側面の不規則な位置に木釘による孔があり、105には2箇所に木釘が埋木状となり留まる。

目釘孔と解釈される。なお、106は円形板の破片で、一端部に曲線を持つが側面は腐植しておりはっきりしない。また、板面には内部へ線上に孔が4箇所あけられ、この内一箇所には木釘が残される。これまでの材質とは異なるが容器の蓋として判断した。103は両面に巴文が墨書される。この巴文は、板の一端部が欠損しておりその全容は明らかでないが、その形状より裏表に一つ巴が印される。ちなみに、巴文には一つ巴、二つ巴、三つ巴文が一般的で、円頭の巻方により右巴、左巴となる。104と108は欠損が甚だしくその全容は明らかでないが、円形板材として復元される。また、108は一部で筋状に隆起する箇所がある。

時期は、91・97が古墳時代中期～後期、90・98・99・102が古墳時代後期～奈良時代、95が古墳時代～平安時代、92・93・96・104・105が奈良時代～平安時代、100・107が中世、106が近世、103が近世以降、108は不明である。なお、B地区より出土した古墳時代～平安時代のものは、出土層位より91・97→90・98・99・102→92・93・96の新旧関係にあることが確認された。

樹種は、91～93・96・97b・98・99・102・104～106がヒノキ、90がサワラ、95がケヤキ、97aがモミ属、103がアカマツ、108がカツラ、100・107が不明である。

(2) 楕円形および大型円形曲物 (94・101・109)

楕円形や長方形の曲物の特に大型のものには、折敷（オシキ）や折櫃（オリウス）が含まれる。この形態は底板と側板の接合関係より判断されるが、本遺跡より出土したこの種の曲物は底板のみである。

94は板厚2.0cmで、周縁に楕円形的一端曲線を残す大型の曲物である。カキゾコ板として周縁部の上下段に2対の孔が貫通しており、その内の1点には榫紐の破片が遺存している。また、他の箇所にも数点は榫紐止めの痕跡ある。なお、欠損端部側に見られる線刻は、整形時の基準線であろうか。また、内部に貫通する孔は、どのような用途に利用されたものか、あるいは転用後の加工であるかの判断はできない。109は板材の2隅の曲線部を持つ。同等の板材を組合せれば楕円形が想定され、大型の曲物と判断した。101は周縁部に段を持つカキゾコ板であるが欠損部が多くその全容は明らかでない。遺存状態より、楕円形もしくは円形的大型曲物と推定される。この材の特徴は下段には突出する箇所があり、欠損する対縁部も恐らく造り出しが想定される。

時期は、いずれも奈良時代～平安時代で、樹種は94がサワラで、101と109がヒノキである。

4 その他の容器 (図版63～65)

(1) 容器の枠板 (110)

110は、板材に他材との接合を想定する加工が施されている。本材の両端側にあく四角い孔が垂直方向に組む納穴を、底板材との接合に関係すると解釈すれば、角形容器の一辺部の枠板になる。しかし遺存状態に見られる類例がほかにないため、結論付けられない。

時期は、古墳時代後期～奈良時代に帰属し、樹種はモミである。

(2) 容器の破片 (111～127)

ここに掲載した木製品は、容器の一部の部材と推定されるものである。この内、111と126は、遺存する2隅を斜めに欠き取る。117・124は板材の一端部に曲面加工を施している。121は一端部の両隅を欠いて別材との接合が想定される。

時期は、119が弥生時代中期～後期、120が弥生時代後期、124・125が古墳時代前期、127が古墳時代中期～後期、117が古墳時代中期～平安時代、113・115・123が古墳時代後期、122が古墳時代後期～奈良時

代、111・118・126が奈良時代～平安時代、112・114・116・121が近世である。

樹種は、111・114・121・122がヒノキ、112・116～119・123・127がサワラ、113がクヌギ節、115・125がケンボナシ属、120がスギ、124がモミ、126がヒノキ科である。

(3) その他の容器 (128～130)

128は角材の一面を材心まで刳抜く加工がなされている。129は丸木材の中心を刳抜き、途中から断面の1/3を削り取った溝状の形態になる。溝状になった端部が欠損しているため、全容は明らかではない。128・129は両木口面まで抜いているため刳物容器との結論には至れない。130は角材を逆台形状に削り込んで、その底面が薄くなり、欠損している。

時期は128・130が弥生時代後期、129が近世以降で、樹種は129がアカマツ、130がトチノキ、128は不明。

第6節 用途不明木製品および加工材

ここでは、使用目的がわからずその物の用途が不明のため上記木製品に該当しないが、今後の木製品および加工材における調査研究の上でも、特に重要と思われる木製品を対象とした。ここで取り上げた木製品は、有頭状木製品、弓状木製品、棒状木製品および加工材、板状木製品および加工材、有孔棒状・有孔板状木製品および加工材、その他に分類した。複数の材を組合せることで機能を果す木製品の一部(部材)あるいは建築部材と思われるものには、上記の分類に板状加工材や棒状加工材という「加工材」の名称を付加して区別した。

1 有頭状木製品 (図版66・67)

両端あるいは一端部に頭状の加工を施した木製品を「有頭状木製品」としてまとめる。この有頭状の木製品は、織機の部材、天秤棒、建築部材の垂木などが想定されるが、垂木は規模も大きくなり、その形態も特徴的で特定し易いため、ここでは含めず、建築部材の項で取り上げた。板状木製品と棒状木製品に大別する。

(1) 有頭板状木製品 (135～138)

135と136は、板目の板材で、両端部に有頭状の加工が施される。その有頭状の部分の形状は、撥状の136と先端側に若干の幅を持たせる135で、この内の135は括れ部に四角形の貫通する孔としない孔があげられている。いずれも紐による結び目の痕跡は認められていない。この両木製品の形態は、織機の部材と推定している報告書もある。138は一先端部の両木端より一段付けて円形上に曲線を持たせ、もう一端部は膨らみを持たせる有頭状の痕跡が残される。137は一端部の両木端側から欠き、先端を尖らせる有頭部を形成する。

時期は、135が古墳時代中期～後期、136・138が古墳時代後期、137が中世である。樹種は136がサワラ、135がスギで、137がニレ属、138がニレ属である。

(2) 有頭棒状木製品 (131～134・139～142)

131・132・134・141は丸木材で、一端部に有頭状の加工が施されている。この内、132・134・141はその遺存状態が異なるが、ほぼ同型の有頭棒状木製品で、これらより一回り規模の大きな131がある。131の

一端部は有頭状に、もう一端部は杭状に加工されている。この杭状に尖らせる加工は後世の加工であろう。133の横断面は隅円の台形で、その一端部は欠損しているものの、一端部には先端部を丸く削り両側面の曲面部を欠き有頭状の頭を造り出すものである。横断面隅円の形状は、他には見られない。139は建築部材とすれば、腰掛け蟻継仕口を思わせる先端部の形状であるが、台形に切り出した木口は一端面より面を持つ。140の有頭は、天秤棒の一端部に見られる形態であるが、全長は短く、もう一端にはこれとは異なる加工が施される。142は角材で、有頭状の頭のみ出土である。先端部は山形に尖らせ、もう一端部は主体部との接合部より欠損している。

時期は、133が弥生時代中期以前、134が弥生時代中期、142が弥生時代後期、131・132・140が古墳時代中期～後期、139・141が古墳時代中期～平安時代である。樹種は131がカヤ、132がニワトコ、133がモミ属、134がサクラ属、139がアサダ、140がフジキ、141がカエデ属、142がヤマザクラである。

2 弓状木製品 (図版68-143-149)

完形品でなくとも、端部に弦を掛ける弓頭が施されていれば弓の主体部と特定できる。それらは、前述の「武器・祭祀具」の項に記述した。ここでは、弓加工が施されていない弓状の木製品を対象とする。

143-145は弓形状に大きく反り、146-149は全長が短いため反りが弱い。145は枝を落とす程度であるが、143と144は両先端部に加工が施され、なんらかの用途に使用されたことが窺えるが、それを弓の主体部とは断定できない。

時期は、145・148・149が弥生時代中期～後期、147が古墳時代前期、144が中世、143と146は出土地点が不明である。樹種は143・147-149がカヤ、144-146がイヌガヤである。

3 棒状木製品および加工材 (図版69-71・80・81)

用途不明の棒状材について、単品にて機能するものを棒状木製品とし、大形のもので他材との接合が想定されるものを棒状加工材として大別した。

(1) 棒状木製品 (150-161・232-235・238-241・243-248)

150と157は、農具等の柄頭付きの柄部分の可能性もあるが、それを決定できる遺存状態にはない。151は一端部を片側のみ欠き取り、杭状に先端を尖らせ、もう一端部は不整形な形状に加工される。有頭状の加工を施す過程のものか。しかし遺存状態が不良のため詳細はわからない。152と155は棒状に多面に加工が成される。153は先細りする端部に差込みによると思われる圧迫痕が見られる。もう一端部は欠損しておりその全容は明らかではない。納穴等に差し込む太柄(ダボ)材であろうか。154は一端部に仕口用加工が施されている。このため、なんらかの組合せ部材と推定されるが、その用途はわからない。156は枝落を認め、一端部を片面より杭状に尖らせる。158は両端部が欠損しておりその全容は明らかではない。一端部は膨らみをもたせ柄を造り出す痕跡が認められる。もう一端部側には把手ほどの幅を持たせその両側に厚みを出して変化を付けているがその先端部は欠損しており明らかではない。この部分が製品として材の中央に位置するの一端部に片寄っているのかは現状からは読み取れない。159は一端部を欠損するが、一端部は鬚状(ピンタ)状の欠き柄を持つがその先端は杭状に尖らせる。161は両端部が欠損しておりその全容は明らかではない。ただ、柄と椀状の変化を持たせている。233と234は先端部を杭状に尖らせる加工が施される。

時期は、151・233・234・243が弥生時代中期、238が弥生時代中期～後期、157・239が弥生時代後期、241弥生時代後期～古墳時代前期、159・240・245-248が古墳時代前期、244が古墳時代中期～後期、235

古墳時代中期～平安時代、150・152・153・155・156・158・161が古墳時代後期～奈良時代、160が奈良時代～平安時代、232が中世、154が不明である。

樹種は151がアサダ、152～155・158がヒノキ、156はイヌガヤ、157がクヌギ節、159・235がカエデ属、160・243がケヤキ、161がモミ、232がモミ属、233・234がムラサキシキブ属、238がエノキ属、239・240がカヤ、241・244・246～248がクリ、245がコナラ節、150は不明である。

(2) 棒状加工材 (162～168)

162はL字形の断面形を持つ。仕口加工は施されていない。163は角材で二方向隅に面を取る特徴がある。164は角材で、一端部に仕口加工がある。165は欠損部が多くその全容は不明である。166は全長175.8 cmの角材で、一端部を杭状に尖らせ、一端部は欠損状態にある。杭状の加工は角材の表面加工とは異なることから後世のものと思われる。167は角材で、一端部に仕口加工が施されているが、欠損によりその詳細は明らかではない。168は板材で、一端部が両端より先を細めている。

時期は、165が弥生時代後期、162～164・166が古墳時代前期、167が古墳時代中期～後期、168が奈良時代～平安時代である。樹種は162がタラノキ、163がコナラ節、164がケンボナシ属、166がフジキ、167がクリ、168がモミ属、165が不明である。

4 板状木製品 (含む加工材) (図版72・73・80—169～186・231・237・242)

170は片側の木端面より両木口面にかけ隅円に成形される。169もまた若干その傾向にある板材である。171は不整形で内側に仕口加工と思われる削り込みがある。172～177・231・242は、一端部を杭状に尖らせる加工が施されている。この内、176・177・242は杭状の加工と板材としての加工形状が異なる。杭状加工は後世の転用と推定される。178・179・181・182は下記の板状木製品よりも小型のものである。この内、179は当初容器と思われたが、その様な加工にないことが判明した。180は一端部に楕円加工の痕跡を留めるが、欠損のためその詳細はわからない。183～186は、やや幅を持ち板状加工材に含めたものである。186は板目材で、一端部の両木端面を欠いており、他材との接合のための仕口加工の可能性が持たれる。また、184は一端部を矢板状に加工している。この加工が後世のものかは明らかではない。

時期は、169～177・242が弥生時代中期、179・181が弥生時代中期～後期、237が弥生時代後期、183が古墳時代前期、231が古墳時代中期～後期、178・180・182・185・186が古墳時代後期、184が中世(?)である。

樹種は169～172・174～177・184・242がケヤキ、173がクリ、178・180・182・185・231がケンボナシ属、179がクヌギ節、183がイヌシデ節、186がヒノキ、237がエノキ属、181は不明である。

5 有孔棒状・有孔板状木製品 (含む加工材) (図版74～77・80)

(1) 有孔棒状木製品 (187～191・236)

189は断面四角形で、一端部は2方向より山形に尖らせている。孔は、この山形の先端を持つ1面に2本の平行した溝状に刻まれる。187・188・236は丸木材の芯部分を剥抜いている。190・191は断面四角形の角材で、複数の孔が貫通する。紡織具の糸巻の部材の可能性はあるが、残存状況が不良のため断定できない。

時期は、187・191が弥生時代中期、190が弥生時代後期、188が古墳時代中期～後期、189が奈良時代～平安時代、236が中世である。樹種は187がタラノキ、188がケンボナシ属、189がヒノキ、190・191がケヤキ、236がムラサキシキブ属である。

(2) 有孔板状木製品 (192~213)

192は一部で欠損するものの、両端部に四角形の孔の貫通が読み取れる。別材との組合せが想定される部材と思われる。193は木口側的一端部に二対の孔が、一端部やや木端面側に1孔があく。木口側の二対の孔からして、欠損する対木端側にも小孔が設けられていた可能性がある。また、194は両先端部を、203は片側先端部を山形に尖らせる部材である。195は板目材、196は柀目材の一端部に四角形の孔が貫通する。198は、小型の孔が2箇所あけられる。199は四隅を隅凹に成形し、両木端面沿いに六対の小孔が貫通する。この内、一対の孔2点はやや内側に位置する。200は長方形の板目材で2.0cmほどの厚さを持つ。板材の片側の木端面より両木口面にかけて隅凹に成形し、隅に2孔が、そのほかの2孔は不規則な位置にある。いずれも貫通する。板目材の201および柀目材の202は薄い板材で、板面に複数の孔が貫通する。201は規則性を持つ円形の孔が5箇所に位置する。203・204はセギ状の遺構に矢板として用いられていたものである。204は板目材に小孔が貫通する。この小孔は目の表面の口が裏面より広がる。205は板面幅と片木端面の厚さともに窄めており、欠損側に小孔が貫通する。206と210は柀目材に長方形の孔が貫通する。この孔は、他材との仕口用の柄穴と思われる。遺存する規模よりなんらかの部材の一部と思われるが、その用途は不明である。212と213は、幅の広い板面の1箇所に孔が貫通する。この孔は212が小型円形で、213は角形となる。212は後世に一端部を矢板状に尖らせる加工が施された。板幅から見てもなんらかの部材の可能性が持たれる。この他、遺存状態が不良な207~209・211は有孔板状加工材に含められる。

時期は、203~205が弥生時代中期、194が弥生時代後期、201が弥生時代後期~古墳時代前期、207・210・212・213が古墳時代前期、208が古墳時代前期~中期、192・199が古墳時代中期~後期、202が古墳時代中期~平安時代、206が古墳時代後期、193・195・211が古墳時代後期~奈良時代、197・200・209が奈良時代~平安時代、198が近世、196は不明である。

樹種は192・195・196・207がモミ属、193・194・197~200がヒノキ、201がフジキ、202~205・210・213がケヤキ、206がクリ、208がケンボナシ属、209・212がエノキ属、211は不明である。

6 その他 (図版77~79-214~230)

ここでは、上記の木製品および加工材に該当させられない、主に角材について掲載する。

214は一部で欠損する。遺存状態からは、両木端へ両板面の中央より勾配を減じ、一端部は両隅から削り取られる櫛形に加工された材であることが読み取れる。舟の櫛にしては規模が大きすぎ、柄状の部分は他材との装着痕跡は認められず接合仕口に施された柄とはいえない。215~217は、木端面一部に曲線状に削り込む。222は曲材に特異な板面を加工している。221・223は一端部に杭状の加工が施されているが、杭加工に認められる加工形態と異なるためこの項に含めた加工材である。224・225は、一端部の両木端面を矢板状に窄める加工が施されている。その対面の木口側は欠損により明らかでない。230は一端部が大きく欠損していると思われるが全容は不明である。もう一端部は幅厚を減じており二面から挟み込む様な削り込みがある。他材との組合せ仕口はわからない。ここに含まれる加工材は他に218~220・226~229がある。

時期は、218~220・224・225・228が弥生時代中期、215が弥生時代中期~後期、230が弥生時代後期、214が弥生時代後期~古墳時代前期、216・217・221・223が古墳時代前期、222が古墳時代前期~中期、229が古墳時代中期~後期、227が中世(?)、226は不明である。

樹種は214がクヌギ節、215がサワラ、217・226・229がクリ、218~225がケヤキ、227がモミ属、228がフジキ、230がエノキ属、216は不明である。

第7節 建築部材

1 建築部材の分類

川田条里遺跡から出土した建築部材もまた、大方の水田遺跡の状況と同様に、建物が倒壊した構造体のままの姿では出土していない。このため、当初の建築物の姿を復元するためには、出土建築部材から必要な情報を把握する以外に方法がない。しかし、出土建築部材は欠損部の占める割合が高いものや、杭に転用され先端部を尖らせるなど、構造材として当初の形状を留めたものはほとんどない。特に、転用加工が施された箇所は先端部のため、杓や杓穴加工部分を失っていることが多い。また、仕口・継手加工部が欠落する部材は、それを単独で建築部材と認定することは極めて難しくなる。ここでは、遺存状態から建築当初の形態が推測される出土建築部材について取り上げることとした。特に、構造体の接合部に当たる継手や仕口を形成した杓と杓穴を遺存させる部材が重要な判断材料となった。

出土建築部材の分類にあたっては、構造体のどの部位に該当させられるか、その手掛かりを得るための方策が求められる。建築物は、建築部材を組合せた構造体であるため、出土建築部材の組合せを想定しながらの分類が不可欠である。これにより建物の構造形式までもが推測できる可能性が持てるからである。それには建物の構造形式を理解し、その構成要素となる各構造材の役割を把握する必要がある。

構造体の区分

建物は、基礎・軸組・小屋組・屋根によって構成されている。その構成内容を以下に記す。

- 基礎……………掘立柱の下部、礎石。基壇。
- 軸組……………柱と梁あるいは桁により構成。
- 小屋組……………軸組より上部で屋根を支持する。
- 屋根……………屋根板、葺材に垂木を含める。

基礎部は、上部の軸組を地表下に固定させる。柱の遺存状態により掘立柱か礎石であるかの判断ができる場合がある。それは掘立柱では元口側を地中に埋めるため、地表側とは異なる遺存状態が読み取れるはずである。瘦せた状態が地中側と判断できれば、軸組と基礎部の分離は可能である。本遺跡の場合は柱の木口面等の状態より掘立柱以外の形態は想定されていない。

軸組は「軸部」とも称し、基礎部より上部に、小屋組の下部に位置付く。梁や桁といった横架材とそれを支持する柱などの縦材（竪材）により形成される。なお、「軸部」は、農耕具の特に鋳の着柄軸の部分の名称として使用するなどしているため、建築部材の項ではこの名称は避けた。

小屋組は、古代には扱首組と重ね梁組に和小屋などの構造形式がある。

屋根には、草屋根や板屋根がある。江戸時代の民家などによく使われた茅や葦などは、夏期には雑草のごとく良く繁り、手に入り易く、板材より加工がし易く軽いため屋根葺材となりやすい。

この様に建物は基礎と架構構造を形成する軸組、それに屋根を形造る小屋組により成り立つ。

建築部材の分類

構造体は、基礎・軸組・小屋組・屋根によって構成されるが、そこに使用される構造材は縦材（竪材）・横架材・屋根材・付属材・その他へとさらに細分化される。以下にその構成材の内容を記す。

部 位	川田条里遺跡出土部材	出土していない部材
縦材 (竪材)	柱・小屋組の垂直材	小屋組の束柱・方立
横架材	梁・桁・台輪・壁板・床板・楣	棟木・胴差
屋根材	蹴放 (隅)・小屋組の水平材	萱や草などの屋根葺材および板材・
付属材	梯子・限柱	扱首・屋根木舞・破風板・
その他	用途不明材	屋根飾り扉・鼠返・限棒

以下、現状より特定できる建築部材について上記の分類表にしたがい分類し、各材における構造形態について記述する。特に重要と思われる木製品および加工材については、出土遺構（遺物等により特定された時期）や樹種の分析結果等の詳細を記す。これらの記述がない出土木製品および加工材については、巻末の観察表を参照されたい。

2 縦材 (竪材) (図版82～85)

(1) 柱・方立・小屋組の垂直材 (249～264)

柱とする縦材は、接合部を除けば丸太材や角材に係わらず通直性の高いものが構造上要求される。このため、直径が柱としての許容範囲内であっても、仕口用の加工がなく通直性が劣るものはその可能性が低くなる。また、方立に代用する部材は出土している。楣・蹴放材にその仕口と推定される柄穴が認められており、その存在が裏付けられている。

小屋組の垂直材は、屋根の荷重を支持する構造形式によりその形態が決まるが、いずれも、軸組の部材よりも軽量化が図られていると見るべき要素がある。

柱

川田条里遺跡の柱材は、仕口加工により二種に分類される。249・250のごとく柱頭に鬘太 (ピンタ) を大きく残すものと、251・253のごとく柱頭に細長い柄を持つ部材に区分され、いずれも梁や桁の横架材との接合が想定される仕口加工となる。柱頭に鬘太を遺存させる250は、胴部に四角形の貫穴が2箇所にあけられる。全長184cm、直径約15.2cmで、末口側を柱頭として仕口加工が施され、元口側は欠損する柱材である。この柱材は仕口加工にて曲がっているが、これは解体以後の環境下の影響と解釈している。貫穴は7×6cmと10×6cmの縦長で、上下の貫穴の間隔は心々間で、56cmを測る。また、249は全長239.2cmで、直径17.2cmを測る、下端部は欠損するものの通直性の高い部材である。250の様な胴部に貫穴は設けられておらず、柱頭は仕口加工が施されるが曲がりは見られない。249と250の仕口加工は、横架材との接合が想定される。この場合、隅柱と隅柱の支点間距離内に架かる横架材を支持する柱ということになる。

柱頭に柄を持つ251は、一端部に断面円形の柄を造り出すものの、その先端部は欠損する。また、253は、長い柄で断面を削り角を持つが、円形に近い加工がなされている。251と253の双方は、この長い柄に対応した柄穴を持つ横架材と接合する。

この他、転用加工や欠損のため仕口加工が遺存していないが柱として想定される部材がある。254・255・256・257・258・262は、一端が杭状に加工され、もう一端が欠損しているためその詳細は明らかでないが、断面円形の胴部面に成形した加工痕跡があり、また長い柄を持つ253ともこの成形で類似するた

め、柱と判断した。

なお、貫通しない枘穴が3箇所に残される252は、「通し納差」により別材と接合するもので、250の貫穴ではなく通し枘穴ということになるため、柱材の胴部面の整形加工の痕跡が見られず、小屋組の横架材にも想定されようが、断面円形で、元口と末口側が明瞭なため、柱材と判断した。また、259～261は、縦材に含めるが上記の範疇にはなく、柱材が否かは他遺跡から出土する類似部材との比較検討が必要と思われる。

時期は、253が弥生時代後期、255が弥生時代後期～古墳時代前期、249・254・256・257・259～262が古墳時代前期、250・252・264が古墳時代中期～後期、251が古墳時代後期～奈良時代、258が平安時代、263は不明である。樹種は249がカヤ(？)、250～254・261・263がカヤ、255～258がクリ、259がヤマウルシ、260がニレ属、262がフジキ、264がイヌガヤである。

3 横架材 (図版86～108)

梁・桁・台輪・壁板・床板・楣・敷放(闕)・小屋組の水平材(屋根には含まない)などが該当させられる。以下では、形態上比較することで分類可能な出土建築部材も取り上げることにした。しかし、それらはあくまでも推定の域を出ないものである。

(1) 梁・桁・小屋組の水平材

梁・桁 (265・301・302・310～312)

265は全長300cmで、11.4cmの直径を測る。元端部は材の外表面を削り込み、末口部との形態を均等になるように成形することがわかる。両端部の木口面は斜めに欠き取る加工が施されている。2箇所の仕口加工は、「渡り脚」仕口の上木に施されるものである。本材は桁木の上の梁材に該当する。301・302・310・311は一端部に「片胴付き」枘を残す。いずれも一端部は欠損する。312は四角形の枘穴を両端部に持つ板目の板材である。この貫通する枘穴は、8.0×6.0cmを平均値とし、双方の枘穴の心々間の距離は256cmを測る。この枘穴の心々間の距離は一部の柱間間隔に相当することになる。

時期は、312が弥生時代後期、265が古墳時代前期、301が古墳時代中期～後期、302・310・311が古墳時代中期～平安時代である。樹種は265がモミ属、301がクリ、302・310・311がエノキ属、312がケンボナシ属である。

小屋組の水平材 (309・315～317)

小屋組の水平材は、桁や梁等と比べて規模が小さい。309は一端部に貫通する円形の枘穴を持ち一端部は欠損しておりその全容は不明である。316は、枘穴が3箇所に施されているが、断面形状が小型で、梁材としては強度に乏しい。317は小型で梁材には該当させられない。

315は全長約158cmを測る。一端部には貫通する四角形の枘穴があり、それより約100cm内側に貫通しない四角形の枘穴が施される。この部材は一端部を欠損するが、その遺存状態により内部に施された枘穴を束柱との仕口として中央に位置させ、両端には貫穴を持ち柱頭に長い枘を持つ柱との組合せが想定される。小屋組材として注目する。

時期は、309・315・317が古墳時代中期～後期、316が古墳時代後期(?)である。樹種は309がケンボナシ属、315がモミ属、316がクリ、317がサクラ属である。

(2) 台輪 (266～274・276～278・282～284・289)

高床式建物における台輪とは、根太の補助を受けて床板を支持する基礎的な部材となる。これに対し

て、平地に土間を持つ掘立柱建物は軸組の構造が異なり、台輪を待たない。このため、台輪材は高床式建物の存在を示すものといえる。高床式建物において開口部の足元には、蹴放材が位置付けられる。開口部(出入口)を除く蹴放材が配置される高さには、台輪によって取り巻かれることになる。このことから、台輪材は用途の異なる蹴放材の形態とは全く同一のものではないものの、基本的な形状はある程度類似する。すなわち、幅が広い板材で、柱に接合させる枘穴等の仕口加工が施され、床板や壁板を支持する部材となる。これら、仕口用の加工が施されていれば台輪材の可能性が高い。しかし、出土部材からは台輪と断定できるものは少なく、推定の域を出ないのが実状である。

272・273は、欠損があるものの一端部に四角形の枘穴が貫通することが推定復元される部材である。この内の272は、それより内側3箇所に四角形の枘穴が貫通する特異な部材で、273の板厚は2.4cmと薄い柱目材で、台輪として機能するかやや疑わしい。これに対し、274は幅が19.7cm、厚さ8.7cmと台輪とすれば充分な部材といえる。

上記以外に、横架材とは認められるものの、台輪とは断定できかねる部材に、266～271・276～278・282～284・289がある。この内、267～269・271は、両側に貫通する枘穴が施された痕跡がある。また、282～284は、その大半が欠損しているが、いずれも貫通する枘穴とすれば三通りの形状を呈する。

時期は、271・278・283が弥生時代後期、266・276・282が弥生時代後期～古墳時代前期、267・269・272・274・289が古墳時代前期、273・284が古墳時代中期～後期、277が古墳時代後期、268・270は不明である。樹種は267・269・271・276・283がクリ、266がケンボナシ属、268がコナラ属、273がオニグルミ、274・277がエノキ属、278がハリギリ、282がカツラ、289がニレ属、270・272・284は不明である。

(3) 壁板・床板・屋根板

板材は覆田遺跡出土例のように、壁板・床板・屋根板材に分類されることがある。しかし、本遺跡では板状に加工された材が出土したものの、これらのように使用部位を特定できるものは確認できなかった。

(4) 楣と蹴放(闕)

建物の開口部(出入口)を構成する楣材は、柱や辺付、方立などの縦材の上部に載せられ支点間を繋ぎ渡す横架材で、対する内法(ウチノリ)の下部側は蹴放材(闕)が水平に渡され、柱などの縦材を受けて連絡し、開口部を強固に形成する。この開口部に納まる原材は、軸吊棒を回転範囲の中心軸として回転させるもので、それを楣材と蹴放材が上下から挟み込み、双方の材に施された軸吊孔が扉に付属する軸吊棒を受けることになる。このため、開き扉の開閉の中心軸となる軸吊棒の断面は、上下横架材と接する部分で円形となる。軸吊棒を受ける軸吊孔は、一回り口径を広げる必要がある。つまり、双方の関係は充塞することはなく、隙間が生じる「遊び」を持つことになる。楣と蹴放の一枚に軸吊孔が一つならば片扉となり、二対ならば観音開きの両扉が納まる。また、凸断面材と方立材により扉板の回転半径の範囲は、およそ四半径(回転角90°)に制限される。凸断面材を使用していなければ前後に開き半径(180°)となる。構造上、楣や蹴放は梁桁や台輪と同じ構造材を兼ねるため、内法の扉板は上下から挟まれ構造物の一部として組合せられ一体化する。

楣および蹴放の分類は、まず断面形状により凸断面材と平板状断面材に大別される。凸断面材は丸太を半載した曲面側を上に向け、さらに「凸断面の加工を施さない先端部に枘穴付き」と「枘穴なし」に細分される。軸吊孔は凸断面部に施されている。また、欠損等により判別不可能なものは、その他に含めた。

凸断面材 先端部枘穴なし (327・330～332・338・341)

327は、凸断面部には円形の孔が1箇所に在り、他の3箇所の孔は隆起部沿いに並ぶ。いずれも貫通し

ており、隆起部沿いのものは軸吊り棒の回転による摩滅や使用時の欠損をとまなうものと思われ、不整形な遺存状態にある。このため、軸吊孔あるいは扉止めを補足する孔と認める。この隆起部沿いに並ぶ3孔の内、両端部の孔の心々間で約136cmを測り、両扉として扉板幅一枚約68cmとなる。また、凸断面の加工を施さない側へ接する孔と中央の孔との間隔は、心々間で76cmを測り、両扉として扉板幅一枚約38cmとなる。この距離にある隆起部は凹レンズ状に削り込まれてその延長上にある隆起部とは変化を持たせている。ちなみに、榎田遺跡出土の扉板（図版番号328：全長175.8cm、幅32.2cm、板厚3.5cm）にその値が近くなる。330は両先端部が反り返る。これは後世の変化と考えられる。軸吊孔に相当する孔は、隆起部沿いに3箇所と端部に2箇所認められる。いずれも貫通し、欠損により円形の当初形状は留めない。また、隆起部から若干離れた2孔は隣接しており、ともに円形で貫通するが摩滅の痕跡は隆起部沿いのものとは異なる。331は貫通する孔の一部分は残されるもの、隆起部に沿う様な軸吊孔は欠損しており認められない。332は凸断面側が欠損によりほとんど不明であるが、最大幅は39.1cmを測り、凸断面材の中でも特に幅広く、先端先細りの特徴を持つ。338は欠損しており、軸吊孔等の孔は認められない。341は凸断面形状の一部分を残すため、それとわかる程度の材である。その両端部は欠損によりほとんど不明である。

時期は、331が弥生時代後期～古墳時代前期、327・330・332・338・341が古墳時代前期である。樹種は327・330～332・338がクリ、341がコナラ節である。

凸断面材 先端部枘穴付き（328・329・335・337）

328は比較的良好な遺存状態にある。枘穴は、凸断面境側にわりと近接する位置にあり、正四角形で貫通する。隆起部は、凸断面境から徐々に成を持ち高くなる。また、隆起部の端部は、平坦面より突出する特徴がある。凸断面部の凹孔は、隆起部上に設けられたものと、隆起沿いに揃う2箇所、その反対側沿いに1箇所の計4個になる。隆起沿いに並ぶ2孔は、軸吊孔と思われる。この軸吊孔は心々間で81cmを測り、ここに両扉が納まるとすると、扉板幅一枚あたり約40cmとなる。隆起部上に施された孔は、辺付や方立に該当する枘穴であろうか。329は軸吊孔が想定される箇所より欠損が広がるものと思われる。凸断面加工を施さない枘穴は、凸断面境よりやや離れて位置し、四角形で上下に貫通する。335はほとんどが欠損しており、軸吊孔等は不明である。凸断面にない先端部の枘穴は、正四角形で上下に貫通する。337は軸吊孔が想定される部分が欠損し、凸断面にない先端部の枘穴は四角形と推定され、上下に貫通する。

時期は、328が弥生時代後期～古墳時代前期、329・335・337が古墳時代前期である。樹種は328がエノキ属、329・337がクリ、335がコナラ節である。

平板状断面材（336）

川田糸里遺跡より出土した平板状断面材は、336の一材のみである。板面上に施された枘穴により、扉板は一枚の片扉式で、その内側の材中央部に溝状に方立の枘穴が左右彫り込まれる。その一端部は辺付あるいは柱枘穴が該当させられる。

時期は、古墳時代中期～後期で、凸断面材とは異なる時期に属することになる。樹種はケンボナシ属である。

その他（333・334・339・340・342・343）

凸断面材の中で、欠損等により先端部枘穴の有無が確認できないもの、その形態に類例がないものを以下に掲載する。

333・334・339・340は、凸断面部の一部を遺存させる。334と340からは、隆起部沿いに1孔があくが軸吊孔とは認められない。342は縦方向に割れる欠損により明瞭に分類されない部材である。343は上記の凸断面材にも平板状断面材にも該当し難い形態にある。「波り隠」仕口として組合せる様な上木を受ける下木の角決り加工が二対に施される特徴がある。しかし、角決り加工の二対が極めて近接しているところか

ら用途が特定できず、「渡り腿」仕口とは断定するものではない。

時期は、333・334・339・340・343が古墳時代前期、342が近世以降である。樹種は333がヤマザクラ、334・339・ガグリ、340がケンボナシ属、342がアカマツ、343がニレ属とされる。

(5) その他の横架材

枘穴を持つ加工材 (266～271・275・280・285・288・296～299・305・313・314)

ここでは、貫通する方形の枘穴を持つ板材を対象とする。267～271は枘穴が2箇所に施されていることが確認される。この内、枘穴と枘穴が対となる構成材について以下に記す。

267の枘穴は、 8×8 cmで、枘穴と枘穴との間隔は心々間で163cmを測る。柁目材。268は両端部が欠損しておりその詳細はわからないが、枘穴は 8×5 cmで、枘穴と枘穴の間隔は心々間で115cmを測る。柁目材。271の枘穴は、 10×8 cmあり、枘穴と枘穴との間隔は心々間で120cmを測る。板目材。269の枘穴は、残存状況から推定して 7×4 cmで、枘穴と枘穴の間隔は心々間で149cmを測る。板目材。以下は、枘穴を持つが対とならない材を取り上げる。270は、一辺の木端側に仕口と思われる加工が施されるが、その詳細は不明である。板目材。296は、一端部を片削付きとし、鬘太の接合部中央に枘穴を持つ。板目材。266は、一端部に枘穴を持つ材と思われるが、欠損のためその詳細は明らかではない。板目材。270と296は、欠損部に残存する枘穴が対となる可能性が持たれる。なお、266～271は台輪と推定される。

時期は、299が弥生時代中期、271・313・314が弥生時代後期、266・267・269・275・296・297・306が古墳時代前期、280・288が古墳時代中期～後期、285・298が古墳時代後期、268・270が不明である。樹種は、267・269・271・280・296・297・305がクリ、266・285・298がケンボナシ属、268がコナラ属、313がコナラ節、275がカヤ、288がカエデ属、299がニレ属、314がケヤキ、270は不明である。

枘穴を持たない加工材 (279・281・286・287・290～295・300・303・304・306～308・318～326)

281は通直性に欠け、弓なりに反る。反る側の木端(コバ)側に仕口と思われる加工が4箇所に施されている。横架材と推定したのはこの仕口からで、ここに直行する横架材が平行して渡され架けられるものと推定されるが、その構造材としての用途は明らかではない。291は一辺の木端面側に仕口と思われる加工が1箇所に施される。両先端部は杭状の加工や欠損によりその詳細は明らかではない。柁目材。

時期は、303・304・319が弥生時代中期、279・320が弥生時代中期～後期、286・307が弥生時代後期、323・324が弥生時代後期～古墳時代前期、287・290・293・295・308・325・326が古墳時代前期、281が古墳時代中期～後期、291が古墳時代後期、300・306・318が古墳時代後期～奈良時代、292・294が奈良・平安時代、321・322が近世以降である。

樹種は279・318・324がモミ属、281・291・293・295・300がクリ、286・308がサワラ、287がニレ属、290・325がカツラ、292・294がコナラ節、303・304・319・326がケヤキ、306がサクラ属、307がヤマザクラ、320がヒノキ、321・322がアカマツ、323が不明である。

4 屋根材 (図版109・110)

(1) 垂木

垂木材は、元口側と末口側を同等の直径となるように加工しておらず、丸太材「掻き(枝落しを施す)」を使用する。また、柱ほどの通直性を要求したものではない。本遺跡では、大半が杭などに転用されており、当初の全長を保ったままの材はまれである。屋根材を支持する垂木材は、棟木から拝む形で2方向に2材が分かれ、それぞれが身舎梁に架けて外桁へと渡し軒先へ延びるため直径が細く全長が長い材を必要とする。出土した垂木材で仕口加工が遺存するものは、元口端部に欠き込み加工が施されている。この欠

き込み仕口の形状は、棟木に掛け接合させるために有効である。ここでは、込栓により2つの垂木材が棟木上で交差して接合させる構法ではないのは結い縄により仕口部が固定できるからである。この垂木材の元口端部に施された特徴的な仕口加工は、出土する他の建築部材には見られないもので、転用などにより切断され中途半端な全長を持つものであっても、この加工が遺存しているものであれば垂木として捉えることができる。また、元口端部とは対照的に直径をすぼめる末口端部の仕口加工は、これまで明らかにされていなかった。それは、建築当初の全長を留めた垂木材が出土していなかったからである。しかし、川田条黒遺跡においては、両端部に加工が施された垂木材が認められている。一般的に垂木材の末口側では、材に直角に先端部を切り落とす真矩（マガネ）木口と地面に対しほぼ垂直線方向に切る豎水（タテミズ）木口がある。この斜めの木口面を切り出す末口端部が残存する材は、3本認められた。

「有頭棒状木製品」は、織具の部材としている事例が多い。織具の部材やあるいは運搬具の天秤棒など身体に接するものは、垂木材程の全長は必要としない。出土したもので欠損により短形のものでも、端部に仕口用加工が施された垂木材との形状や枝落しの仕方などが類似すること、さらに建築部材が多量に出土する中においてはむしろ垂木材に該当すると判断されるものがある。

なお、垂木の実測図に関しては、その性格を考慮し、元口を天に末口に地に配置した。しかし、仕口用加工が残存する材に関してはその加工を天にして、元口末口を無視している。仕口用・有頭棒状のもの・その他の詳細不明に大別する。

仕口用加工を持つ垂木 (345・346・348～350)

345は全長408.8cmで最大径9.6cmを測り、346は全長416cmで最大径9.4cmを測る。345・346は、ともに通直性が高く、全長が400cmを越え直径もそれぞれに近似した寸法を持つ。さらに、両端部に施された元口側の仕口加工と、末口側の豎水木口加工の形態が極めて類似しているため、転用加工されていない建築当初の形態を残す垂木材として判断される。また、双方はC地区のS C52より出土していることより、同一建物に使用された可能性も持たれる好例として特筆される。348は、一端部が欠損しておりその全容は明らかではなく、遺存状態からも通直性には劣る材である。元口端部に片面より欠き込み加工が施されており垂木材と判断している。ただ、その先端部は他の加工痕跡とは異なり杖状に尖らせており、転用加工の性格も合せ持つ。349は、先口部のみでその全容は不明である。しかし、元口端部に片面より欠き込み加工が施されており垂木材として判断している。350は一端部を欠損し、所々に虫喰い状に炭化欠損が見られる。しかし、元口部の仕口加工は遺存状態が良好で、片面の欠き込みの裏面にも欠き込み加工の痕跡が認められる。

時期は、345・346・348が古墳時代中期～後期、349・350が古墳時代中期～平安時代である。樹種は348がコナラ節、349がカエデ属、350がカヤ、345・346は不明である。

有頭棒状加工を持つ垂木 (347)

347は、末口側が杖状に削られておりその全容は明らかではない。特に元口側の通直性に劣るものの、それより末口側は比較的安定した状態にある。元口側の有頭棒状の加工下の片面より欠き込み加工が施されている。本遺跡における有頭棒状加工を持つ垂木材はこの1点のみ。

時期は、古墳時代中期～後期(?)で、樹種はモミ属である。

(2) その他の不明材 (344)

344は全長348.8cm、直径8.8cmを測る。元口側に施された仕口用の加工は欠損しており、詳細は不明である。

時期は、古墳時代中期～後期で、樹種はコナラ節である。

5 付属材 (図版111~113)

(1) 梯子 (351~353)

今日一般的に使用される梯子は、左右の縦棧の側木に横棧を付け組合せる複数の部品からなるが、川田条里遺跡からその様な梯子は出土していない。出土した梯子は、丸太材からの一本造りとするもので、板状の本体に踏み込み面を作り出す形式である。この形式は、東南アジアや近年まで韓国の農家にも見られた。なお、丸太材の外表面をほぼ残して踏み込み面を欠き込んで仕上げる形式のものは認められない。

出土した梯子の大きな特徴は、踏み面を設けるため、上段の踏み面から下段の踏み面にかけて深く削り込み、足を掛け易くするため、決して削り貫くことはしない。これは、その使用法が、やや傾斜を付けて建物に立て掛けることを当初から想定したためである。その使用形態からはむしろ階段の性格に近いといえる。このような形態から、出土した梯子についても、階段で表現される各部名称に当てはめると、踏み込み面を「踏面 (フミツラ)」、その踏面と踏面の間を蹴上げ面とし、その距離 (高さ) を「蹴上げ高」として表現する。

351は、全長256cmで幅20.7cmで、踏面が最長7cm厚の一本造りである。踏面裏面側の勾配に傾斜角度を付け、緩く欠き取る形状は352と類似する。最上段の踏面より延びる板状部は長く、下端の板状部は欠損している。その両側の板状部には、8×6cmを測る方形の孔が貫通している。この孔は、建物との接合を想定した納穴であるか、あるいは梯子が常時建物に設置されていなければ、収納時の掛け止めのものだろうか。この板状の梯子の存在が軽量化を図ったものであれば後者が妥当であろう。352は、全長181cmで幅14.4cmを測る一本造りである。踏面を5段造り出すが、その奥行きは浅く、欠損箇所が多く遺存状態は不良である。上段の踏面と下段の踏面との間を緩く欠き削ぐ。353は、全長180cmで幅23.6cmを測る一本造りである。踏面は5段造り出すものの、両端部は欠損しておりその全長は明らかではない。踏面裏面の勾配を本体に対して垂直に近付けるほどにきつく付け欠き落とす加工をする。このため、蹴放面は平坦となる範囲が広がる。なお、階段状の加工面の裏面側の両端部は曲面に加工されている。

時期は、352が弥生時代後期～古墳時代前期、353が古墳時代前期、351が古墳時代中期～後期である。樹種は351がコナラ属、352がキハダ、353がクリである。

(2) 限柱 (マセ柱) (354)

元来「限柱」という名称はない。出土した354は、厩の出入口を仕切る丸太材「限棒 (既檢棒)」を掛ける穴を持つ柱に類するためと、他に適当な名称がないので、形態を分類する上で「限柱」とした。出土した部材は、柱目の板材で幅15.6cmの厚さ6cmの断面楕円形を示し、一端部は欠損しており全長99.2cmである。その上下の2箇所には、側面より中央付近まで斜めに割抜いて、奥に僅かながらの深みを造り出している。この割抜きを施す加工は、もう1箇所置いて推定できるため、合計3箇所ということになる。この部材は一對となり、この加工に限棒を架けることで、取り外し可能な横木 (限棒) を渡した柵となると推定される。類似材の出土例に乏しく今後の資料の増加をまって再検討を要する。

時期は、弥生時代後期～古墳時代前期で、樹種はクリである。

6 その他の加工材 (図版96・113~115-293~295・355~368)

若干の加工痕が見られるが、上記の建築部材の分類には該当しない用途不明の大型部材をまとめた。

時期は、355・359・366が弥生時代後期～古墳時代前期、293・295・358・360・363・364が古墳時代前期、357・362・368が古墳時代中期～後期、367が古墳時代後期、294が奈良時代～平安時代、356・361・

365不明である。樹種は293・295・357・359・361・364・364～368がクリ、294・362がコナラ節、355がエノキ属、356がモミ属、363がカツラである。

第8節 小 結

1 農具について

農事暦については、中世までは史料により断片的にしろ読み取られている⁽²⁴⁾。しかし、農作業と農具との関係がいかなるものであったのか、享保2年(1717)の土屋又三郎による『農業図絵』⁽²⁵⁾などの絵図を端緒として江戸時代まで遡れるが、それ以前は推察するに足る資料に乏しい現状がある。これら、江戸時代の絵図を頼るにしても、山手や里では地域性があるはずで、民俗事例を見ても形態が同じはずはない⁽²⁶⁾。また、描き手側の癖が一樣でないことを考慮しなくてはならず、これらもまた鷓呑みにはできない要因である。すなわち、史料より古代における農業形態を農具の用途と絡めて把握することは現時点では難しい。

しかし、出土した古代の農具がどのような用途に利用されたか、これまでの発掘成果を手掛かりに、今日伝わる農作業形態をあくまでも参考材料とする以外に糸口すら掴めない。このため、本遺跡報告書においてもこれまでの研究方法と成果を先駆とし、それらを基に形態分類をした。

実際、田植に入るまでの行程作業を見ても、田起こし、砕土、代播(シロカ)きといった段階を経る。それから刈敷(カリシキ)を行い代田として田植に入る。水田となる土壌は、常に刈敷を必要としたことは使用頻度からも重要な問題と思われるが、当時も同じ様な作業形態として繰り返されていたかを本遺跡の水田址からは窺知することはできなかった。

第4表 農具の時期別出土点数

時 期	直柄横鋏	直柄平鋏	ナスビ形平鋏	曲柄着柄軸	ナスビ形鋏	ナスビ形鋏(細分不可)	曲柄着柄軸棒状又鋏	曲柄着柄軸棒状平鋏	曲柄鋏(細分不可)	扶(柄振)	一木平鋏(なで月)	一木平鋏(水平月)	襖鋏	編目盛板	田下駄	馬鋏	その他	合計
近世																1		1
奈良・平安											1	2			4			7
古墳後期～奈良	1	1		1										1	9	3		16
古墳中期～後期	2		2	2	2		1	1	1						3	1	2	17
古墳前期				2			1	3				1	1				2	10
弥生後期～古墳前期									1	1	1							3
弥生中期～後期											1						2	3
不明															2			2
合計	3	1	2	5	2		1	4	2	2	2	2	3	1	18	5	6	59

本遺跡から出土した木製農具は、鋏・鋤・挾（柄振）・馬鋏・横鋤そして編台（目盛板）と田下駄（大足）で、各々をさらに形態別に分類した。ここでは、杵・掣（カラスキ）・田舟などは出土していない。出土品の内、鋤・鋏などの農耕具は、欠損部の占める割合が高いものを含めて22点出土したが、木製品および自然木総数に比しても極めて少ない。さらに出土農耕具を器種ごとに細分化すると、多いものでも3～4点以内に留まる。このため、細分化した器種分類に対し、該当させられないものもある。川田条里遺跡内においては実に比較資料に乏しい状態といえる。その中で、鋏の類が比較的にまとまって出土した。また、時期別に出土点数を見ると、農耕具を中心として、古墳時代中期～奈良時代にかけて集中しており、中世には出土例が無い（第4表）。

2 建築部材について

出土した木製品の内、弥生時代後期～古墳時代の建築部材と認められるものは比較的多い。以下、川田条里遺跡に近隣する長野市所在の石川条里遺跡（以下、石川とし、木製品番号は報告書図版番号とする。）と榎田遺跡（以下、榎田とし、木製品番号は報告書図版番号とする。）の出土木製品を中心とした他遺跡の出土品との比較をまじえ、本遺跡より出土した建築部材の位置付けを行うものである。

木材は製材作業を経て製品あるいは家具や建築物の部材となる。この製材作業とは、一般的には各種製品や部材となる素材を木取りにしたがい切断するものである。また、製材とは広義には伐木から木取りまでを指す。これを当初の（一次的な）製材とすれば、転用材を製材として使用した場合には二次的な製材となる。川田条里遺跡（以下、川田）より出土した建築部材は、生産域から出土したものであるから、建築物の役目を終えた廃材で、それらは転用後の（二次的な）使用を見たことになる。

川田出土の建築部材には、当初からの加工上に杭や矢板状に先を尖らせた転用加工を施すものも少なかった。この転用と当初からの加工形状（削り方）は、次元が異なる加工のため、容易に区分することも可能であった。

出土建築部材は、縦材（堅材）・横架材・屋根材・付属材・その他に大別した。この分類方法は、以後の建築物復元を試みる場合に有効な手段と考えたからである。なお、ここでは当初からの杭や矢板材は建築部材と見なせないため含めない。

縦材に該当する柱は、桁・梁と組合さることで軸組を形成する重要な部材である。柱頭には、横架材との接合を示す仕口加工が施される。川田より出土した柱には細長い柄を持つものと、縦に半截し鬘太を大きく残すものがある（第4図）。細長い柄を持つ形態は、静岡県浜松市入野町所在角江遺跡より出土した柱（弥生時代中期）では「出柄」としている。この様な細長い柄を造り出す柱については、組合さる部材により「ヒキモン構造」を構成する「コキ柱」の性格がある⁽²⁷⁾。この部材により梁行方向と桁行方向にある横架材に施す桁穴を重ね合わせ、下方から柱頭の細長い柄により「柄差」し、支える工法が推測される。細長い柄の断面が四角形であることから、強固に一体化するため軸組構造には適する。特に石川599の仕口加工は川田の細長い柄を持つ251・253とは異なり、ヒキモン構造の形態を良く表わし注目すべき部材である。この工法は、一部の地域に江戸時代末期ころ盛んに使われたとされる⁽²⁸⁾。また、県内北安曇郡美麻村所在の重要文化財旧中村家住宅（元禄11年棟上の記録あり）の通し柱数本にそれを認めている⁽²⁹⁾。

川田249・250や榎田384は、鬘太を残す。この形態の仕口加工が施された柱は、隅柱と隅柱の支点間距離内に架けられる横架材を支持させる配置といえる。頭貫仕口加工は、榎田の383があり、石川では597と598があるが、川田からは出土していない。




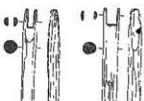







楯・藏放を除く横架材の仕口加工の内には、「渡り懸」「片割欠き」が認められた。渡り懸仕口は、265

の上木の端部加工によりその仕口加工の存在が明らかになった。この上木材は、古墳時代前期に属するものとしては初見である。建物遺構としては、奈良時代の校倉の隅壁の構成材が知られており、出土部材としては富山県小矢部市桜町遺跡の縄文時代に属する上木と下木が揃いで出土し、渡り腰仕口加工材が特定されている（『桜町遺跡 縄文の森に吹く風を感じて』1998 小矢部市・小矢部市教育委員会）。なお、楯・蹴放材の取に分類した343は「渡り腰」仕口組の下木材に相当する様な加工が施されるが断定はしていない。片胴欠きは、301・302などに見られる。

桁とともに建築物の規模を物語る棟木は、その形態がゆえに完形品にて出土する可能性は極めて少ない。覆田の様にな長が明らかであれば建築物の規模が推測できる。また、垂木との接合関係がわかれば屋根の形態復元にまで踏み込める。本遺跡では棟木と思われる部材が出土しているが、全長は不明である。

台輪は桁・梁と比較して厚さに対する幅を広く取る傾向にある。しかし、このことが鼠返しを兼ねたものなのかは不明である。なお、長野市内から鼠返しに類するもの出土例は今のところない。

横架材の楯と蹴放は開口部に納まる部材である（第5図）。建築用語に照らせば、楯材は内法の上部に、蹴放材は下部に組まれる部材である。ただ、開口部を形成する部材が揃って出土しないため、本報告書内においても凸断面材と平板断面材の上下関係を断定することは難しい。古墳時代の建物の開口部がどの様

	コキ柱仕口加工	鬘太仕口加工	頭貫仕口加工	
弥生後期	 川田 253			
古墳前期	 石川 599	 川田 249	 石川 598 石川 597	
古墳中期・後期	 覆田 376	 覆田 378	 覆田 383	
	 覆田 375	 覆田 384	 川田 250	 覆田 377

数字は報告書の図版中の番号

第4図 柱仕口加工部の比較

平板状断面材		凸断面材		その他一括
先端部納穴なし		先端部納穴付		
<p>古墳前期</p> <p>石川 592 かつら型 石川 594 595 石川 596 矢形 石川 597 矢形 横田 327 矢形 川田 328 矢形 川田 329 矢形 川田 331 91 川田 333 ヤマギクワ 川田 334 91 川田 335 ヤマギクワ 川田 336 ヤマギクワ 川田 337 91 川田 338 ヤマギクワ 川田 339 91 川田 340 ヤマギクワ 川田 341 ヤマギクワ 川田 342 ヤマギクワ 川田 343 ヤマギクワ</p>	<p>川田 327 川田 330 川田 331 川田 332 川田 338 川田 341</p>	<p>石川 592 石川 593 石川 595 石川 596 川田 329 川田 330 川田 333 川田 342 川田 343 川田 340</p>	<p>石川 594 川田 334 川田 340 川田 342 川田 343 川田 340</p>	<p>横田 327</p>
<p>古墳中期・後期</p> <p>川田 328 川田 331 川田 336 川田 337 川田 338 川田 341 川田 342 川田 343 川田 340</p>	<p>川田 328 川田 331 川田 336 川田 337 川田 338 川田 341</p>	<p>川田 328 川田 331 川田 336 川田 337 川田 338 川田 341</p>	<p>川田 328 川田 331 川田 336 川田 337 川田 338 川田 341</p>	<p>横田 326</p>

川田328-331、石川592-593-596は弥生後期から古墳前期のいずれかの時期。数字は報告書の図版中の番号。

第5図 楯・版材の比較

な納まりであったのか。他の遺跡内においても実際に楣や蹴放等の部材が組まれた状態で出土しておらず、推測の域は脱し得ない実状がある。また、開口部が組まれた状態で発見されたとしても、それを持って全国的な代表とすることはできない。このため、単品として出土した凸断面材を蹴放材とするか楣材に当てはめるかは、隆起する部分が戸当として機能するだけなら判断には至れないことになる。この様な現状から、凸断面材を意識する「蹴放」は、「闕」あるいは「敷居」という名称に置き換えるべきかもしれない。

川田から出土した楣と蹴放は、16点（形態の異なる343を含める）を数える。この内、一個体分として判断される13点を抽出すると、凸断面材は12点で、平板状断面材の1点に大別される。ここで、凸断面材がその大半を占めることは、平板状断面材が他の製品に加工し易い転用板材としても、不自然である。このことは、石川や榎田の出土部材と比較することでもその異常さがわかる（第5図）。楣・蹴放材は、その総数から複数の建物が転用元とされる。凸断面材一本が1棟分とすれば12棟に当たり、C地区からは7棟分の転用材となる。このため、凸断面材が上下に組まれた可能性もあり、凸断面材だから下に位置するとは限らないことになる。

壁板について榎田の場合、厚さ1～2cm位を保ち、桎目材の利用を見る傾向にあった。壁板と壁板との継手仕口は、「せぎり継手」と推定される加工が認められている。また、床板は壁板よりも厚く、板目材の利用が多い傾向にある。

屋根材には垂木を含める。垂木の仕口加工については、静岡市所在の川合遺跡および角江遺跡出土の垂木（弥生時代中期・後期）に類似する。垂木は、元口（モトクチ）と末口（スエクチ）の加工状態により、材そのものが使用される方向や屋根の形状などがわかる場合がある。このため端部には特に注意が必要である。なお、扱首は、扱首組として小屋組を復元可能な状態でないとそれと認め難い部材である。

垂木元口端部は、棟木との接合部に当たる。川田出土材は縦に半載する有頭状の加工が施されたものだけである。これらは、半載された部分を棟木に合せ、補助的に結び縄で固定したものであろうか。柄穴付きのものは石川出土の垂木材807が上げられる。この柄穴付きのものは、太柄（ダボ）を差込み拌み部分

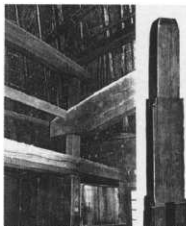


写真1 「徳島県田下木家住宅」
「田下木家住宅の移築工事記録」
より転載




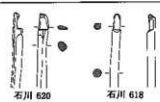
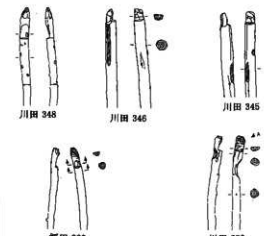
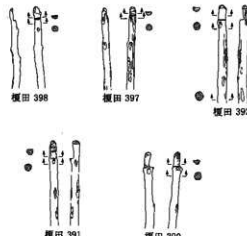
写真2 「美麻村中村家住宅」
「中村家住宅修理工事報告書」
より転載



写真3 「榎田遺跡出土 垂木」


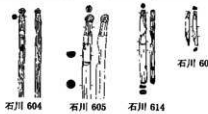
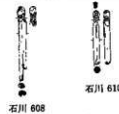

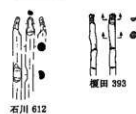
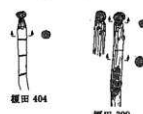


写真4 「榎田遺跡出土 柱」

	元口側仕口加工	末口側仕口加工
弥生後期	 石川 619	石川 618 不明 石川 619 コナラ類 石川 620 不明 榎田 389 カヤ 榎田 390 カヤ 榎田 391 カヤ 榎田 392 カヤ 榎田 397 カヤ 榎田 398 カヤ 川田 345 不明 川田 346 不明 川田 348 コナラ類 川田 350 カヤ
古墳前期	 石川 620 石川 618	
古墳中期・後期	 川田 348 川田 346 川田 345 榎田 389 川田 350	 榎田 398 榎田 397 榎田 392 榎田 391 榎田 390

数字は報告書の図版中の番号

第6図 垂木仕口加工部の比較

	胴部欠込仕口	先端部欠込仕口	欠込仕口なし
弥生後期	 石川 606	石川 604 モミ属 石川 605 モミ属 石川 606 不明 石川 607 モミ属 石川 608 不明 石川 610 クマノ属 石川 612 モミ属 石川 614 コナラ類 榎田 393 カエデ属 榎田 399 不明 榎田 404 カヤ 川田 347 モミ属	
古墳前期	 石川 604 石川 605 石川 614 石川 607		 石川 608 石川 610
古墳中期・後期	 川田 347	 石川 612 榎田 393	 榎田 404 榎田 399

数字は報告書の図版中の番号

第7図 垂木仕口加工部の比較（有頭状）

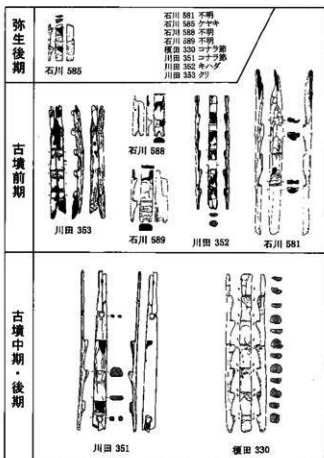
を固定する。垂木末口端部は、木口加工により竪水木口や真矩木口などに分類される。木舞・広木舞などとの接合は、先端部より若干上る位置に想定される。垂木の元口側に施された仕口加工は、榎田出土木製品と同様の形態を示している（写真3：「榎田遺跡出土垂木」）。また、榎田出土の垂木には曲材が認められた。このため、ここでの屋根葺材は、垂木の曲材の使用に対して、壁板や床板以外の板材が認められず、茅や葦などの草葺材の使用が推定された。

垂木材345と346は、転用を免れ当初の全長に元口と末口端部を保つ。完形の垂木材は、長野県内においては初めての出土例で、全国的にも希な存在となる。垂木は、古墳時代においては屋根に直接作用する構造形態のため、この地域における屋根の形態復元には重要な資料といえる（第6・7図）。

付属材としての梯子は、すべて一木造りとするものである。川田・榎田・石川の出土総点数はそれほど多くはないが、その形態は、板状のものや半丸太状～丸太状のものがあ、その階段状の加工も多種多様な形態が認められる。川

田353および石川588は、踏面の裏側の勾配が、垂直となるほどに急勾配として欠き落とす。このため、蹴上面と踏面およびその裏面との境は明瞭に分けられる。石川588は先端部にV字形の切れ込みを入れるもので、石川589と類似する。なお、上部の大半は欠損状態にある。踏面裏側の勾配に傾斜角度を付け、緩やかに欠き削ぐ。ものによっては、蹴上面が下段踏面の取り付けまで残るものもある。石川588・589は、先端部にU字形の切れ込みを入れる。川田351は階段状の加工を除く上下側に四角形の貫通する穴を設けている。川田352と榎田330は、この様な穴が認められない。石川581は、必要最低限の踏面を確保するために加工され、踏面裏側が認められない。このため、半丸太状の自然面が多分に残存することになる。丸太材を縦方向に楔割りし、曲面側に階段状の加工を施す。工期が短縮できるため、簡易な梯子の性格であろうか（第8図）。

榎田の自然流路SG3より出土した建築部材は、多量にして良質な角材および板材が含まれるため、再利用を待つ第二の製材として保管された可能性が指摘されている。これが裏付けられれば、製材作業工程に対して重要な意味を持つ遺構となる。これに対し川田の建築部材は、石川と同様にその出土地は生産域であり、農具と比較すれば当初の用途からはおよそかけ離れた場所から出土したことになる。その多くは畦畔の芯材に転用されたもので、そのため、建築部材としての原形を留めていないものが多く、建物全体の構造に言及することができなかつた。川田では、弥生時代から古墳時代の建築部材が多く出土しており、今回報告できなかつた大型の加工材の中には、建築部材も多く含まれると考えられる。これらの加工材は断片であったり、用途を特定できる特徴的な加工が認められず、建築部材と認定されていない。本章で報告できなかつた木製遺物については、第3分冊12章で木製遺物の全容に触れているので、参照してい



川田352は弥生後期から古墳前期のいずれかの時期
数字は報告書の図版中の番号

第8図 梯子の比較

いただきたい。

注

- 川用集道跡より出土した木製品の器種は、(財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川集道跡』第3分冊)および(長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 板田遺跡』第2分冊)を基に分類した。
- 清水隆久 1983 日本農書全集 第26巻『農業図録 土屋又三郎』社団法人農山漁村文化協会
- 臼原直之氏によれば、実物を観察した限りでは静岡県川合遺跡の第5遺構より出土した木製品からも綱合の目盛板と思われるもの(図原組番号5-125、用途不明品の内の棒状木製品とする)が出土していると指摘する。報告書に掲載されるこの木製品の展開図および写真を観察すると、全長55.6cmの内一辺を約15mmの間に材に直行する溝が13切れ、それ以上に広げられた形跡はない。また、板材ではない。綱合の目盛板と同じ性格ならばこれをどう解釈すればよいか。この様に、これまでの出土木製品に綱合が含まれていたとしても、その特殊性からそれと判断されていない場合があるという。
なお、この川合遺跡出土品については、以下の参考文献を参照されたい。
 - 『川合遺跡』遺物編3(木製品図版収録) 1994 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
 - 『川合遺跡 八反田地区II』(本文編・図版編) 1995 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
 - 『川合遺跡』遺物編3(木製品本文編) 1996 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 木村茂光 1993 『中世農民の四季』『中世の生活空間』有斐閣
- 『農業図録』は、(清水隆久(校注) 1983 日本農書全集26 『農業図録』社団法人農山漁村文化協会)を参考としている。
- 『たがやす』『日本生活図引』1989 弘文堂)と(第六編 生産・生業『長野県史』民俗編 第四巻(二)北信地方 仕事と行事)を参考し、『日本生活図引』による昭和初期に見る農事暦より一般的な形態を大別すると、以下の様になる。

農作業の行程	使用農具、畜耕
田植に入るまで	
田起こし	犁、牛耕
碎土(田起こしの土塊を碎く)	
代掻き(土塊を細かく砕き、均す)	袂、馬鍬
刈藪(草や藁などを肥料として田に敷込む)	大足、馬押し
田面を平坦に均す	大足、袂
代田とする	
(田植以下農作業行程は省略する。)	
- コキモおよびヒキモン構造については、(宮澤智士 1977 『四国の民家と集落一・一字村』(財)四国民家博物館刊行)と(『旧下木家住宅の移築工事記録-四国の民家と集落二』1980 (財)四国民家博物館)および『鹿兒島県の民家』1975 鹿兒島県教育委員会)を参照した。
- 宮澤智士 1994 『琉球と日本文化の接点』『月刊文化財』9 第一法規出版
- 美麻村中村家住宅については、『中村家住宅修理事務報告書』1997 長野県美麻村教育委員会)を参照している。

参考文献

- 飯沼二郎・堀尾尚志 1976 ものと人間の文化史19『農具』(財)法政大学出版局
- 宮本長二郎 1981 『高床建築の出土部材』『月刊文化財』12 No.219 第一法規出版
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』
- 橋上 昇 1989 『木製農具の地域色とその変遷』(財)愛知県埋蔵文化財センター 年報』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 南 博史 1991 『曲物研究と課題 形態と機能について』『考古学ジャーナル』335
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始編』
- 臼原直之・鈴木 信 1994 『狩猟のための道具』『季刊考古学』第47号 雄山閣出版
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『川合遺跡』遺物編3(木製品図版編)
- 岩井宏實 1994 ものと人間の文化史75『曲物』(財)法政大学出版局
- 宮島義和 1995 『更埴市歴代遺跡群の祭祀遺物』『長野県考古学会誌』第76号 長野県考古学会
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『川合遺跡 八反田地区II』(本文編・図版編)
- 宮内省歴史博物館 1995 『日本の櫛』
- 奈良国立文化財研究所 1995 『山田寺出土建築部材集成』
- 黒崎 直 1996 『古代の農具』『日本の美術2』No.357 至文堂
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『川合遺跡』遺物編3(木製品本文編)

- 埋蔵文化財研究会 1996 『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究実行委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『角江遺跡II』遺物編2（木製品）
- 四柳宏幸 1997 「北陸の中世漆器」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『川田糸車遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報14』
- 臼柄直之 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川糸車遺跡』第3分冊（財）長野県埋蔵文化財センター
- 金出ミチル 1998 「打ち割り法：古代からの製材方法の再現」『文化庁月報』357 ぎょうせい
- 増田一真 1998 『敷式のない構造力学』真木堂
- 伊藤友久 1999 「建築部材」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 横田遺跡』長野県埋蔵文化財センター

土器観察表

- ・出土位置は報告書で記述した名称を示しており、遺物の注記と異なる場合がある。
- ・残存状況の数値は、残存部位で全面を1とした時の残存率である。

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	登録番号
図版1-1	D3	27-1層	縄文晩期1期	深鉢	破片	外面無文、ナデ。内面1本の沈線。	D114
図版1-2	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	口縁外面無文、内面並行沈線。	D100
図版1-3	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面無文、口唇部に小突起。	D108
図版1-4	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	1.8の厚胎縄文。内面並行沈線。	D97
図版1-5	D3	SD11	縄文晩期1期	鉢	破片	外面無文、内面並行沈線。	D68
図版1-6	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面無文、内面並行沈線。内外面に僅かに赤彩が確認される。	D102
図版1-7	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	口唇部小突起。口縁外周無文。	D110
図版1-8	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面細密な縄文?。並列。口縁内面2本の並行沈線。	D91
図版1-9	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面並行縄文、内面沈線。	D116
図版1-10	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面無文の縄文。内面並行沈線。	D112
図版1-11	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	棒状工具端部による刺突列。図版1-14と同一個体。	D98
図版1-12	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	図版1-14と同一個体か。	D113
図版1-13	D3	SD11-13	縄文晩期1期	鉢	破片	唇部に刺突列。図版1-14と並上?が類似する。	D69
図版1-14	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	口縁部無文の縄文。沈線間棒状工具端部の刺突列。口縁内面並行沈線。	D99
図版1-15	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面に赤彩。並行縄文。	D117
図版1-16	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面赤彩。	D96
図版1-17	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	外面縄文?。内面並行沈線。内外面に赤彩が見られる。	D104
図版1-18	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	底部	底部ナデ。	D85
図版1-19	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	底部	底部網代紋。	D89
図版1-20	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	1/3	底部網代紋。	D87
図版1-21	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	底部	底部ナデ。	D86
図版1-22	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	底部	無文ナデ。底部ナデ。	D84
図版1-23	D3	SD11	縄文晩期1期	深鉢	2/3	無文ナデ。	D92
図版1-24	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	底部	並行ナデ。	D90
図版1-25	D3	27-1層	縄文晩期1期	鉢	破片	底部網代紋。	D88
図版1-26	D3	SD11	縄文晩期1期	深鉢	口縁1/4	無文ナデ。口縁内面に1本ないし2本の沈線。口唇部に小突起。胴部外面にバウダー状の白色付着物(灰?)。	D61
図版1-27	D3	27-1層	縄文晩期1期?	壺?	1/3	ナデ。	D93
図版1-28	D2	SQ01	縄文晩期	壺	1/6	肩帯が隆を成し有段となる。胴部内面僅ミガキ。外面ナデ又はミガキ。	D38
図版2-29	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	口縁部太い沈線。	A1631
図版2-30	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	外面ミガキ。口縁部太い沈線。	A1633
図版2-31	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	2本の並行沈線。	A1634
図版2-32	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺?	破片	口唇部面取り。口縁部並行ナデ?による筋目列。	A1636
図版2-33	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺?	破片	口縁部断面方形の棒状工具による2列の刺突列。	A1654
図版2-34	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺?	破片	断面方形の棒状工具による刺突列。外面ミガキ。内面ナデ。	A1613
図版2-35	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	口唇部面取り。断面方形の棒状工具による刺突列。	A1639
図版2-36	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	並行沈線。内外面ナデ。	A1635
図版2-37	A4	SQ01	縄文晩期II期	鉢	破片	外面ミガキ。内面ナデ。外面の下半分にターレット状の黒色付着物。	A1652
図版2-38	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	浅いハケム(細密な赤彩)が僅かに見られる。	A1632
図版2-39	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/8	内外面ナデ。口唇部面取り。	A1629
図版2-40	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	内外面に浅く細密なハケム(細密な赤彩)が見られる。	A1641
図版2-41	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/8	ハケム(細密な赤彩)。	A1630
図版2-42	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	ハケム(赤彩)。	A1655
図版2-43	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	外面ハケム(細密な赤彩)。内面ナデ。	A1638
図版2-44	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	胴部粗い赤彩。	A1644
図版2-45	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	肩部に4本の沈線。胴部には粗いハケム?が見られる。	A1642
図版2-46	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	破片	腹の貫通孔がある腹状の突起。赤彩が部分的に残る。	A1645
図版2-47	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/8	只腹赤彩?	A1646
図版2-48	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/6	縄文?光腹部に赤彩。表面に黒色付着物。	A1628
図版2-49	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/6	口縁部ナデ。胴部浅いハケム。	A1627
図版2-50	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/3	口縁部ナデ。胴部ハケム調整ナデ。口唇部小突起は5単位。	A1647
図版2-51	A4	SQ01	縄文晩期II期	鉢	底部1/1	底部ナデ。	A1624
図版2-52	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/4	口唇部にM字状の小突起。	A1623
図版2-53	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	底部破片	並行網代紋。	A1640
図版2-54	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/6	口縁部コナデ。胴部ハケム(細密な赤彩)。	A1625
図版2-55	A4	SQ01	縄文晩期II期	壺	1/8	口縁部に小突起。胴部番号54と同一個体か?。	A1626
図版3-56	R2	9b層・10b層	弥生II期	壺	破片	胴部縄文縞文の隆帯と押引状の刺突列。胴部上部太い沈線による区画内を押引状の刺突列を充填する。下半部は帯位の帯状区画内は縄文晩期後遺状工具による刺突列を施す。押引状の刺突列を充填した3角文が配置される。	E161
図版3-57	A3西	SD111	弥生II期	壺	1/2	口唇部粗み又は縄文。胴部に沈線がめぐる。器面全面ミガキであるが、部分的にハケムが残る。	A1693
図版3-58	D3	SD10	弥生II期	壺	1/5	口唇部縄文縞文。	D60
図版3-59	D2	27-1層	弥生I期、II期	壺	破片	口唇部に縄文?が施される。内面に赤色顔料が付着。	D169
図版3-60	B2	SD106	弥生II期	壺	底部1/2	花崗岩縄文縞文。	B119

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版3-61	B2	SD106	弥生Ⅱ期	甕	頸部1/3	沈線間に縄文と棒状工具による刻突列。縄文部分は低隆帯となる。	B121
図版3-62	B2	SD105	弥生Ⅱ期	甕	頸部1/1	頸部沈線間縄文様文。胴部外面縦ミガキ、内面ナデ。	B115
図版3-63	D3	SC06	弥生Ⅱ期・Ⅲ期前半	甕	破片	内外面ナデ。	D164
図版3-64	D3	25-1期	弥生Ⅱ期・Ⅲ期前半	甕	1/3	内外面ナデ。黒褐色を呈する。	D154
図版3-65	D1	第6A水田	弥生Ⅱ期後半・Ⅲ期前半	甕	1/3	内面赤彩、外面ナデ。口唇部は凹形棒状工具の痕跡による刻み。	D8
図版3-66	D3	第6C水田(3号土層)	弥生Ⅱ期	甕	1/6	口唇部に刻み。器面の厚削が著しい。	D149
図版3-67	E2	SQ102	弥生Ⅲ期	甕	口縁のみ欠損	頸部2条の帯状隆帯文(5本1単位)。隆帯文の下に屈折帯で充塞される黒彩。胴部は赤彩・ミガキ?	E130
図版3-68	E1	第2水田直上	弥生Ⅲ期	甕	3/4	頸部帯状隆帯文の下に帯状隆帯文。外面ナデ、内面滑潤面。外面に僅かに赤彩の痕跡が見られる。	E136
図版3-69	E1	SD14	弥生Ⅲ期	甕	ほぼ完形	外面は口縁部ナデ、胴部ミガキ?口縁部内面から外面にターレット状の黒色付着物。口縁部僅かに欠損。	E32
図版3-70	E2	SK03	弥生Ⅲ期	甕	胴部1/1	口縁のみ欠損。外面赤彩・ミガキ、胴下半部にハケメが残る。内面は口縁赤彩・ミガキ、胴下半部ハケメ。	E62
図版3-71	E2	SK03	弥生Ⅲ期	甕	胴部1/1	外面は頸部帯状隆帯文、胴部上半赤彩・ミガキ、胴下半部赤彩・ミガキ。内面は口縁部赤彩、胴下半部の孔は施成後の人為的な穿孔と考えられる。外面にターレット状の黒色付着物。	E63
図版3-72	E1	SK02	弥生Ⅲ期	甕	完形	外面と口縁内面赤彩・ミガキ。頸部文字文は8本1単位の帯状隆帯文の2本1単位の帯状隆帯文で構成される。縦帯隆帯文は9ヵ所、赤彩部が類似した文字部まで及んでいるが、ミガキは及んでいない。	E3
図版3-73	F2	SK02	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	1/6	外面は頸部帯状隆帯文、胴部赤彩・ミガキ、内面はナデ。図版番号77と同一個体の可能性有り。	E84
図版3-74	F2	SK03	弥生Ⅲ期	甕	胴部1/1	外面はハケメ→頸部帯状隆帯文→口縁部と胴部ミガキ、胴部はハケメが残る。内面は胴部下半がハケメ、胴部上半から口縁ミガキ。外面に黒色付着物。	E61
図版3-75	D2	SC107	?	甕?	1/5	外面ココナデ。	D25
図版3-76	D2	23-2層	弥生Ⅲ期・Ⅳ期?	甕	1/3	ナデ。	D43
図版3-77	E2	SK02	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	1/8	口縁内外面赤彩・ミガキ。頸部帯状隆帯文。	E55
図版3-78	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	3/4	口縁内面と外面口縁上端部に赤彩・ミガキ。他はミガキのみ、胴部に帯状隆帯文が僅かに確認される。	E45
図版3-79	E2	SK01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	1/6	口縁部内外面赤彩・ミガキ。	E53
図版3-80	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	1/4	口縁部内面赤彩・ミガキ、外面ミガキ、口縁部ナデ。	E58
図版3-81	C2	第6水田前	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	甕	破片	内外面赤彩・ミガキ。	C53
図版4-82	E2	SQ103	弥生Ⅲ期	甕	1/3	頸部に2条の帯状隆帯文。隆帯文下には帯状隆帯文。内外面にハケメが顕著に残る。	E151
図版4-83	D3	SD07	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	1/12	口縁内外面ミガキ。	D77
図版4-84	B2	SD105-106	弥生Ⅲ期	甕	口縁1/2	外面ハケメ→頸部帯状隆帯文に縦帯文で区別を成し、区画内を沈線で充塞。内面赤彩・ミガキ。	B137
図版4-85	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	口縁1/6~1/4	口縁内面と外面口縁上端部に赤彩・ミガキ。外面口縁から着状に垂下する赤彩部が顕著される。頸部帯状隆帯文に凹状ハケメによる縦帯の沈線。	E46
図版4-86	E2	SK02	弥生Ⅲ期後半	甕	1/8	口縁の内面赤彩・ミガキ、外面はハケメ後ミガキで口縁部のみ赤彩。外面にハケメが顕著に残る。	E66
図版4-87	D3	SC03	弥生Ⅲ期	甕	1/8	口縁部内面赤彩、外面ミガキ、頸部帯状隆帯文。胎土が白っぽく図版4-88に類似。	D160
図版4-88	D3	SC03	弥生Ⅲ期	甕	1/8	口縁部内面赤彩、外面ミガキ、白っぽい胎土。	D159
図版4-89	E2	8a層	弥生Ⅲ期	甕	1/2	口縁内面赤彩・ミガキ、外面ナデ又はミガキ。	E145
図版4-90	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	1/2	口縁内面赤彩・ミガキ、外面ナデ。	E43
図版4-91	E2	7b層	弥生Ⅲ期	甕	1/4	口縁内面赤彩・ミガキ、外面ナデ。	B126
図版4-92	B2	SD106	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	口縁1/4	口縁部外面波状文。内面のみ赤彩・ミガキ。	E153
図版4-93	E1	SD12	弥生Ⅲ期	甕	1/12	口縁内面赤彩。	E136
図版4-94	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	1/6	口縁部内面赤彩・内面ミガキ、外面ナデ。	E57
図版4-95	E1	SK01	弥生Ⅲ期	甕	1/3	口縁部内面赤彩・ミガキ、外面ミガキ。胴部上段は隆帯文。下段は帯状隆帯文(8本単位)。	E2
図版4-96	E2	SQ04	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	甕	1/4	胴上半部と下半部は兼用しないが、出土状況と胎土が類似していることから、同一個体と判断される。胴上半部には帯状隆帯文が観察される。同一個体と思われる1片の胴部破片に赤彩有り。	E80
図版5-97	E2	SQ16	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕	口縁1/1(胴下半1/2)	口縁部内外面ハケメ後ミガキ。頸部帯状隆帯文。胴部外面はミガキ、内面はハケメ後ナデ。胎土は白本1単位。	E87
図版5-98	E2	SQ20	弥生Ⅲ期後半	甕	1/2	8本1単位の帯状隆帯文。外面は浅いハケメの後ミガキ、内面は浅い横方向のハケメ。赤彩は見られず。胴部から胴部下部にターレット状の黒色付着物が見られる。	E96
図版5-99	E2	SQ06	弥生Ⅲ期	甕	ほぼ完形	頸部に3条の帯状隆帯文。口縁内外面と胴部外面はハケメ後ミガキ。ハケメが部分的に残る。口縁欠け。	E77
図版6-100	E2	SQ11	弥生Ⅲ期後半	甕	1/2(頸2/10)	口縁内面赤彩・ミガキ、口縁外面と胴部はミガキ。頸部帯状隆帯文と2条の帯状隆帯文により7文字を構成する。	E83
図版6-101	E2	SQ14	弥生Ⅲ期後半	甕	1/8~1/4	頸部帯状隆帯文。帯状隆帯文は8本1単位。胴部上半は赤彩・ミガキで、赤彩部上端帯状隆帯文となる。	E85
図版6-102	E2	SK01	弥生Ⅲ期	甕	胴部1/1	頸部帯状隆帯文。口縁部内面と頸部隆帯文の下に2.5mmほどの帯状の赤彩・ミガキ。外面口縁部と胴部の赤彩部分はミガキ。	E42

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	現存状況	土器説明	整理番号
図版6-103	E2	SK01	弥生Ⅲ期後半	椀	1/2	外面は頸部縮径直線文一定状工具による2本1対の縦位の沈線、胴部赤彩・ミガキ。内面はハケメナデ。	E41A
図版6-104	E2	SQ02	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	4/5	口縁部内外面赤彩・ミガキ。頸部縮径T字文。T字文は6ヵ所所で1周。垂曲状工具は7本1単位。胴部外面赤彩。	E74
図版7-105	E2	SQ18	弥生Ⅲ期	壺	ほぼ完形	頸部縮径直線文、口縁部内外面と胴部上半部外面赤彩・ミガキ。赤彩が縮径直線文にかかる。	E89
図版7-106	E2	SK01	弥生Ⅲ期	壺	胴部5/6	外面にターム状の黒色付着物。明赤褐色を呈し、表面が割れ入っている所が見られ、二次焼成か？	E41B
図版7-107	E2	SK01	弥生Ⅲ期	壺	1/8	外面ミガキ、内面ハケメナ及びナデ。	E49
図版7-108	E2	SQ15(8層)	弥生Ⅲ期	壺	胴部3/4	胴部外面の上半は赤彩・ミガキ、下半はミガキ。内面はハケメ。	E173
図版8-109	E2	SQ05	弥生Ⅲ期	壺	3/5 口縁1/4	口縁部内外面赤彩。頸部縮径T字文。T字文は6ヵ所と想定される。垂曲状工具は7本1単位。胴下半部に破がある。	E76
図版8-110	E2	SQ10	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/2	口縁内外面赤彩。胴部上半部赤彩・ミガキ。胴下半部はミガキ。頸部縮径T字文。胴部に破を持つ。	E82
図版8-111	E2	SQ08	弥生Ⅳ期	壺	1/4-1/3	口縁部内外面と胴部外面が赤彩・ミガキ。頸部は横位の6枚の帯状文と、縦位の2本1対の帯状文により構成されたT字文。横位の最上段は帯帯状文、他は直線文である。胴部内面はハケメ。蓋部は縮径を欠く。	E79
図版9-112	E2	SQ07	弥生Ⅳ期	壺	3/5	頸部縮径T字文と円形刺突があるボタン状紐付文(5ヶ所)。口縁部内外面と頸部赤彩。胴部にターム状の黒色付着物が帯状に見られ、黒色付着物は割れ筋に沿っており、割れ筋にも付着物が見られることから接着剤的な効果をねらったものであろう。土器破片が細かく、割れ面の摩擦が著しいことから、復元の段階で歪みが出た可能性が高い。胴下半部に明赤褐色は見られない。	E78
図版9-113	E1	SD14	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	1/6	内外面赤彩・ミガキ。外面にターム状の付着物。	E23
図版9-114	D2	SC109	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。	D24
図版9-115	B 2	SC123	弥生Ⅲ期	壺	1/6	口縁部内外面赤彩・ミガキ。頸部T字文の縦の線は垂曲状工具による可能性有り。T字文の後赤彩・ミガキ。	B462
図版9-116	E1	第2調査所	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	2/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。頸部縮径直線文。	E113
図版9-117	D2	20ノ層	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/6	口縁内外面赤彩・ミガキ。頸部縮径直線文が僅かに確認される。	D39
図版9-118	E1	SD14	弥生Ⅲ期?	壺	1/6	帯帯状文。胴部ハケメ後ミガキ。細密なハケメに施る。	E134
図版9-119	E1	SD14	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	1/3	外面は胴部上半部赤彩・ミガキ、下半部ミガキ。内面ナデ。	E21
図版9-120	E1	SD12	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/5	胴下半部の破が見られる。内外面ハケメ後ミガキ。内面にハケメが密着に施る。外面にターム状の黒色付着物。割れ筋に部分的に付着物が確認される。	E125
図版10-121	C2	SA01	古墳1期	壺	1/2	外面ケズリ後接合工具によるハケメ跡のナデ。内面ナデ。器厚5mm-6mmと薄い。	C40
図版10-122	C2	第6水田	古墳1期	壺		外面ハケメ後ミガキ。内面ナデ?。	C28
図版10-123	C1	SA01	古墳1期	壺	1/8	口縁内外面赤彩。胴部にT字文。	C11
図版10-124	D2	SC112	弥生Ⅲ期後半～古墳1期	壺	1/12	外面ミガキ。胴部に破が認められる。	D30
図版10-125	D2	SM01	弥生Ⅳ期・古墳1期	壺	1/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。	D32
図版10-126	D2	SM01	弥生後期～古墳前期	壺	1/3	外面赤彩・ミガキ。図版10-125と同一個体。	D32
図版10-127	D2	SM01	弥生Ⅳ期・古墳1期	壺		口縁部内外面ミガキ。頸部縮径T字文。胴部ミガキ。	D37
図版10-128	D2	SC112	古墳1期	壺	ほぼ完形	口縁部内外面ミガキ。胴部外面はナデ又はミガキ。内面は上半部がナデ又はミガキで、下半部はハケメが観察される。	D36
図版10-129	D2	SM01	古墳1期	壺	1/2	胴上半部のみ赤彩。胴下半部はミガキ。口縁内外面ミガキ。胴部付着に僅かに帯が確認される。器厚が5mmほどと薄手である。残丘上に置かれて出土。	D35
図版10-130	C	SD3002	弥生Ⅳ期・古墳1期	壺	1/2	内面口縁部と外面赤彩・ミガキ。外面底部付近は赤彩がない可能性有り。肩部2列の帯状文。	C30
図版10-131	D2	SD2005	弥生Ⅲ期・Ⅳ期?	壺	1/4	外面赤彩と細密な帯帯状文。内面ナデ。	D44
図版10-132	E1	SD12(渠上土庫)	弥生Ⅲ期・Ⅳ期?	壺	1/8	口縁部縮径を欠くが、口縁部縮径帯部に3本の沈線が確認される。口縁内外面赤彩。胴部外面赤彩・ミガキ。丸孔無き?	E122
図版11-133	E2	第5調査所	弥生Ⅲ期	広口甕	1/6	胴部に2個1対の円孔。	E114
図版11-134	D3	25-1期	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期前半	広口甕	1/8	口縁内外面赤彩。胴部に直径1mmほどの円孔(2孔1対)。	D156
図版11-135	D3	第6水田	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期前半	広口甕	1/3	内外面赤彩。口縁部に直径3mmの円孔。円孔は2孔1対。	D151
図版11-136	D3	SC04	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期前半	広口甕	1/8	内外面赤彩。	D161
図版11-137	E1	SQ01	弥生Ⅲ期	広口甕	1/8	帯帯状文。胴部外面赤彩。内面ミガキ。	E6
図版11-138	A3	第6水田	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	1/10	胴部に帯状文	A1091
図版11-139	A3	SC07	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	1/6	胴部に直線文	A1061
図版11-140	E1	第2水田	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	1/4	口縁部内外面、胴部外面赤彩。胴部に2個1対の円孔。	E110
図版11-141	E1	SD14	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	ほぼ完形	外面と、内面に破から胴部上半部赤彩・ミガキ。器面にハケメの僅かな面が認められる。2個1対の円孔が2ヵ所。胴口縁部と外面にターム状の黒色付着物。口縁部を後に欠き、割れ口にもターム状の付着物が見られる。	E30
図版11-142	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	広口甕	1/8	内外面赤彩・ミガキ。頸部縮径直線文。	E28
図版11-143	E1	第2調査所	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	底部1/1	外面ミガキ。部分的に赤彩が見られる。	E112
図版11-144	E2	SC01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口甕	底部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケメ。	E52

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	七器説明	整理番号
図版11-145	E2	SQ01	弥生Ⅱ期・Ⅳ期	広口短頸 壺又は鉢	1/4	内外面赤彩。底面も赤彩。内面は剥落しており僅かに赤彩が確認される。	E73
図版11-146	A3	第6水田	弥生Ⅱ期・Ⅲ期	広口短頸壺	1/2	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	A1089
図版11-147	D3	第7B 調査面	弥生Ⅲ期	鉢	底部1/1	内面赤彩。外面ハケ後ナデ。外面に僅かに赤色顔料が見られる。	D135
図版11-148	D3	第7B 調査面	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	広口短頸壺	1/2	外面赤彩。内面ハケ後ナデ。	D136
図版11-149	D2	SD107	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。	D18
図版11-150	B2	SD105	弥生Ⅲ期	高杯	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。	B114
図版11-151	B2	SC117	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	脚部外面。坏部内外面赤彩・ミガキ。	B159
図版11-152	D1	第6水田 (23期)	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/2	外面赤彩・ミガキ。脚部内面ナデ。	D152
図版11-153	E1	SD14	弥生Ⅲ期	高杯	1/12	内外面赤彩。	E108
図版11-154	E2	8層内	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/8	内外面赤彩。外面は縁部に赤彩が確認されない。	E149
図版11-155	E2	8層内	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/12	内外面赤彩。外面テール状の黒色付着物。	E148
図版11-156	D3	SD07	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	破片	内外面赤彩。	D78
図版11-157	E2	7b層	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/12	内外面赤彩・ミガキ。	E132
図版11-158	C	SD3002	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	1/2	内外面赤彩・ミガキ。	C53
図版11-159	D2	第6水田西	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	2/3	内外面赤彩・ミガキ。坏部に埃を付す。	D46
図版11-160	C2	第6水田	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/2	内外面赤彩・ミガキ。	C51
図版11-161	E1	SC01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	1/8	坏部内外面赤彩。牙部の縁は不明瞭。	E119
図版11-162	D1	第6水田	弥生Ⅲ期後半	高杯	坏部1/2	坏部内面赤彩。外面ハケ後ナデ。坏部の縁は不明瞭。	D117
図版11-163	E1	SA05	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/8	内外面赤彩・ミガキ。	E117
図版11-164	E1	SA02	弥生Ⅲ期・古墳Ⅰ期	高杯	1/10	内外面赤彩。	E116
図版11-165	E1	SD14	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/5	内外面赤彩・ミガキ。	E26
図版11-166	E2	SQ12	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/6	内外面赤彩・ミガキ。	F84
図版11-167	C1	SA01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。脚部4単位の三角透かし。	C19
図版12-168	B2	SQ20	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	1/4	口唇部に小突起が確認されるが、欠損しているため単位は不明。内外面赤彩。	E98
図版12-169	D2	SK01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	1/4	内外面赤彩・ミガキ。	E54
図版12-170	F3	SD12	弥生Ⅲ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩。脚部に紅線帯。	D70
図版12-171	B2	SD105-166	弥生Ⅲ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	B136
図版12-172	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	脚部1/4	4単位の三角透かし。外面赤彩・ミガキ。内面ハケ後ナデ。	E72
図版12-173	E1	SQ01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	脚部1/2	赤彩・ミガキ。	E27
図版12-174	E2	SK02	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/2	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。黒色を塗す。	E67
図版12-175	D3	第7B 調査面	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	脚部は外面赤彩。内面ナデ。	D137
図版12-176	E2	SK01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケ後ナデ。	E53
図版12-177	E2	SQ19	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/4	脚部外面赤彩。内面黒色を塗す。	E91
図版12-178	E1	SQ01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	脚部1/2	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	E39
図版12-179	E1	SD14 (底面)	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケ。	E17
図版12-180	D3	SD07	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	脚部1/12	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	D82
図版12-181	B2	SC117	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	B160
図版12-182	C	SD3002	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	脚部1/1	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	C35
図版12-183	E1	SA01	弥生Ⅲ期	高杯	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	E13
図版12-184	C1	SD04?	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	高杯	1/3	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。三角透かしは4単位。	E142
図版12-185	E2	SD03	弥生Ⅳ期・古墳Ⅰ期	高杯	1/3	脚部外面赤彩。内面に部分的に赤色顔料が付く。3単位の円形透かし。	E168
図版12-186	D2	SD10-11	弥生Ⅲ期・近世前期	鉢	底部3/4	内外面赤彩・ミガキ。底面ケズリ後ナデ。	D75
図版12-187	E2	SQ01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	高杯	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。	E60
図版12-188	D1	SC1001	弥生Ⅲ期?	鉢	3/4	内外面赤彩。遺物番号102-103-104-106-118・123。	D26
図版12-189	E2	SQ15	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	鉢	1/4	内外面赤彩・ミガキ。底面はナデ。	E82
図版12-190	B2	SD106	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	鉢	ほぼ完形	内外面赤彩・ミガキ。	B134
図版12-191	E2	SK02	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	鉢	ほぼ完形	口縁部に僅かに欠損。内外面赤彩・ミガキ。	E69
図版12-192	E1	試掘15層	弥生	蓋	3/4	内外面ハケ後ナデ。	E139
図版12-193	E1	第2水田	弥生Ⅲ期・Ⅳ期?	蓋	1/3	内外面ミガキ。	E111
図版13-194	A4	SA02	弥生Ⅲ期	甕	1/3~2/3	口唇部に剥み。口縁部緑彩・ミガキ。頸部は3~4本の波状沈線。胴部はハケ後波状沈線。波状沈線は右から左へ展開。	A1049
図版13-195	D3	SD10	弥生Ⅲ期・旧暦前	甕	1/8	半沈線?による波状沈線。	D58
図版13-196	B2	SC124	弥生Ⅲ期	甕	1/4	胴部上半部は磨治工具による条線と板状工具による刻列。口唇部板状工具取部による刻みと縄文。外面に黒色付着物。	B166
図版13-197	D2	27-11a	弥生Ⅲ期	甕	1/3	口唇部円形板状工具取部による刻み。胴部は磨治工具。	D158
図版13-198	E2	第4水田	弥生Ⅲ期後半・ 旧暦前	甕	1/5	胴部ナデ。胴部磨治波状沈線。胴部磨治波状沈線?。	E158
図版13-199	D2	23-2層	弥生Ⅲ期?	甕	1/10	ヨコナデ。	D42
図版13-200	E1	SD14	弥生Ⅲ期	甕?	1/6	頸部T字文。腹位の磨治文は5本1単位の磨治文で2条単位とする。T字文・磨治波状沈線。	E27
図版13-201	D3	18層	弥生Ⅲ期?	甕	破片	外面ハケ調整後。磨治波状文・磨治波状文。内面口縁部ナデ。胴部ハケ。	D146
図版13-202	E1	SD14	弥生Ⅲ期	甕	1/4	外面ハケ調整後。磨治波状文・磨治波状文。内面口縁部ナデ。胴部ハケ。	B25

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	上説説明	整理番号
図版13-203	E1	SD14	弥生中期	甕	1/6	外周は帯幅線文・帯幅線文。内周は口縁部ナデ、胴部ハケメ(ハケメは磨肉状工具)。	E29
図版13-204	E2	SK01	弥生中期	甕	1/4	帯幅線文→帯幅線文→ボタン状貼付文(口縁部と胴部線文の下縁部)。内面はミダキ。	E44
図版13-205	E1	SD14	弥生中期後半	甕	1/4	ハケメ調整後、帯幅線文→帯幅線文。胴部にハケメが顕著に残る。	E21
図版13-206	E2	SQ01	弥生中期後半・IV期	甕	底部1/1	帯幅線文→帯幅線文。胴下半部内外面ミダキ。	E71
図版13-207	E2	SA01	弥生中期	甕	1/2	帯幅線文、帯幅線文。	E164
図版13-208	E1	SK01	弥生中期	甕	ほぼ定形	無文?。器蓋摩耗が著しい。	E1
図版14-209	D3	SC06	弥生?	甕?	破片	無文?。器蓋摩耗が著しい。	D163
図版14-210	E2	SQ03	弥生中期・IV期	甕	3/4	帯幅線文。口縁部僅かに受け口状を呈する。	E75
図版14-211	D3	第6奥裏面(後込地)	弥生中期後半・IV期	甕	1/2	帯幅線文→帯幅線文。	D138
図版14-212	E2	SQ01	弥生中期・IV期	甕	1/3	帯幅線文。内面ミダキ。	E72
図版14-213	E1	SD14	弥生中期後半	甕	1/4	外面帯幅線文。内面ミダキ。外面に黒色付着物。	E100
図版14-214	D3	SD07	弥生中期後半・IV期	甕	1/2	帯幅線文、帯幅線文。口縁部中や受け口状を呈す。無文部は内外面ミダキ。	D79
図版14-215	E2	SQ20	弥生中期・IV期	甕	1/2	帯幅線文、帯幅線文。器蓋が著しく摩耗する。	E97
図版14-216	E2	SQ09	弥生中期後半・IV期	甕	1/2	帯幅線文→帯幅線文。胴下半部ミダキ。口縁部内面はハケメ後ミダキ。	E81
図版14-217	E2	SQ17	弥生中期・IV期	甕	底部のみ欠損	帯幅線文・帯幅線文。口縁内面、胴下半部内面ミダキ。	E88
図版14-218	E1	SQ01	弥生中期後半?	甕	1/4	外面ハケメ後。線文→波状文。外面胴下半部ミダキ、黒色付着物。	E8
図版14-219	E1	SD14	弥生中期後半	甕	2/3	2段の帯幅線文と帯幅線文。6本1単位の磨肉状工具。口縁部縮部ナデ。	E14
図版14-220	E1	SD14	弥生中期後半	甕	2/3	外面帯幅線文と帯幅線文。胴下半部ミダキ。胴部外面黒色付着物。	E16
図版14-221	E1	SD14	弥生中期後半?	甕	5/6	ハケメ後ナデ調整を行った後、帯幅線文→帯幅線文。胴部と上半部に黒色付着物。内周口縁から胴部上半部はミダキが認められる。	E13
図版15-222	E1	SQ04	弥生中期後半・IV期	甕	1/2	ハケメ後、帯幅線文→帯幅線文。外周黒色付着物。口縁部血取り。	E10
図版15-223	C2	SC41	弥生IV期	甕	ほぼ定形	折返し口縁。線文→波状文。胴下半部はミダキ。ハケメ痕僅かに見られる。胴部外面黒色付着物。	C10
図版15-224	D3	第5水田	弥生IV期・Ⅰ・Ⅱ期	甕	2/3	粗線帯幅線文。胴下半部ナデ。	D83
図版15-225	D2	SC110	弥生IV期	甕	1/2	帯幅線文→帯幅線線文。器蓋は摩耗・割落が著しい。	D66
図版15-226	D2	SC109	弥生IV期	甕	底部1/1 胴部1/2	胴部付近のみ帯幅線文。器蓋が著しく残る。	D22
図版15-227	E2	SK02	弥生中期後半・IV期	甕	胴部1/1	帯幅線文→帯幅線文。外面胴部に黒色付着物。	E60
図版15-228	D3	SD07	弥生中期後半・IV期	甕	1/5	帯幅線文→帯幅線文。外周に黒色付着物。	D81
図版15-229	C2	39扉	弥生中期・IV期	甕	1/3	線文→波状文。胴下半部ミダキ。	C21
図版16-230	E1	SQ03-04	弥生中期・IV期	甕	2/3	胴上半部改い帯幅線文。胴下半部ミダキ。表面の割落が著しい。	E11
図版16-231	C2	SA01	弥生IV期・Ⅰ・Ⅱ期	甕	底部1/1	線文ハケメ後ミダキ。残存部上端に波状文が僅かに確認される。内面に黒色付着物(スクリーン・トン)磨肉4mm×6mmと推定。	C39
図版16-232	E2	SQ19	弥生中期・IV期	甕	3/4	胴下半部内面ミダキ。	E90
図版16-233	E1	SD12(後土上層)	弥生中期?	甕?	1/2	外面短いミダキ。内面板状工具による短いナデ。底部段辺に帯幅線文。	E123
図版16-234	E1	SQ05	弥生中期・IV期	甕	底部1/1	外面ミダキ。内面ミダキ。	E12
図版16-235	E1	第2奥裏面	弥生中期・IV期	甕又は壺	底部1/1	内面ミダキ。外周に暗褐色の赤彩?。外面にテール状の黒色付着物。付着物は割れ口にもあり、内面にも僅かに観察される。	E129
図版16-236	C	SD3002	弥生中期後半・IV期	白付甕	胴部のみ欠損	線文→波状文。外面胴下半部ミダキ。内面ミダキ。	C37
図版16-237	E1	SD01	弥生中期後半・IV期	白付甕	口縁1/1	胴部と器蓋の接合部が明確に観察される。帯幅線文・帯幅線文。	E130
図版16-238	D2	SC110	弥生中期後半・IV期	白付甕	ほぼ定形	帯幅線文、帯幅線文。胴下半部はミダキ。口縁部血取り。磨肉状工具による沈線。	D20
図版16-239	C2	第6水田	弥生中期・IV期	白付甕	胴部1/1	胴部ナデ。胴部内面ミダキ。	C52
図版16-240	D2	SC103	弥生中期・IV期	白付甕又は高坏		外面ハケメ後ミダキ。	D21
図版16-241	B2	SD106	弥生中期?	甕?	破片	胴部割裂列。	B131
図版16-242	D3	SC06	弥生I期	壺?	破片	沈線部に赤色顔料が付着。	D166
図版16-243	D3	25-1層	弥生I期	壺	破片	沈線部に黒文。板状工具による割裂列。	D157
図版16-244	B2	SD106	弥生I期	壺	破片	沈線部ハケメ後?。磨肉状内文。外面赤彩。	B128
図版16-245	C1	SA01	弥生中期・IV期?	壺	破片	細い棒状工具による沈線。	C14
図版16-246	B2	SD106・SC110	弥生	壺	破片	前沈線による磨肉目文。	B135
図版16-247	B2	SD106	弥生I期	壺	破片	沈線。	B132
図版16-248	D3	SD11	弥生I期	壺	破片	押し引き状の割裂列。帯幅線線文、磨肉。ボタン状貼付文。図版16-249と同一個体か。	D63

図版番号	地区名	出土位置	土師の時期	器種	残存状況	土師説明	整理番号
図版16-249	D3	SD10	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	押し引き状の割裂列、磨部直線文、縄文。	D67
図版16-250	D3	25-1層	弥生Ⅰ期	甕	破片	並行流線、流線内に赤色顔料が残る。	D153
図版16-251	D3	SD11	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部並行流線。	D65
図版16-252	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	辻廻りに縄文と棒状工具による割裂列。	F118
図版16-253	D3	SD13	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨り滑し縄文。	D73
図版16-254	B2	SD105-106	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部磨部直線文に直交する2本1対の流線。赤彩無し。	B140
図版16-255	D3	SC08	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	磨部流線文と流線。	D134
図版16-256	E1	SD12	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部磨部直線文の下部に磨部流線文。図版3-68に類似。	E127
図版16-257	E1	SD14	弥生Ⅰ期後半・Ⅳ期	甕	破片	磨部T字文。	E133
図版16-258	E1	SD12	弥生Ⅰ期後半・Ⅳ期	甕	破片	頸部磨部T字文。縦位は3本1単位の磨部文。	E126
図版16-259	C1	SA01	弥生Ⅰ期～古墳Ⅰ期	甕	破片	磨部並行流線によるT字文。外面黒色付着物。	C12
図版16-260	C	SD002	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部磨部直線文。磨部による流線がある三角文。赤彩無し。	C34
図版16-261	E1	第2水田	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	外面赤彩。底部に棒状工具による割裂。	E137
図版17-262	A4	第10調査面?	弥生Ⅰ期	甕	破片	外面赤彩。口唇部凹取り。表面割溝。	A1051
図版17-263	A4	第10調査面?	弥生Ⅰ期	甕	破片	赤彩?	A1050
図版17-264	D3	SD10	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部縄文流線。11線部ナマ。頸部に斜行直線文が僅かに確認される。図版17-165と同一個体。	D69
図版17-265	D3	SD10	弥生Ⅰ期	甕	破片	ハケム後斜行直線文。	D69
図版17-266	E1	第2水田	弥生Ⅰ期	甕	破片	斜行直線文。口唇部に縄文又は刷り筋。	E138
図版17-267	A3	SC01	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部に刷り筋。頸部に流線。	A1088
図版17-268	D3	第6水田(23層)	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部刷り筋。頸部磨部斜行直線文。	D158
図版17-269	A3西	SD111	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部磨部文。磨部直線文。	A1066
図版17-270	D3	第6水田(23層)	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部に刷り筋。頸部磨部直線文。外面黒色付着物。	D150
図版17-271	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部刷り筋。頸部直線文。	B125
図版17-272	D1	第6水田	弥生Ⅰ期	甕	破片	口の字重ハケム。凹形割突があるボタン状粘付文。	D11
図版17-273	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	口の字重ハケム。ボタン状粘付。	B133
図版17-274	D1	SC1001	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部直線文?	D6
図版17-275	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部直線文。	B130
図版17-276	D3	SC06	不明	不明	破片	磨部工具による並行流線。	D167
図版17-277	D3	SD11	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	太い磨部直線文。図版13-195と同一個体。	D69
図版17-278	D3	SD13	弥生?	甕	破片	内周ハケム。外面はハケム後ナマ。	D72
図版17-279	D3	SD12	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	ハケム後斜行直線文。	D71
図版17-280	E2	第4水田	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部並行流線による現状文(後期の磨部文に比べ条線が細い)。凹形割突があるボタン状粘付文。	E159
図版17-281	D1	第6水田	弥生Ⅰ期後半・前期前半	甕	破片	磨部直線文。磨部斜行直線文。	D10
図版17-282	E2	第4水田	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	斜行直線文(現状文か?)。	E162
図版17-283	E2	第4水田	弥生Ⅰ期・前期前半	甕	破片	斜行直線文(現状文か?)。	E160
図版17-284	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	流線と板状工具による割裂列。	B120
図版17-285	D2	SD2005	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部斜行直線文。	D13
図版17-286	D3	SC06	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部流線文。磨部直線文。	D165
図版17-287	E2	7b層	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部直線文。磨部直線文。図版13 204に類似。	E157
図版17-288	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部に直線文流線文。口唇部磨部?	B122
図版17-289	B2	SD106	弥生Ⅰ期	甕	破片	口唇部直線文の刷り筋。磨部直線文と頸部の磨部直線文。	B117
図版17-290	E1	SC01	弥生Ⅰ期	甕	破片	流線文のみ。	E5
図版17-291	E1	SD12	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。	E172
図版17-292	D2	20-1層上	弥生Ⅰ期	甕	1/6	磨部直線文。磨部直線文。内周ミガキ。	D40
図版17-293	E1	SD14	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部磨部直線文の磨部直線文を重下する。頸部に磨部直線文。	E163
図版17-294	D3	22層	弥生Ⅰ期	甕	破片	頸部は磨部の磨部直線文を重下する2本1対の磨部文。口唇と頸部は磨部直線文。	D148
図版17-295	E1	SD14	弥生Ⅰ期	甕	破片	2条の磨部直線文。磨部直線文。磨部直線文にハケムが残る。	E141
図版17-296	E1	SD14	弥生Ⅰ期後半	甕	1/4	外面磨部直線文。内周ハケム後ミガキ。外面に黒色付着物。	E99
図版17-297	E1	SD11	弥生Ⅰ期?	甕	1/5	磨部直線文。外面黒色付着物。	E171
図版17-298	E1	SD14	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	1/4	磨部直線文。	E19
図版18-299	D2	8層	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。	E147
図版18-300	E1	SC112	弥生Ⅰ期	甕	破片	磨部直線文。	D4
図版18-301	E1	SD11	弥生Ⅰ期?	甕	破片	磨部直線文。	E170
図版18-302	F2	7b層	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。磨部直線文。	E153
図版18-303	B2	SD105	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	流線文。	B116
図版18-304	B2	SC124	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	頸部磨部直線文?。流線文。	B165
図版18-305	E1	SD14	弥生Ⅰ期後半	甕	破片	頸部磨部直線文?と口唇部磨部直線文。	E102
図版18-306	E1	第2調査面	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。	E132
図版18-307	E2	7b層	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。	E146
図版18-308	E2	7b層	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。磨部直線文。	E145
図版18-309	D2	23-2層	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部直線文。外面に黒色付着物。腹口にも黒色付着物がみられる。ただし、腹は隆と判断した部分で口縁である可能性があり。頸部に磨部直線文による割裂が見られる。	D41
図版18-310	A3	第6水田	弥生Ⅰ期・Ⅳ期	甕	破片	磨部文。流線文。	A1092

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版18-311	D3	SC04	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。外面に黒色付物。	D162
図版18-312	B2	SD106	弥生前期	甕	破片	流紋状。ホタン状付物。	B129
図版18-313	E1	SA05	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。帯流紋状が僅かに摩りこぼれる。	E118
図版18-314	A3	第3水田	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。流紋状。	A1085
図版18-315	A3	SC02	弥生前期・IV期	甕	破片	流紋状。	A1087
図版18-316	B2	SD105	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状後流紋状。	B116
図版18-317	D2	SD107	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。	D17
図版18-318	E1	SD12	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。	E124
図版18-319	B2	SD105-106	弥生前期?	甕	破片	帯流紋状。胎土が他の甕と異なり、焼成が硬質。	B139
図版18-320	E1	SD14	弥生前期?	甕	破片	帯流紋状。胴部にハケメ残る。	E104
図版18-321	E1	SC01	弥生前期・IV期	甕	破片	ハケメ後流紋状一帯流紋状。	F14
図版18-322	B2	SC123	弥生前期・IV期	甕	破片	頸部磨滅した流紋状。	B143
図版18-323	B2	SD106	弥生前期・IV期	甕	破片	頸部磨滅状。後頸部流紋状。ハケメ痕を残す。	B127
図版18-324	E2	SA01	弥生前期?	甕	破片	帯流紋状。磨滅流紋状。内面ハケメ後ナデ?でハケメが残る。	E165
図版18-325	C	SD3002	弥生前期・IV期	甕	破片	流紋状一帯流紋状。	C3
図版18-326	D1	SC1001	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。磨滅流紋状。	D52
図版18-327	D1	第6水田	弥生前期?	甕	破片	帯流紋状。磨滅流紋状。	D9
図版18-328	E1	第2調査地	弥生前期後半・IV期	甕	破片	外周帯流紋状。内面ミガキ。外面に黒色付物。	E131
図版18-329	E1	SD14	弥生前期?	甕	破片	頸部磨滅流紋状?。胴上半部帯流紋状。胴下半部ミガキ。胴上半部にハケメが顕著に残る。	E140
図版18-330	E1	SD14	弥生前期後半・IV期	甕	破片	外周頸部帯流紋状と磨滅流紋状。外面に黒色付物。内面にターム状の黒色付物。	E101
図版18-331	A3	SC04	弥生前期・IV期	甕	破片	帯流紋状。黒色付物。	A1063
図版18-332	E2	SK01	弥生前期-古墳I期?	鉢?	1/12	外面ハケメ後ミガキ。内面ハケメ後ミガキ。	E47
図版18-333	D3	SK07	弥生前期-古墳I期	鉢	3/4	手すね。内外面ミガキ又はナデ。	D129
図版18-334	D3	SK07	弥生前期-古墳I期	鉢	5/6	内面ミガキ。外面ハケメ後ミガキ。	D130
図版18-335	C	SD3002	弥生前期・古墳I期	鉢	1/2	外面ハケメ後粗いミガキ。内面ハケメ後ナデ。内面黒色を呈する。口径3.6cm。	C31
図版18-336	D1	SC1001	弥生前期?	鉢	1/2	内外面ナデ。	D11
図版18-337	B2	SD103	古墳前期・IV期	土師器杯	1/8	外面ミガキ。内面ミガキ。	B1
図版18-338	C1	SC51	古墳前期・IV期	土師器鉢	完形	内外面ミガキ。	C6
図版18-339	C2	SC02	古墳前期-古墳I期	土師器鉢	1/3	内外面ミガキ。表面磨耗。	C3
図版18-340	C1	SC52	古墳前期-IV期?	土師器鉢	1/3	外面頸部ミガキ。口縁コナテ。口縁面取り。外周黒面に黒色付物。	C7
図版18-341	C1	SC52	古墳前期・IV期	土師器鉢	1/6	内面ミガキ。外面上半部全て、下半部から底部ナズリ。	C8
図版18-342	C1	SC52	古墳前期・IV期	土師器鉢	1/6	内外面ミガキ。	C9
図版18-343	B2	SC104	古墳前期-古墳I期	土師器杯	1/5	内面黒色処理。外周頸部ナズリ。底部ナテ。	B161
図版18-344	B2	SC110	古墳前期-古墳I期	土師器杯	1/6	内面黒色処理。ミガキ。外面ミガキ。	B157
図版18-345	B2	SC108	古墳前期-古墳I期	土師器杯	1/4	内面黒色処理。ミガキ。外面頸下ナズリ。上半部ミガキ。	B155
図版18-346	B2	SC140	古墳前期-古墳I期	土師器杯	1/6	内面黒色処理。ミガキ。外面ミガキ。	B168
図版18-347	B2	第3水田	古墳前期-古墳I期	土師器杯	口縁1/6	内面黒色処理。ミガキ。外面ナズリ。	B152
図版18-348	A3	SC102	古墳前期・IV期	土師器杯	1/6	内面黒色処理。外面頸部はナテ。底部は工具によるハケメ状のナデ。	A1067
図版18-349	B2	SD103	古墳前期・IV期	土師器杯	1/12	内面黒色処理。ミガキ。外面調整不明。	B39
図版18-350	C2	SC02	古墳IV期	土師器杯	1/4	内面黒色処理。ミガキ。外面ミガキ。	C1
図版18-351	A4	第3水田 NR2	古墳IV期	土師器杯	1/8	内面黒色処理。外面ナズリ。	A1017
図版18-352	B2	第4水田	古墳IV期	土師器杯	1/4	内面黒色処理。ミガキ。内面ミガキ。	B143
図版18-353	C2	SC05	古墳IV期	土師器杯	1/6	内面黒色処理。ミガキ。外面ミガキ。	C5
図版18-354	A4	第3水田	古墳IV期	土師器杯	1/4	内面黒色処理。	A1022
図版18-355	B2	SC110	古墳前期-古墳I期	土師器杯?	ほぼ完形	内面黒色処理。ミガキ。	B156
図版18-356	B2	SC1005	古墳前期・古墳I期	土師器鉢	ほぼ完形	内面黒色処理。ミガキ。外面ミガキ。胴下半部はナズリ後ミガキ。	B170
図版18-357	B2	SD103	古墳I期・II期前半	土師器台	1/8	調整調整不明。	B33
図版18-358	C1	SA01	古墳I期・II期	土師器台	坏部1/1	内外面ナテ。胎土に気物粒が多く含まれる。	C17
図版18-359	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器台	1/6	外周縁面に有段部。内外面ミガキ。	B12
図版18-360	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器台	1/2	脚部3単位の円孔。外面ミガキ。	B16
図版18-361	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器台	脚部1/1	脚部3単位の円孔。	B13
図版18-362	B2	SD103	古墳I期・II期後半	土師器台	脚部1/1	表面磨耗するが、脚部外面ハケメ残る。3単位の円孔。	B17
図版18-363	D2	SC112	古墳I期・II期後半	土師器台	坏部1/2	円孔の透かし。	D34
図版18-364	A3	第3水田 自然発露地	古墳前期	土師器高杯	3/4	外面ナテ。	A1008
図版18-365	D2	SC107	古墳前期後半・II期	土師器高杯	脚部1/1	表面磨耗。	D19
図版18-366	B2	SD103	古墳前期・II期	土師器高杯	1/4	脚部に段部有り。表面調整不明。	B18
図版18-367	A3	第3水田	古墳前期・IV期後半	土師器高杯	脚部1/1	外面ミガキ。	A1075
図版18-368	C2	SC02	古墳前期・IV期	土師器高杯	3/4	外面ミガキ。	C3
図版18-369	A3	第3水田 自然発露地	古墳前期・IV期	土師器高杯	脚部1/1	外面ミガキ。口縁部太い流紋。	A1003
図版18-370	A3	第3水田	古墳前期後半・IV期	土師器高杯	1/3	外面ミガキ。内面粘土層の混合痕が明瞭。	A1073
図版18-371	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器高杯	脚部1/1	外面ミガキ。内面ハケメ後ナテ。	B18
図版18-372	A2	SD108	古墳前期	土師器高杯	脚部1/4	脚部のみ。外面ミガキ。	A140
図版18-373	B2	SC1005	古墳前期後半・I期	土師器高杯	脚部1/1	外面ミガキ。	B171
図版18-374	B2	第4水田	古墳前期後半・I期	土師器高杯	脚部1/1	内面に輪状痕が明瞭に残る。	B141
図版18-375	A3	第3水田	古墳前期後半・I期	土師器高杯	1/2	外面ミガキ。内面ナテ。	A1072

図版番号	地区名	出土位置	土師の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版19-376	B2	SD103	古墳II期後半・I前期	土師器高杯	脚部1/1	表面摩耗。	B20
図版19-377	B2	SD103	古墳II期後半・I前期	土師器高杯	脚部1/1	表面摩耗。器面ナデ又はミガキ。	B22
図版19-378	B2	SD103	古墳II期後半・I前期	土師器高杯	脚部1/1	表面摩耗。	B21
図版19-379	B2	SD103	古墳IV期	土師器高杯	脚部1/1	内面黒色処理。	B15
図版19-380	B2	SD103	古墳IV期	土師器高杯	脚部1/1	内面黒色処理。	B14
図版20-381	B2	第1水田	古墳I期・I前期	土師器甕	1/2	底部円孔直径1.3cm。	B147
図版20-382	E1	第2調査区	弥生I期・I前期	壺	底部1/1	内外面ナデ。	E169
図版20-383	B2	SD103	古墳I期	土師器甕	土師器甕	口縁部欠損	B10
図版20-384	B2	SD103	古墳I期	土師器甕	1/6	内面に絞り込み疵。	B25
図版20-385	C2	SA01	古墳I期・I前期	土師器甕	1/8	小形甕。内外面ミガキ。	C24
図版20-386	B2	SC1007	古墳I期	土師器甕	3/4	縮製小形甕。	B172
図版20-387	R2	SC123	古墳I期・I前期	土師器甕	1/4	内外面ミガキ。	B164
図版20-388	A3	第3水田	古墳II期後半・I前期	土師器小壺	1/2	口縁部ナデ。胴部外面ミガキ。	A1074
図版20-389	B2	SC140	古墳I期・I前期	土師器甕	1/2	外面ミガキ。内面黒色を呈する。	B187
図版20-390	A3	SC102	古墳I期・IV期	土師器甕	1/6	外面ミガキ。内面は口縁部ミガキ。胴部ナデ。	A1068
図版20-391	B2	SC114	古墳I期・IV期	土師器甕	口縁部1/1	外面ミガキ。内面磨肌。外面に黒色付着物。	B158
図版20-392	A3	第4水田?	古墳I期	土師器甕	1/5	外面ミガキ。内面ハケミ後ナデ。	A1082
図版20-393	C2	SA01	古墳I期・I前期	土師器甕	1/6	有段口縁。外面ハケミ。内面ハケミ後ミガキ。口唇部黒色付着物(塗?)。	C23
図版20-394	B2	SD103	古墳I期	土師器甕	1/6	表面摩耗するが、胴部頸部にハケミが残る。	B1
図版20-395	B2	SD103	古墳II期・I前期	土師器甕	頸部1/4	表面摩耗。	B25
図版20-396	C2	SA01	古墳I期・I前期	土師器甕?	1/2	外面ハケミ後ナデ又はミガキ。内面ナデ。外面黒色付着物。薄手。	C38
図版20-397	A3	第5水田	古墳I期	土師器甕	破片	ハケミ後部分的にミガキ。	A1086
図版20-398	C1	SC42	古墳I期・I前期	土師器甕?	1/6	内外面ナデ。器厚薄手。外面黒色処理。	C20
図版20-399	C2	SA01	古墳I期・I前期	土師器甕	ほぼ完形	外面ミガキ。内面黒色を呈する。胴部上半から口縁にかけて器面が割落しており、二次焼成を受けた可能性がある。	C41
図版21-400	D2	SC112	古墳I期・I前期	土師器甕	1/3	口縁外面ヨコナデ。内面ハケミ。胴部外面ハケミで下部はケズリ。内面ナデ。	D29
図版21-401	D1	SC112	古墳I期	土師器甕	1/12	口縁部ヨコナデ。外面にテール状の黒色付着物。	D3
図版21-402	E2	SK01	弥生I期・古墳I期	壺	1/6	内外面ナデ。	E50
図版21-403	B2	SC1007	古墳I期・I前期	壺	口縁1/4	内外面ナデ。	B173
図版21-404	B2	SD103	古墳I期・I前期	土師器甕	口縁1/8	口縁外面ミガキ。内面磨肌ミガキ。	B3
図版21-405	B2	SD103	古墳I期・I前期	土師器甕	口縁1/8	粗いハケミまたはナデツク。	B4
図版21-406	B2	SD103	古墳I期・I前期	土師器甕	口縁1/8	頸部ハケミ。口縁部ヨコナデ。	S7
図版21-407	A3	SD03	古墳I期	壺	1/8	内外面ハケミ。外縁テール状の黒色付着物。	A1060
図版21-408	C1	SA01	古墳I期・I前期	土師器甕	1/8	外面ハケミ。内面粗いハケミ。	C18
図版21-409	B2	SC1005	古墳I期	壺	口縁1/3	外ナデ。	B169
図版21-410	A3	SQ1001	古墳I期	土師器甕	1/12	内面ナデ。外面粗いハケミ後ナデ。	A1080
図版21-411	A3	第3水田	古墳I期・IV期	土師器甕	1/2	口縁部内外面ミガキ。	A1071
図版21-412	B2	SD103	古墳I期・I前期	土師器甕	1/6	口縁部ヨコナデ。	B2
図版21-413	B2	SD103	古墳I期	土師器甕	口縁1/8	外面ハケミ後ナデ。	B24
図版21-414	A3	第3水田 自然発露	古墳I期・I前期	土師器甕	1/5	内外面ナデ。	A1006
図版21-415	D2	SC109	古墳I期・I前期	土師器甕	1/20	外面ナデ。胴部内面ケズリ。外面に黒色付着物。	D23
図版21-416	E1	第1水田	古墳I期～IV期	壺	1/6	外面黒色付着物。	E144
図版21-417	A3	SD03	古墳I期	壺	1/6	外面ハケミ。内面ナデ。	A1058
図版21-418	A3	第4水田	古墳I期・I前期	土師器甕	1/4	外面ケズリ。内面に黒色付着物。	A1084
図版21-419	D2	SC203	古墳I期	土師器甕	完形	外面ナデ。	D28
図版21-420	A3	SQ1001	古墳I期・I前期	土師器甕	1/8	口縁部ハケミ後ナデ。胴部外面ハケミ。胴部内面ナデツク。底部ハケミ。	A1081
図版21-421	A3	第4水田	古墳I期	土師器甕	1/3	外面は口縁部ハケミ後ナデ。胴部上半ハケミ。胴部下半から底部ケズリ。内面は口縁部ナデ。胴部ハケミで、胴下半はナデ。器径4cm以下と推定。	A1083
図版21-422	E1	SA02	古墳I期・I前期	土師器甕	口縁1/1	胴部外面ミガキ。外面に黒色付着物。	E115
図版22-423	C	SD3002	古墳I期・I前期	土師器甕	底部1/1 口縁1/4	内外ハケミ。底部外面ハケミ。	C29
図版22-424	C	SD3002	古墳I期・I前期	土師器甕	口縁1/4	口縁部ナデ。外面上半ハケミ。下半部ケズリ。内面磨肌ハケミ後ナデ。胴部外面焼結土帯の接合痕残存。底部外面ケズリ。底部径5～6cm。	C26
図版22-425	D3	第5調査区 (遺跡)	古墳I期・I前期	土師器甕	3/4～1/2	口縁部ヨコナデ。胴部ハケミ後ナデ又はミガキであるが、ハケミが顕著に見られる。	D139
図版22-426	C1	SC52	古墳I期後半・I前期	土師器甕	1/2	外面細密ハケミ後ナデ。底部不明確な平底。底部付着物。	C4
図版22-427	C2	SC02	古墳I期～古代I期	土師器甕?	1/6	口縁部内外面ミガキ。胴下半部ナデ?	C54
図版22-428	D2	SD103	古墳I期・IV期	須恵器高杯	1/3	底部に黒色付着。焼成良好。	D16
図版22-429	D3	IS1414群	古墳I期	須恵器高杯	1/2	尖唇部の下に締結痕状。釜上は青灰色で焼成良好。	D147
図版22-430	A3	第3水田	古墳IV期	須恵器高杯	1/3	塩漬褐色。焼成が粗悪で土師質である。	A1077
図版22-431	A3	第3水田 自然発露	古墳I期	須恵器高杯		頸部の赤行沈線の上に斜交文。自然色がわかる。	A1007
図版22-432	A2	SD101	古墳IV期	須恵器高杯	1/12	底部ケズリ。	A139

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版23-433	C2	第4水田NR1	古代Ⅱ期	須恵器B	破片	色調灰白色。寛書「大」。	C50
図版23-434	A3	第3水田自然流路	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/2	底部赤きり。底部外面塗漆。内面曇灰。	A1048
図版23-435	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	底部1/2	底部回転未切り。帯書「？」。	B101
図版23-436	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	破片	帯書「大」か。	B168
図版23-437	D3	SD03	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器A	破片	口縁のみ。帯書「大？」	D120
図版23-438	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	口縁3/4	帯書「？」	B103
図版23-439	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	破片	帯書「中」	B106
図版23-440	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/4	曇灰「？」	B102
図版23-441	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	破片	帯書「丸」	B112
図版23-442	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/8	曇灰「上」	B105
図版23-443	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/6	帯書かどうかわ不明確。	B104
図版23-444	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器A	1/2	曇書「大」	B97
図版23-445	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/12	帯書かどうかわ不明確。	B96
図版23-446	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	破片	内面黒色付着物(曇灰?)。	B94
図版23-447	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器A	口縁3/4	底部回転未切り。内面曇灰。	B100
図版23-448	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	底部1/1	灰白色の焼成軟質。底部回転未切り。内面曇灰。	B99
図版23-449	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	底部2/3	赤褐色の焼成軟質。底部回転未切り。内面曇灰。	B93
図版24-450	A3	第3水田	古代Ⅱ期	須恵器A	底部1/1	底部切離し後ナ。ヘラ切りか?	A1078
図版24-451	B2	SD103	古代Ⅱ期前半	須恵器A	1/8	底部ヘラ切り後。禁止ヘラケズリ。	B71
図版24-452	B2	SD103	古代Ⅱ期前半	須恵器A	1/6	底部ヘラ切り。	B74
図版24-453	C	SC01	古代Ⅱ期前半	須恵器A	1/2	底部ヘラ切り。	C49
図版24-454	D2	SD102	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	灰白色。軟質曇灰。底部回転未切り。	D15
図版24-455	B2	第1水田	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。	B146
図版24-456	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/3	底部回転未切り。胎土に白色粒を多く含む。	B68
図版24-457	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。	B70
図版24-458	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/6	底部回転未切り。灰白色。	B76
図版24-459	D1	第3水田	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/2	底部回転未切り。	D124
図版24-460	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。	B73
図版24-461	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。底部に黒着。	B77
図版24-462	A3	第3水田自然流路	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/3	底部未切り。灰色。焼成良好。	A1009
図版24-463	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器A	1/2	底部回転未切り。	B72
図版24-464	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。赤褐色。	B75
図版24-465	D3	SD03	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器A	1/4	灰色。底部未切り?。	D54
図版24-466	A3	第3水田自然流路	古代Ⅱ期	須恵器A	1/4	底部未切り。	A1014
図版24-467	A3	第3水田自然流路	古代Ⅱ期	須恵器A	1/4	黒灰色の軟質曇灰。	A1001
図版24-468	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器A	1/4	底部回転未切り。	B69
図版24-469	B2	第2水田	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器B	底部2/3	底部回転未切り後外周回転ヘラケズリ。	B150
図版24-470	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/4	底部未切りヘラケズリ。	B87
図版24-471	B2	SD103	古代Ⅱ期後半・Ⅲ期	須恵器B	1/2	底部回転未切り後。高合内回転ヘラケズリ。	B85
図版24-472	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/2	底部回転ヘラケズリ。	B86
図版24-473	A3	第3水田自然流路	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/4	高台部全面塗漆。	A1010
図版24-474	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/3	帯書褐色。焼成良好。	B89
図版24-475	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/8		B88
図版24-476	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	1/4	底部ヘラ切り?後。回転ヘラケズリ。	B82
図版24-477	B2	第3水田	古代Ⅱ期前半	須恵器B	2/3	底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ。	B153
図版24-478	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/6	高台部新漆。	B84
図版24-479	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	1/8	口縁端部外側に洗い流ぬ。	B51
図版24-480	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	1/10	口縁端部外側に洗い流ぬ。	B83
図版24-481	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/4		B79
図版24-482	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/8		B78
図版24-483	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	1/12		B80
図版24-484	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/3		B62
図版24-485	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	破片	肩部に凸帯が走る。	B64
図版24-486	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	1/12	肩部に凸帯が走る。	B65
図版24-487	B2	SD103	古代Ⅱ期?	須恵器B	頸部1/1	二条の流線が走る。	B67
図版24-488	B2	SD103	古代Ⅱ期前半	須恵器B	頸部1/1	頸部流線。	B154
図版24-489	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/3		B39
図版24-490	A4	第3水田NR2	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/3	幅0.7mmの細い流線が走る。	A1015
図版24-491	B2	SD103	古代?	須恵器B	1/3		B61
図版24-492	B2	SD103	古代Ⅱ期	須恵器B	頸部1/1	肩部との接合部に溝巻き文。	B57
図版24-493	B2	SD103	古代Ⅱ期・Ⅲ期	須恵器B	1/12		B63

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版24-494	A3	第3水田 自然流路	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	1/3		A1012
図版25-495	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	1/12		B47
図版25-496	B2	SD103	古代Ⅰ期-Ⅲ期	須恵器椀	1/6		B45
図版25-497	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	1/8	胴部タタキ目、焼成良好、明赤褐色。	B52
図版25-498	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	1/4	内面当て具痕。	B48
図版25-499	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器 内耳室		焼成良好。	B44
図版25-500	B2	SD103	古代Ⅰ期-Ⅲ期	須恵器椀	破片	外周タタキ目、内面青褐色。焼成不良、橙褐色。	B55
図版25-501	B2	SD103	古代Ⅰ期-Ⅲ期	須恵器椀	破片	外周タタキ目、内面青褐色。	B56
図版25-502	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	破片	沈線と波状文。口縁部内面に沈線。	B50
図版25-503	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	須恵器椀	破片	沈線後に波状文。口縁部内面に沈線。	B49
図版25-504	B2	SD103	古代?	土師器杯	1/3 (底面1/1)	内面黒色処理。ミガキ。底部丁寧なヘラケズリ。	B43
図版25-505	B2	SD103	古代	土師器杯	口縁1/6	内面黒色処理。ミガキ。口縁部浅い沈線。	B42
図版25-506	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	1/6	内面黒色処理。ミガキ。底部跡止ヘラケズリ。	B37
図版25-507	A3	第3水田	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	1/3	内面黒色処理。底部未切り後底部周辺跡止ヘラケズリ。	A1076
図版25-508	B2	SD103	古墳Ⅲ期-古代	土師器杯	口縁1/4	内面黒色処理。ミガキ。外周調整不明。	B41
図版25-509	A4	第3水田 NR2	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	1/12	内面黒色処理。ミガキ。	A1018
図版25-510	D1	第3水田	古墳Ⅲ期- 古代Ⅰ期	土師器杯	3/4	内面黒色処理。ミガキ。	D123
図版25-511	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	底部1/4	内面黒色処理。ミガキ。底部跡止ヘラケズリ。	B38
図版25-512	B2	SD103	古代Ⅱ期後半- Ⅳ期前半	土師器杯	破片	内面黒色処理。底部(4)部未切り。底部に寛書「×」	B90
図版25-513	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	破片	内面黒色処理。底部跡止ヘラケズリ。寛書「×」	B92
図版25-514	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	破片	内面黒色処理。底部跡止ヘラケズリ。寛書「×」	B91
図版25-515	B2	SD103	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	1/3	内面黒色処理。底部跡止ヘラケズリ。寛書「-」	B98
図版25-516	A3	第3水田	古代Ⅱ期-Ⅲ期	土師器杯	1/2	内面黒色処理。底部未切り後底部周辺跡止ヘラケズリ。	A1079
図版25-517	A4	第3水田 NR2	古代Ⅳ期	土師器杯	1/2	底部未切り。	A1020
図版25-518	A4	第3水田 NR2	古代Ⅳ期	土師器杯	底部1/1	内面口ロナナ。	A1021
図版25-519	A4	第3水田 自然流路	古代Ⅲ期後半-Ⅳ期	土師器杯	底部1/1 口縁1/3	内面ミガキで薄い黒色を塗る。	A1069
図版25-520	A3	第3水田 自然流路	古墳Ⅲ期-Ⅳ期	土師器椀	破片	把手。	A1002
図版25-521	B2	SD103	古代Ⅲ期後半-Ⅳ期	土師器椀	口縁1/8	胴部外面タタキ目ナデテ、外周タタキ目。	B23
図版25-522	E1	第3水田 (水田跡後 田中出土)	古代Ⅲ期	灰釉陶器椀	1/6		E143
図版26-523	A2	SH01	中世	カワラケ	1/2		A102
図版26-524	A2	SD101	中世	カワラケ	1/8		A101
図版26-525	A2	SD101	中世	カワラケ	1/3	胎土が灰白色で色のカワラケより薄い。	A100
図版26-526	A2	SD101	中世	カワラケ	1/5		A99
図版26-527	A2	SH01	中世	カワラケ	口縁1/4		A2
図版26-528	A2	SH01	中世	カワラケ	口縁3/24	内面に焼成後の穿孔痕跡あり。灯明皿?	A1
図版26-529	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁4/24		A5
図版26-530	A2	SH02	中世	カワラケ	底部3/4		A8
図版26-531	A2	SH02	中世	カワラケ	1/4	焼成前穿孔。	A92
図版26-532	A2	SH02	中世	カワラケ	1/2		A9
図版26-533	A2	SH02	中世	カワラケ	1/3		A6
図版26-534	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁4/24		A3
図版26-535	A2	SH02	中世	カワラケ	2/3		A7
図版26-536	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁5/24		A4
図版26-537	A2	SH03	中世	カワラケ	底部1/1	内外面に黒色付着物。灯明皿?	A13
図版26-538	A2	SH03	中世	カワラケ	口縁1/3	外面に黒色付着物。灯明皿?	A11
図版26-539	A2	SH03	中世	カワラケ	2/3	外面と外周底面に黒色付着物。	A12
図版26-540	A2	SH06	中世	カワラケ	口縁5/24 底部1/3		A14
図版26-541	A2	SH09	中世	カワラケ	口縁3/24 底部1/8		A15
図版26-542	A2	SH09	中世	カワラケ	口縁5/24 底部5/24	外面に黒色付着物。灯明皿?	A16
図版26-543	A2	SH11	中世	カワラケ	1/4	口縁部付近焼成後外面から穿孔か?。	A53
図版26-544	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁10/24 底面9/24		A17
図版26-545	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁7/24 底面7/24		A18
図版26-546	A2	SH11	中世	カワラケ	底部1/3	焼成前の乾燥後又は焼成後内面から穿孔。	A94
図版26-547	A2	SH11	中世	カワラケ	1/3	焼成後内面から穿孔。	A95
図版26-548	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁2/24 底面1/3	底部内外面黒色に紫色。灯明皿?	A20
図版26-549	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁3/24 底面1/6		A19
図版26-550	A2	SH12	中世	カワラケ	底部3/4		A21

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版26-551	A2	SH14	中世	カワラケ	口縁10/24 底部1/1		A22
図版26-552	A2	SH18	中世	カワラケ	口縁6/24 底部6/24		A23
図版26-553	A2	SH18	中世	カワラケ	口縁2/24 底部1/8	内面に黒色付着物。灯明皿?	A24
図版26-554	A2	SH20	中世	カワラケ	完形		A27
図版26-555	A2	SH20	中世	カワラケ	完形		A26
図版26-556	A2	SH20	中世	カワラケ	底部3/4	内面に僅かに黒色付着物。灯明皿?	A28
図版26-557	A2	SH20	中世	カワラケ	1/4		A29
図版26-558	A2	SH20-21	中世	カワラケ	底部3/4		A30
図版26-559	A2	SH18-20	中世	カワラケ	底部1/1		A31
図版26-560	A2	SH21	中世	カワラケ	底部1/1		A33
図版26-561	A2	SH21	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。	A32
図版26-562	A2	SH21	中世	カワラケ	底部1/1		A35
図版26-563	A2	SH21	中世	カワラケ	4/5	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。底部外面に条線状の付着。	A34
図版26-564	A2	SK02	中世	カワラケ	破片	口縁部内外面に黒色付着物。灯明皿? 底部に穿孔点線あり。	A137
図版26-565	A2	SK03	中世	カワラケ	1/3	焼成痕穿孔有り。	A138
図版26-566	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/1		A70
図版26-567	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/1		A58
図版26-568	A2	整地IV	中世	カワラケ	3/4		A59
図版26-569	A2	整地II	中世	カワラケ	1/3		A47
図版26-570	A2	整地I	中世	カワラケ	底部1/1		A44
図版26-571	A2	整地下	中世	カワラケ	底部1/6	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A89
図版26-572	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/2		A80
図版26-573	A2	整地V	中世	カワラケ	底部3/4		A65
図版26-574	A2	I a面	中世	カワラケ	1/2	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。	A36
図版26-575	A2	整地III	中世	カワラケ	1/3	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A87
図版26-576	A2	整地T	中世	カワラケ	1/6	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A88
図版26-577	A2	整地下	中世	カワラケ	1/6	底部跡へラケズリ。	A80
図版26-578	A2	整地I	中世	カワラケ	3/4		A43
図版26-579	A2	I a面	中世	カワラケ	底部1/1	底部未切り後ナデ。	A39
図版26-580	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/2		A79
図版26-581	A2	整地上	中世	カワラケ	1/8		A50
図版26-582	A2	整地I	中世	カワラケ	1/1	底部未切り後ナデ。	A46
図版26-583	A2	整地	中世	カワラケ	底部1/2		A54
図版26-584	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/4	内面部分的に黒色付着物。全体に暗褐色に変色。灯明皿?	A82
図版26-585	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8		A84
図版26-586	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4		A71
図版26-587	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4	内外面黒色付着物。割れ口にも黒色付着物が見られ、欠損後灯明皿として使用?。	A72
図版26-588	A2	整地V	中世	カワラケ	2/5		A74
図版26-589	A2	整地V	中世	カワラケ	1/4	内面黒色付着物。灯明皿?	A84
図版26-590	A2	整地V	中世	カワラケ	1/4	焼成後底部外面からの穿孔。	A97
図版26-591	A2	整地I	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。	A42
図版26-592	A2	I a面	中世	カワラケ	1/4		A37
図版26-593	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A56
図版26-594	A2	整地V	中世	カワラケ	1/3		A67
図版26-595	A2	整地V	中世	カワラケ	底部3/4	内外面黒色付着物。割れ口にも黒色付着物が見られ、欠損後灯明皿として使用?。	A66
図版26-596	A2	整地V	中世	カワラケ	1/1		A69
図版26-597	A2	整地I	中世	カワラケ	3/4		A45
図版27-598	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8	胎土が灰白色で、他のカワラケより白い。	A85
図版27-599	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8		A83
図版27-600	A2	整地VI	中世	カワラケ	底部1/1		A77
図版27-601	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/4		A81
図版27-602	A2	整地VI	中世	カワラケ	底部1/3		A78
図版27-603	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/4		A91
図版27-604	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/2		A63
図版27-605	A2	整地I	中世	カワラケ	1/4		A40
図版27-606	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/2	内面黒色に変色。灯明皿?	A75
図版27-607	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4		A76
図版27-608	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/1		A68
図版27-609	A3	整地V	中世	カワラケ	1/2		A73
図版27-610	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/3		A55
図版27-611	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A57
図版27-612	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/1	底部外面黒色付着物。	A60
図版27-613	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/4		A61
図版27-614	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A62
図版27-615	A3	整地上	中世	カワラケ	1/4		A49
図版27-616	A2	整地II	中世	カワラケ	3/5		A48
図版27-617	A2	ES20 グリッド	中世	カワラケ	1/3	焼成前乾燥後?の内面からの穿孔。	A96

図版番号	地区名	山土位置	土器の時期	器種	残存状況	上器説明	整理番号
図版27-618	A2	I a層	中世	カワラケ	2/3		A38
図版27-619	A2	整地I下層	中世	カワラケ	底部1/2	内面部分的に黒色に着色。灯明蓋?	A53
図版27-620	A2	整地I	中世	カワラケ	1/4		A41
図版27-621	A2	II面	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケより白い。整理番号A51に類似。	A52
図版27-622	A2	SH02	12世紀	白磁瓶	破片		A219
図版27-623	A2	整地IV	15世紀	白磁皿	底部1/1		A210
図版27-624	A2	SK80	14世紀後半-15世紀前半	青磁碗	破片	玉縁。	A220
図版27-625	A2	SD101	15世紀末-16世紀前半	青磁碗	1/8	細線連弁文様。	A178
図版27-626	A2	不明	15世紀-16世紀	青磁碗	底部1/1		A262
図版27-627	A2	SD101	15世紀末-16世紀前半	青磁碗	1/10	細線連弁文様。	A181
図版27-628	A2	整地IV	15世紀末	占瀬戸 腰折皿	1/12		A209
図版27-629	A2	整地I	16世紀前半	瀬戸美濃 大甕丸蓋?	1/10		A208
図版27-630	A2	SD101	16世紀後半	瀬戸美濃 大甕丸ノ ミ折縁皿	1/4		A182
図版27-631	A2	SH02	16世紀末	瀬戸美濃 大甕丸ノ ミ折縁皿	1/3		A218
図版27-632	A2	SD101	近世	瀬戸美濃 本渡縁香付	1/4		A184
図版27-633	A2	ST02		瀬戸美濃	底部1/1		A221
図版27-634	A2	SD101	1480年-16世紀前半	瀬戸美濃 大甕丸皿	1/8		A187
図版27-635	A2	SD101	16世紀中	瀬戸美濃 大甕丸目 茶碗	底部1/1		A186
図版27-636	A2	整地I	17世紀前半	唐津すり鉢	1/16		A207
図版27-637	A2	整地I	17世紀後半	唐津すり鉢	1/16		A206
図版27-638	A2	SD101	16世紀末	唐津皿	1/8		A179
図版27-639	A2	整地I	16世紀末	唐津皿	1/4		A199
図版27-640	A2	SD101	16世紀末	唐津皿	底部1/1		A180
図版28-641	A2	整地V	中世	内耳鍋	1/4		A130
図版28-642	A2	整地V-VI	中世	内耳鍋	1/8		A132
図版28-643	A2	SH02	中世	内耳鍋	1/4		A121
図版28-644	A2	SH18	中世	内耳鍋	1/6		A124
図版28-645	A2	整地II下層	中世	内耳鍋	1/6		A134
図版28-646	A2	SH21	中世	内耳鍋	1/6		A131
図版28-647	A2	SH23	中世	内耳鍋	1/8		A126
図版28-648	A2	整地I上	中世	内耳鍋	1/4		A128
図版29-649	C	SD03	中世	カワラケ	1/4	底部回転系切り。	C47
図版29-650	C	SD03	中世	カワラケ	破片		C45
図版29-651	C	13-1層	13世紀後半- 14世紀前半	龍泉窯系 連弁文様	破片		C55
図版29-652	D3	8-1層	13世紀	龍泉窯系 連弁文様	1/6		D140
図版29-653	D2	7層	15世紀後半	占瀬戸皿	1/6		D128
図版29-654	C	SD03	16世紀	瀬戸美濃 天目茶碗	破片		C44
図版29-655	C	SD03	17世紀前半	志野	破片		C42
図版29-656	D3	SD01	古代IV期	灰輪陶器 段皿	1/2	底部外面に墨痕が僅かに確認される。	D47
図版29-657	D3	8-1層	16世紀前半	瀬戸美濃 大甕皿	底部1/1		D143
図版29-658	D2	第2水田	16世紀	瀬戸美濃 大甕内毛皿	底部1/1		D126
図版29-659	A3	第3水田 自然産露	17世紀初頭	瀬戸美濃 輪先蓋?	1/6		A1013
図版29-660	D2	第2水田	17世紀後半	肥前系 陶器(陶)	底部1/1		D127
図版29-661	E2	SD01	18世紀	備前系赤土 器	1/3		E167
図版29-662	D1	第1水田	18世紀前半	伊万里	1/6		D121
図版29-663	A4	2層	近世以降?	瀬戸美濃?	1/6		A1670
図版29-664	D3	8-1層	近世末	陶器蓋	破片		D142
図版29-665	C	13-1層	13世紀後半	山茶碗系 こお鉢	破片	外周ケズリ。	C56
図版29-666	D3	SD02	中世以降	珠洲焼 すり鉢	1/6	8本1号粒の糸織。内面は厚化粧している。外面は11号粒ヨコナ デ。胴部ケズリ後ナデ。	D48
図版29-667	C	SD01	17世紀後半- 18世紀前半	唐津すり鉢	破片		C88
図版29-668	D2	9-2層	14世紀	珠洲焼 すり鉢	1/2		D125
図版29-669	A2	整地I	中世	内耳鍋	1/8		A127
図版29-670	A2	SH03-21	中世	内耳鍋	1/6		A122
図版29-671	A2	SH11	中世	内耳鍋	1/6		A123

石器観察表

図版番号	地区名	出土位置	器種	石材	欠損状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	整理番号	備考
図版30-1	D3	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	欠損	—	1.26	0.35	—	34	
図版30-2	A2	SD105	石楯(無茎)	黒曜石	欠損	1.94	1.22	0.41	—	144	
図版30-3	D3	SD10	石楯(無茎)	黒曜石	完形	2.39	0.15	0.28	0.63	154	
図版30-4	D2	27-1層	石楯(有茎)	安山岩	ほぼ完形	3.47	1.47	0.48	1.85	151	D2②地区出土。
図版30-5	D3	28-1層	石楯(有茎)	不明	基部欠損	2.16	1.48	0.37	—	160	南トレンチ出土。
図版30-6	A4	SQ01	石楯(有茎)	黒曜石	完形	1.44	1.15	0.37	0.53	146	
図版30-7	A4	SA01	石楯(有茎)	チャート	完形	2.14	1.49	0.33	1.13	147	
図版30-8	A3	第3水田 自然発露	石楯(有茎)	チャート	完形	2.02	1.52	0.41	1.03	145	
図版30-9	D3	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	欠損	2.12	1.33	0.47	0.93	35	
図版30-10	D3	SD11 (検出層)	石楯(有茎)	珪質頁岩	基部欠損	2.02	1.35	0.44	(1.08)	156	
図版30-11	D3	SD10	石楯(有茎)	黒曜石	完形	1.88	1.27	0.42	0.89	155	
図版30-12	D3	SD11 (覆土上層)	石楯(有茎)	黒曜石	ほぼ完形	1.88	1.36	0.51	0.88	158	
図版30-13	D1	23下層	石楯(有茎)	珪質頁岩	完形	2.28	1.46	0.27	0.73	150	
図版30-14	D3	27-1層	石楯(有茎)	チャート	基部欠損	2.51	1.71	0.25	(0.89)	162	
図版30-15	D3	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	欠損	—	1.36	0.32	—	38	
図版30-16	D3	25-3層	石楯(有茎)	珪質頁岩	ほぼ完形	2.09	1.97	0.47	(1.37)	161	
図版30-17	D3	SD10	石楯(有茎)	チャート	基部欠損	2.23	2.05	0.44	1.88	153	
図版30-18	D3	SD11 (覆土上層)	石楯(有茎)	不明	ほぼ完形	2.54	1.7	0.42	1.65	157	
図版30-19	D3	27-1層	石楯(有茎)	不明	欠損	—	2.17	0.65	—	37	
図版30-20	C2	第6水田	石楯(有茎)	黒曜石	完形	2.23	1.06	0.73	1.69	149	
図版30-21	A4	不明	石楯(有茎)	黒曜石	欠損	—	1.22	0.52	—	148	
図版30-22	A1	テラス1 敷地上中	石楯(有茎)	珪質頁岩	欠損	2.8	1.48	0.34	—	143	
図版30-23	D2	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	基部欠損	3.12	1.63	0.49	(2.06)	152	D2③地区出土。
図版30-24	D3	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	基部欠損	3.66	1.42	0.43	(2.27)	163	
図版30-25	C2	第3水田	石楯(無茎)	チャート	欠損	—	0.62	0.42	—	103	未製品品。
図版30-26	D3	27-1層	石楯(有茎)	珪質頁岩	完形	3.8	2.26	0.75	6.7	159	未製品品。
図版30-27	D3	27-1層	石楯	不明	完形	3.45	0.57	0.56	3.68	39	
図版30-28	D3	27-1層	石楯	珪質頁岩	つまみ部 欠損	2.93	0.67	0.41	1.08	40	
図版31-29	D3	SD10	re, F1	珪質頁岩	欠損	—	—	—	—	52	
図版31-30	A4	SQ01	re, F1	黒曜石	欠損	1.71	2.26	0.83	3.47	5	
図版31-31	D3	27-1層	re, F1	不明	欠損	2.58	2.17	1.02	—	45	
図版31-32	D3	27-1層	re, F1	チャート	欠損	3.5	3.1	1.11	—	42	
図版31-33	A4	27-1層	re, F1	珪質頁岩	完形	6.02	3.22	1.42	24.1	49	
図版31-34	D3	SQ01	re, F1	チャート	完形	3.02	1.48	0.48	—	8	二側切頭断面?
図版31-35	A4	SQ01	re, F1	黒曜石	欠損	2.27	3.48	0.54	4.75	3	
図版31-36	D3	27-1層	削部	珪質頁岩	完形	3.1	3.62	0.84	13.39	51	
図版31-37	D3	25-1層	石核	珪質頁岩	—	3.68	4.42	1.72	22.57	50	
図版31-38	D3	SD11	石核	黒曜石	—	3.44	2.02	1.4	7.83	47	
図版31-39	D3	27-1層	石核	黒曜石	—	2.93	2.11	1.2	9.63	43	
図版31-40	D3	27-1層	石核	黒曜石	—	3.73	1.9	1.24	8.26	44	
図版31-41	A4	SQ01	—	石英	完形	3.32	1.37	1.11	8.28	1	上下両端部に発行痕跡。
図版32-42	D3	27-1層	刃器I類	安山岩	完形	7.6	10.4	2.56	170.89	58	断面に研磨痕。内側の自然面を 残す。刃部に極めて微細な利維 痕。
図版32-43	H2	出土地不明	刃器II類	輝石安山岩	基部欠損	6.31	6.54	1.52	90.68	19	二側面に鋭角加工。
図版32-44	D2	27-1層	刃器	安山岩	完形	10.39	8.56	2.58	281.19	31	刃部に微細な利維痕。内側の自 然面を残す。D2③地区出土。
図版32-45	D3	SD10	刃器I類	輝石安山岩	欠損	6.49	7.5	1.06	75.83	57	刃部に微細な利維痕。
図版32-46	D2	第6水田 (23-1層)	刃器I類	輝石安山岩	完形	9.04	8.78	1.71	160.76	28	二側面に快り。D2①地区出土。
図版32-47	D3	SD10	刃器II類	輝石安山岩	完形?	10.2	5.3	2.65	242.69	60	側縁が切斷。刃部の対辺に調整 加工。刃部に微細な利維痕。
図版32-48	D3	SD10	刃器I類	輝石安山岩	完形	10.6	17.9	3.16	479.03	62	刃部に先沢痕と微細な利維痕。
図版33-49	H2	第4水田	刃器I類	輝石安山岩	完形	10.1	13.9	3.16	332.01	107	刃部に先沢痕。側縁部に微細な 利維痕が見られ、二辺の刃部が磨 定される。
図版33-50	H2	第6水田 (23-2層)	刃器I類	輝石安山岩	欠損	12	14.2	1.64	278.74	33	刃部に先沢痕。片面に比喩痕 跡。刃部の対辺に微細な利維 痕。D2③地区出土。
図版33-51	D2	市上地不明	刃器I類	輝石安山岩	完形	15.5	19.6	1.72	601.36	20	側縁部調整加工。
図版33-52	D3	SD10	刃器I類	輝石安山岩	完形	11.4	17.2	4.56	800.69	63	刃部微細な利維痕と先沢痕。表 面に縦行痕が見られる。
図版34-53	D3	SD12	刃器I類	輝石安山岩	刃部一 部欠損	10.9	15.2	2.75	365.29	61	刃部に先沢痕。
図版34-54	D2	SD2005	刃器I類	輝石安山岩	完形	7.51	17	1.14	355.89	32	刃部に先沢痕。刃部の対辺に微 細な利維痕。D2③地区出土。
図版34-55	A4	SA01	刃器I類	輝石安山岩	ほぼ完形	15.1	15.7	2.9	553.85	10	刃部に先沢痕。
図版34-56	H2	SD105	刃器I類	輝石安山岩	ほぼ完形	11	19.9	3.48	709.37	21	刃部以外の側縁に発行痕跡。

調査番号	地区名	出土位置	器種	石材	欠損状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	整理番号	備考
図版35-57	D2	27-1層	打製石斧	頁岩	破片	-	-	-	-	29	D2②地区出土。
図版35-58	D2	27-1層	打製石斧	頁岩	欠損	7.75	3.75	1.33	42.5	30	D2③地区出土。
図版35-59	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	基部欠損	-	5.1	1.93	-	9	
図版35-60	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	完形	9.98	4.45	1.93	94.54	4	側縁に自然面を残す。
図版35-61	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	完形	11.15	5.65	2.2	171.66	6	扁平な地門縁を素材とする。
図版35-62	D2	27-1層直上	打製石斧	頁岩	基部欠損	-	6.57	1.31	-	27	D2③地区出土。
図版35-63	A3	第3水田 自然成露	磨製石包丁	安山岩	欠損	-	-	-	-	134	両面からの穿孔。
図版35-64	D2	27-1層直上	磨製石包丁	安山岩	欠損	6.47	5.46	0.91	60.14	135	両面からの穿孔。D2③地区出土。
図版35-65	D3	SD10	磨製石包丁	安山岩	完形	14.43	5.88	0.74	107.97	136	二つに割れて出土。両面からの穿孔。
図版35-66	D3	25-1層	磨製石包丁	頁岩	完形	15.21	5.42	0.87	141.2	137	両面からの穿孔。
図版36-67	D1	SC1001	偏平片刃 磨製石斧	輝緑岩	完形	7.83	4.19	1.56	109.51	139	
図版36-68	D3	SD11	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	欠損	-	5.27	3.28	-	141	
図版36-69	D2	SC112	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	欠損	-	5.71	4.17	-	25	敲打痕を多く残す。D2③地区出土。
図版36-70	A2	ST02	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	欠損	-	6.9	3.17	-	138	ほぼ全面に研磨が及ぶ。
図版36-71	D3	SD13	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	欠損	-	6.83	3.73	-	142	赤色顔料が僅かに残存しており、全面に赤彩されていた可能性がある。刃部の割傷部には赤色顔料は認められない。
図版36-72	D3	SD11	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	欠損	-	7.25	3.34	-	140	
図版36-73	D2	第6水田 (23-1層)	太形輪刃 磨製石斧	輝緑岩	刃部欠損	-	6.05	5.36	-	77	全面敲打痕
図版36-74	E2	第3水田 (7b層)	研磨痕ある磨 きチャート?	完形	7	2.76	1.44	52.25	164		
図版36-75	E1	第2調査面	軽石	完形	6.48	6.37	4.75	60.13	121		
図版36-76	D2	17層直上	軽石	完形	5.75	5.29	3.18	29.59	71	D2②地区出土。	
図版36-77	D2	SC201	軽石	完形	4.72	3.9	3.43	18.84	73		
図版36-78	D2	17層直上	軽石	完形	5.58	3.65	2.57	15.18	70	D2②地区出土。	
図版36-79	E2	第1水田	軽石	完形	3.94	2.89	2.35	6.93	123		
図版37-80	E2	第4水田	融石	安山岩	完形	16.8	6.25	4.16	661.49	128	両端部に敲打痕。
図版37-81	E2	第4水田	融石	安山岩	完形	17.8	8.25	5.77	1266.54	129	両端部と側縁に表裏面に敲打痕。
図版37-82	D2	SD102	融石	安山岩?	完形	15.5	4.95	3.88	515.29	78	両端部と側縁に特に顕著な敲打痕。
図版37-83	E2	8層	融石	安山岩	完形	14.04	4.88	2.44	313.05	172	両端部と側縁に面を成した敲打痕。
図版37-84	D3	第7調査面	融石	安山岩?	完形	14.31	7.47	3.18	396.77	88	
図版37-85	D3	SD11	融石	安山岩	完形	11.8	10.7	2.46	435.82	87	円盤状の両面縁の側縁部に敲打痕もしくは割傷痕。
図版37-86	D2	第6水田 (23-1層)	融石	不明	完形	10.07	6.28	1.9	179.16	75	
図版37-87	D3	SD12	融石	チャート	完形	6.5	5.32	5.03	280.22	85	表面積の1/2に敲打痕が見られる。
図版37-88	D1	第6調査面	凹石	安山岩	完形	8.13	5.65	5.43	358.25	76	
図版37-89	C	SD03	凹石	不明	完形	8.34	7.11	4.78	388.54	101	
図版37-90	D3	SD10	凹石	花崗岩	完形	10.92	8.21	5.81	764.36	89	
図版37-91	D3	不明	凹石	安山岩	完形	9.89	7.34	5.34	537.71	86	
図版37-92	A2	SH02	石鉢	安山岩	欠損	-	(30.0)	14	-	178	黒色付着物が内外面に割れ口に付着。
図版37-93	A2	SH03	石鉢	安山岩	欠損	(17.1)	(16.5)	12.9	-	177	片口部以外は口縁部が欠損している。
図版37-94	C2	SD03	石鉢	安山岩	欠損	23.8	-	12.3	-	133	
図版37-95	C2	SD03	石鉢	安山岩	欠損	18.6	-	11.5	-	132	
図版37-96	C2	SD03	石鉢	安山岩	完形	18.3	17.9	11.1	-	131	底が抜けている。
図版38-97	A2	不明	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	9.8	-	194	上面の縁に刻目がある。
図版38-98	A2	SH03	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	-	-	180	
図版38-99	A2	SH03	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	-	-	188	
図版38-100	A2	SH03	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	-	-	190	
図版38-101	A2	SH21	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	12.2	-	187	割れ口が専断する。
図版38-102	A2	雙地V	粉青白(上白)	安山岩	欠損	28.6	-	-	-	189	
図版38-103	A2	SH03	粉青白(上白)	安山岩	欠損	31.2	-	-	-	192	
図版38-104	A2	出土地不明	粉青白(上白)	安山岩	ほぼ完形	31.4	31.9	9.4	-	197	磨り面の日は摩耗し不明瞭である。
図版38-105	A2	出土地不明	粉青白(上白)	安山岩	欠損	34	32	-	-	174	
図版38-106	A2	出土地不明	粉青白(上白)	安山岩	欠損	-	-	-	-	186	
図版38-107	A2	SH03	粉青白(上白)	安山岩	欠損	33.3	-	-	-	183	
図版38-108	A2	出土地不明	灰白(上白)	安山岩	欠損	-	-	-	-	195	
図版38-109	A2	出土地不明	灰白(上白)	安山岩	欠損	-	-	13	-	173	受け部に黒色付着物。

木製品観察表

図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	径・ 口径 (cm)	厚 (cm)	径・ 径・高 さ (cm)	整理番号	備考
図版42-1a	C2	SC05	W22	曲柄横線	板材(楡目)	クリ	30.3	12.9	3.5	0024-1	
図版42-1b	C2	SC05	W22	曲柄横線の柄	丸木材 芯もち	クリ	14.2			0024-2	
図版42-2a	C2	SC05	W21	曲柄横線	板材(楡目)	クヌギ節	33.6	9.9	1.4	0025-1	
図版42-2b	C2	SC05	W21	曲柄横線の柄	丸木材 芯もち	スルデ	64.7		3.5	0025-2	
図版42-3	B2	SD104	不明 144-16	曲柄横線	板材(楡目)	不明	24.3	9.2	0.8	0023	
図版43-4	C	SA01	C39	曲柄帯形輪状平線	板材(楡目)	クリ	51.7	10.0	1.8	0005	
図版43-5	C	SD002	1001	曲柄帯形輪状平線	板材(楡目)	クヌギ	41.9	9.7	1.9	0015	
図版43-6	C2	SC31	3	曲柄帯形輪状平線	板材(楡目)	クヌギ節	45.9	10.5	1.4	0012	
図版43-7	B2	SC140	4	曲柄帯形輪状平線	板材(楡目)	不明	46.8	14.8	1.2	0033	
図版44-8	A3	SC07	26	曲柄帯形輪状平線	板材(楡目)	アサダ	32.8	6.5	1.9	0013	
図版44-9	C2	SC06	414	曲柄帯形輪状平線(板)	板材(楡目)	不明	35.9	7.4	1.4	0022	
図版44-10	C1	SC3024	1	曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	クヌギ	50.9	14.6	1.6	0002	
図版44-11	C2	SC31		曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	アサダ	65.6	15.2	1.6	0004	
図版45-12	A3	SC09	42	曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	クヌギ	47.6	11.3	1.8	0008	
図版45-13	C2	SC05付近	1002	曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	クヌギ	33.6	8.0	1.4	0003	
図版45-14	C2	SC05付近	1001	曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	クヌギ	42.5	8.7	1.2	0001	
図版45-15	C	SA01	C103	曲柄帯形輪状平線(スラ)	板材(楡目)	アサダ	50.8	7.0	1.2	0011	
図版45-16	C2	SC05	W18	曲柄帯形輪状平線(不明)	板材(楡目)	クヌギ	34.4	8.5	1.3	0020	
図版45-17	C1	SC52	18-2-2	曲柄帯形輪状平線(不明)	板材(楡目)	クヌギ節	24.1	13.2	1.2	0050	
図版45-18	A3	SC02	1008	曲柄帯形輪状平線(二又)	板材(楡目)	クヌギ	33.6	6.5	0.8	0016	
図版45-19	B2	SC114	1	輪	板材(楡目)	不明	37.9	5.7	0.7	0030	
図版45-20	B2	SC103	11	直線平線	板材(楡目)	ケヤキ	26.1	9.0	2.0	0018	
図版46-21	C	SC01	26	一水平線(水平間)	板材(楡目)	コナラ節	45.6	16.0	3.3	0006	
図版46-22	C	SA01	B44	一水平線(水平間)	板材(楡目)	クヌギ	37.9	17.8	1.6	0009	
図版46-23	B2	SK02	1	一水平線(なで目)	板材(楡目)	コエダ属	42.5	8.7	1.6	0007	覆土中層。
図版46-24	C2	SC41-42	33	一水平線(なで目)	板材(楡目)	アサダ	69.4	16.4	3.2	0010	
図版47-25a	A3	第5水田		エブリ	板材(楡目)	クヌギ節	52.0	12.4	3.6	0021-1	
図版47-25b	A3	第5水田		エブリの柄	丸木材 芯もち	スルデ	28.4		2.9	0021-2	
図版47-26	C2	SC02	71	エブリ	板材(楡目)	クヌギ	33.1	8.8	2.4	0019	
図版47-27	C2	SC05	W20	柄	丸木材	カンボナシ属	60.4	4.7	3.1	0047	
図版47-28	C	SA01	D30 b	柄	丸木材	チドリノキ	22.9		2.7	0031	
図版47-29	C2	SC05	E10	柄	丸木材	カンボナシ属	14.7		3.2	0032	
図版48-30	C	SA01	F115	柄	丸木材 芯もち	アサダ	48.0	3.3	2.3	0051	カヤの可能性あり。
図版48-31	D0	SC04	95-1	柄	丸木材 芯もち	クリ	39.8		2.5	0052	
図版48-32	B2	SC108	19	角線の輪?	角材	モミ属	25.7	3.0	3.3	0026	
図版48-33	D3	SD10	101	柄	角材	クリ	81.2	7.8	4.4	0053	ケヤキの可能性あり。
図版48-34	F2	SA01	27	棒状木製品	丸木材 芯もち	ヤマグワ	60.0		9.8	0055	
図版49-35	C1	21層又は24層	平安朝下層 1	角線の角木	角材	クリ	65.0	6.0	7.0	0027	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版49-36	C1	21層又は24層	平安朝下層 2	角線の輪	角材	クリ	53.7	3.0	3.7	0028	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版49-37	C1	21層又は24層	平安朝下層 2	角線の輪	角材	クリ	45.1	3.7	2.3	0029	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版50-38	B2	SC103	14	縁合目曲板	板材(楡目)	モミ	36.7	6.4	1.5	0043	
図版50-39	B1	SA06	15	縁合目曲板?	角材 芯もち	クリ	70.3	12.1	12.0	0054	
図版50-40	C2	SD03	30	角線の引線	板材(楡目)	ブナ属	27.4	7.3	2.7	0014	
図版51-41	C	第5水田	嵐儀焼山時	凹下駄	板材(楡目)	サウラ	44.5	13.9	2.4	0101	
図版51-42	B2	SC101	18	凹下駄	板材(楡目)	モミ	42.8	10.5	2.3	0105	
図版51-43	C2	外堀トレンチ		凹下駄	板材(楡目)	モミ属	31.3	11.4	1.7	0102	
図版51-44	B2	SC103	1	凹下駄	板材(楡目)	トネリコ属	36.8	10.1	1.5	0103	
図版51-45	A3	SC09	8	凹下駄	板材(楡目)	真鍮松属	38.0	7.9	1.5	0109	
図版52-46	B2	SC103	2	凹下駄	板材(楡目)	カンボナシ属	36.0	9.5	1.2	0108	
図版52-47	B2	第3水田	5	凹下駄	板材(楡目)	モミ属	39.9	9.1	1.6	0114	
図版52-48	B2	SC103	10	凹下駄	板材(楡目)	カンボナシ属	43.3	11.0	1.1	0116	
図版52-49	B2	SC101	17	凹下駄	板材(楡目)	モミ	42.7	9.5	2.4	0106	
図版52-50	B2	第3水田	4	凹下駄	板材(楡目)	カンボナシ属	31.9	9.5	1.3	0115	
図版53-51	B2	SC101	12	凹下駄	板材(楡目)	サウラ	32.4	12.2	1.9	0104	
図版53-52	B2	第3水田	3	凹下駄	板材(楡目)	モミ属	32.0	11.8	2.4	0111	
図版53-53	C2	SC02	54	凹下駄	板材(楡目)	クヌギ	30.5	11.1	1.0	0110	中央大田と先行トレンチの交点出土。
図版53-54	C	SC01	44	凹下駄	板材(楡目)	サウラ	36.3	8.8	2.4	0107	
図版53-55	B2	第3水田	1(板)	凹下駄	板材(楡目)	モミ属	35.6	6.6	0.8	0112	

河川番号	地区名	道標名	取上番号	器種分類	手法	器種	長さ・ 口径 (cm)	深さ・ 径 (cm)	取番号	備考
河版53-56	B2	第3水田	2(仮)	河下取	板材(板目)	モミ属	23.9	8.2	1.5	0113
河版53-57	C2	SC02	30	河下取	板材(板目)	スギ	29.8	7.5	1.0	0160
河版53-58	D3	不明	19	河下取	板材(板目)	ヒノキ	33.6	7.4	0.9	0161
河版54-59	C	SA01	G88	横積	丹材	クスギ	58.9	11.3	5.0	0151
河版54-60	C	第4水田下 自然流路		横積	丸太材 芯入り	イヌシダ属	20.9	7.6	4.1	0152
河版54-61	C	SC01	35	横積	丸太材 芯もち	カエダ属	36.3		14.4	0153
河版55-62	B2	SD106	Y1Y2	橋	丸太材 芯もち	イヌダケ	172.6		3.0	0302
河版55-63	D3	SC04	1	弓	丸太材 1/2 芯もち	イヌダケ	58.7	2.7	1.8	0320
河版55-64	B2	第4水田		弓	丸太材	イヌダケ	60.8	2.2	2.0	0307
河版55-65	B2	SC123	139の東	矢	竹箆類		6.8	0.9	0.8	0306
河版56-66	E2	第4水田	1	溝	板材(斜目)	サワグルミ	28.6	19.4	1.2	0301
河版56-67	B2	SD103		瓦形	板材(板目)	ヒノキ	12.4	2.5	0.2	0303
河版56-68	B2	SD106	No女し 9	木皮	不明		11.0	4.9	3.4	0305
河版56-69	B2	SD103		傘形	板材(板目)	ヒノキ	9.2	2.2	0.3	0304
河版56-70	E1	SD12	No女し 1 1/2	板状木製品 赤色押形付	板材(板目)	モミ属	27.6	2.7	1.1	0308
河版57-71	A2	SD101		透流下取	板材(板目)	不明	17.6	11.0	0.8	0433
河版57-72	D1	第1水田水口	水口 NO1	透流下取	板材(板目)	ヒノキ	30.9	8.2	3.0	0429
河版57-73	A2	SD101		透流下取	板材(板目)	不明	22.1	9.0	1.0	0431
河版57-74	C2	SD03		透流下取	板材(板目,板目)	ブナ属	20.3	6.4	2.6	0408
河版57-75	A2	SD101		透流下取	板材(板目)	不明	16.5	6.1	2.0	0432
河版57-76	C2	SD03	75	透流下取	板材(板目)	サワラ	19.6	4.5	2.6	0457
河版57-77	C2	SD03	22	透流下取の溝	角材	ハリギリ	7.2	5.6	3.7	0458
河版57-78	C	第3水田		溝	板材(板目)	サクラ属	5.1	2.8	1.1	0501
河版58-79	A3	第3水田 自然流路		割物	板材(板目)	ヒノキ	29.9	9.6	3.5	0402
河版58-80	A2	SK02	2	割物 瓦	板材(板目)	エノキ属	9.8	6.2	3.1	0438
河版58-81	C2	SC02	23	割物 瓦	板材(板目)	クスギ節	14.2	5.3	2.1	0472
河版58-82	A3	SC101	83	割物	板材(板目)	スギ	27.8	20.0	6.4	0404
河版59-83	C	SC01	33	挽物 皿	板材(板目)	ケヤキ	20.0	0.7	0.9	0419
河版59-84	C	SC01	45	挽物 皿	板材(板目)	ケヤキ	14.8	5.3	1.3	0417
河版59-85	B2	SD104		挽物 皿	板材(板目)	ヒノキ	7.6	0.7	0.7	0424
河版59-86	A2	敷地層下		挽物 橋	不明		14.0	0.9	0.9	0461
河版59-87	A2	E15グリップ		挽物 橋	ブナ属		13.3		7.7	0442
河版59-88	A2	SH18		挽物 橋	ブナ属		7.9		3.0	0436
河版59-89	A2	敷地層下	ES12	挽物 橋	ブナ属		11.4		0.9	0440
河版60-90	B2	第3水田	3(仮)	円形曲物	板材(板目)	サワラ	21.0	19.1	1.2	0411
河版60-91	B2	SC106	P1	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	20.0		1.1	0415
河版60-92	B2	SD103		円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	19.8		1.1	0405
河版60-93	B2	SD101	35	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	19.3	7.4	1.1	0439
河版60-94	C	SC01	39	円形曲物	板材(板目)	サワラ	37.9	12.0	2.0	0418
河版60-95	A3	第3水田を 切る自然流路		円形曲物	削材	ケヤキ	9.4	5.7	1.5	0403
河版60-96	B2	第2水田畔畔		曲物	板材(板目)	ヒノキ	15.7	5.7	1.0	0427
河版61-97	B2	第4水田圃	1	円形曲物	透板ヒノキ 透板モミ属		20.0		4.6	0443
河版61-98	B2	SD104	不明 144	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	19.6	10.5	0.8	0430
河版61-99	B2	第3水田	4	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	14.2	5.6	1.6	0425
河版61-100	A2	敷地層下		円形曲物	板材(板目)	不明	8.6	3.3	0.6	0435
河版61-101	C	SC01	40-47	大型曲物	板材(板目)	ヒノキ	44.7	9.5	2.1	0445
河版61-102	B2	第3水田		円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	16.2		1.2	0420
河版61-103	C	第1水田	水口 2	円形曲物	板材(斜目)	アカマツ	13.1		1.3	0407
河版62-104	B2	第1水田		円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	30.8		1.1	0426
河版62-105	C1	杉原区A 下層水田	木 1	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	23.5	7.7	1.4	0406
河版62-106	C2	SD03	48	円形曲物	板材(板目)	ヒノキダケ	19.1		1.2	0436
河版62-107	A2	SK02	1	円形曲物	板材(板目)	不明	14.3	3.9	0.7	0434
河版62-108	C2	外層トレンチ		円形曲物	板材(板目)	カツラ	9.0	7.0	2.0	0470
河版62-109	C	SC01	21	楕円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	42.2	15.2	0.8	0437
河版63-110	B2	SC102	7-8	容器の挿片	板材(板目)	モミ	42.5	4.2	1.5	0422
河版63-111	C1	SC01	16	容器の破片	板材(板目)	ヒノキ	12.1	3.4	0.8	0446
河版63-112	C2	SD03	74	容器の破片	板材(斜目)	サワラ	12.8	4.0	1.1	0454
河版63-113	C2	SC02	72	容器の破片	板材(板目)	クスギ節	16.2	4.6	0.7	0460
河版63-114	C2	SD03	32	容器の破片	板材(斜目)	ヒノキ	12.1	5.4	0.7	0453
河版63-115	C2	SC02	13	容器の破片	板材(板目)	ケンボナン属	9.8	4.8	1.3	0471
河版63-116	C2	SD03	78	容器の破片	板材(板目)	サワラ	6.7	1.8	0.5	0451
河版63-117	A3	SC019	1001	容器の破片	板材(板目)	サワラ	17.9	4.0	1.1	0409
河版63-118	C	SC01	14	容器の破片	板材(板目)	サワラ	20.1	6.5	0.6	0448
河版63-119	B2	SD106	No女し 25	容器の破片	板材(板目)	サワラ	23.4	5.2	1.1	0161
河版63-120	E1	SD12	No女し 1-2/2	容器の破片	板材(板目)	スギ	23.5	1.6	0.3	0459
河版63-121	C2	SD03	44	容器の挿片	板材(板目)	ヒノキ	22.2	5.2	0.6	0450
河版63-122	B2	SD104	木塊の1/4	容器の破片	板材(板目)	ヒノキ	20.5	6.3	1.5	0456
河版63-123	C2	SC02	82	容器の破片	板材(板目)	サワラ	19.3	4.1	0.8	0423
河版64-124	B2	SC123	104	容器の破片	板材(板目)	モミ	31.0	3.6	0.9	0414

河川番号125と同一割
体の可能性あり。

図版番号	地区名	道標名	取上番号	器種分類	手法	器種	長さ・ 口径 (cm)	幅 (cm)	高さ・ 底高さ (cm)	器種番号	備考
図版64-125	E1	SC01	2	器種の破片	板材(板目)	ケンボナシ属	20.3	5.4	1.4	0428	
図版64-126	C	SC01	14	器種の破片	板材(板目)	ヒノキ科	16.0	4.5	0.6	0447	図版番号118と同一体の可能性あり。
図版64-127	B2	第1水田		器種の破片	板材(板目)	サワラ	15.4	4.9	0.8	0416	
図版64-128	E1	SA07	14	その他の器種	丸木材 芯もち	不明	47.9	21.5	12.7	0444	
図版65-129	A2	SD101		器種	丸木材 芯もち	アカマツ	64.4		21.0	0662	
図版65-130	F1	SA07	17	器種	製材	トチノキ	85.2	21.3	11.0	0648	
図版66-131	R2	SC1004	11	有孔様状木製品	丸木材	カヤ	142.0		5.6	0275	
図版66-132	D2	SC107	58	有孔様状木製品	丸木材 芯もち	ニワトコ	54.8		3.5	0260	ケヤキの可能性あり。
図版66-133	A2	砂塚層		有孔様状木製品	丹材	モミ属	71.4		3.3	0213	
図版66-134	D3	SD10	179	有孔様状木製品	丸木材	サクラ属	56.6		3.3	0246	
図版67-135	B2	SC1004	21	有孔様状木製品	板材(板目)	スギ	33.9	5.8	1.4	0206	
図版67-136	C2	SC02	34	有孔様状木製品	板材(板目)	サワラ	43.2	5.2	1.7	0201	
図版67-137	D3	SD03	6	有孔様状木製品	板材(板目)	ニレ属	38.0	3.5	1.5	0257	ニワトコの可能性あり。
図版67-138	C2	SC02	33	有孔様状木製品	板材(板目)	ニレ属	27.7	6.2	1.1	0241	コナラ属の可能性あり。
図版67-139	A3	SA101	秋11	有孔様状木製品	丸木材	アサダ	14.3	5.5	4.5	0248	
図版67-140	D2	SC101	14	有孔様状木製品	角材	フジキ	19.4	3.0	2.6	0258	
図版67-141	A3	SA101	秋36	有孔様状木製品	丸木材 芯もち	カエデ属	13.1	4.0	4.0	0202	
図版67-142	E1	SA07	9 2/3	有孔様状木製品	角材	ヤマザクラ	7.6	8.9	5.8	0256	
図版68-143	B2	不明	Noなし 10	弓状木製品	丸木材	カヤ	69.5		2.0	0220	
図版68-144	D3	SD03	30	弓状木製品	丸木材 芯もち	イヌガヤ	62.5		1.5	0259	
図版68-145	B2	SD106	Noなし 43-1/7	弓状木製品	丸木材 芯もち	イヌガヤ	72.7		2.0	0221	図版番号149と同一体の可能性あり。
図版68-146	B2	不明	不明27	弓状木製品	丸木材 芯もち	イヌガヤ	46.2		2.2	0217	
図版68-147	C	SA01	E46	弓状木製品	丸木材 芯もち	カヤ	47.8		2.6	0219	
図版68-148	B2	SD106	Noなし 13-1/4	弓状木製品	丸木材	カヤ	43.0		2.2	0224	
図版68-149	B2	SD106	Noなし 43-1/7	弓状木製品	丸木材 芯もち	カヤ	39.0		1.5	0223	
図版69-150	R2	SC103	7	棒状木製品	丸木材 芯もち	不明	79.9	2.4	1.9	0216	
図版69-151	D3	SD10	197	棒状木製品	丸木材	アサダ	32.8		3.0	0243	
図版69-152	B2	SP104	不明 144	棒状木製品	角材	ヒノキ	27.0	2.1	1.6	0211	
図版69-153	B2	SD104	一坏遺物(6)	棒状木製品	丸木材	ヒノキ	12.6		1.2	0225	
図版69-154	C2	R12グリット		棒状木製品	板材(板目)	ヒノキ	21.8	2.3	1.7	0462	
図版69-155	B2	SD104	不明 144	棒状木製品	角材	ヒノキ	13.0	1.7	1.2	0212	
図版69-156	B2	SD104	一坏遺物(7)	棒状木製品	丸木材	イヌガヤ	12.7		0.7	0226	
図版69-157	R2	SD105	46	棒状木製品	丸木材 芯もち	クヌギ属	23.1		3.0	0215	
図版69-158	B2	SC162	木製品 1	棒状木製品	丸木材 芯もち	サス	39.5		2.5	0412	
図版69-159	E1	秋列群	Noなし 8	棒状木製品	丸木材 芯もち	カエデ属	41.5		7.8	0214	
図版69-160	C	SC01	3	棒状木製品	板材(板目)	ケヤキ	41.0	6.8	1.7	0449	
図版69-161	B2	SC1001	1	棒状木製品	板目(板材)	モミ	32.6	6.7	3.0	0401	
図版70-162	C	SA01	C162	棒状加工材	角材	ダラノキ	115.1	16.5	12.8	0626	
図版70-163	C	SA01	D27 2/3	棒状加工材	角材	コナラ属	98.5	9.3	8.2	0669	
図版70-164	E2	SA01	38	棒状加工材	製材 1/8	ケンボナシ属	85.3	8.0	6.6	0682	
図版70-165	D1	SC1001	榎木Y118	棒状加工材	板材(板目)	不明	89.9	4.3	2.0	0639	
図版71-166	C	SA01	C33	棒状加工材	丹材	フジキ	175.8	10.5	7.5	0684	
図版71-167	C2	SC05	218	棒状加工材	角材	タリ	138.5	5.8	5.6	1615	
図版71-168	B2	SC101	13	棒状加工材	板材(板目)	モミ属	96.1	6.7	2.1	0663	
図版72-169	D3	SD10	118	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	62.0	18.8	4.0	0254	
図版72-170	D3	SD10	119	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	71.1	16.4	3.6	0255	
図版72-171	D3	SD10	117	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	56.6	9.0	3.1	0251	
図版72-172	D3	SD10	2	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	48.8	10.6	2.9	0266	
図版72-173	D3	SD10	107の2	板状木製品	板材(板目)	タリ	49.8	3.6	1.3	0250	
図版72-174	D3	SD10	71	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	100.6	16.0	4.1	0262	
図版72-175	D3	SD10	77	板状木製品	板材(板目?)	ケヤキ	116.0	11.4	4.1	0261	
図版73-176	D3	SD10	70	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	103.3	13.3	3.4	0267	
図版73-177	D3	SD10	102	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	89.4	11.7	3.6	0272	
図版73-178	C2	SC02	17	板状木製品	板材(板目)	ケンボナシ属	24.0	5.0	1.5	0222	
図版73-179	B2	SC125	7	板状木製品	板材(板目)	クヌギ属	22.4	10.9	1.9	0210	
図版73-180	C2	SC02	47	板状木製品	板材(板目)	ケンボナシ属	43.9	6.4	1.8	0242	
図版73-181	B2	SC124	101	板状木製品	板材(板目)	不明	20.0	5.8	1.1	0059	
図版73-182	C2	SC02	88	板状木製品	板材(板目)	ケンボナシ属	9.8	5.3	1.1	0240	
図版73-183	B2	SC1011	18	板状加工材	板材(板目)	イヌシテ節	46.5	9.1	2.8	0603	
図版73-184	A2	9層砂地裏下	木 3	板状加工材	板材(板目)	ケヤキ	33.2	17.3	2.6	0619	
図版73-185	C2	SC02	53	板状加工材	板材(板目)	ケンボナシ属	30.0	8.5	2.2	0612	
図版73-186	C2	SC02	201	板状加工材	板材(板目)	ヒノキ	24.3	9.9	1.3	0602	
図版74-187	D3	SD10	163	有孔様状木製品	丸木材	ダラノキ	20.8		4.9	0245	
図版74-188	B2	SC140	25	有孔様状木製品	丸木材	ケンボナシ属	10.5		5.5	0218	
図版74-189	B2	SD103		有孔様状木製品	角材	ヒノキ	19.6	2.8	2.6	0203	
図版74-190	D3	SC04	8	有孔様状木製品	角材	ケヤキ	20.9	3.3	3.4	0263	ブナ属の可能性あり。
図版74-191	D3	SD10	50	有孔様状木製品	角材	ケヤキ	38.3	4.0	4.5	0244	
図版74-192	B2	SC106	1	有孔様状木製品	板材(板目)	モミ属	30.9	2.7	0.9	0207	
図版74-193	B2	SD104		有孔様状木製品	板材(板目)	ヒノキ	21.1	10.4	1.5	0204	
図版74-194	A3	第6水田		有孔様状木製品	板材(板目)	ヒノキ	27.4	6.2	1.4	0205	
図版74-195	R2	SC103	平常(下)水田	有孔様状木製品	板材(板目)	モミ属	20.8	3.6	1.4	0208	
図版74-196	B2			有孔様状木製品	板材(板目)	モミ属	7.8	3.5	1.9	0227	

図面番号	地区名	通称名	取上番号	難程分類	手法	樹種	長さ・ 径高 (cm)	高さ・ 径高 (cm)	樹形番号	備考		
図面74-197	C	SC01	4	有孔板木製品	板材(板目)	ヒノキ	28.1	3.5	1.0	0468		
図面74-198	C2	SD03	77	有孔板木製品	板材(板目)	ヒノキ	17.8	5.3	0.7	0452		
図面74-199	R2	SC105	4	有孔板木製品	板材(板目)	ヒノキ	41.1	9.4	1.4	0410		
図面74-200	C	SC01	43	有孔板木製品	板材(板目)	ヒノキ	32.8	8.7	2.0	0421		
図面75-201	C2	SC41-42	66	有孔板木製品	板材(板目)	フシキ	247.0	12.8	3.2	0276		
図面75-202	A3	SC05	9-2	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	157.3	18.9	2.4	0278		
図面75-203	D3	SD10	108	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	57.3	19.0	2.1	0264		
図面74-204	D3	SD10	108	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	65.9	8.4	3.2	0253		
図面75-205	D3	SD10	138	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	61.9	15.2	4.4	0252		
図面76-206	C2	SC02	103	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	37.5	9.5	3.0	0249		
図面76-207	R2	SC113	9	有孔板加工材	板材(板目)	モミ属	56.8	12.3	2.1	0265		
図面76-208	E1	SA01	7	有孔板加工材	板材(板目)	ケンボナン属	27.6	8.8	1.7	0267		
図面76-209	H2	SC101	19	有孔板加工材	板材(板目)	エノキ属	32.9	10.0	1.3	0266		
図面76-210	C	SA01	1	有孔板木製品	板材(板目)	ウヤキ	41.7	10.7	3.5	0255		
図面76-211	H2	SC102	2	有孔板加工材	板材(板目)	不明	43.1	11.6	2.4	0222		
図面77-212	R2	SC123	142	有孔板加工材	板材(板目)	エノキ属	39.5	26.7	3.3	0260		
図面77-213	E1	SD05	1	有孔板加工材	板材(板目)	ウヤキ	32.7	13.4	1.9	0264		
図面77-214	C	SD3092	1	板状加工材	板材(板目)	ウヤキ	81.2	18.2	4.6	0236		
図面77-215	B2	SD186	S-1	板状加工材	板材(板目)	アズキ属	27.8	13.2	4.6	0236		
図面77-216	B2	SC123	212	板状加工材	板材(板目)	不明	59.3	10.3	4.7	0264		
図面77-217	R2	SC1909	10	板状加工材	板材(板目)	ウヤキ	34.9	8.4	3.1	0268		
図面78-218	D3	SD10	セキ 2-19	板状木製品	角材(板目)	ウヤキ	65.8	7.5	4.3	0270		
図面78-219	D3	SD10	セキ 2-23-1	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	78.1	7.6	4.4	0269		
図面78-220	D3	SD10	セキ 2(1)	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	76.0	10.0	3.3	0271		
図面78-221	E2	SA01	36	板状木製品	角材	ウヤキ	97.1	9.9	6.3	0277		
図面78-222	A3	SC07	13	板状木製品	角材	ウヤキ	97.9	10.3	7.6	0280		
図面78-223	E2	SA01	5	板状木製品	丸太材	ウヤキ	72.5	8.0	7.2	0274		
図面78-224	D3	SD10	セキ 2 20 2	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	77.8	9.5	3.6	0273		
図面78-225	D3	SD10	セキ 2-20-1	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	24.2	10.4	3.9	0268		
図面79-226	A3	不明	1	板状加工材	角材	ウヤキ	29.6	11.0	10.4	0261		
図面79-227	A3	9層階地直下	水製品№8	板状加工材	角材	モミ属	35.5	7.4	7.9	0217		
図面79-228	D3	SD10	182	板状木製品	角材	ウヤキ	22.0	9.9	5.0	0247		
図面79-229	C2	SC03	636	板状木製品	角材	ウヤキ	34.8	7.3	4.7	0279		
図面79-230	E1	SA06	6	板状加工材	角材	エノキ属	82.2	24.2	12.8	0242		
図面80-231	C2	SC03	411	板状木製品	板材(板目)	ケンボナン属	28.1	5.2	1.7	0270		
図面80-232	D3	SD03	20	板状木製品	角材	モミ属	24.4			3.3	0272	
図面80-233	D3	SD10	182	板状木製品	丸太材 芯もち	ムラサキシダ属	12.7	2.1	2.3	0272		
図面80-234	D3	SD10	182	板状木製品	丸太材 芯もち	ムラサキシダ属	11.9			2.1	0271	
図面80-235	A3	SA101	柱目	板状木製品	丸太材 芯もち	ムササビ属	20.9			3.3	0225	
図面80-236	D3	SD03	24	有孔板木製品	丸太材	ムラサキシダ属	14.4			16.5	3.9	0278
図面80-237	E1	SD14	26	板状木製品	角材 1/4以下	エノキ属	46.5	8.1	3.9	0274		
図面80-238	B2	SC124	46	板状木製品	丸太材 芯もち	エノキ属	33.9			7.6	0203	
図面80-239	D3	SC03	15	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	32.7	5.6	3.7	0270		
図面80-240	C	SA01	H70	板状木製品	丸太材 芯もち	ウヤキ	65.3			9.7	0202	
図面80-241	E2	SA01	4	板状木製品	丸太材 芯もち	ウヤキ	77.3			8.4	0238	
図面80-242	D3	SD10	76	板状木製品	板材(板目)	ウヤキ	53.2	11.6	3.3	0279		
図面80-243	D3	SD10	85	板状木製品	角材	ウヤキ	106.0	6.4	4.9	0233		
図面80-244	C2	SC05	K76 1/2	板状木製品	角材	ウヤキ	132.2	7.9	5.2	0246		
図面81-245	C	SA01	G71	板状木製品	丸太材	コナラ属	139.5	7.5	10.8	0237		
図面81-246	C	SA01	E18	板状木製品	丸太材 芯もち	ウヤキ	129.5			10.6	0245	
図面81-247	C	SA01	G19	板状木製品	角材	ウヤキ	136.7	12.0	9.6	0239		
図面81-248	C	SA01	E2	板状木製品	角材	ウヤキ	142.2	11.2	10.3	0243		
図面82-249	C2	SC31	1	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	コナラ属・ウヤキ	239.2			17.2	0209	
図面83-250	C1	SC32	26	建築部材 屋根材	丸太材	ウヤキ	184.0	15.8	15.2	0206		
図面83-251	R2	SC31	3	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	279.6			10.0	0221	
図面83-252	D2	SC161	17	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	206.8			8.4	0226	
図面84-253	D1	SC1001	K124	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	135.5	10.6	11.0	0217		
図面84-254	C	SA01	E38	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	152.6			12.3	0298	
図面84-255	C2	SC41-42	63	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	161.5	9.9	11.0	0269		
図面84-256	C	SA01	C17	建築部材 屋根材	丸太材	ウヤキ	162.7			7.4	0287	
図面84-257	C	SA01	C50 2/2	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	97.4			10.5	0290	
図面84-258	A3	SA101	37-1	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	118.0			11.0	0295	
図面84-259	C	SA01	G97	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	116.9	11.6	11.2	0298		
図面84-260	C	SA01	C30	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	116.9			11.1	0296	
図面84-261	C	SA01	E27	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	117.1			10.7	0293	
図面84-262	C	SA01	H86	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	117.1			11.1	0296	
図面85-263	C	外周トレンチ	23	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	ウヤキ	257.2			11.6	0259	
図面85-264	C1	SC32	4	建築部材 屋根材	角材	ウヤキ	233.2	10.0	8.0	0213		
図面85-265	R2	SC113	79	建築部材 屋根材	丸太材 芯もち	モミ属	300.0			11.4	0203	
図面87-266	C2	SC41-42	65	建築部材 屋根材	板材(板目)	ケンボナン属	269.2	14.6	6.8	0225		
図面87-267	E2	SA101	34	建築部材 屋根材	板材(板目)	ウヤキ	203.2	25.6	4.0	0227		
図面88-268	C	外周トレンチ	3	建築部材 屋根材	板材(板目)	コナラ属	213.6	26.4	4.2	0228		
図面88-269	C	SA01	N7	建築部材 屋根材	板材(板目)	ウヤキ	202.4	14.8	6.4	0271		
図面89-270	C1	外周トレンチ	9 床片 3-3	建築部材 屋根材	板材(板目)	不明	156.0	19.6	4.7	0201		

モミ属の可能性あり。

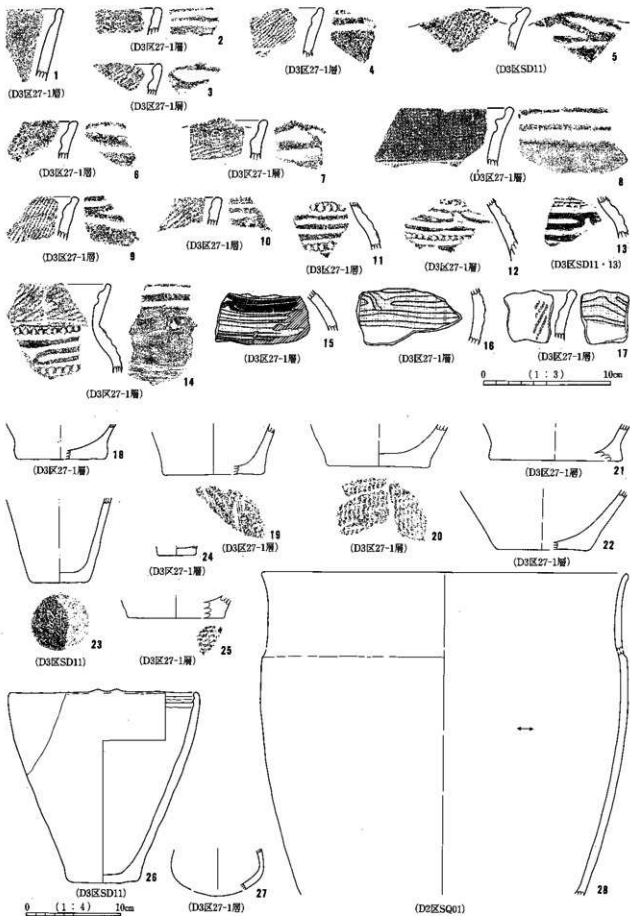
イヌゴヤの可能性あり。

河川番号	地区名	通称名	取上番号	器機分類	手法	器機	長さ・ 口幅 (cm)	高さ・ 水深 (cm)	幅員番号	備考
河原9-271	D0	SC03	21	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	141.6	24.8	6.4	0030
河原9-272	B2	SC117	13	締帯部材 横架材	板材(板目)	不明	192.3	25.1	6.2	0634
河原9-273	B2	SC140	7	締帯部材 横架材	板材(板目)	エノキ属	180.4	24.5	2.4	0649
河原9-274	C	SA01	A8	締帯部材 横架材	板材(板目)	エノキ属	166.8	19.7	8.7	1602
河原9-275	C	SA01	N104	締帯部材 横架材	削材	カヤ	198.2	16.2	8.3	1007
河原9-276	C2	SC41-42	24	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	185.7	16.1	5.7	1618
河原9-277	C2	SC02	1	締帯部材 横架材	角材	エノキ属	154.9	14.8	6.2	0637
河原9-278	F1	SA07	6	締帯部材 横架材	板材(板目)	ハリギリ	137.8	18.9	5.0	0658
河原9-279	B2	SC124	53	締帯部材 横架材	板材(板目)	モミ属	144.4	16.0	3.6	0963
河原9-280	C2	SC05	404	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	146.0	21.3	4.2	0529
河原9-281	B2	SC1008	9	締帯部材 横架材	削材	クリ	152.4	12.4	5.6	0952
河原9-282	C	SD3002		締帯部材 横架材	板材(板目)	カツラ	106.3	35.0	4.5	0651
河原9-283	D1	SC1001	Y47 1/2	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	125.8	19.2	5.4	0635
河原9-284	C2	SC05	407	締帯部材 横架材	板材(板目)	不明	86.7	18.1	3.8	0645
河原9-285	C2	SC02	56	締帯部材 横架材	板材(板目)	カンボナレ属	82.4	7.7	2.3	0601
河原9-286	B2	SC128	3	締帯部材 横架材	板材(板目)	サワラ	76.9	10.9	2.0	0638
河原9-287	C	SA01	R45	締帯部材 横架材	角材	ニレ属	187.0	21.7	7.1	0697
河原9-288	C1	SC51	5	締帯部材 横架材	削材 1/2	カエデ属	152.5	18.0	8.5	1010
河原9-289	B2	SC123	157	締帯部材 横架材	削材	ニレ属	163.8	15.7	9.1	0656
河原9-290	C	SA01	E17	締帯部材 横架材	板材(板目)	カツラ	144.0	12.2	5.6	1066
河原9-291	C2	SC05	K60	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	212.4	11.2	5.6	0922
河原9-292	C	SC01	28	締帯部材 横架材	角材	コナラ属	195.0	10.0	7.3	0902
河原9-293	B2	SC1008	5	締帯部材 横架材	皮材(板目)	クリ	155.6	14.4	6.0	0954
河原9-294	C	SC01	34	締帯部材 横架材	板材(板目)	コナラ属	156.6	12.4	4.4	0956
河原9-295	B2	SC1008	5	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	153.2	14.4	4.8	0953
河原9-296	C	SA01	C102	締帯部材 横架材	角材	クリ	151.2	16.8	6.4	0904
河原9-297	B2	SC1009	46	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	57.9	20.3	3.0	0611
河原9-298	C2	SC03	30	締帯部材 横架材	板材(板目)	カンボナレ属	58.3	5.0	2.8	0609
河原9-299	D3	SD10	セギ 1 314	締帯部材 横架材	板材(板目)	ニレ属	91.0	14.7	3.3	0686
河原9-300	B2	SC139	12	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	256.8	22.4	8.4	0923
河原9-301	D2	SC161	21	締帯部材 横架材	削材	クリ	249.2	11.2	6.4	0914
河原9-302	A3	SC09	9 1	締帯部材 横架材	削材	エノキ属	249.4	10.5	6.5	1614
河原9-303	D3	SD10	106	締帯部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	117.8	11.9	4.5	0681
河原9-304	D3	SD10	103	締帯部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	117.8	12.6	5.6	0694
河原9-305	B2	SA01	51	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	127.7	13.7	3.7	0691
河原9-306	B2	SC1902	6	締帯部材 横架材	板材(板目)	サクラ属	95.3	17.5	5.5	0647
河原9-307	E1	SA07	10	締帯部材 横架材	角材	ヤマザクラ	112.2	7.3	8.8	0653
河原9-308	B0	E1	SA02	13	締帯部材 横架材	角材	110.0	6.2	5.7	0659
河原9-309	C1	SC52	21	締帯部材 横架材	角材	カンボナレ属	149.4	12.0	7.6	1001
河原9-310	A3	SC09	3	締帯部材 横架材	角材	エノキ属	195.0	13.5	10.0	1613
河原9-311	A3	SC09	5	締帯部材 横架材	削材 1/2	エノキ属	159.7	11.8	6.1	1008
河原100-312	E1	SD14	102	締帯部材 横架材	板材(板目)	カンボナレ属	276.5	17.6	5.8	0624
河原100-313	D1	SC1001	Y162	締帯部材 横架材	削材	コナラ属	84.6	14.5	8.6	0646
河原100-314	D1	SC1001	Y22	締帯部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	67.5	13.2	4.2	0650
河原101-315	B2	SC1004	23	締帯部材 横架材 (小直径材)	角材	モミ属	158.0	9.5	7.1	1612
河原101-316	B2	SC114	31	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	165.6	8.6	5.5	0641
河原101-317	B2	SC140	2	締帯部材 横架材	削材	サクラ属	174.9	10.0	7.2	0652
河原102-318	B2	SC139	4	締帯部材 横架材	板材(板目)	モミ属	100.1	26.5	5.7	0689
河原102-319	D3	SD10	セギ 1-342-1	締帯部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	93.3	17.9	5.1	0685
河原102-320	B2	SD106	S103	締帯部材 横架材	板材(板目)	ヒノキ属	65.8	15.6	3.1	0654
河原102-321	A2	SD101	木枠 1-c	締帯部材 横架材	板材(板目)	アカマツ	31.5	9.5	2.2	0655
河原102-322	A3	SD101	木枠 1-a	締帯部材 横架材	板材(板目)	アカマツ	46.5	12.7	2.3	0661
河原102-323	A3	SC03	36	締帯部材 横架材	板材(板目)	不明	53.9	11.4	3.3	0620
河原102-324	C2	SC41-42	83	締帯部材 横架材	板材(板目)	モミ属	63.9	22.5	3.0	0644
河原102-325	E1	SC01	1	締帯部材 横架材	板材(板目)	カツラ	72.8	18.3	3.1	0657
河原102-326	C	SA01	P 不明	締帯部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	64.1	12.9	3.2	0640
河原103-327	C	SA01	G201	締帯部材 横架材	削材	244.5	25.5	11.1	0614	
河原104-328	C2	SC41-42	56	締帯部材 横架材	削材	エノキ属	215.0	26.8	11.4	0616
河原104-329	B2	SC1009	19	締帯部材 横架材	削材	クリ	180.0	21.9	8.8	0615
河原105-330	C	SA01	G202	締帯部材 横架材	削材	クリ	183.4	21.6	8.4	0625
河原105-331	A3	SC02	1010	締帯部材 横架材	削材	クリ	199.2	28.0	14.4	0618
河原106-332	B2	SC123	127	締帯部材 横架材	削材	クリ	82.3	39.1	11.8	0633
河原106-333	C	SA01	G76	締帯部材 横架材	板材	ヤマザクラ	122.6	20.7	6.7	0627
河原106-334	C	SA01	E144	締帯部材 横架材	削材	クリ	99.4	17.2	8.5	0623
河原106-335	C	SA01	E148-2	締帯部材 横架材	削材	コナラ属	78.4	16.2	10.1	0628
河原107-336	B2	SC140	8	締帯部材 横架材	板材(板目)	カンボナレ属	173.2	27.4	6.6	0621
河原107-337	C	SA01	A11	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	154.0	18.1	8.4	0622
河原107-338	B2	SC123	7	締帯部材 横架材	角材	クリ	121.0	7.4	8.9	0630
河原108-339	C	SA01	G202	締帯部材 横架材	板材(板目)	クリ	44.5	17.9	8.9	0631
河原108-340	C	SA01	G202	締帯部材 横架材	板材(板目)	カンボナレ属	24.4	16.5	8.0	0629
河原108-341	B2	SC113	35	締帯部材 横架材	削材	コナラ属	76.8	13.3	6.2	0632
河原108-342	A3	SD101	木枠 1-b	締帯部材 横架材	板材(板目)	アカマツ	63.9	13.2	3.0	0663
河原108-343	C	SA01	E104	締帯部材 横架材	板材(板目)	ニレ属	165.1	22.2	4.7	0693

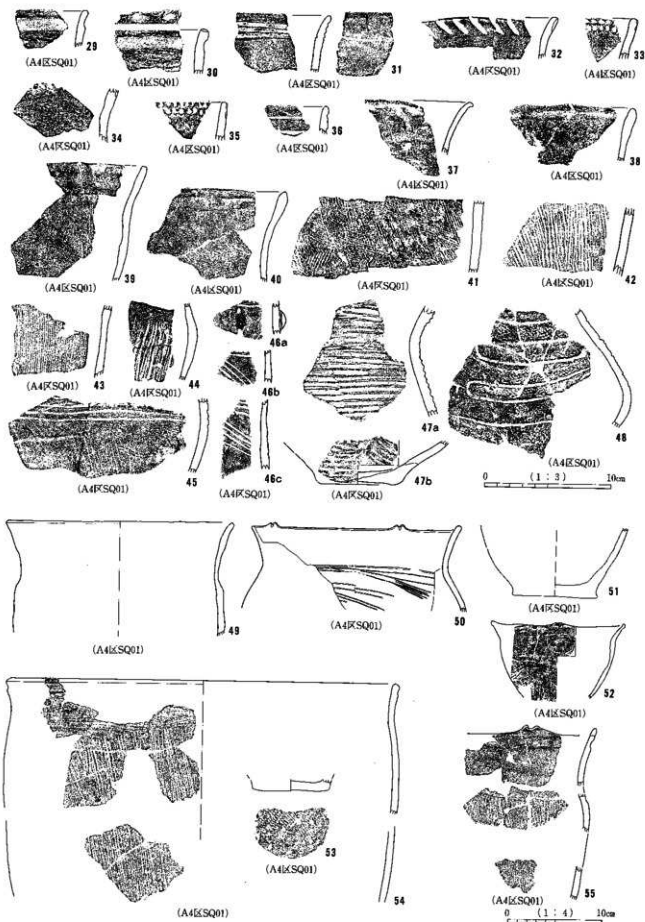
古川人煙の上 北朝橋
道より。

図面番号	地区名	道橋名	取上番号	詳細分類	手法	樹種	長さ・ 直径 (cm)	幅 (cm)	深さ・ 高さ (cm)	設置番号	備考
図面109-344	B2	SC1004	6	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	コナラ節	348.8		8.8	0962	
図面109-345	C1	SC52	1	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	不明	498.8		9.6	0907	
図面109-346	C1	SC52	2	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	不明	416.0		9.4	0908	
図面110-347	B2	SC1005	48	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	モミ属	262.0		8.4	1604	
図面110-348	B2	SC1005	16	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	コナラ節	127.8		7.3	0683	
図面110-349	A3	SC09	30	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	カエデ属	41.0	6.5	5.1	1611	
図面110-350	A3	SC09	6	護岸部材 厚板材(重木)	丸太材 芯もち	カヤ	167.4		7.3	0899	
図面111-351	C2	SC05	W5	護岸部材 竹炭材(滑子)	割材	コナラ属	256.0	20.7	14.5	0905	
図面112-352	A3	SC04	28	護岸部材 竹炭材(滑子)	割材	キハダ	181.0	14.4	10.0	0643	
図面112-353	C2	SC31	20	護岸部材 竹炭材(滑子)	角材	クリ	180.9	23.6	15.4	1616	
図面113-354	C2	SC41-42	41	護岸部材 竹炭材 (マセヒ)	角材	クリ	99.2	15.6	6.0	1605	
図面113-355	E2	SA01	19	護岸部材 加工材	割材	エノキ属	110.0	10.8	5.6	0950	
図面113-356	C1	外周トレンチ	17	護岸部材 加工材	板材(板目)	モミ属	152.4	11.6	5.2	0951	
図面113-357	B2	SC135	4	護岸部材 加工材	割材	クリ	173.6	9.6	8.5	0911	
図面114-358	B2	SC1010	2	護岸部材 加工材	丸太材 芯もち	カヤ	332.4		13.6	0561	
図面114-359	E2	SA01	68	護岸部材 加工材	丸太材 芯もち	クリ	244.5		15.2	0919	
図面114-360	B2	SC113	6	護岸部材 加工材	丸太材 芯もち	カヤ	266.0		11.2	0920	
図面114-361	C 外周トレンチ	13	護岸部材 加工材	丸太材 芯もち	クリ	196.0		10.0	0976		
図面115-362	C1	SC52	25	護岸部材 加工材	割材	コナラ節	247.6	16.8	10.4	0917	
図面115-363	C	SA01	A6	護岸部材 加工材	割材	カツラ	226.0	20.0	11.2	0955	
図面115-364	B2	SC1010	4	護岸部材 加工材	割材	クリ	136.4	6.0	3.6	0975	
図面115-365	C 外周トレンチ			護岸部材 加工材	割材	クリ	155.2	10.0	12.0	0957	
図面115-366	C2	SC41-42	64	護岸部材 加工材	割材	クリ	166.8	14.4	8.0	0918	
図面115-367	C2	SC03	5	護岸部材 加工材	割材	クリ	204.8	7.2	6.8	0915	
図面115-368	C2	SC05	K19	護岸部材 加工材	板材(板目)	クリ	200.4	11.2	7.2	0916	
図面116-369	D1	SC1001	K109	杭	丸太材 芯もち	カヤ	119.4		10.9	0701	
図面116-370	C	SA01	B57	杭	丸太材 芯もち	カヤ	134.2		12.4	0740	
図面116-371	C	SA01	G77	杭	丸太材 芯もち	カヤ	151.6		13.2	0972	
図面116-372	D1	SC1001	K102	杭	丸太材 芯もち	カヤ	176.0		9.6	0924	
図面116-373	C	SA01	D3	杭	丸太材 芯もち	コナラ節	194.8		14.0	0968	
図面116-374	C2	SC05	K21	杭	丸太材 芯もち	モミ属	188.5		5.8	0744	
図面116-375	C2	SC05	K18	杭	丸太材 芯もち	モミ属	181.0		6.0	0750	
図面116-376	C2	SC05	K22	杭	丸太材 芯もち	モミ属	166.0		7.5	0742	
図面116-377	C2	SC05	K23	杭	丸太材 芯もち	モミ属	146.0		6.3	0748	
図面116-378	E2	SA01	18	杭	丸太材 芯もち	エノキ属	104.8		11.6	0965	
図面116-379	C	SA01	E14	杭	丸太材 芯もち	カヤ	90.9		10.2	0705	
図面117-380	B2	SD168	杭1	杭	丸太材 芯もち	カヤ	79.9	7.3	9.0	0704	モミ属の可能性あり。
図面117-381	A3	SA101	杭3	杭	丸太材 芯もち	アブキ	19.6		4.2	0734	
図面117-382	B2	中世枕列	2	杭	丸太材 芯もち	スギ	92.0		10.0	0566	
図面117-383	D3	SC04	13	杭	割材	カヤ	154.4	12.4	5.8	0932	
図面117-384	D3	SC04	11	杭	割材	カヤ	155.5	15.0	9.6	0931	
図面117-385	C	SA01	C56	杭	角材	クリ	177.6	12.4	7.6	0969	
図面117-386	C2	SC43	105	杭	割材 1/2	カヤ	167.5	8.2	4.7	0749	
図面117-387	C	SA01	H3	杭	割材	クリ	173.6	23.6	14.4	0960	
図面117-388	C	SA01	C47 1/3	杭	割材 1/2	クリ	88.5	22.0	11.8	0741	
図面117-389	C2	SC05	K302	杭	割材	モミ属	149.2	8.0	4.8	0967	
図面117-390	C2	SC05	K73	杭	割材	モミ属	173.5	8.8	4.8	0933	
図面118-391	E2	SA01	16	杭	丸太材 芯もち	エノキ属	117.6		11.2	0958	
図面118-392	C	SA01	E57	杭	割材	クリ	139.6	13.6	10.4	0973	
図面118-393	C	SA01	C32	杭	割材	クリ	171.6	22.0	10.0	0974	
図面118-394	C	SA01	R26	杭	割材	クリ	145.0	10.2	10.9	0747	
図面118-395	E2	SA01	23	杭	割材	フジ	106.0	8.0	5.6	0970	
図面118-396	B2	SC1002	16	杭	丸太材 芯もち	モミ属	170.8		8.0	0964	
図面118-397	C1	SC51	5	護岸部材 薄板材	割材 1/2	カエデ属	270.0	17.5	9.4	1610	図面94-288と同一体。

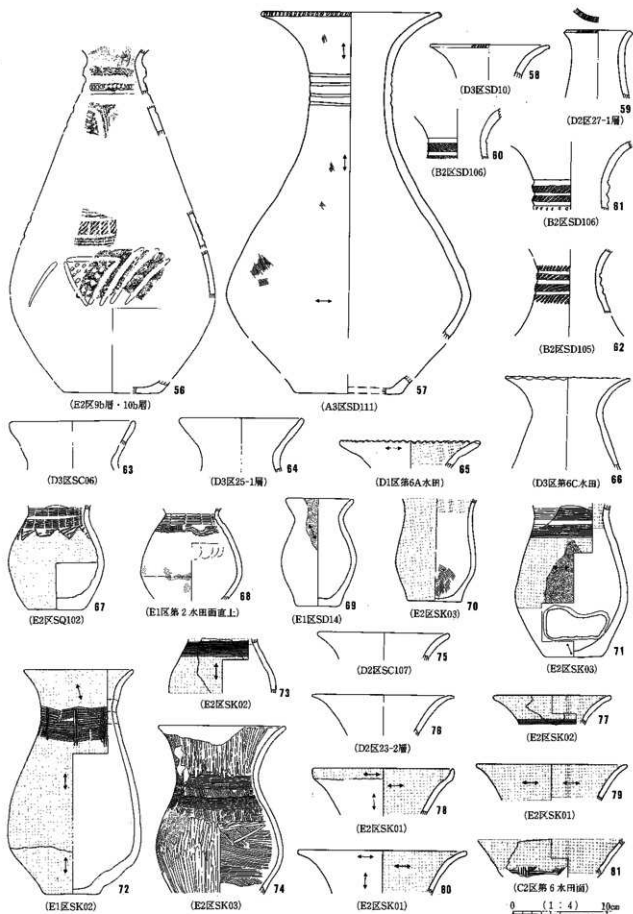
遺物圖版



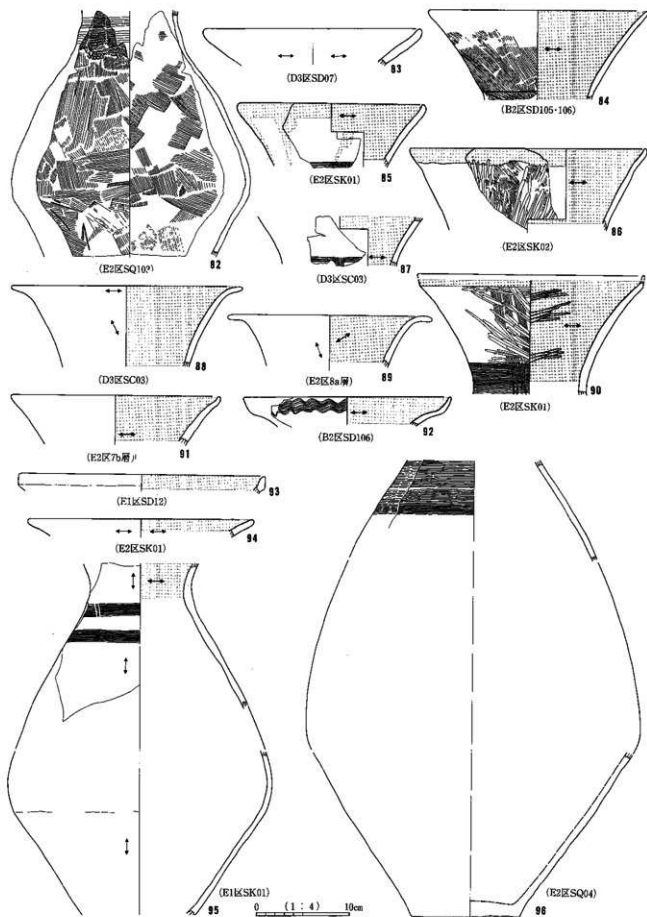
縄文時代晩期の土器 (1)



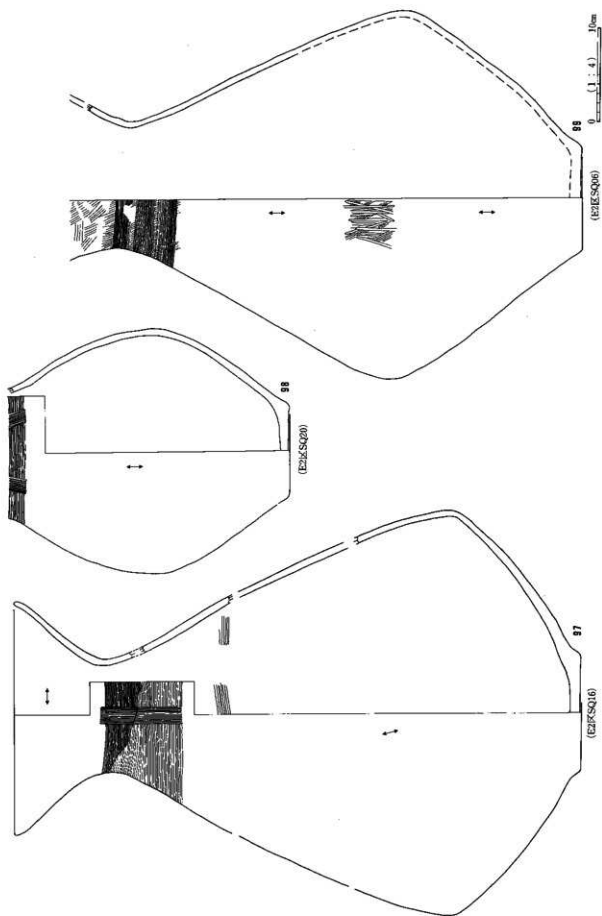
縄文時代晩期の土器 (2)



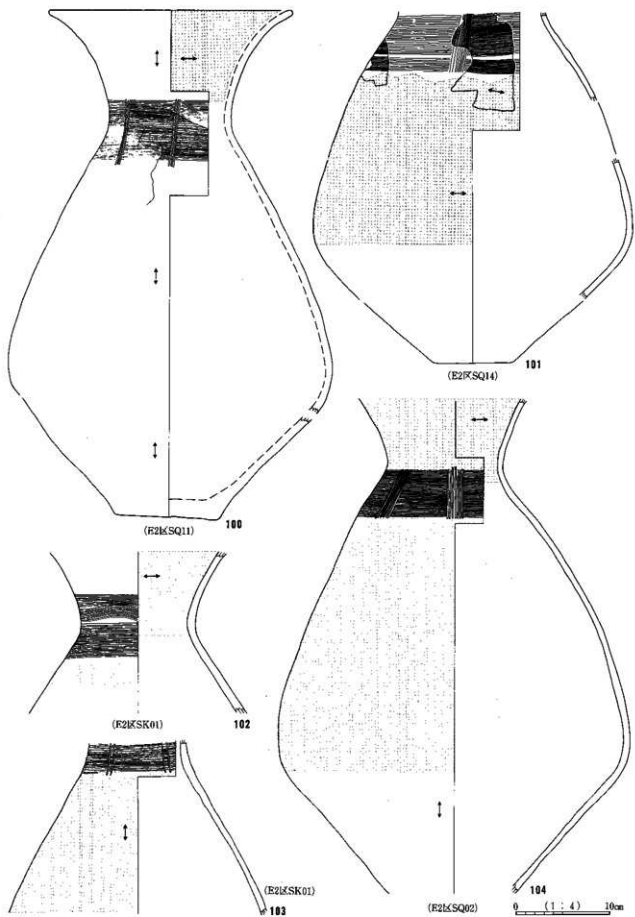
弥生時代の土器 (1)



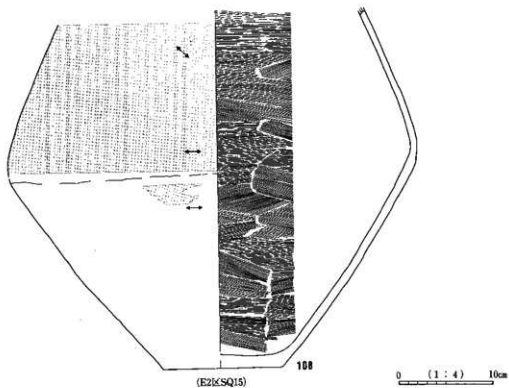
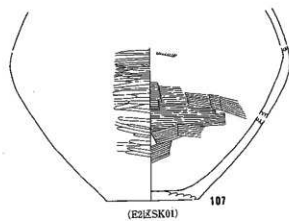
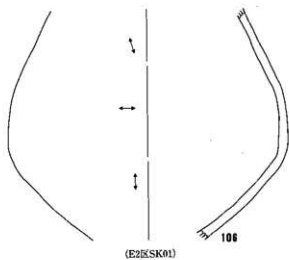
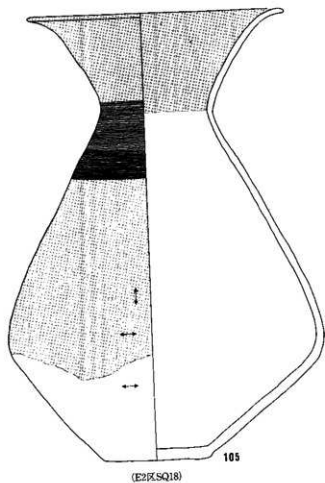
弥生時代の土器 (2)



弥生時代の土器 (3)

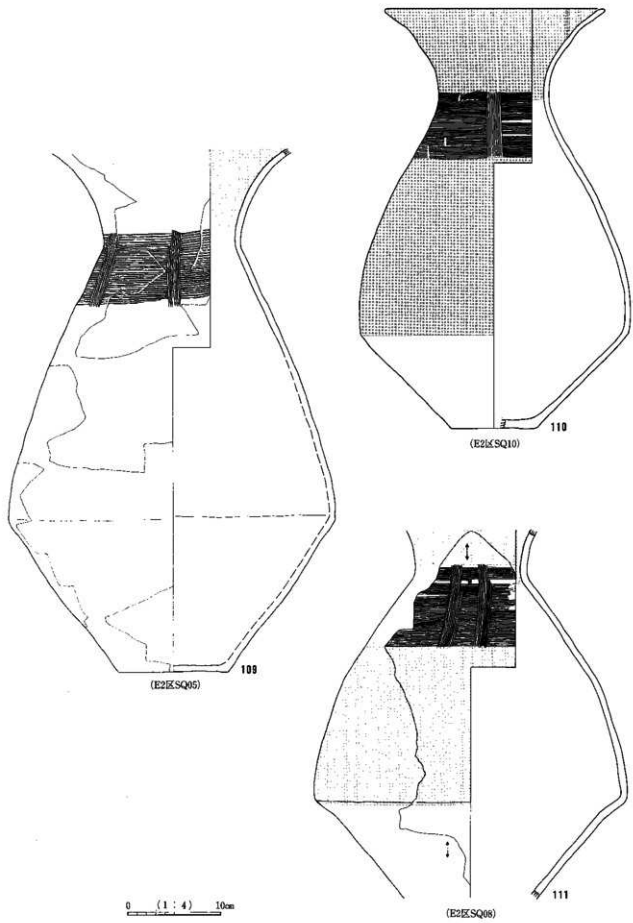


弥生時代の土器 (4)

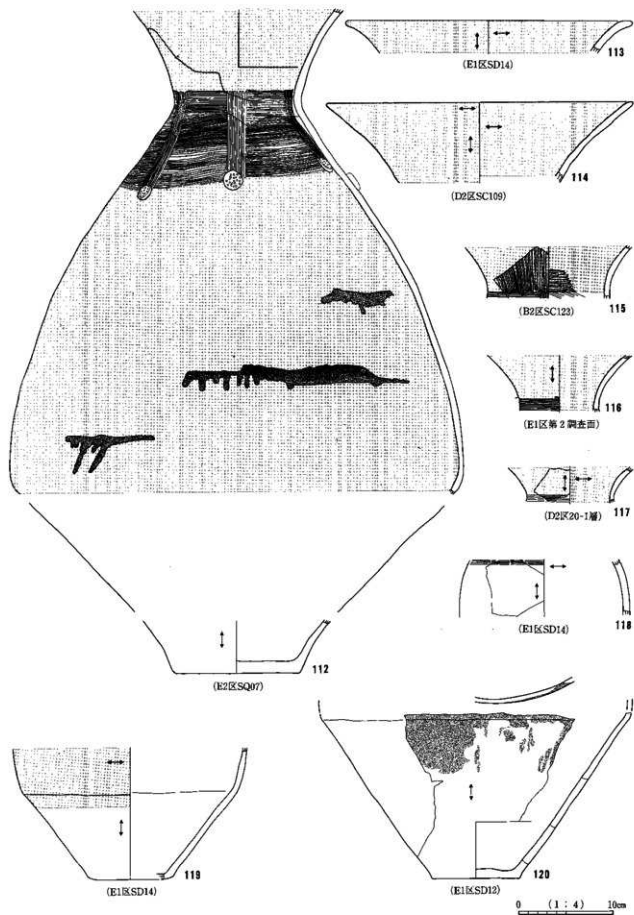


0 (1:4) 10cm

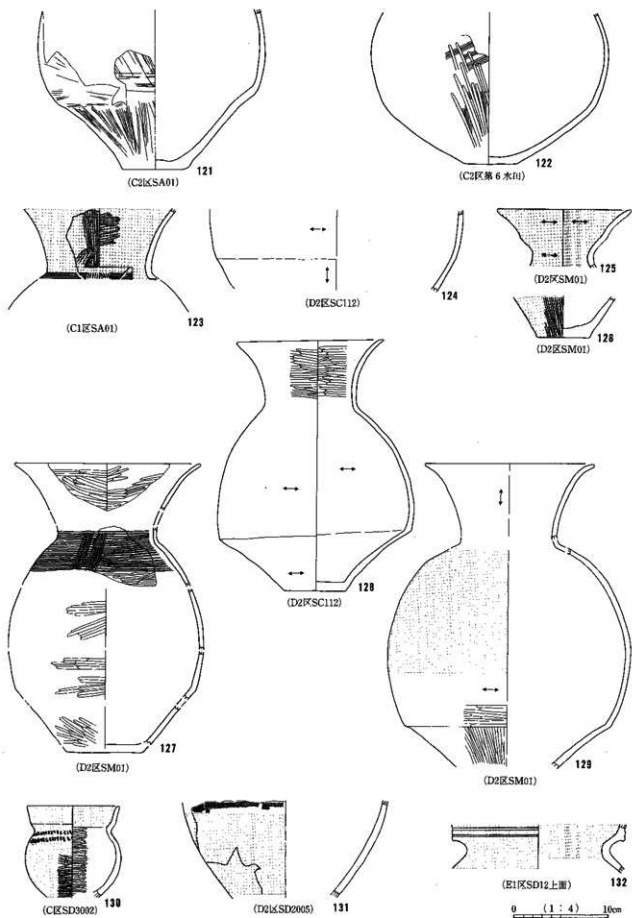
弥生時代の土器 (5)



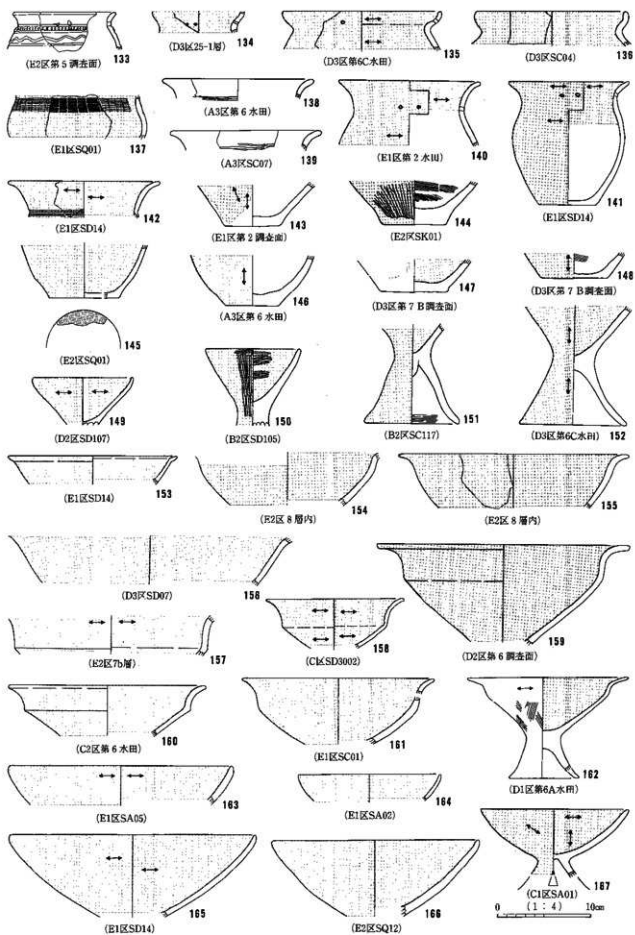
弥生時代の土器 (6)



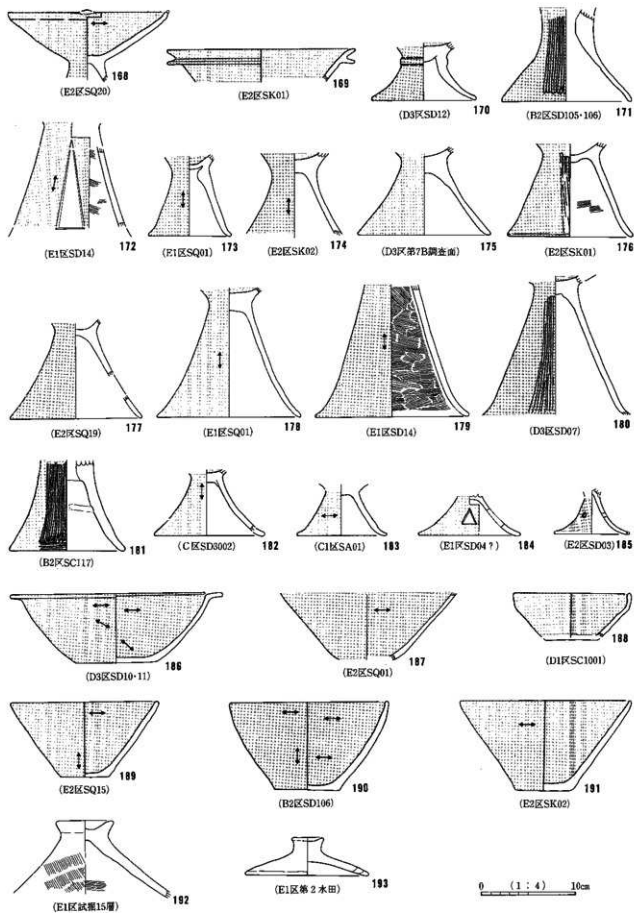
弥生時代の土器 (7)



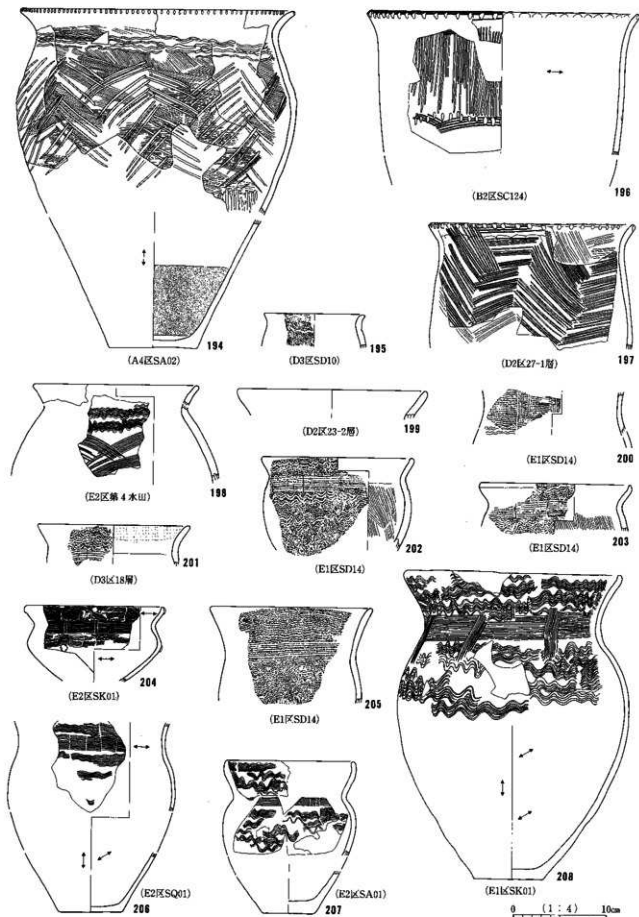
弥生時代の土器 (8)



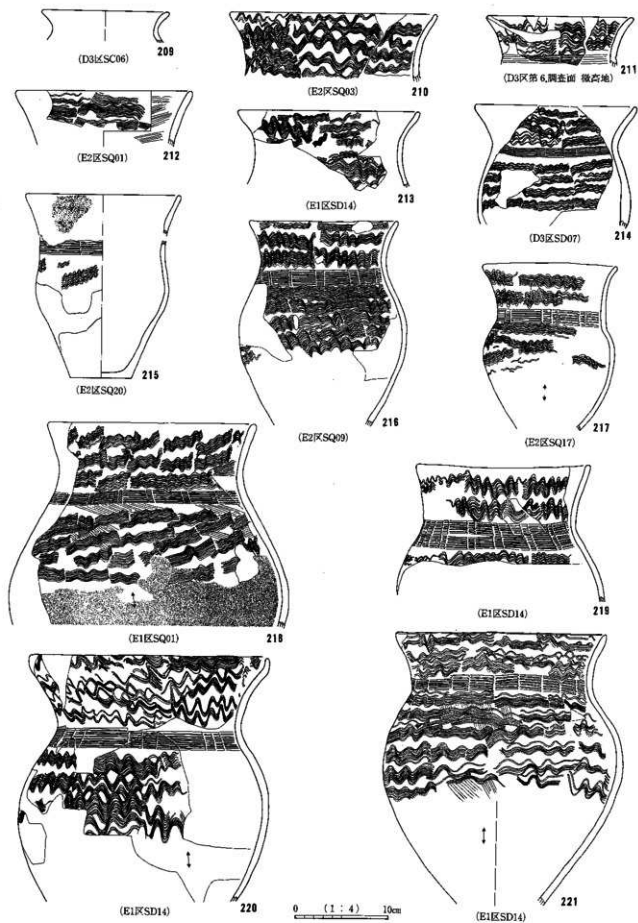
弥生時代の土器(9)



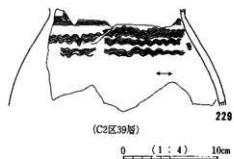
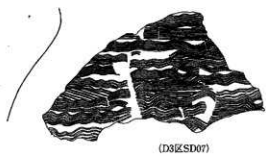
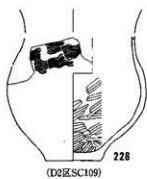
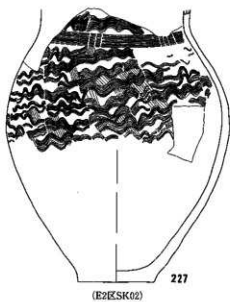
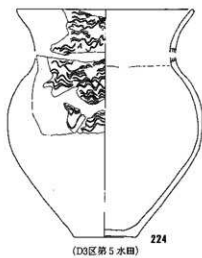
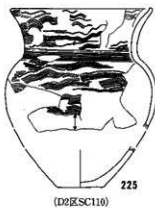
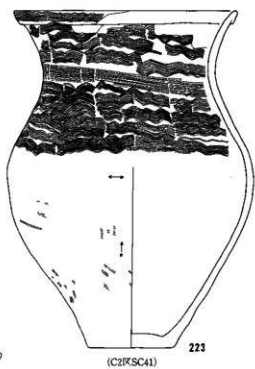
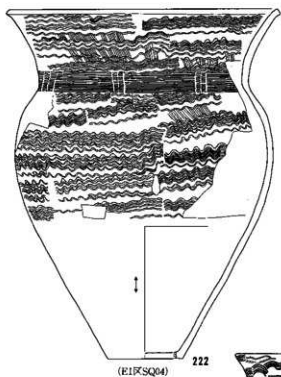
弥生時代の土器 (10)



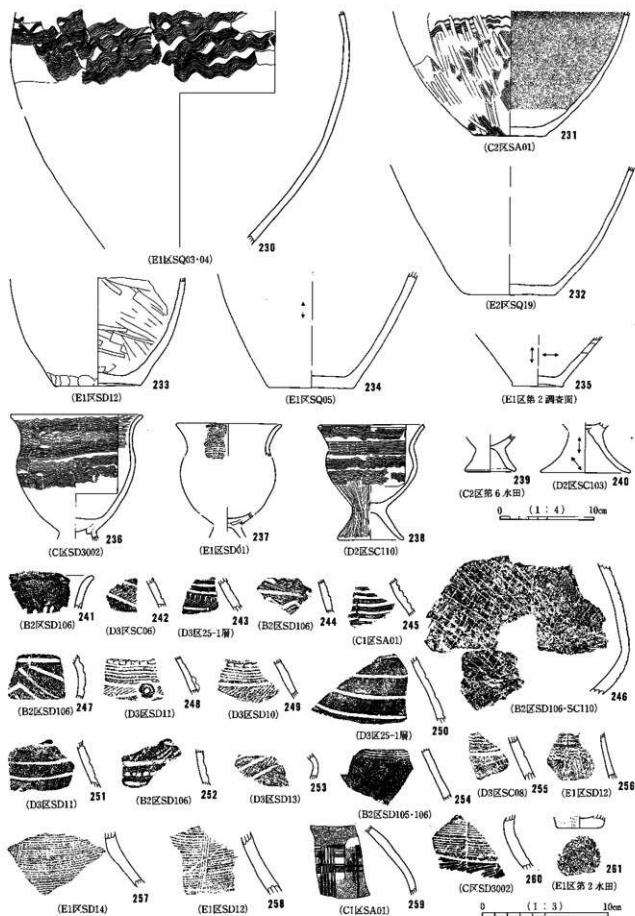
弥生時代の土器 (11)



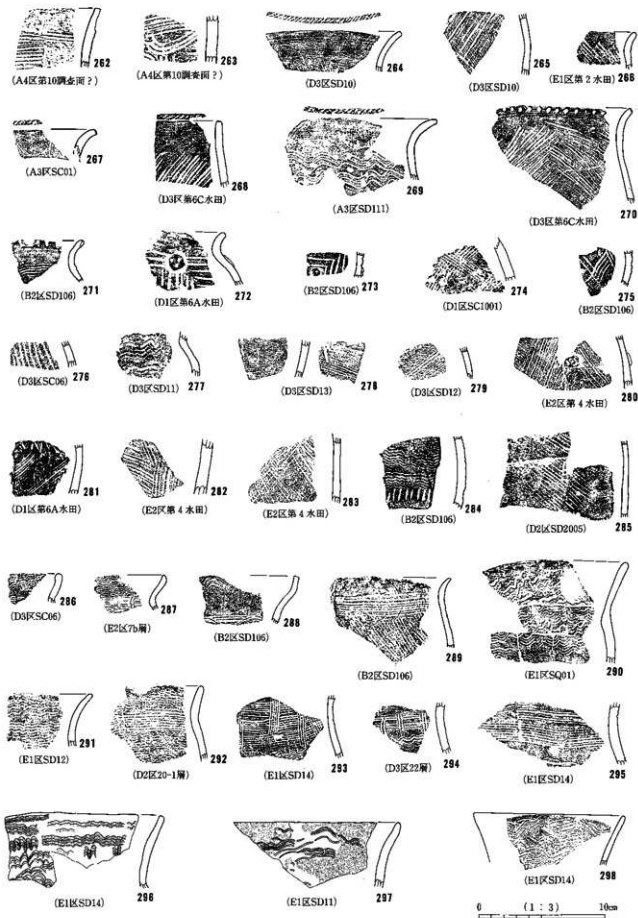
弥生時代の土器 (12)



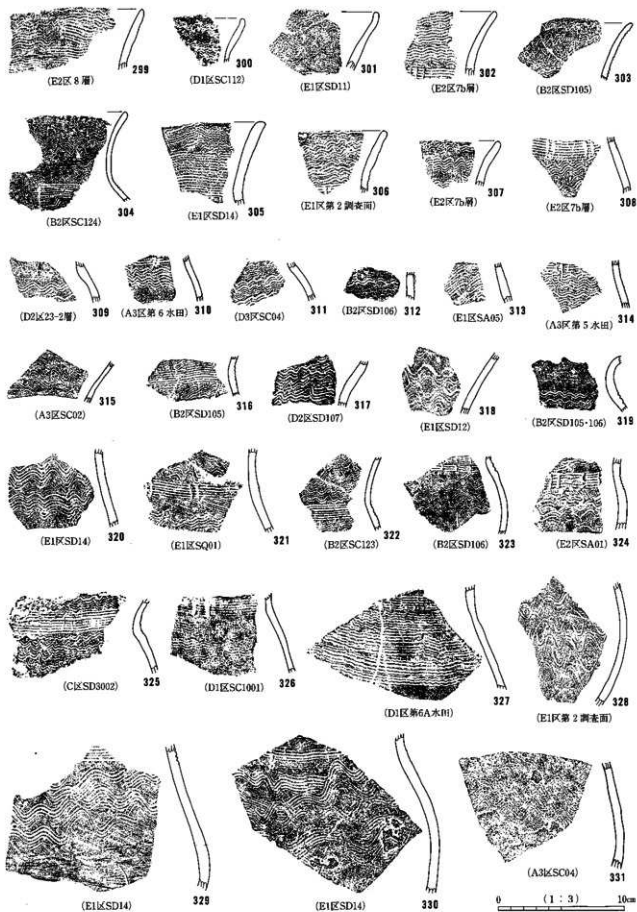
弥生時代の土器 (13)



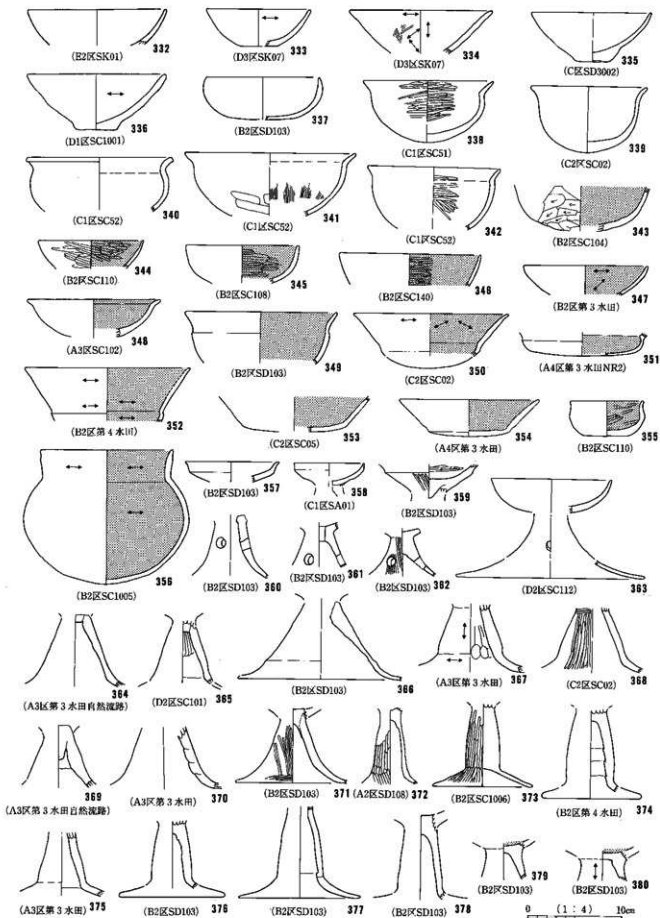
弥生時代の土器 (14)



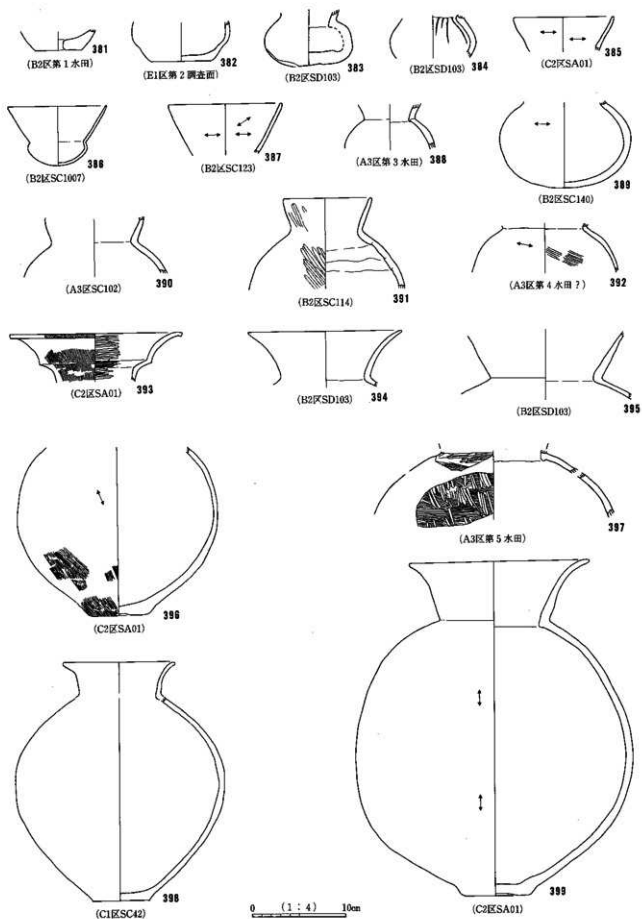
弥生時代の土器 (15)



弥生時代の土器 (16)

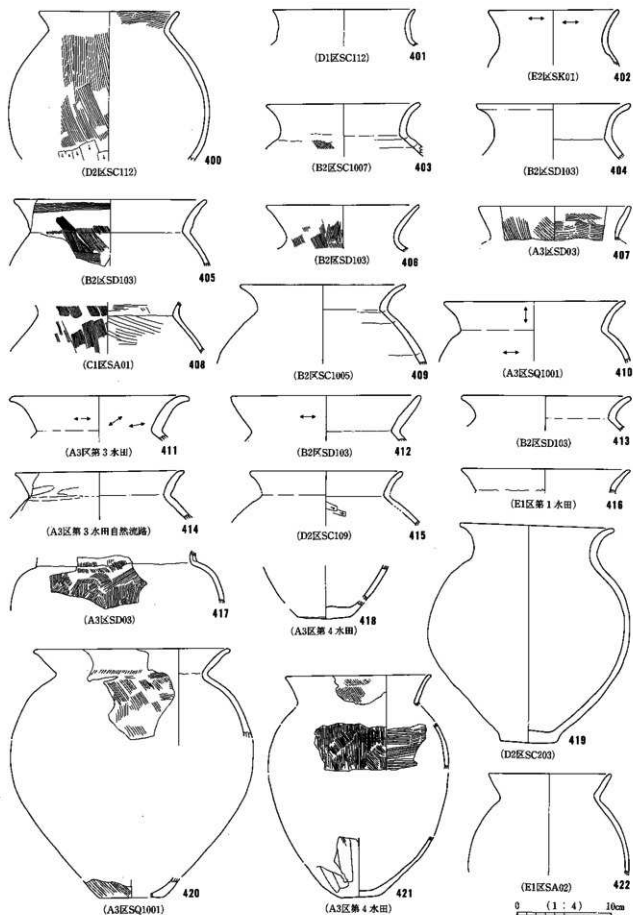


古墳時代の土器 (1)

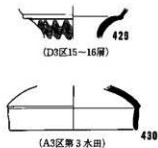
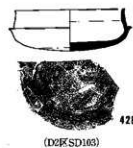
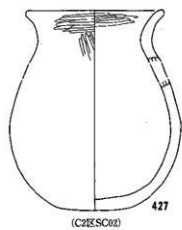
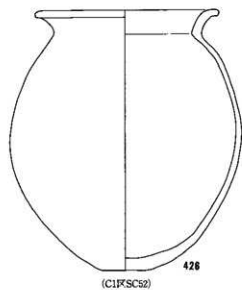
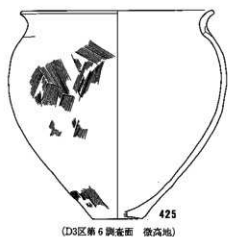
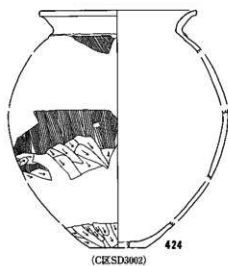
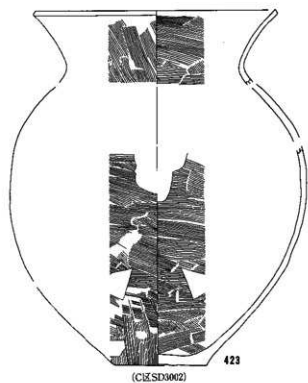


0 (1:4) 10cm

古墳時代の土器(2)

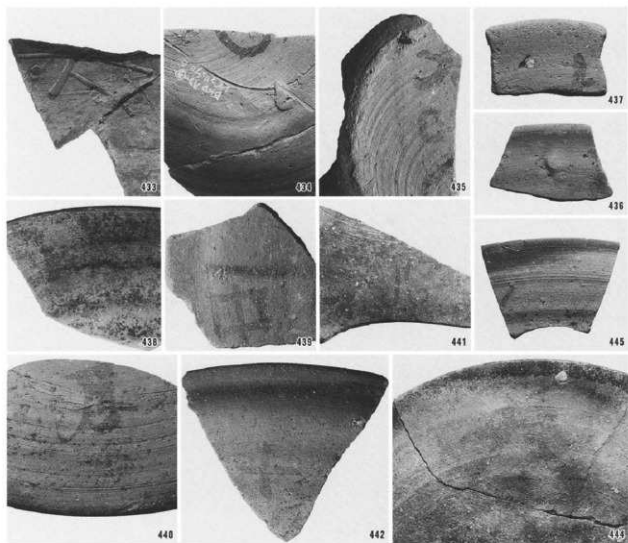
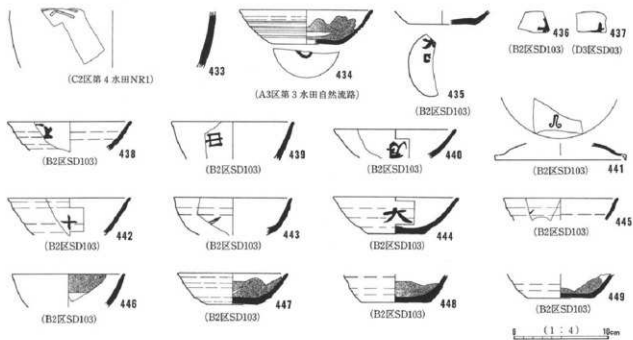


古墳時代の土器 (3)

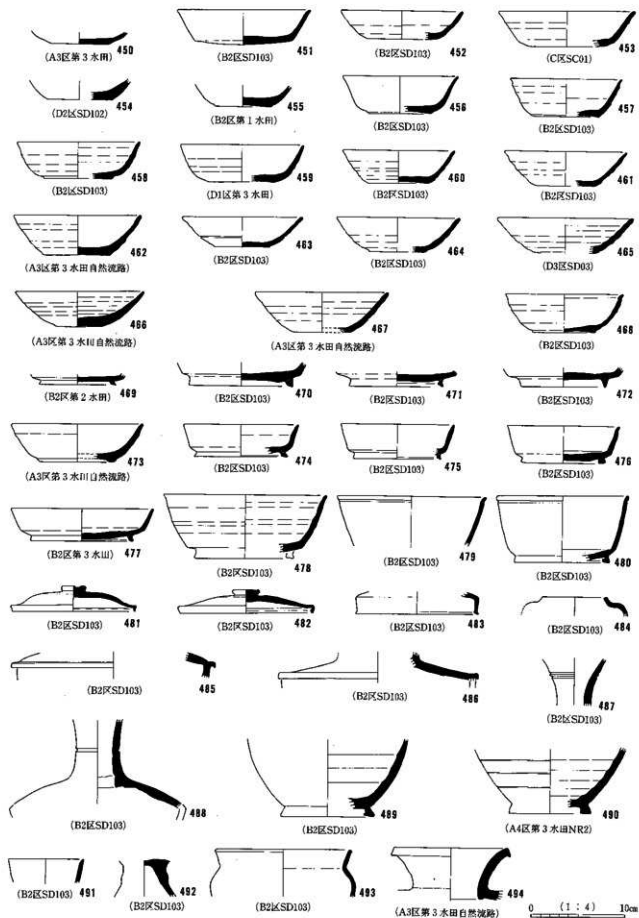


0 (1:4) 10cm

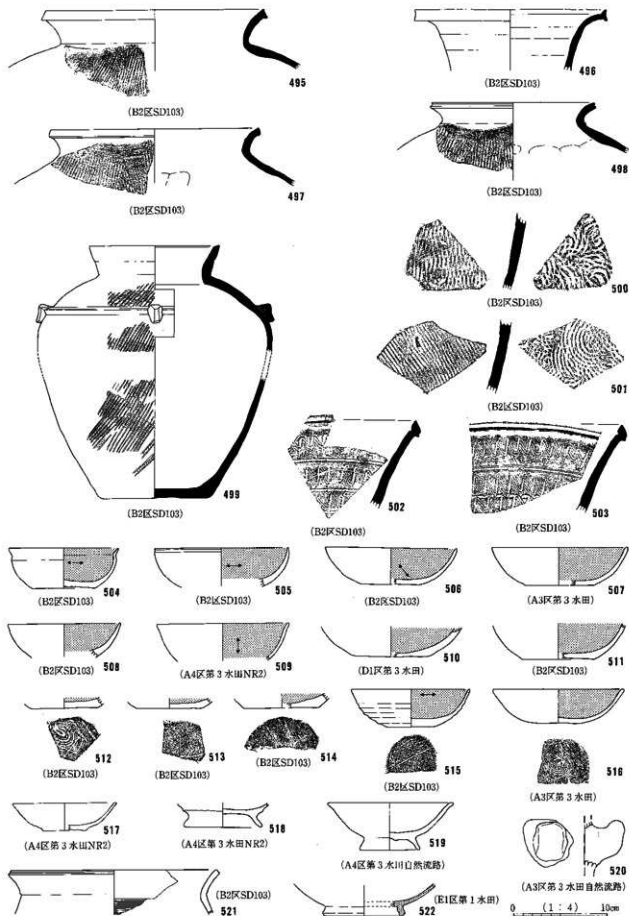
古墳時代の土器(4)



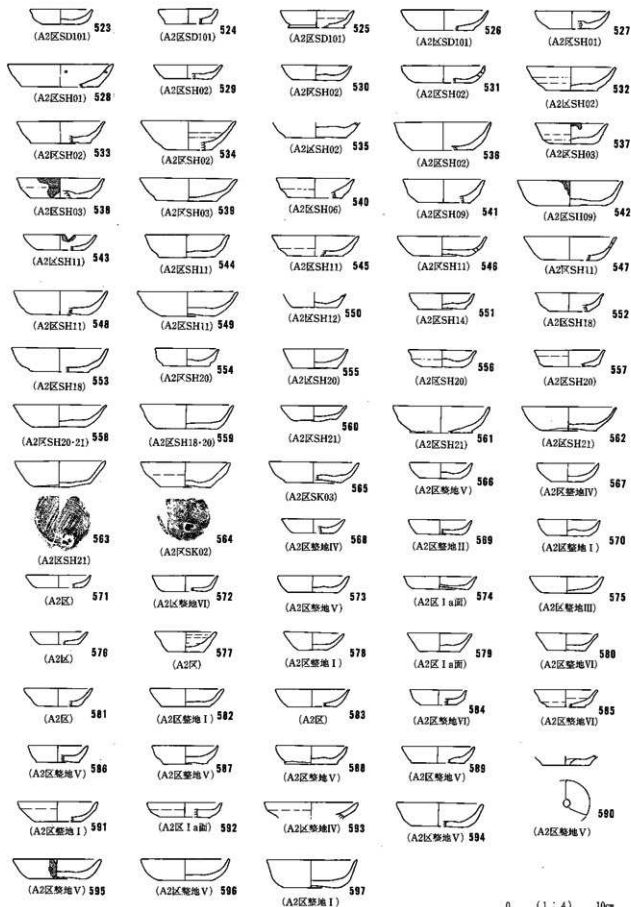
奈良・平安時代の土器 (1)



奈良・平安時代の土器(2)

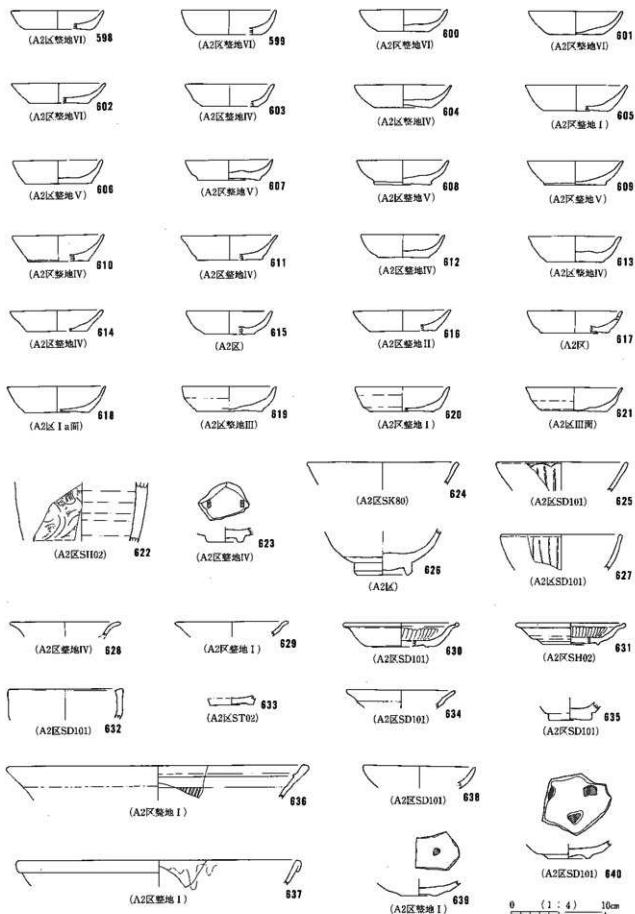


奈良・平安時代の土器(3)

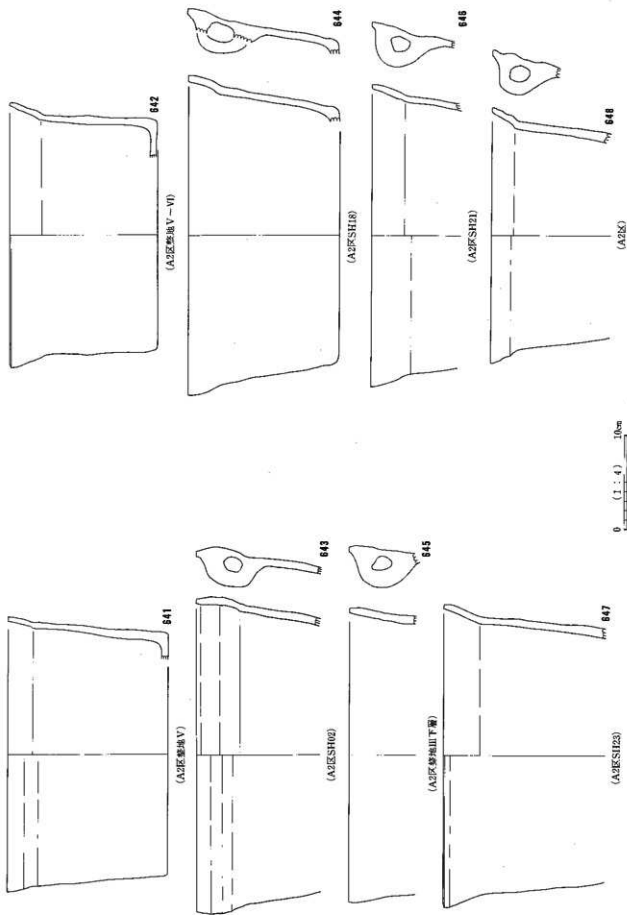


0 (1:4) 10cm

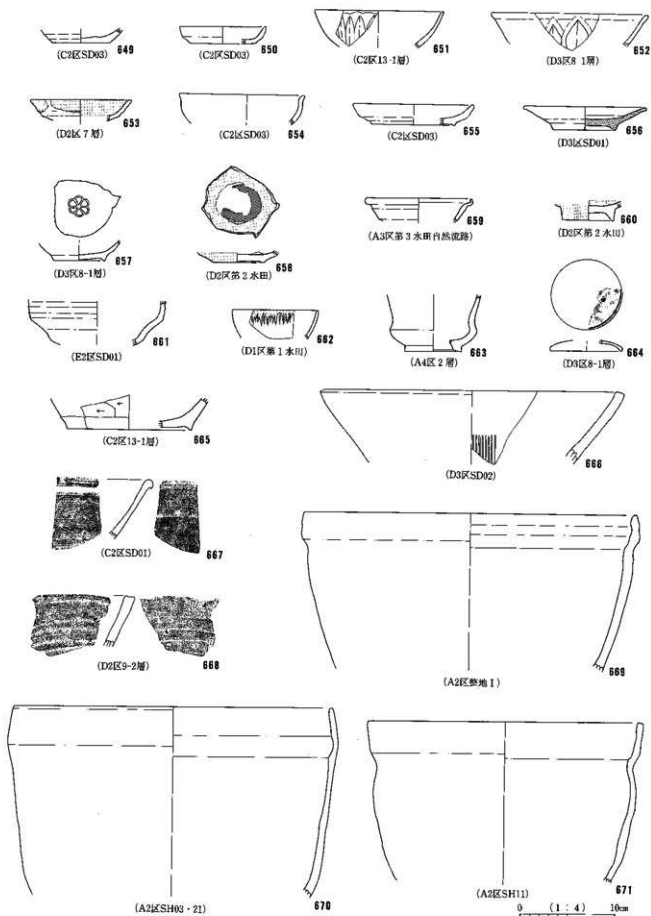
中世・近世の焼物 (1)



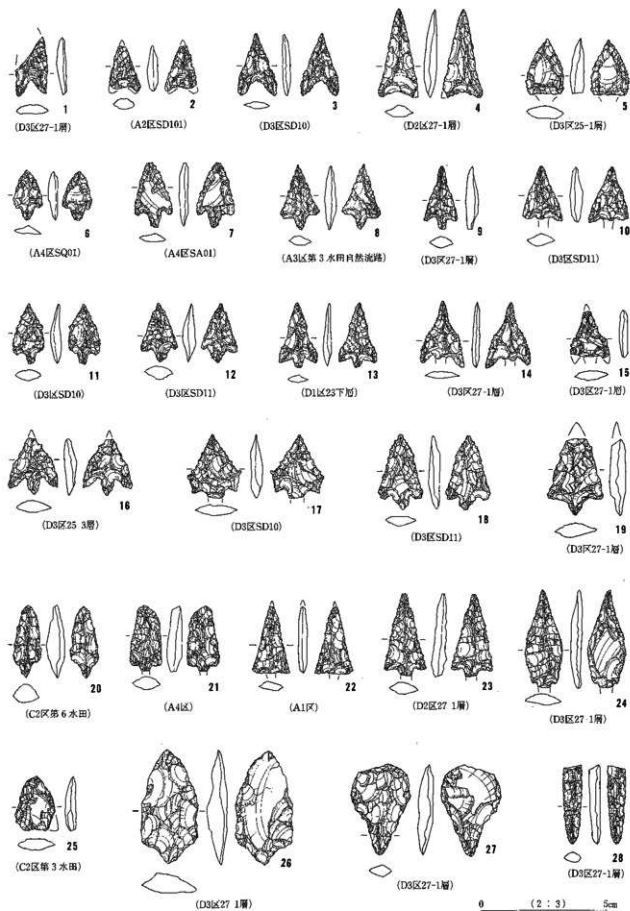
中世・近世の焼物(2)



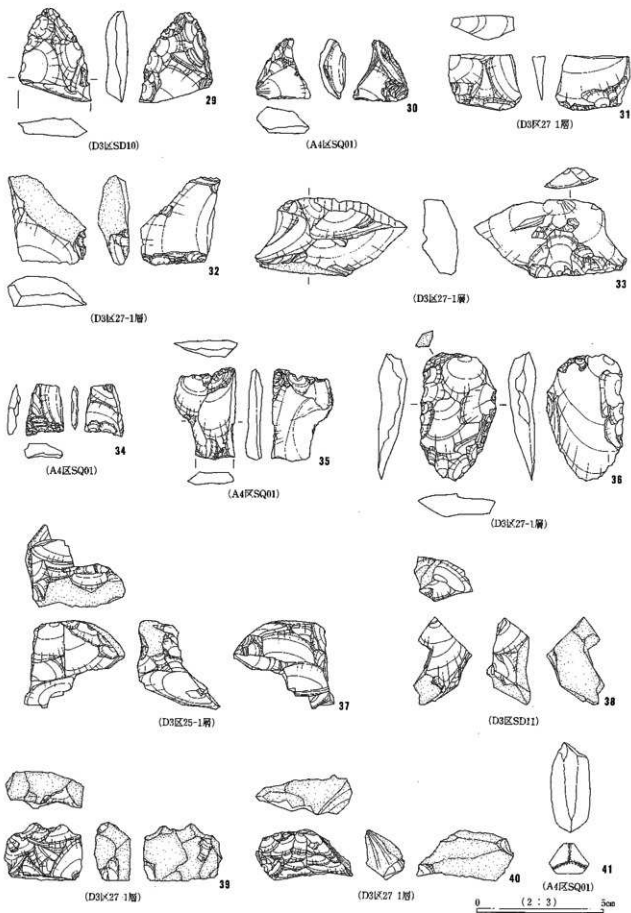
中世・近世の焼物 (3)



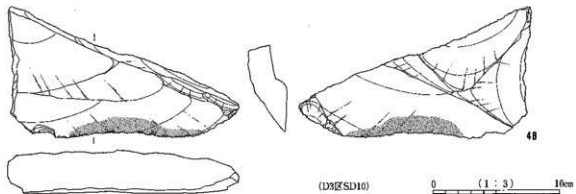
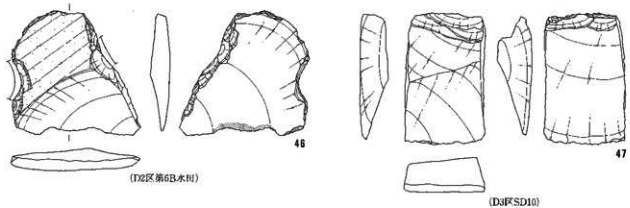
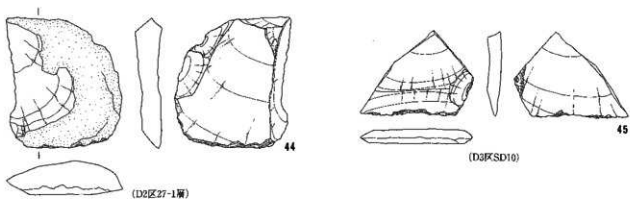
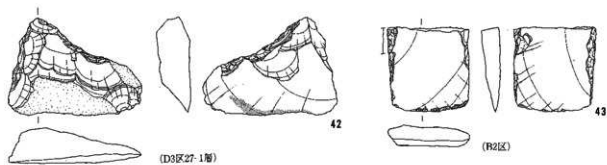
中世・近世の焼物 (4)



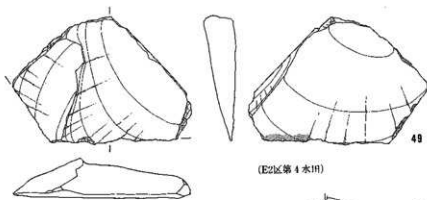
石器 (1)



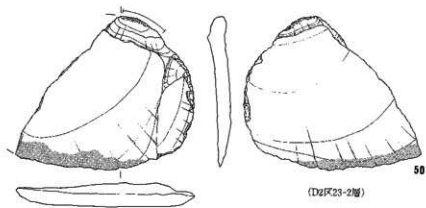
石器(2)



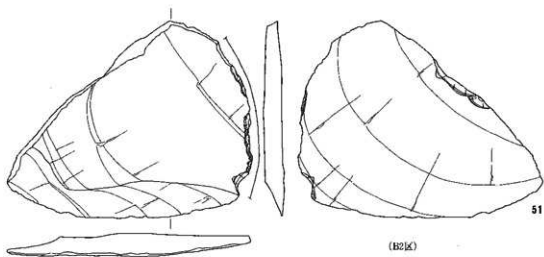
石器 (3)



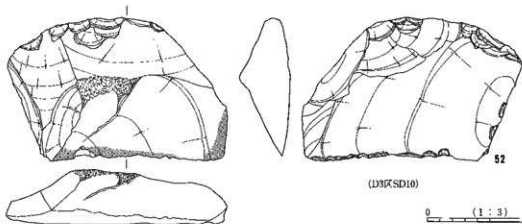
(E2区第4水田)



(D2区23-2層)



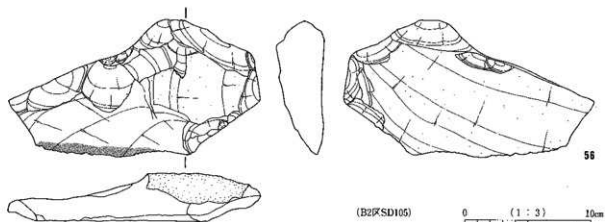
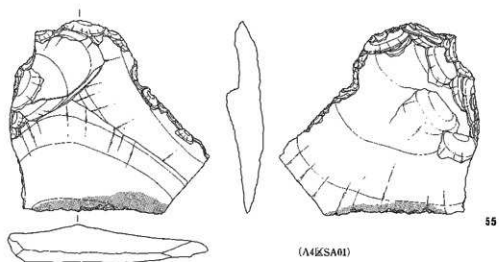
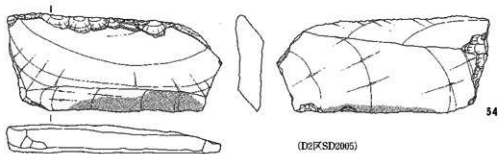
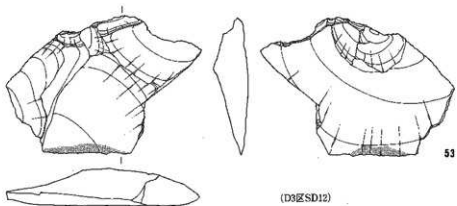
(B2区)



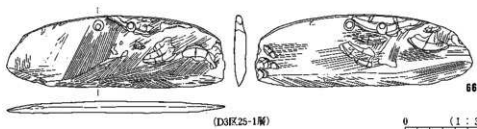
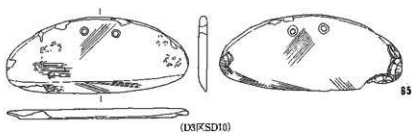
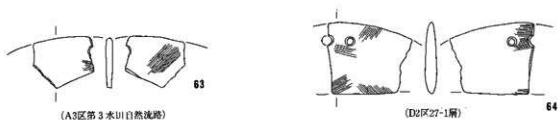
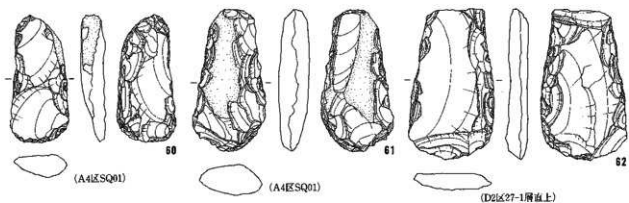
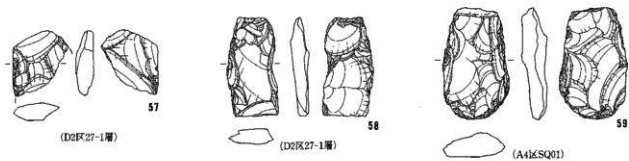
(D1区SD10)

0 (1:3) 10cm

石器 (4)

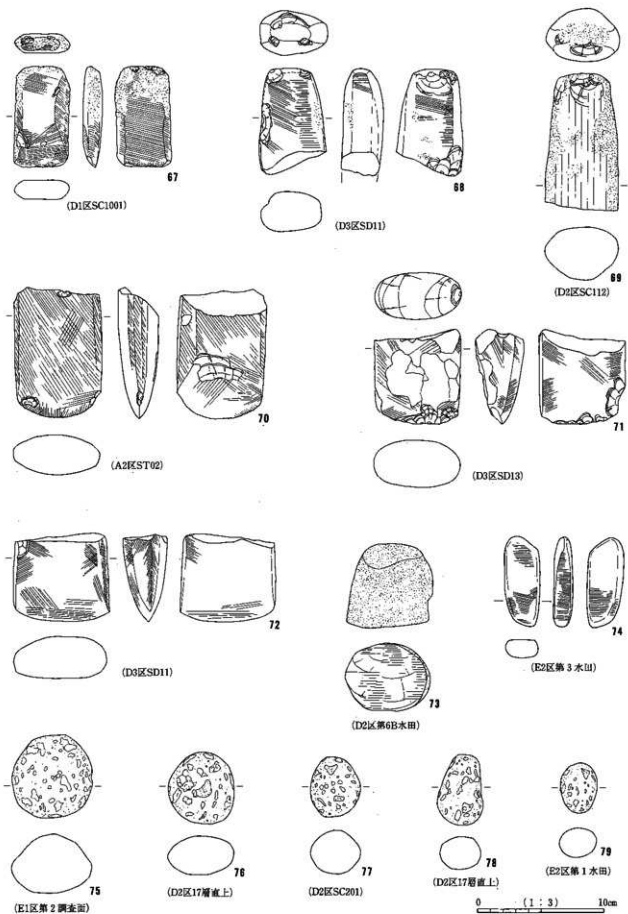


石器 (5)

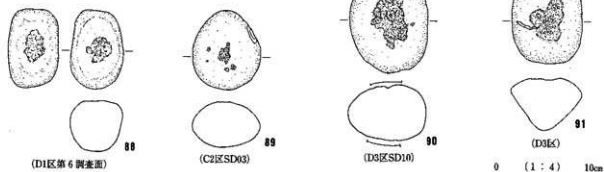
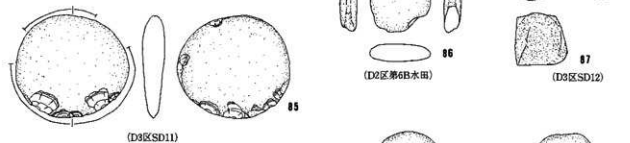
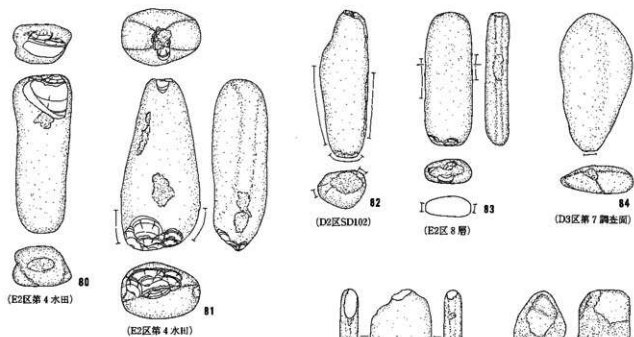


0 (1:3) 10cm

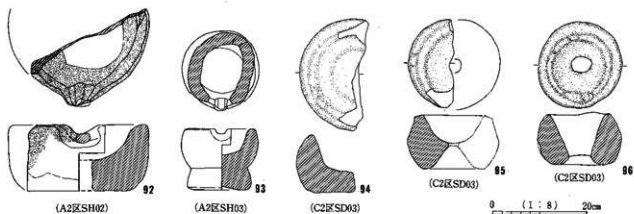
石器 (6)



石器(7)

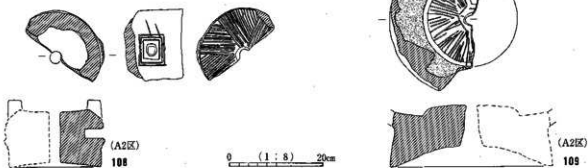
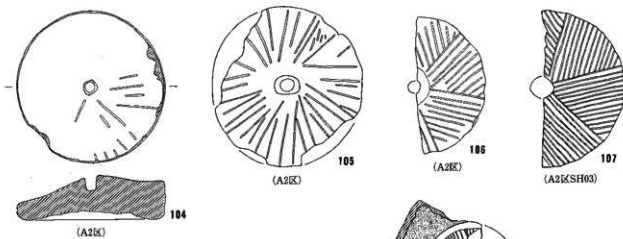
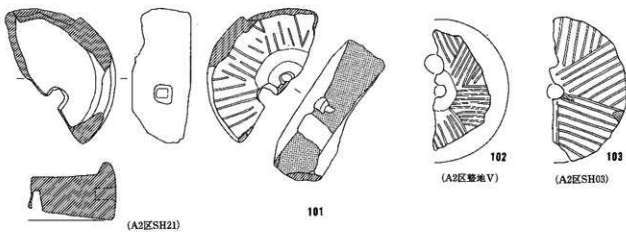
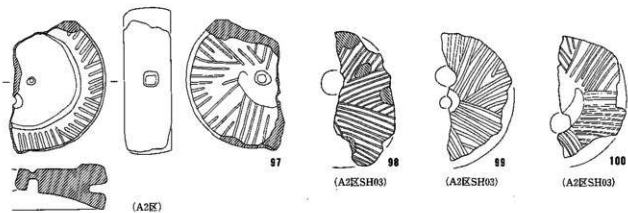


0 (1:4) 10cm



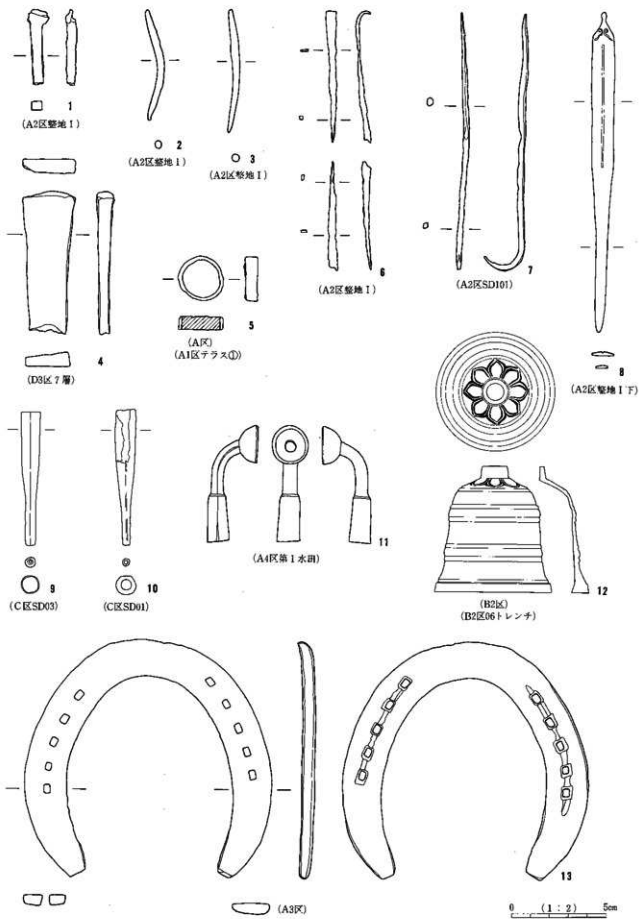
0 (1:8) 20cm

石器(8)

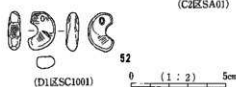
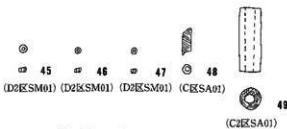
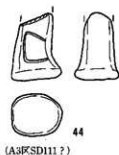
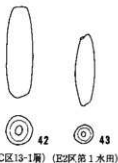
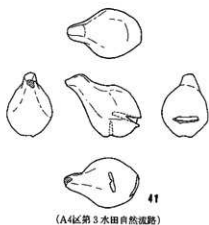
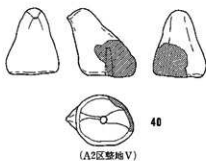
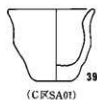
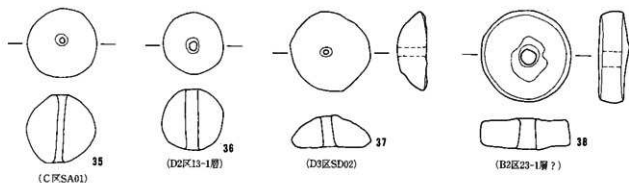
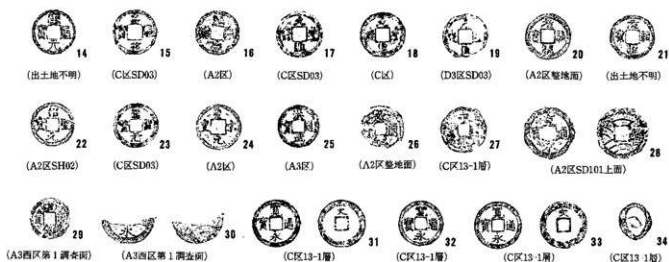


0 (1:8) 20cm

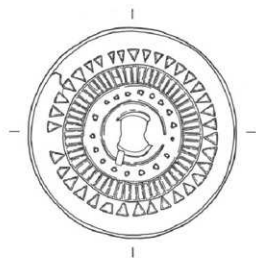
石器 (9)



金属器 (1)



金属器(2) 土製品・石製品

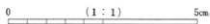


1



(E2E3C38)

53



处理前



处理前(侧面)

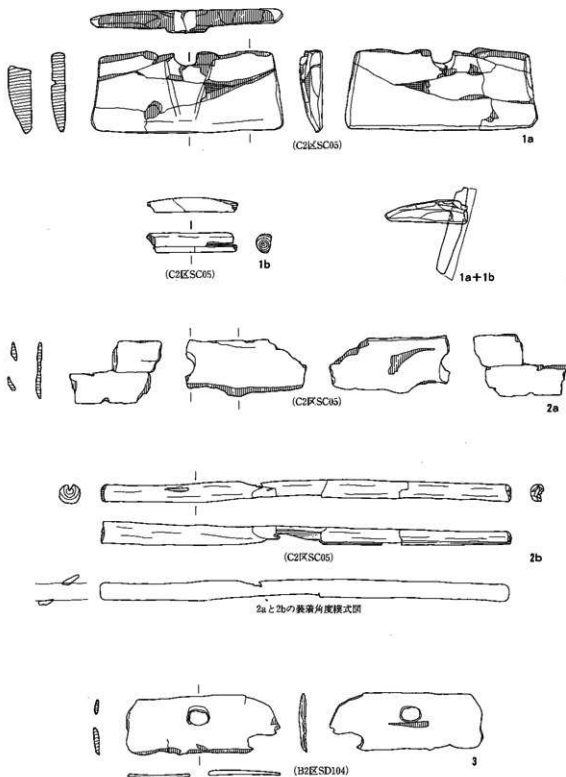


处理后



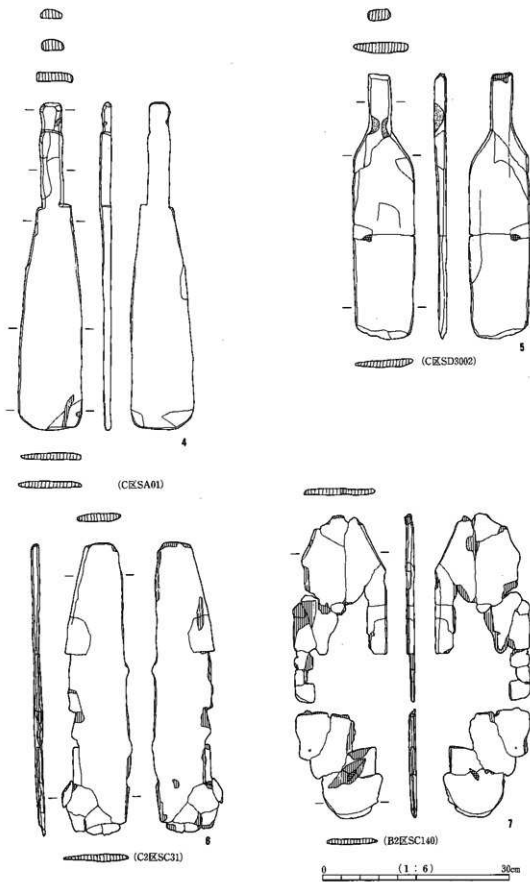
处理后(×2)

金属器(3)

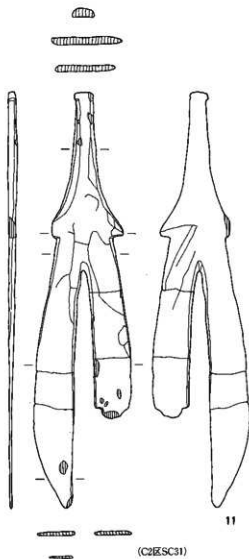
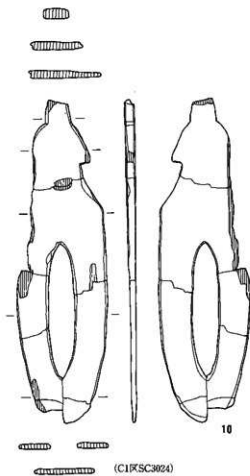
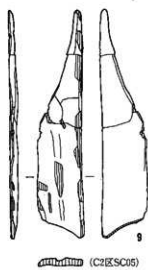
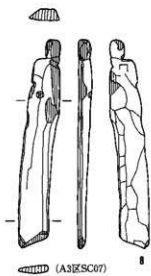


0 (1:6) 30cm

木製品1 (農具)

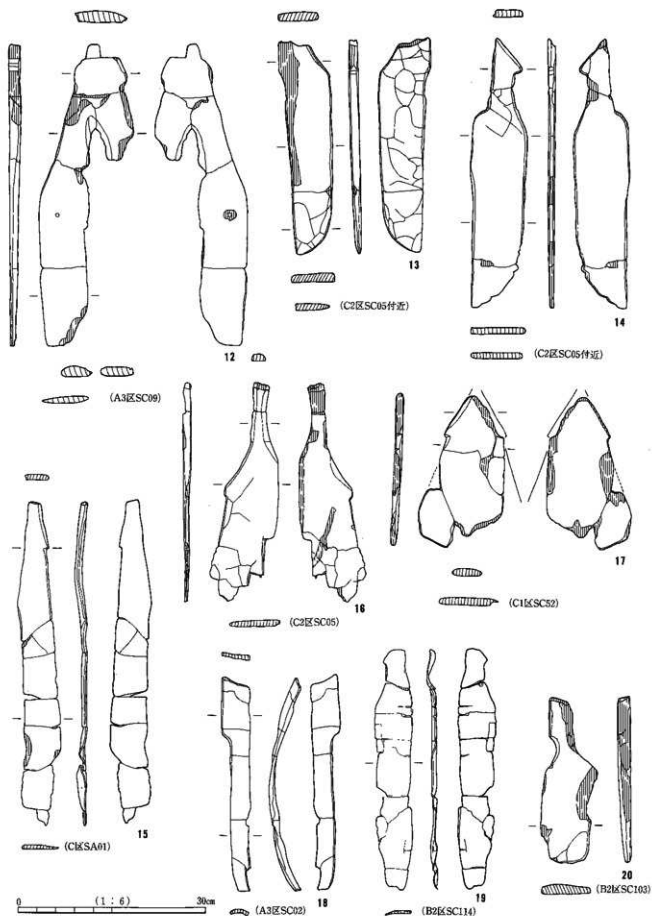


木製品 2 (農具)

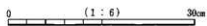
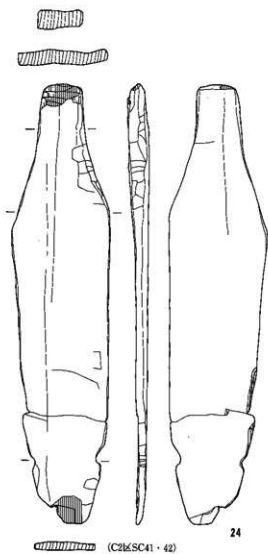
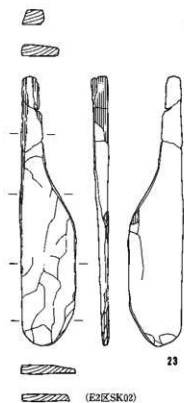
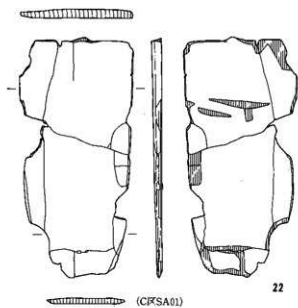
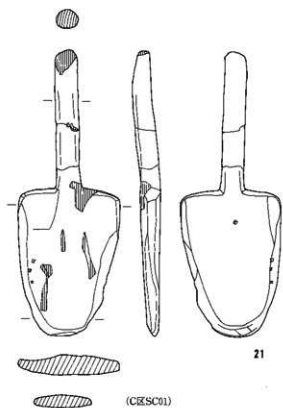


0 (1:6) 30cm

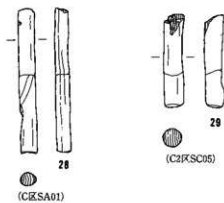
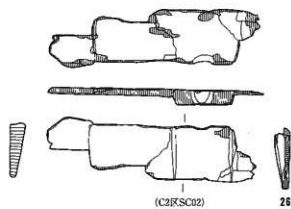
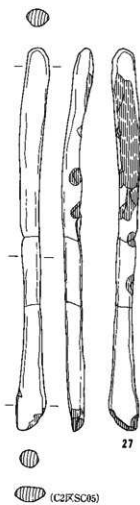
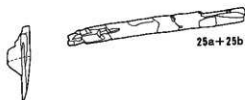
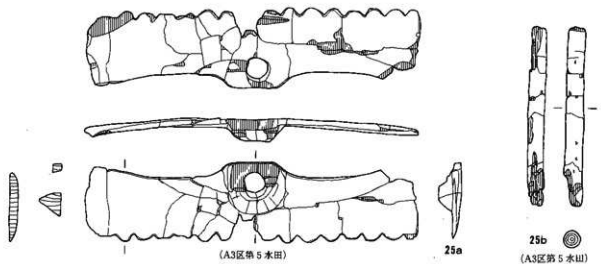
木製品 3 (農具)



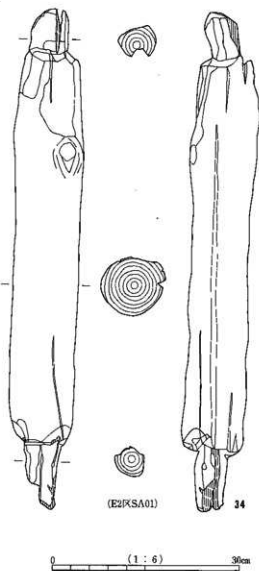
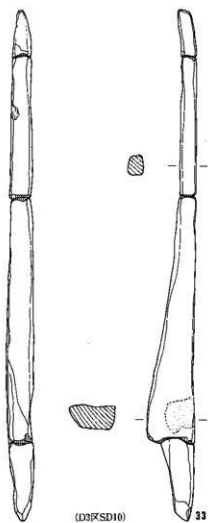
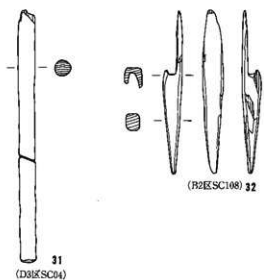
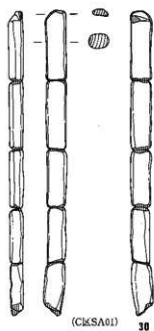
木製品4 (農具)



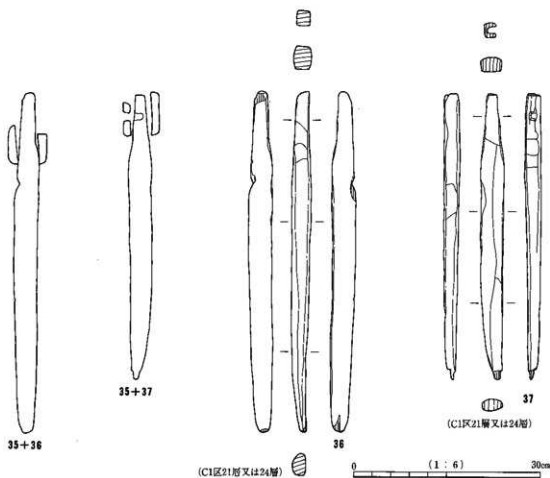
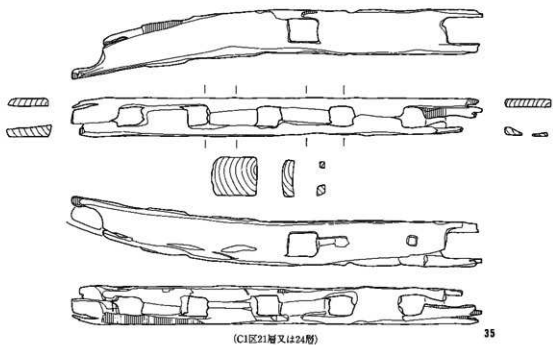
木製品 5 (農具)



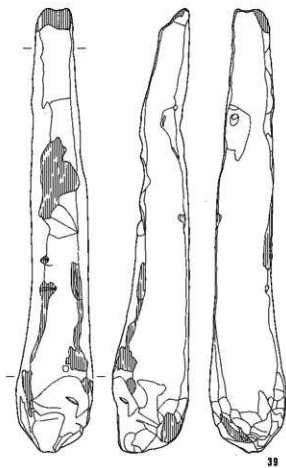
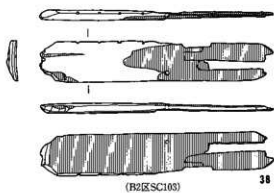
木製品6 (農具)



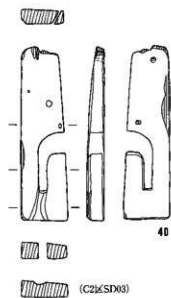
木製品 7 (農具)



木製品 8 (農具)

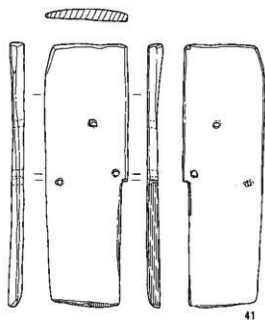


(E1区SA06)

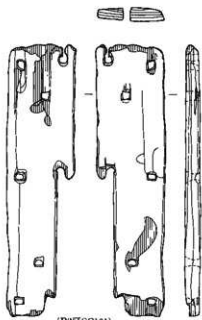


0 (1 : 6) 30cm

木製品9 (農具)



41

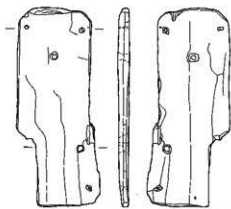


(B2区SC101)

42

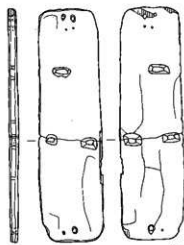


(C区第5水田)



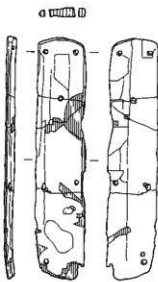
43

(C2区外周トレンチ)



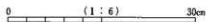
44

(B2区SC101)

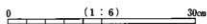
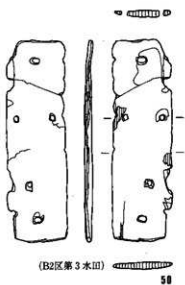
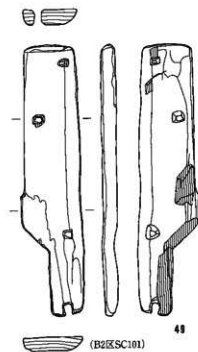
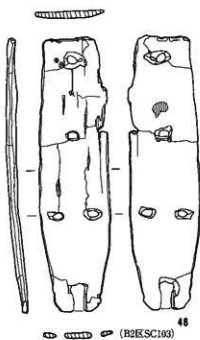
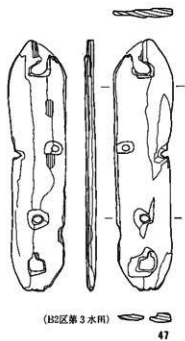
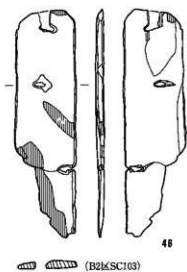


45

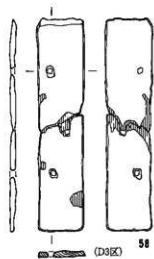
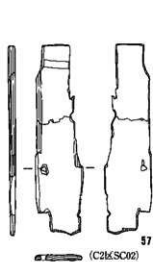
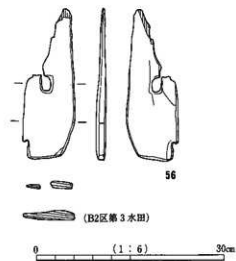
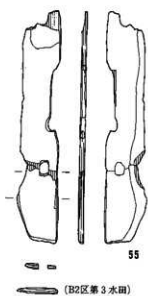
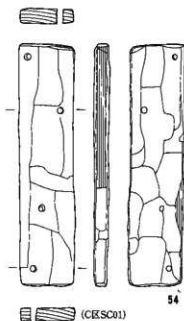
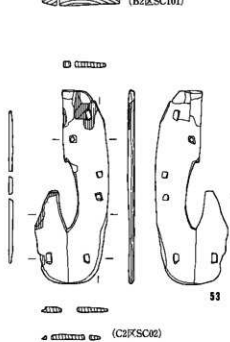
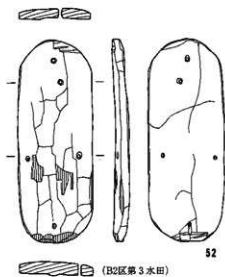
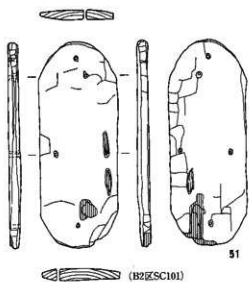
(A3区SC09)



木製品10 (農具)

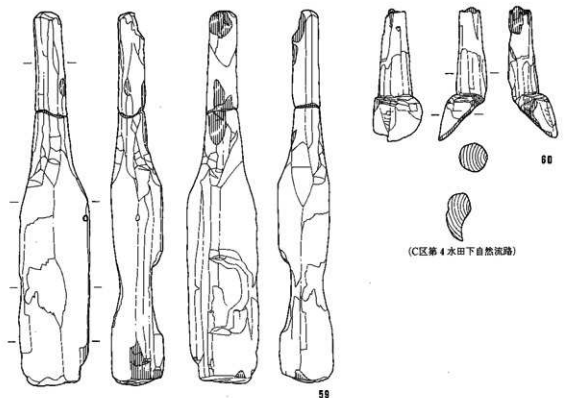


木製品11 (農具)

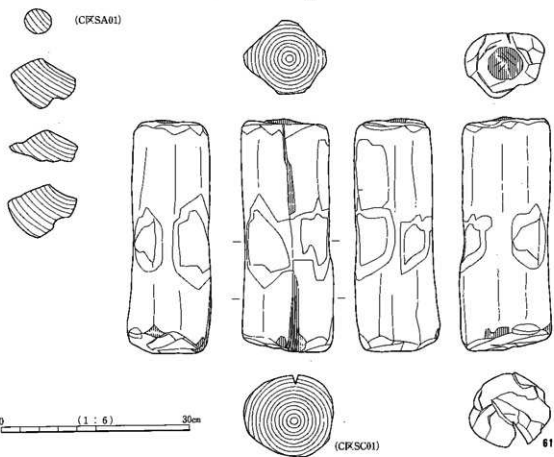


0 (1 : 6) 30cm

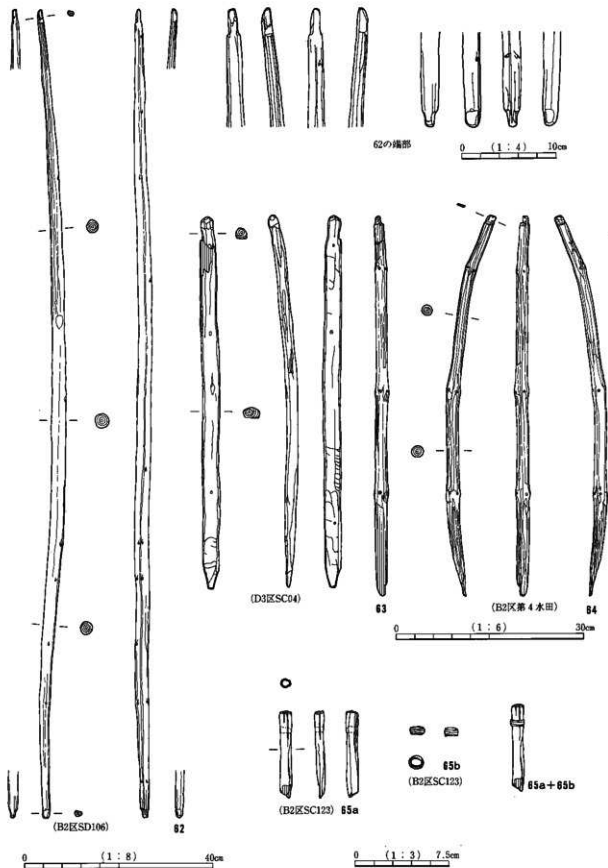
木製品12 (農具)



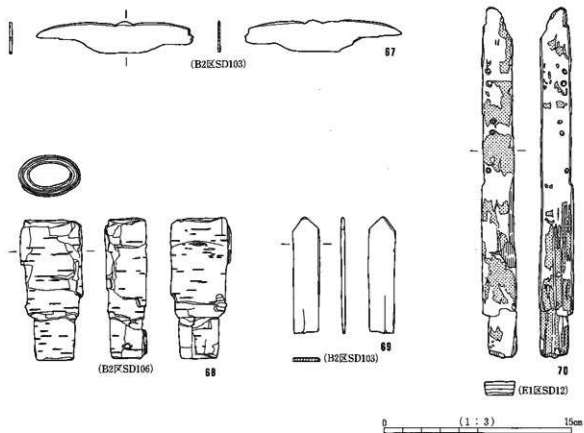
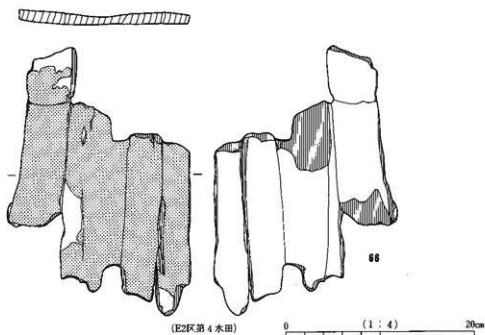
(C区第4水田下自然流路)



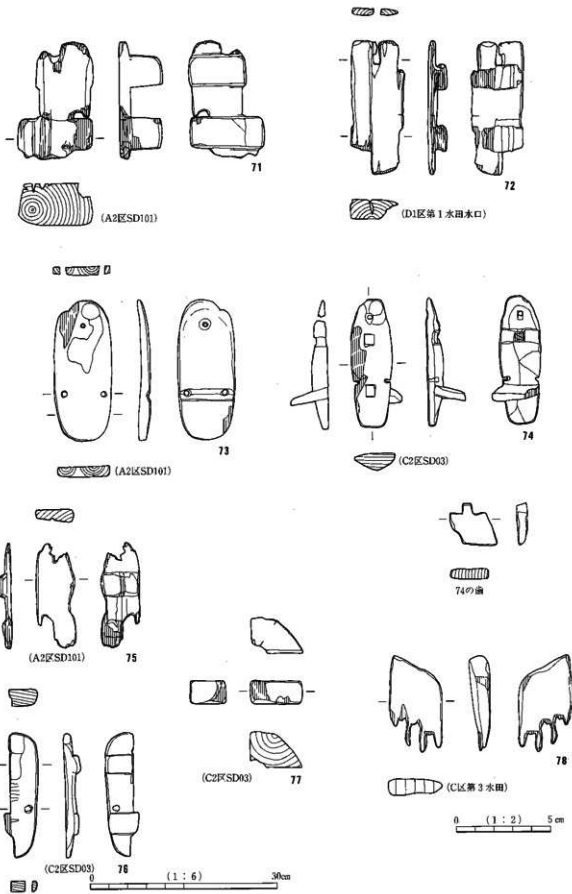
木製品13 (農具)



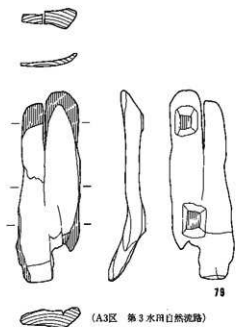
木製品14 (武具・祭祀具)



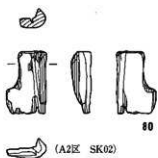
木製品15 (武具・祭祀具)



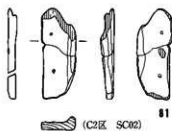
木製品16 (服飾具)



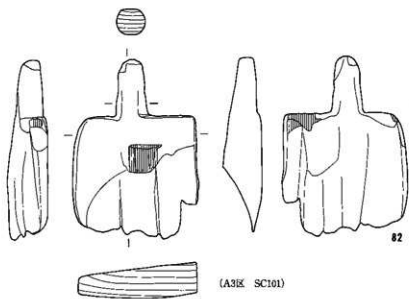
(A3区 第3水田自然泥跡)



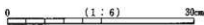
(A2区 SK02)



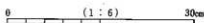
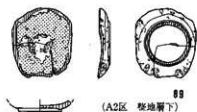
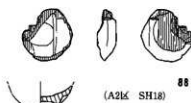
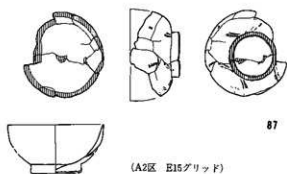
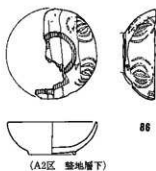
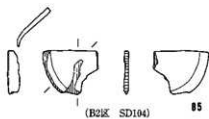
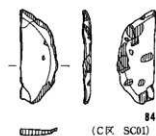
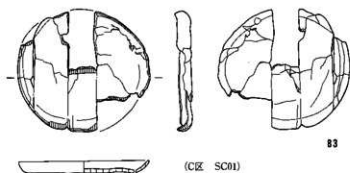
(C2区 SC02)



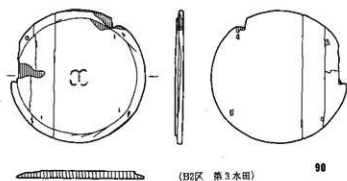
(A3区 SC101)



木製品17 (容器)

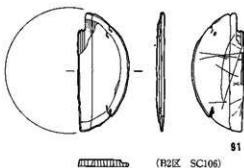


木製品18 (容器)



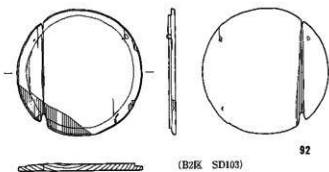
(B2区 第3水田)

90



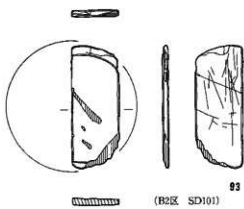
(B2区 SC106)

91



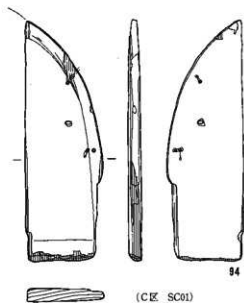
(B2区 SD103)

92



(B2区 SD101)

93



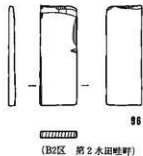
(C区 SC01)

94



(A3区 第3水田を切る自然洗路)

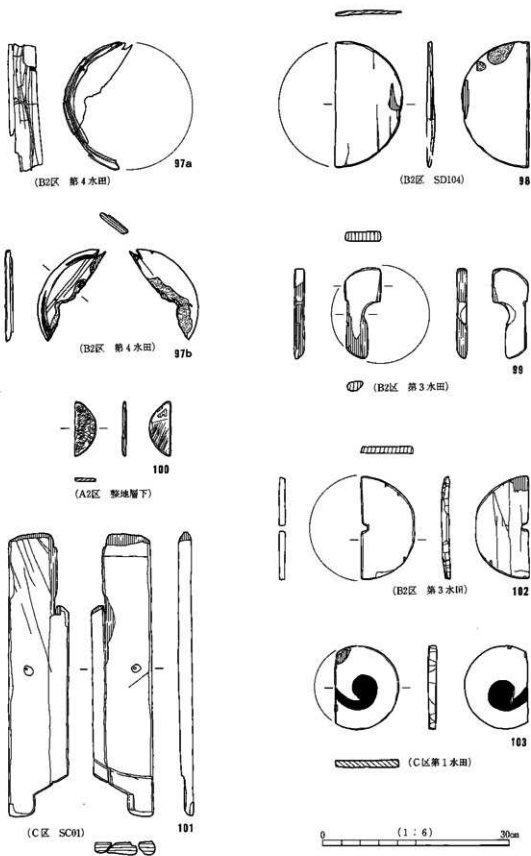
95



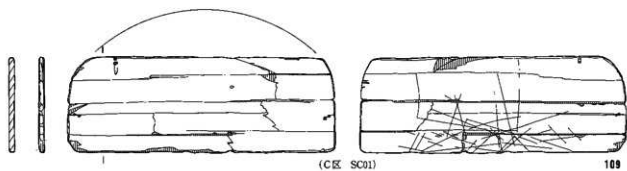
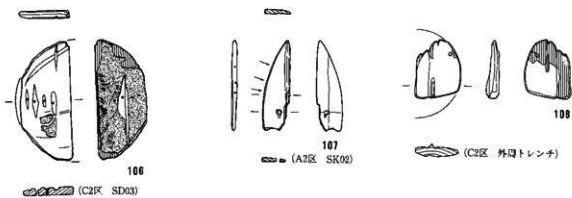
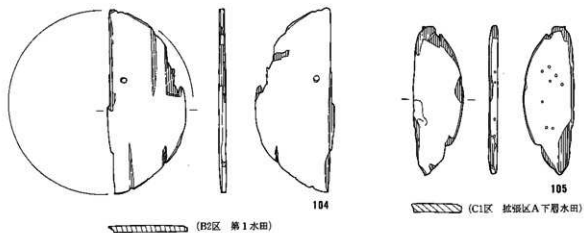
(B2区 第2水田畔畔)

96

0 (1:6) 30mm

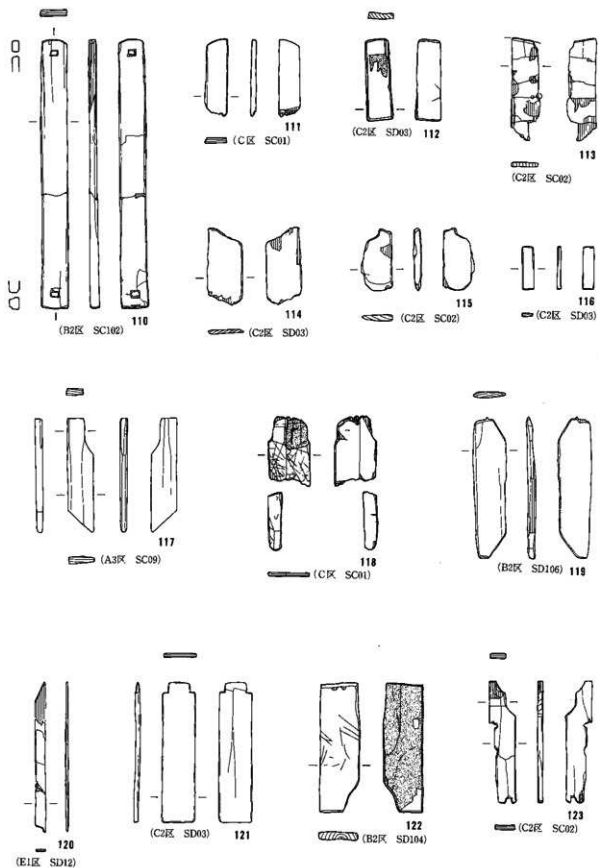


木製品20 (容器)

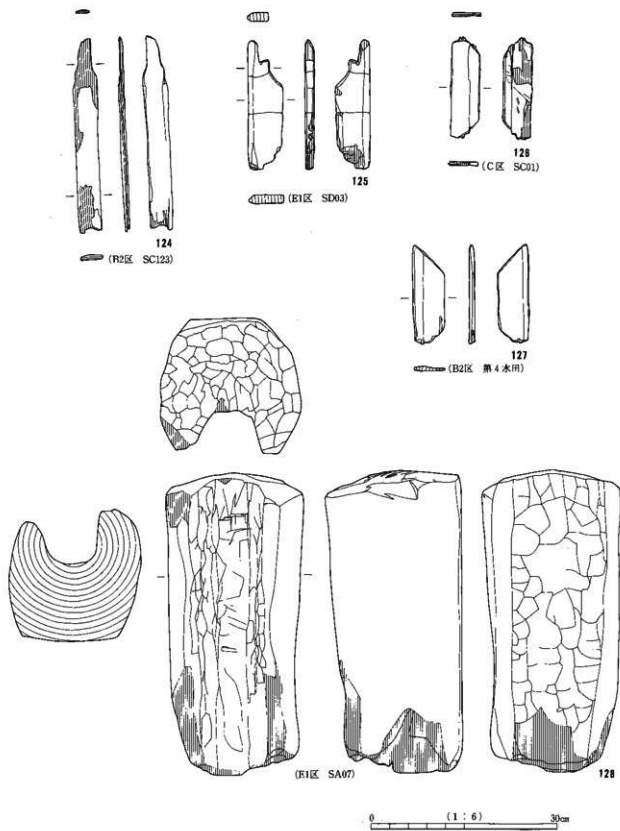


0 (1:6) 30cm

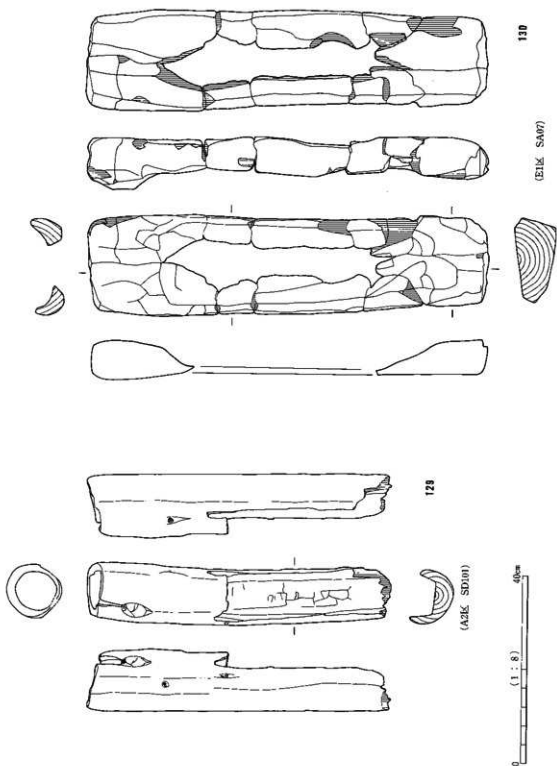
木製品21 (容器)



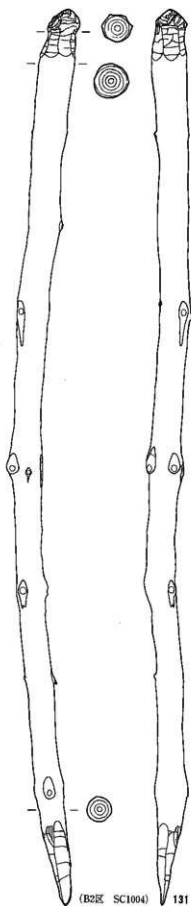
木製品22 (容器)



木製品23 (容器)



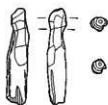
木製品24 (容器)



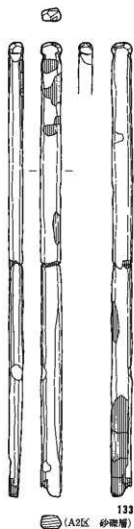
(B2区 SC1004) 131



132
(D2区 SC107)



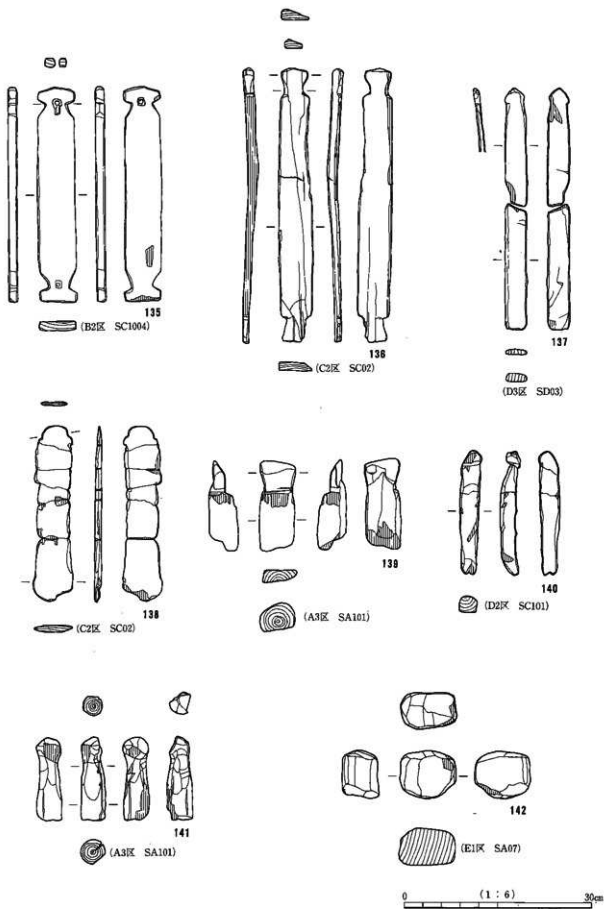
134
(D3区 SD10)



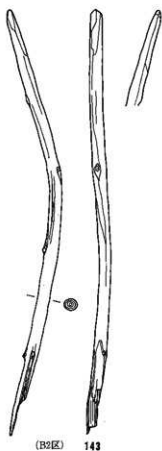
133
(A2区 砂埋層)

0 (1:6) 30cm

木製品25 (有頭棒状木製品)



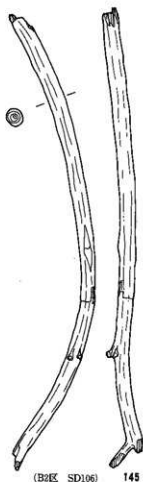
木製品26 (有頭板状木製品・有頭棒状木製品)



(B2区) 143



(D3区 SD03) 144

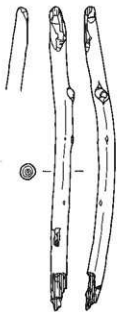


(B2区 SD106) 145

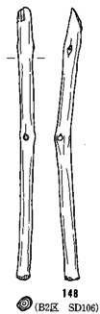


(B2区)

146

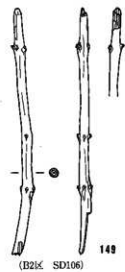


(C区 SA01) 147



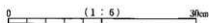
(B2区 SD106)

148

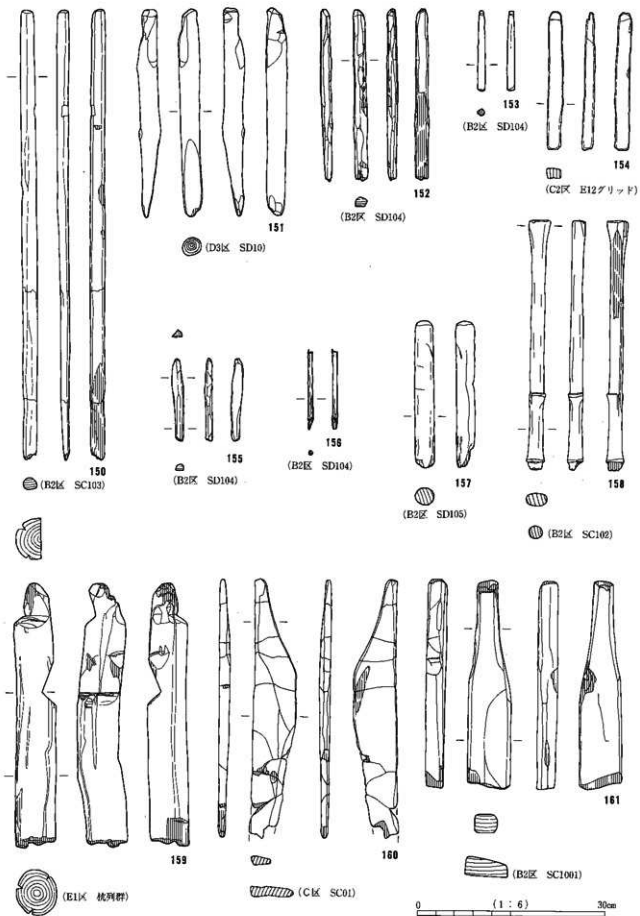


(B2区 SD106)

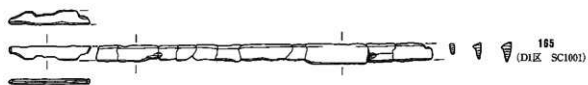
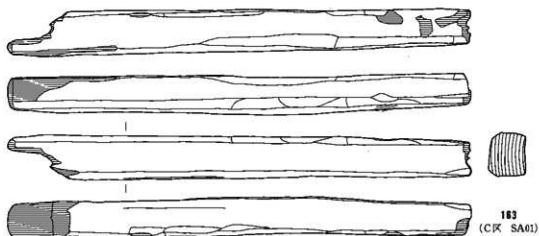
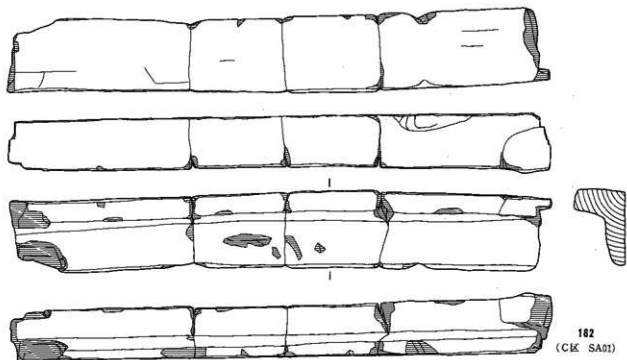
149



木製品27 (弓状木製品)

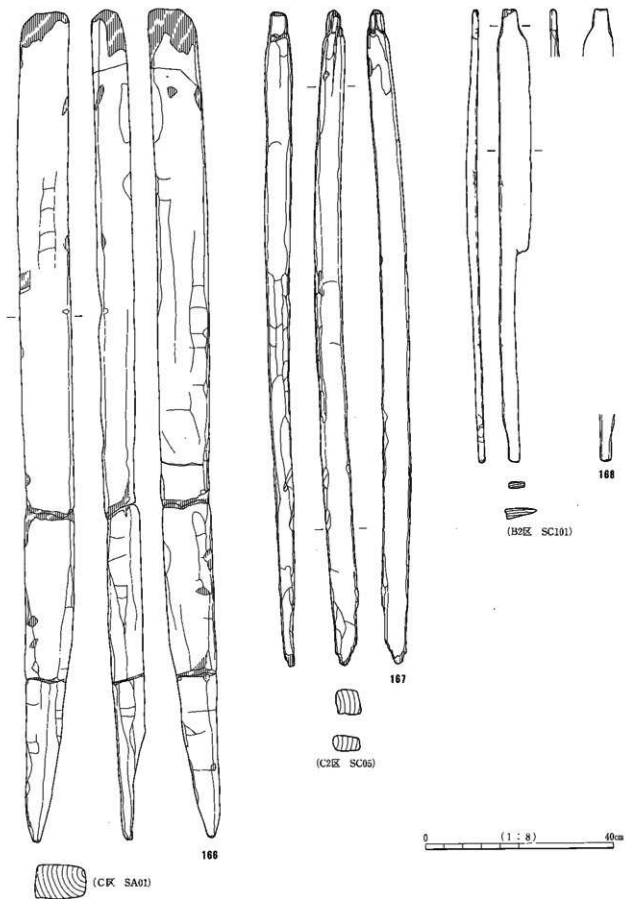


木製品28 (棒状木製品)

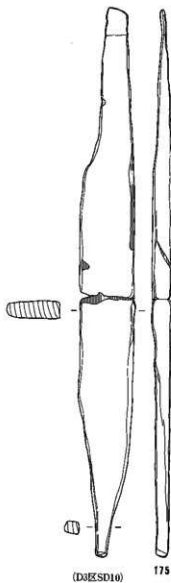
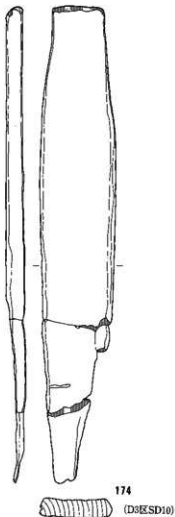
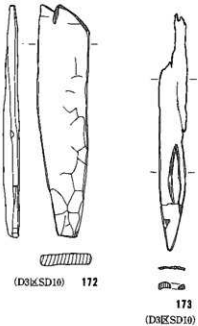
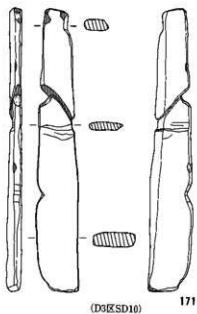
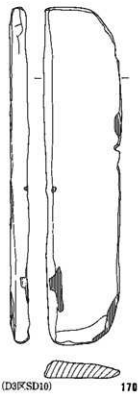
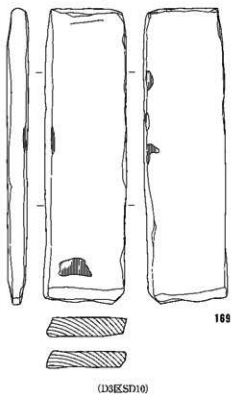


0 (1 : 8) 40cm

木製品29 (棒状加工材)

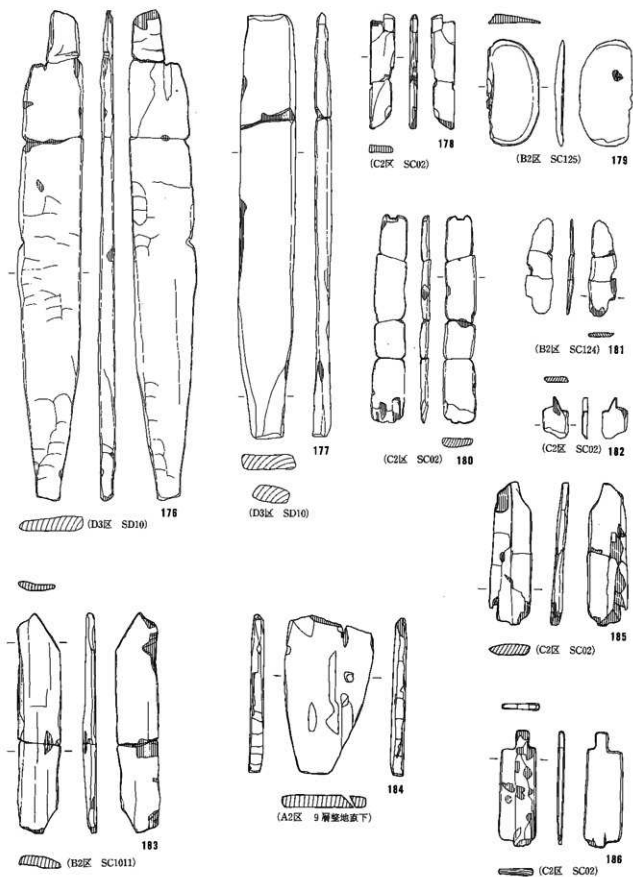


木製品30 (棒状加工材)

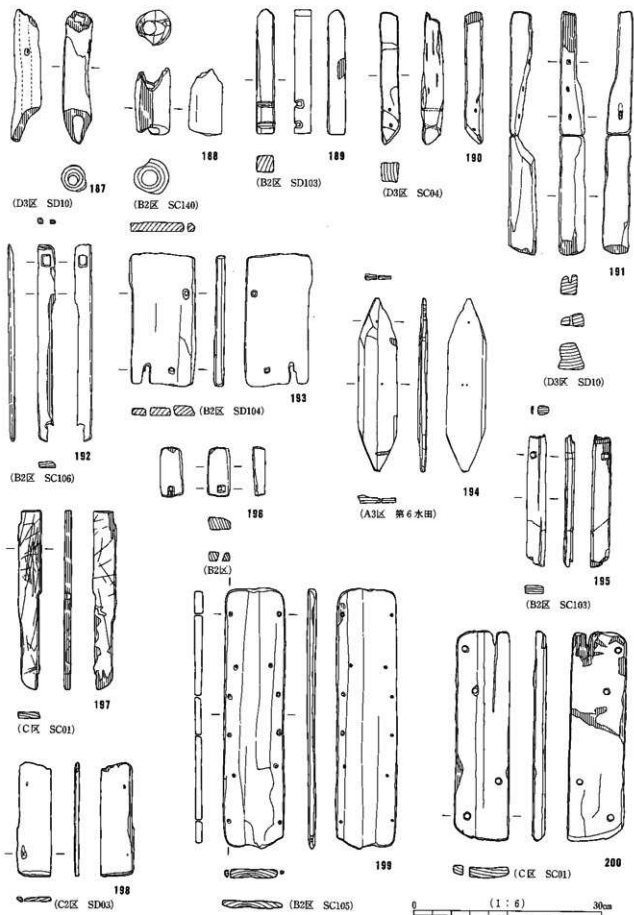


0 (1 : 8) 40cm

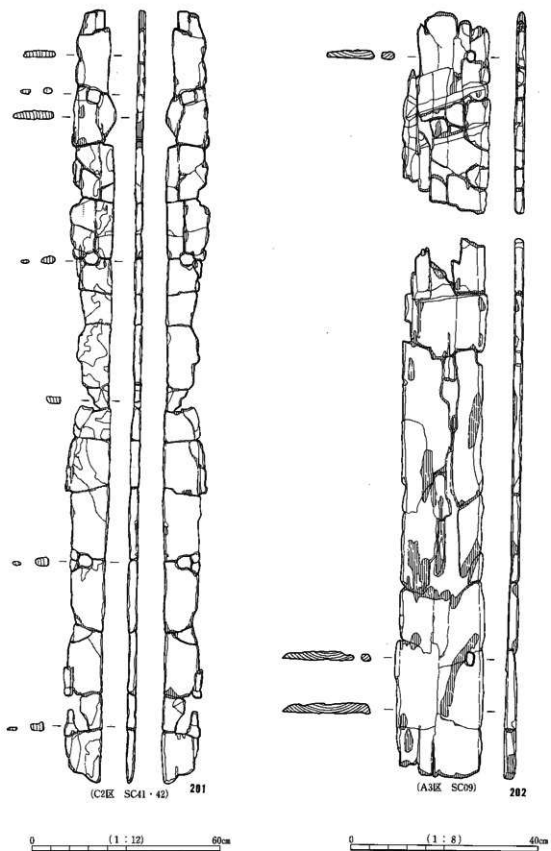
木製品31 (板状木製品)



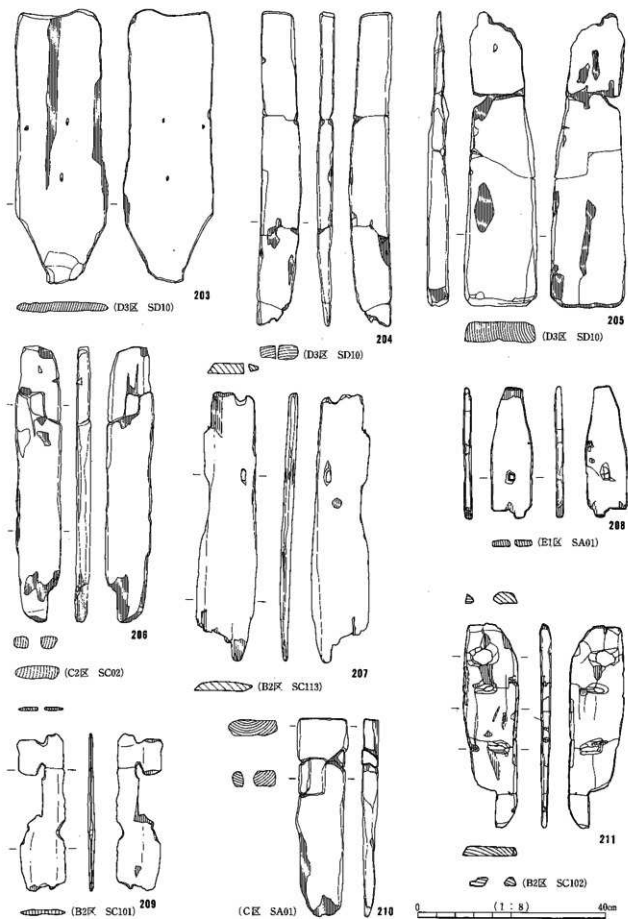
木製品32 (板状木製品・板状加工材)



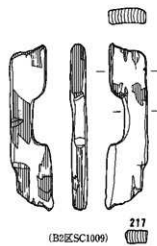
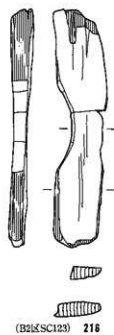
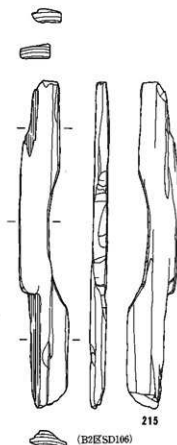
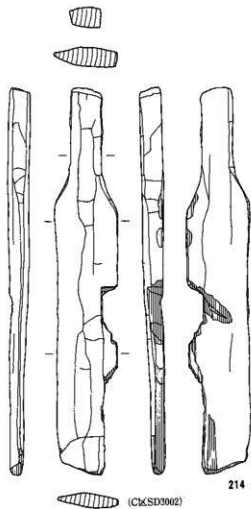
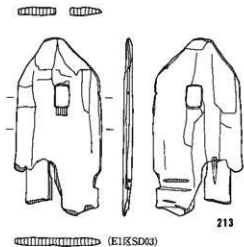
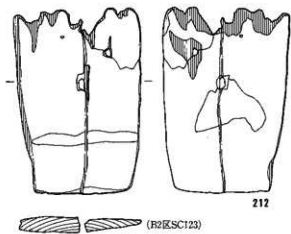
木製品33 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



木製品34 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)

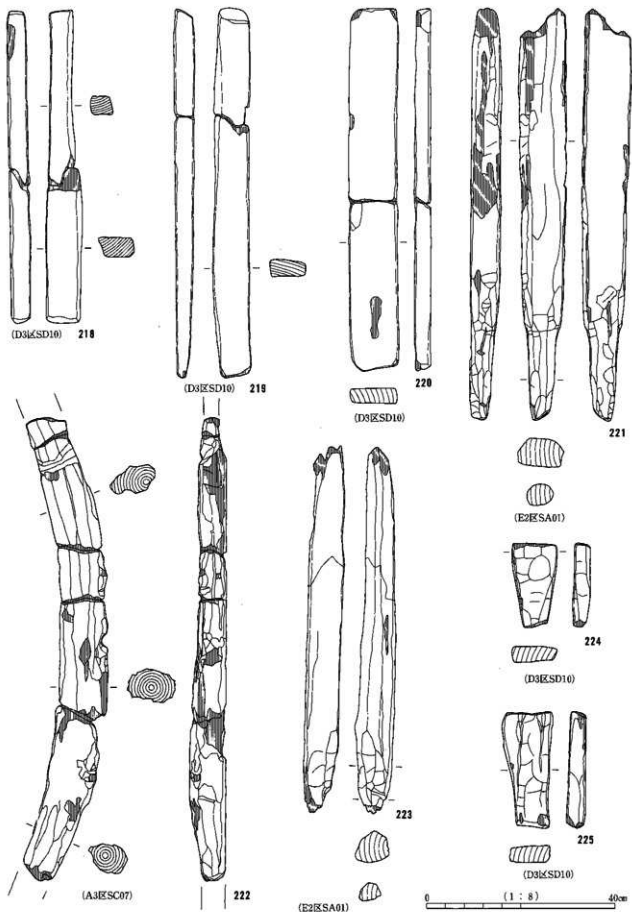


木製品35 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)

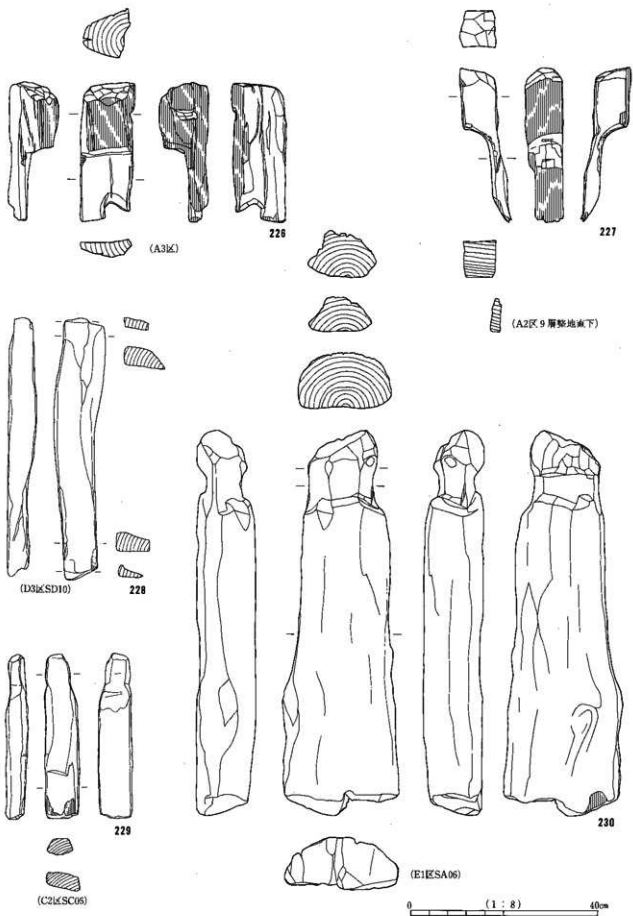


0 (1 : 8) 40cm

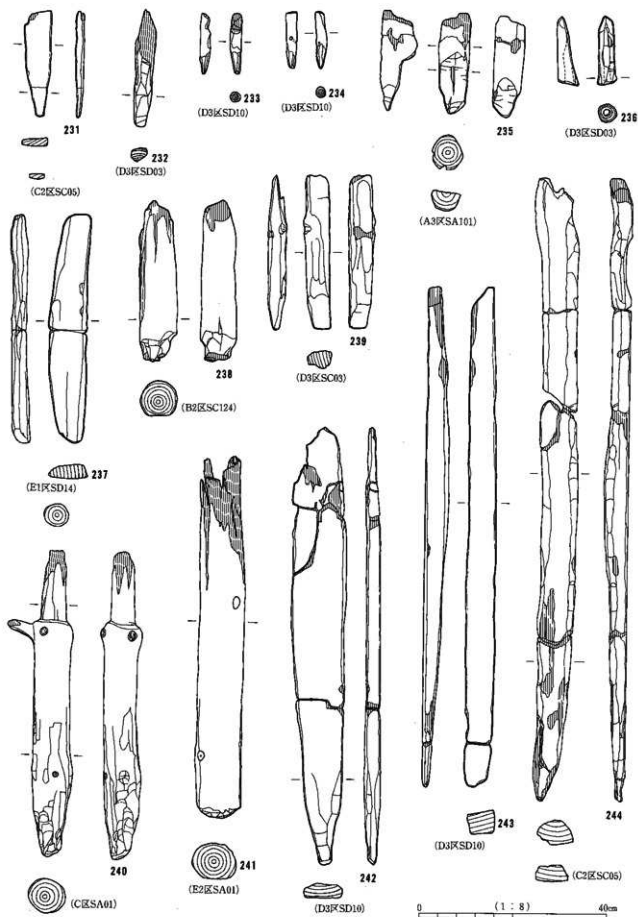
木製品36 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



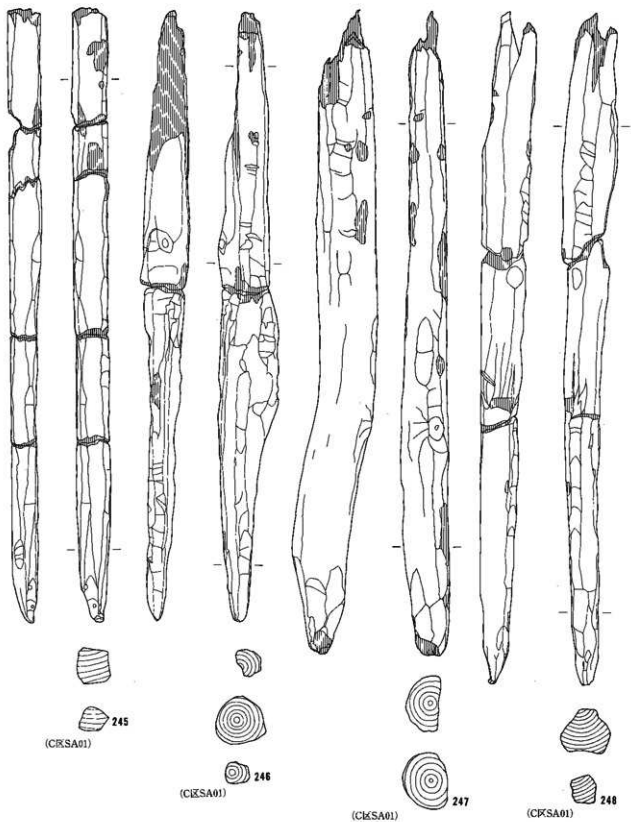
木製品37 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



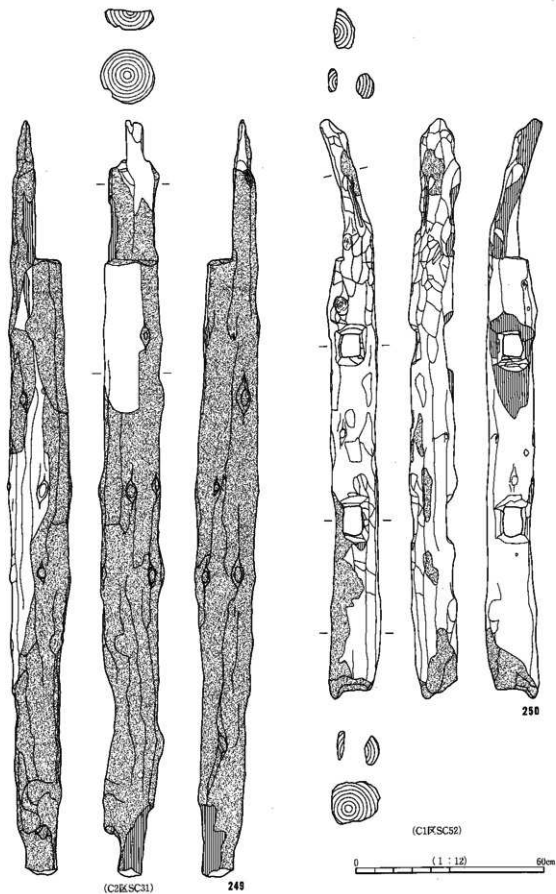
木製品38 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



木製品39 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



木製品40 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



(C2)KSC11

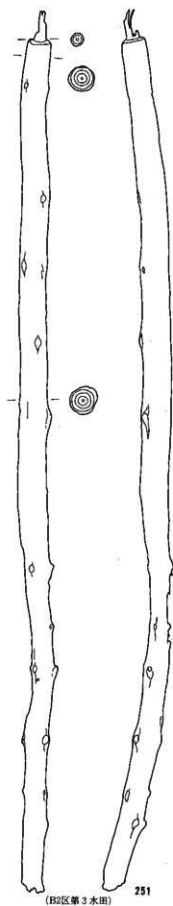
248

250

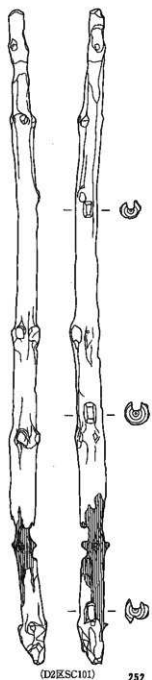
(C1)FSC52

0 (1:12) 60cm

木製品41 (建設部材 縦材)



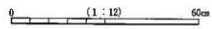
(B2区第3水田) 251



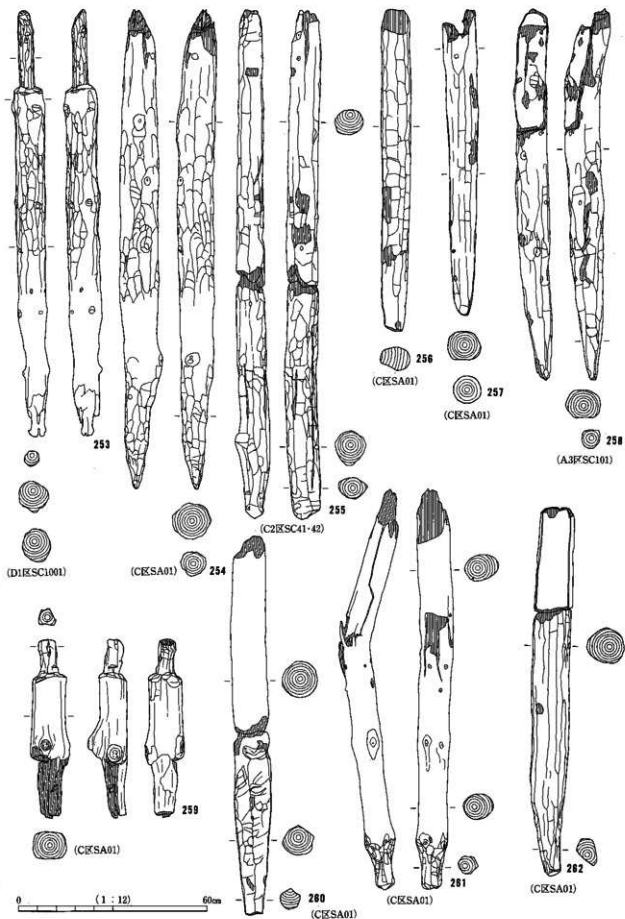
(D2KSC101) 252



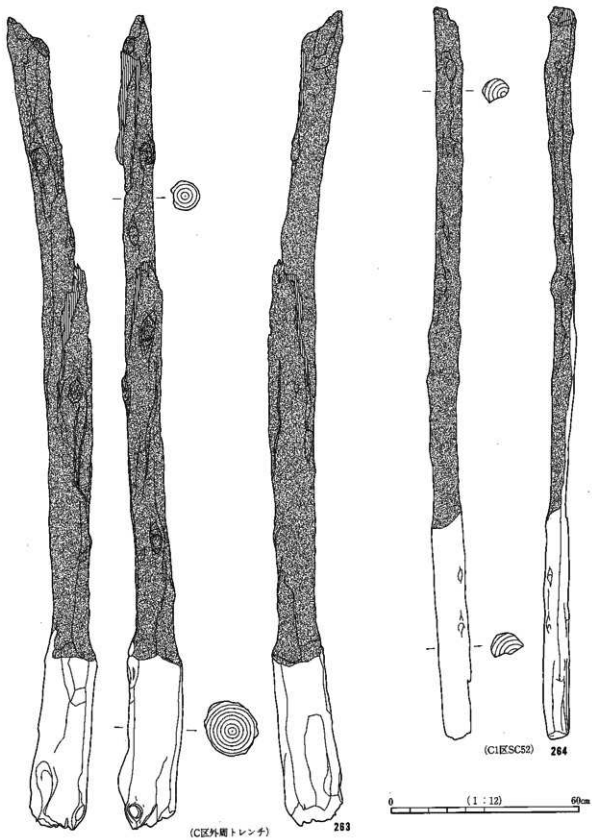
252の拡大図



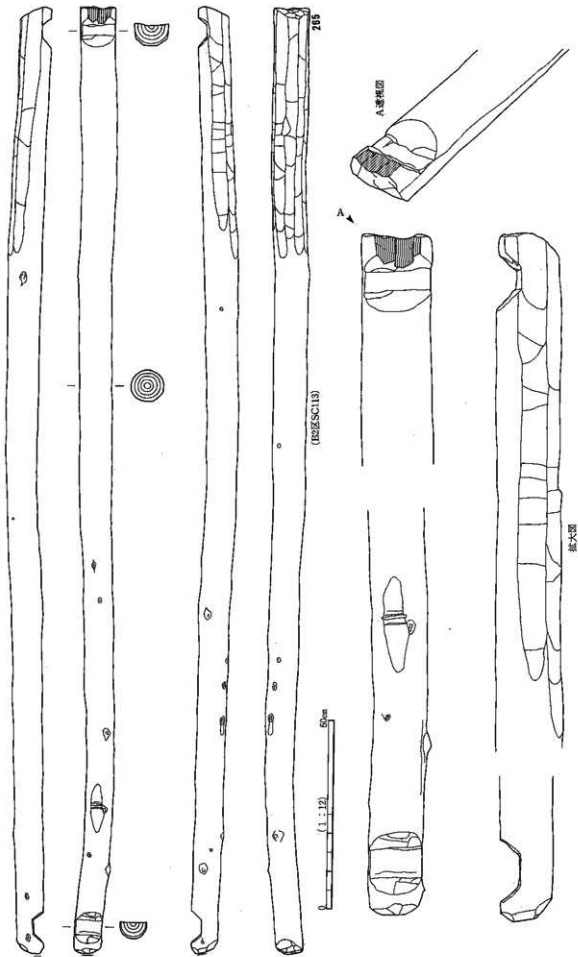
木製品42 (建築部材 縦材)



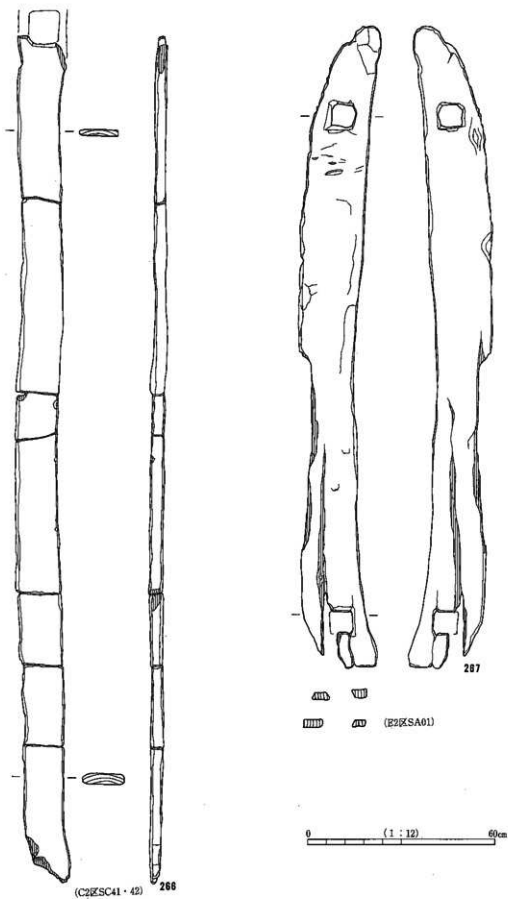
木製品43 (建築部材 縦材)



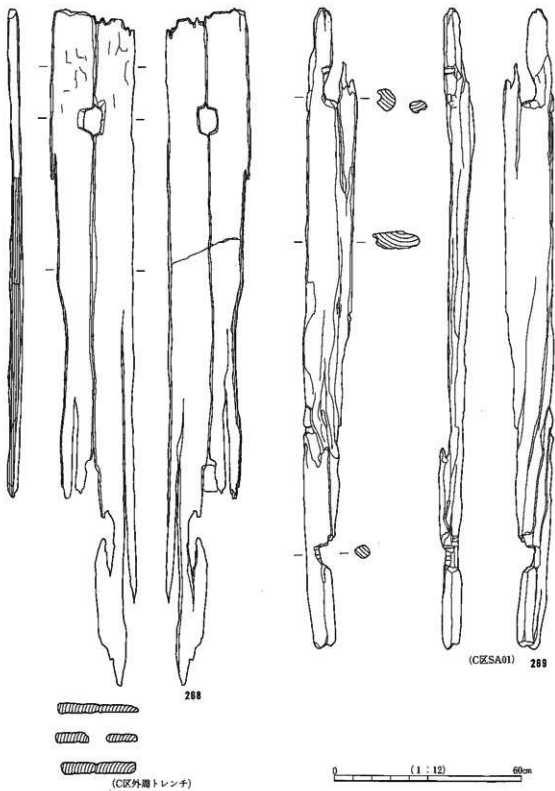
木製品44 (建築部材 縦材)



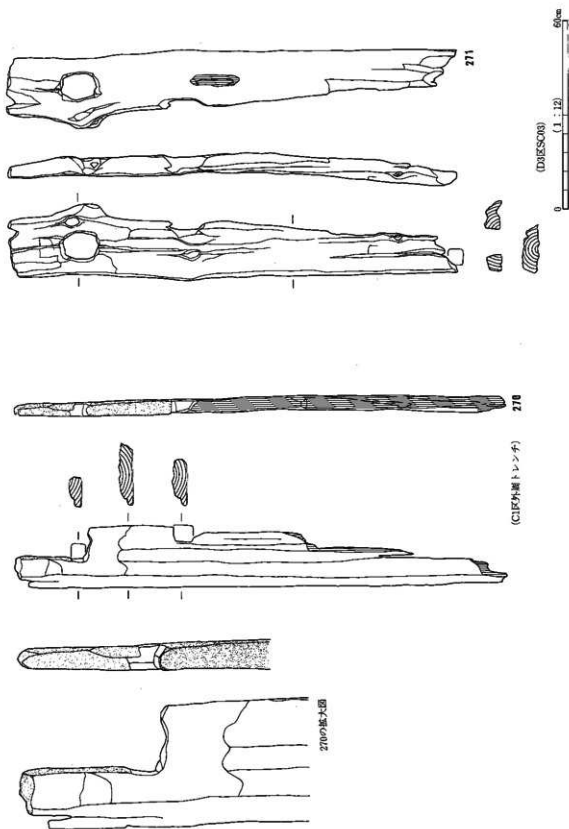
木製品45 (建築部材 横架材)



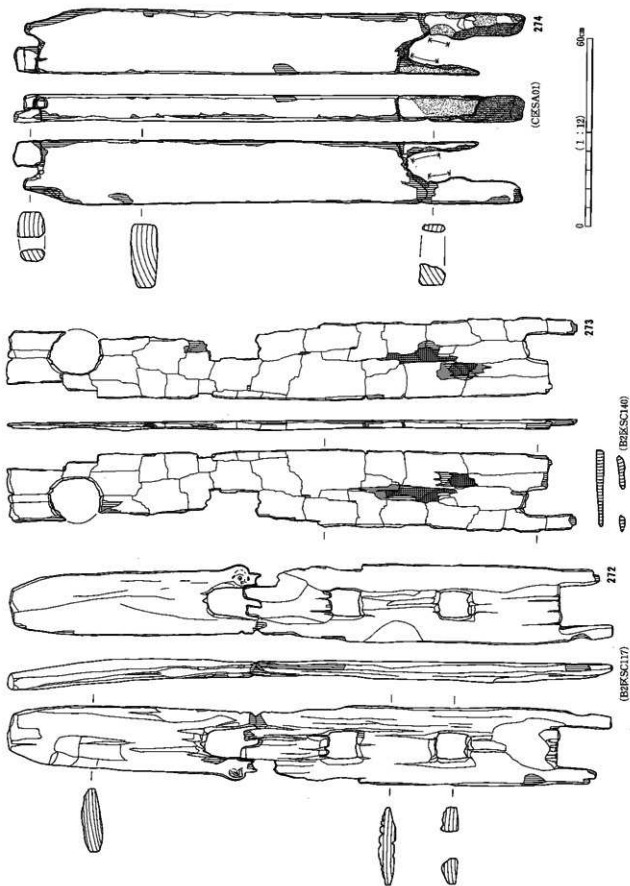
木製品46 (建築部材 横架材)



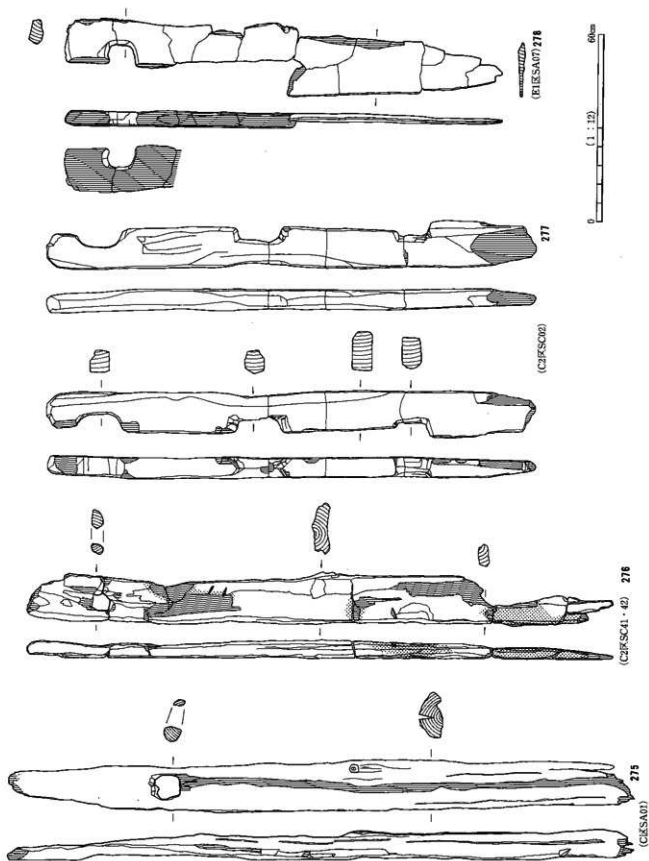
木製品47 (建築部材 横架材)



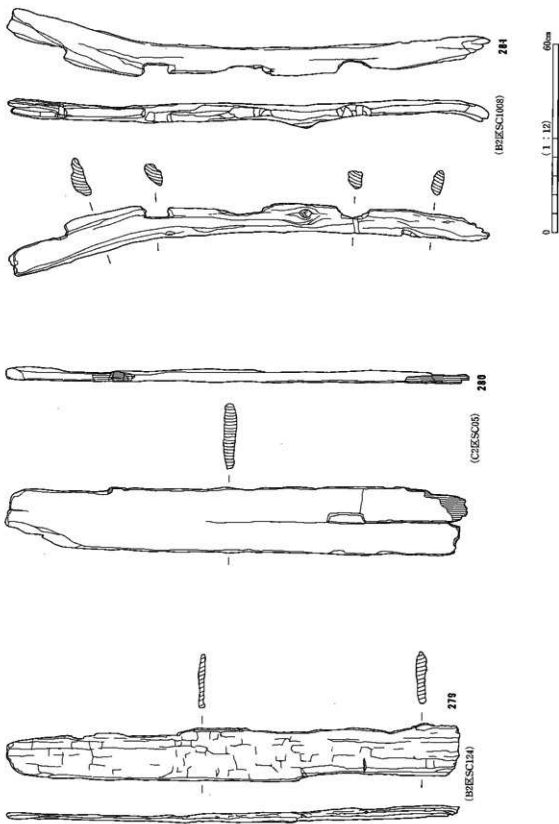
木製品48 (建築部材 横架材)



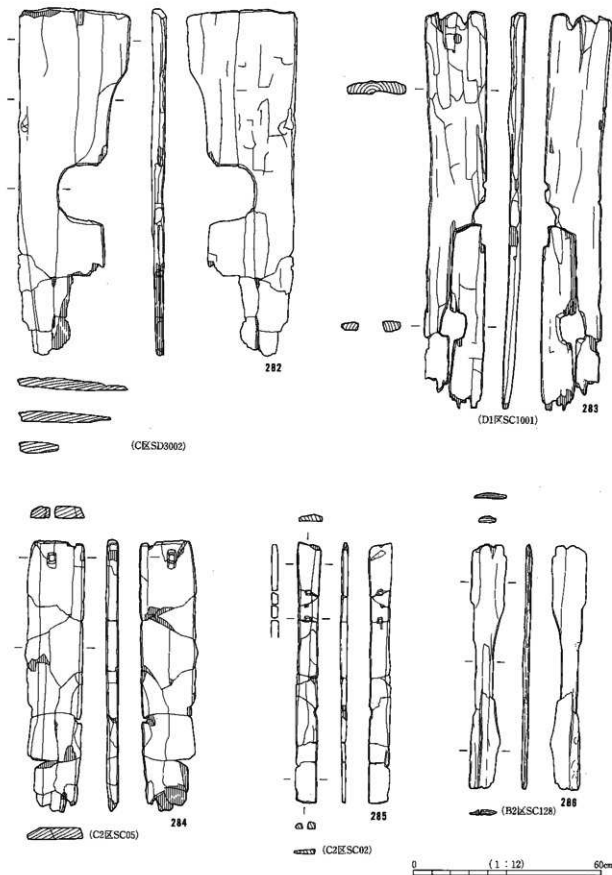
木製品49 (建築部材 横架材)



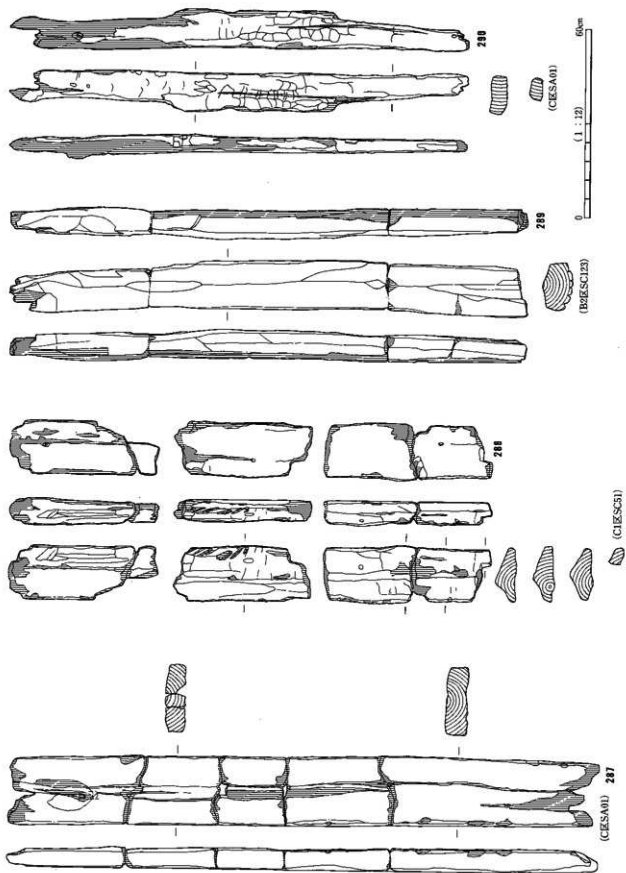
木製品50 (建築部材 横架材)



木製品51 (建築部材 横架材)



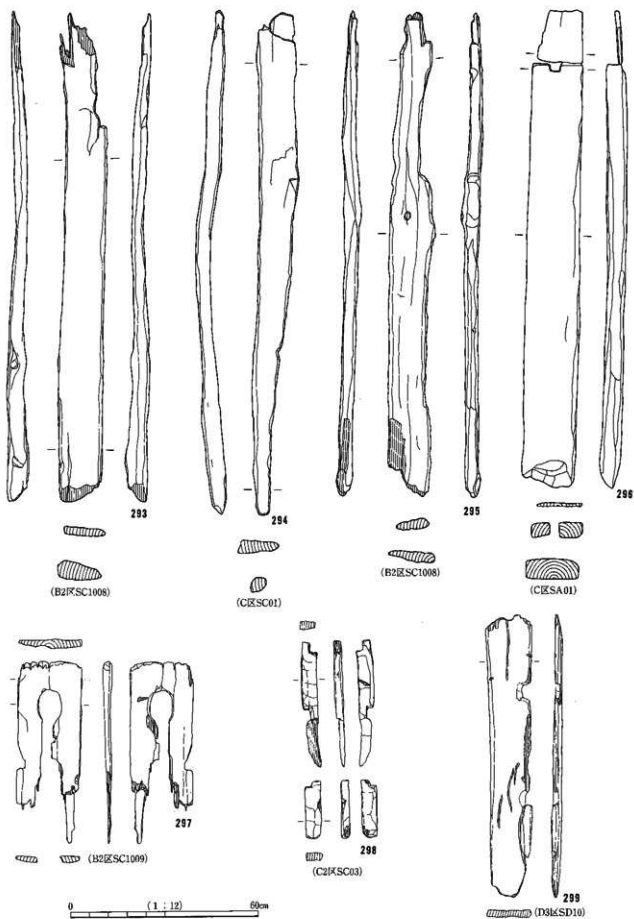
木製品52 (建築部材 横架材)



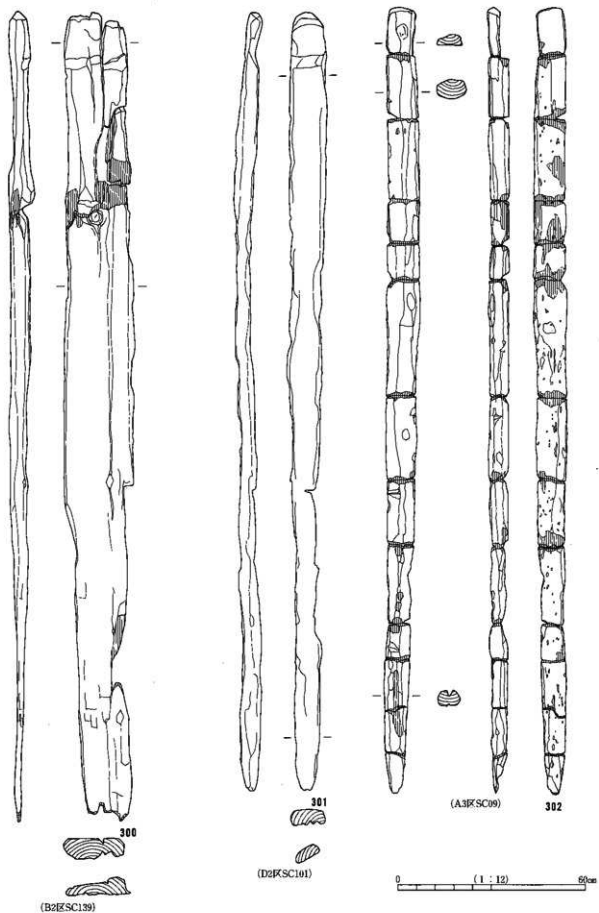
木製品53 (建築資材 横架材)



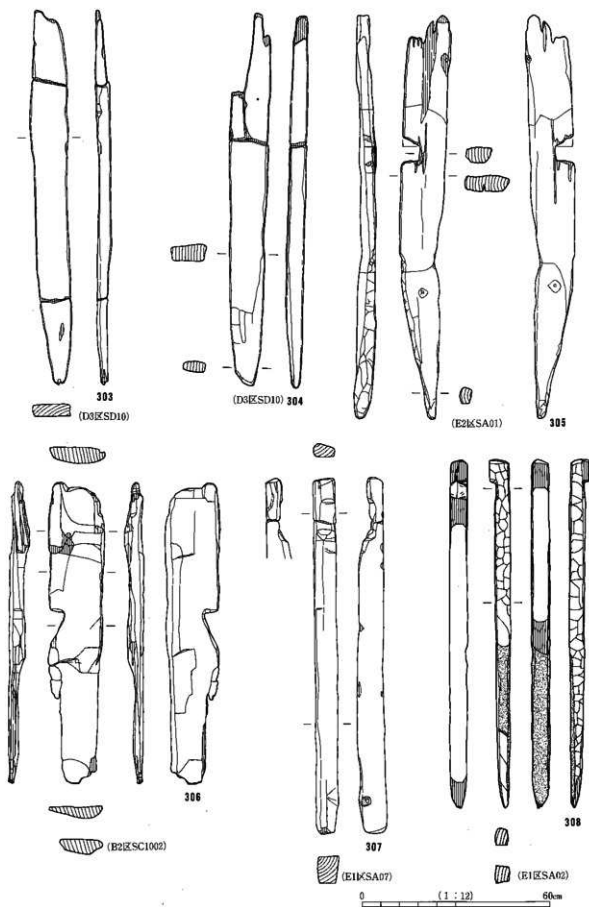
木製品54 (建築部材 横架材)



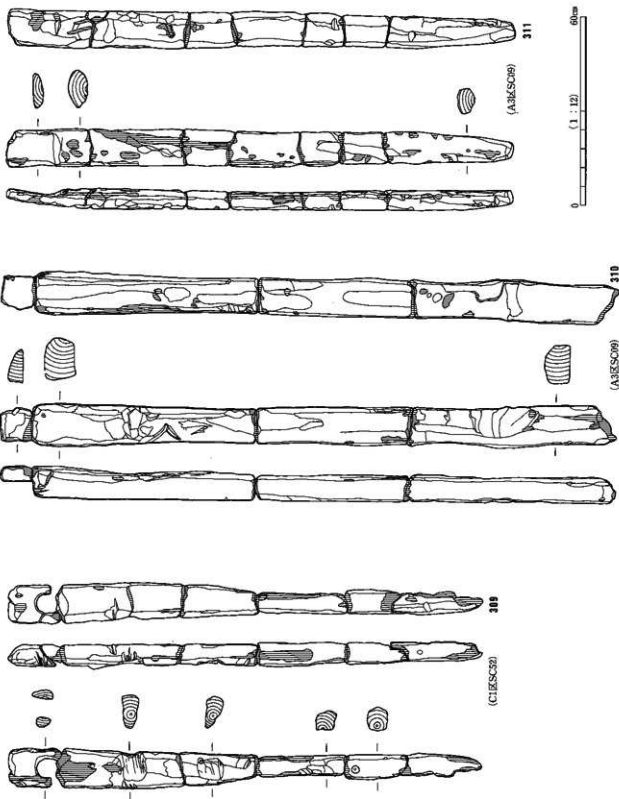
木製品55 (建築部材 横架材他)



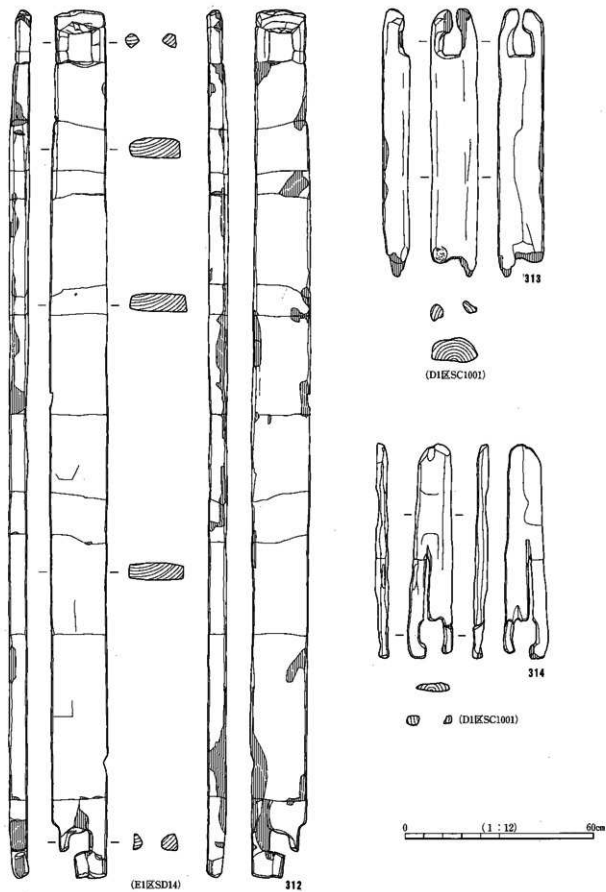
木製品56 (建築部材 横架材)



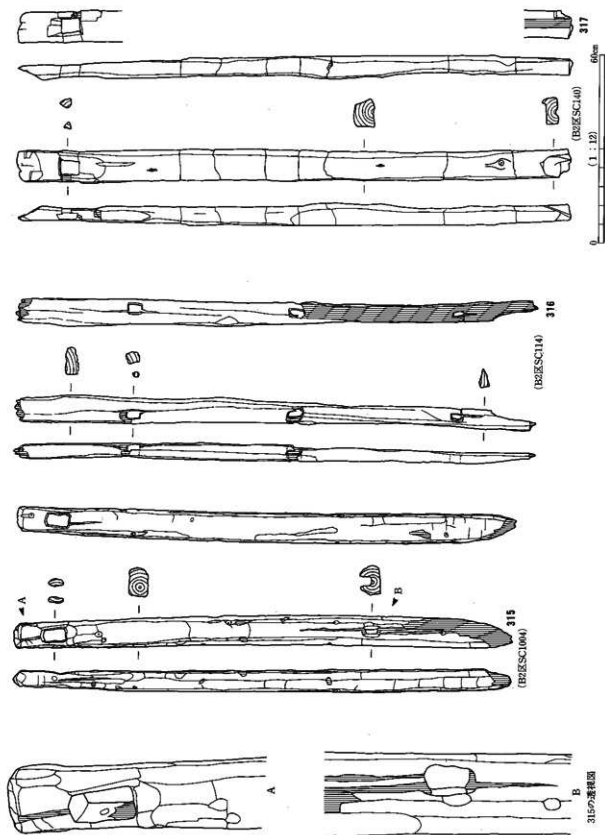
木製品57 (建築部材 横架材)



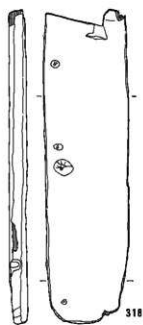
木製品58 (建築部材 横架材)



木製品59 (建築部材 横架材)



木製品60 (建築部材 横架材)



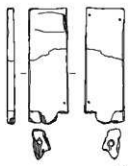
(B2KSC139)



(A2ESD101)



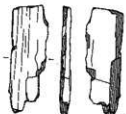
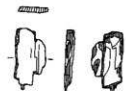
(D3ESD10)



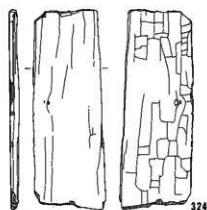
(A2ESD101)



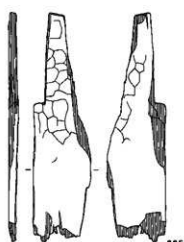
(B2ESD106)



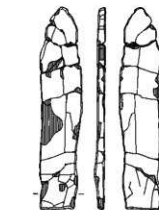
(A3KSC03)



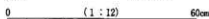
(C2KSC41-42)



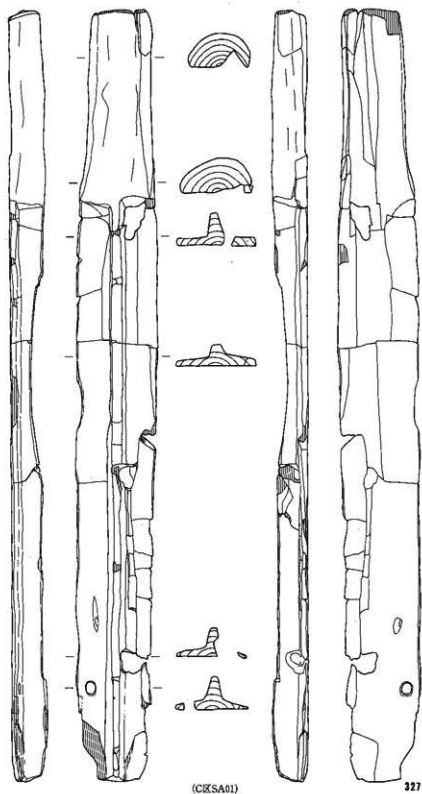
(E1KSC01)



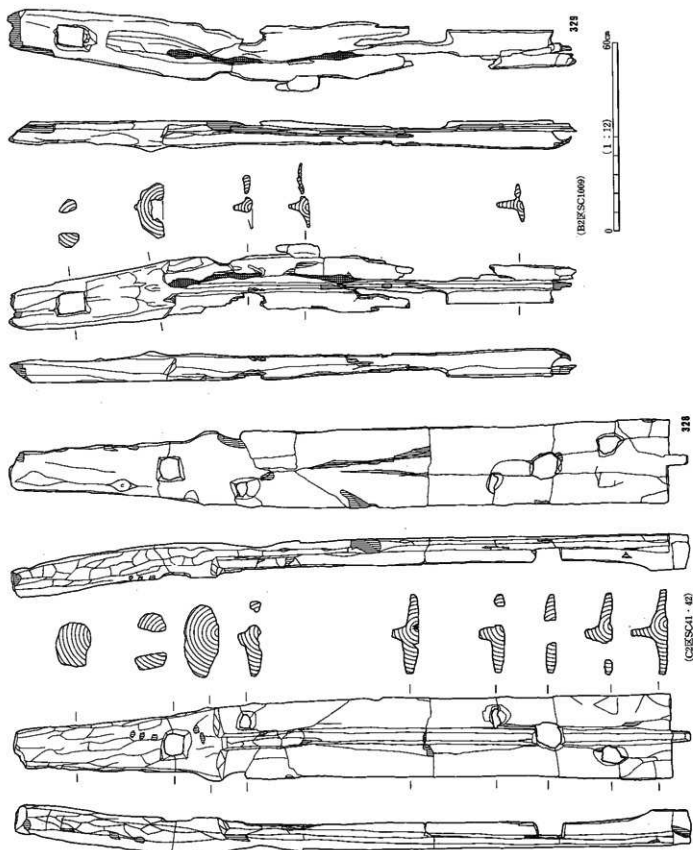
(C1KSA01)



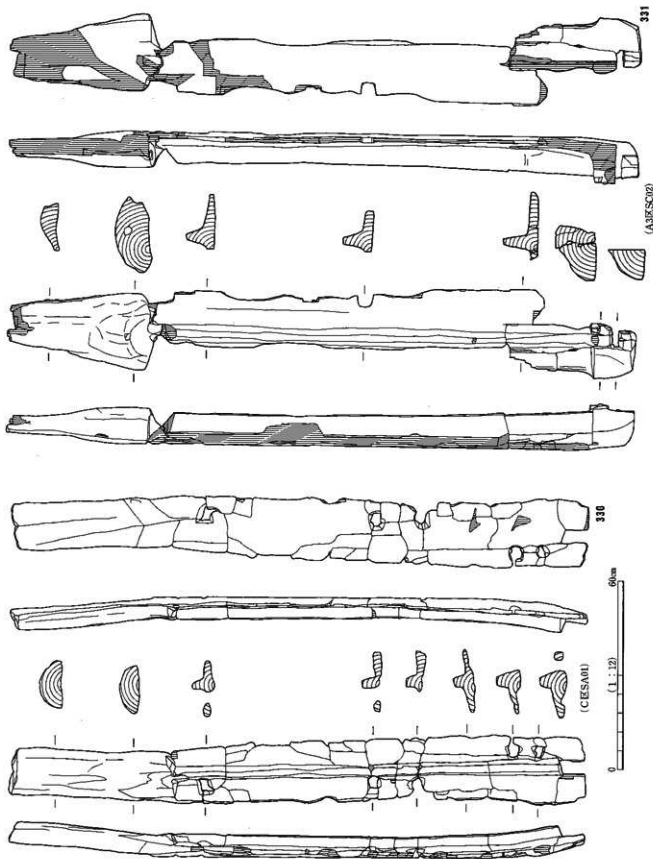
木製品61 (建築部材 横架材)



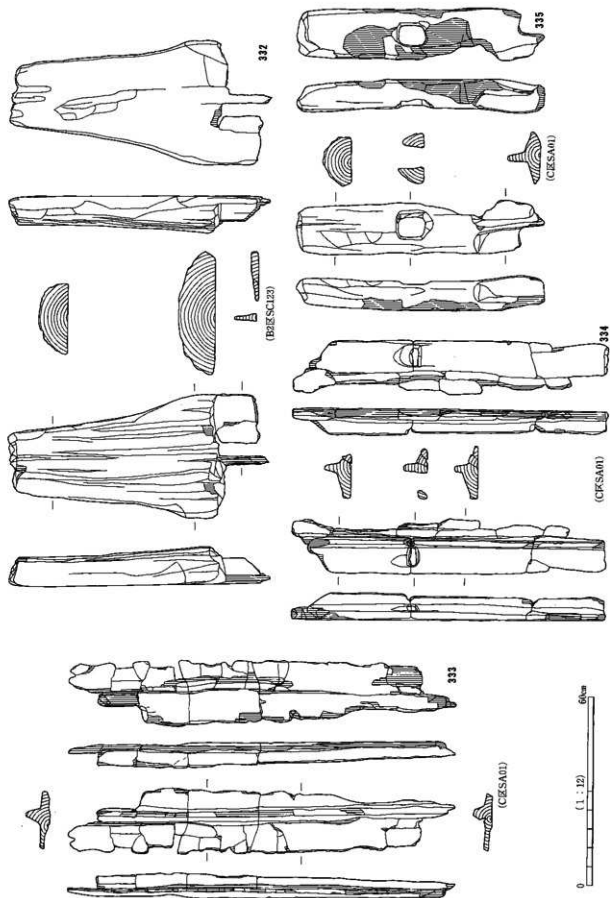
木製品62 (建築部材 楯・藏放材)



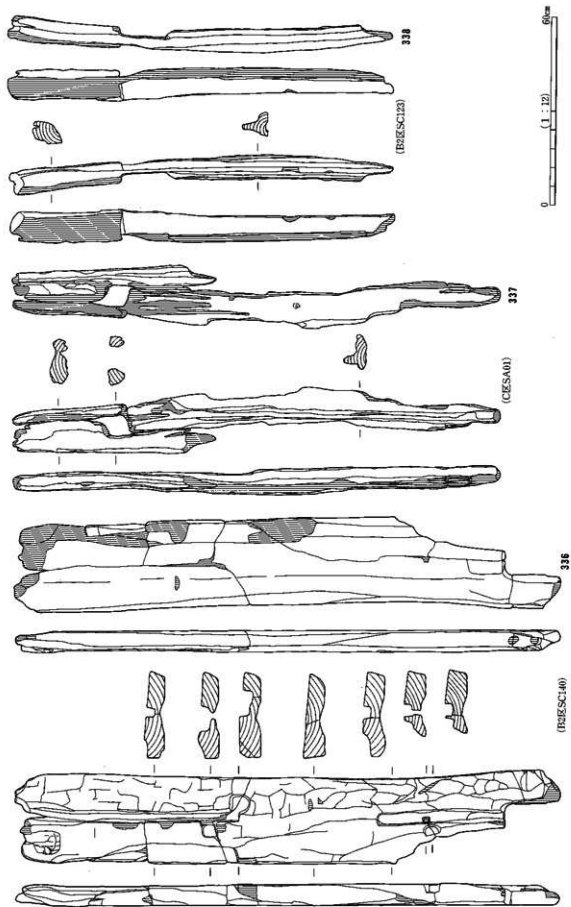
木製品63 (建築部材 樑・扉放材)



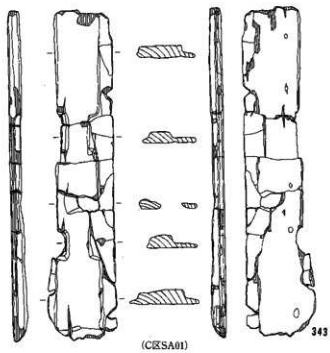
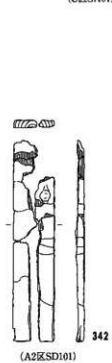
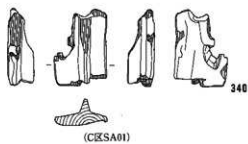
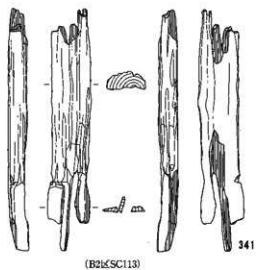
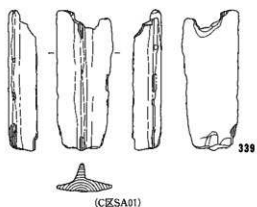
木製品64 (建築部材 櫛・蹴放材)



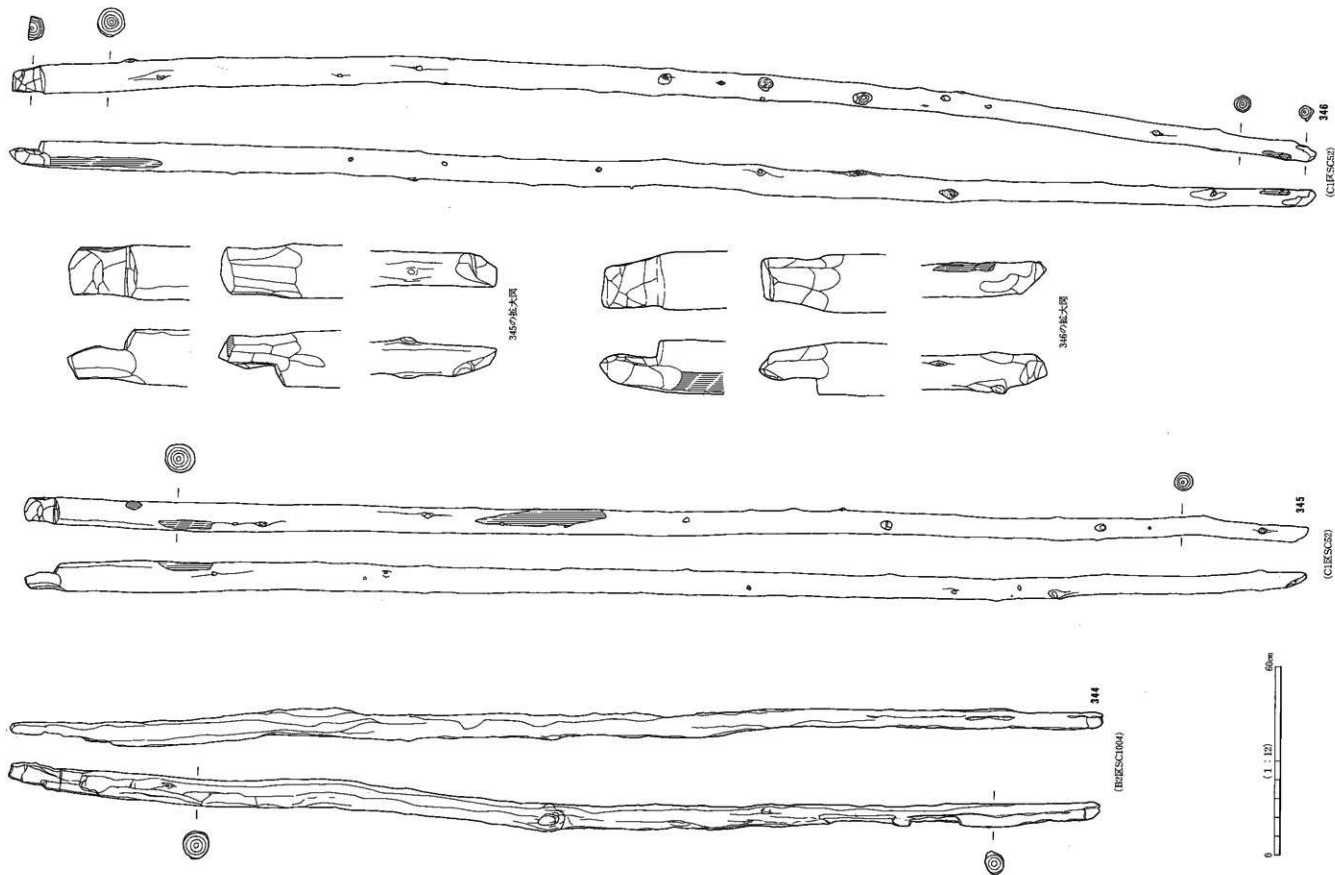
木製品65 (建築部材 櫓・蹴放材)



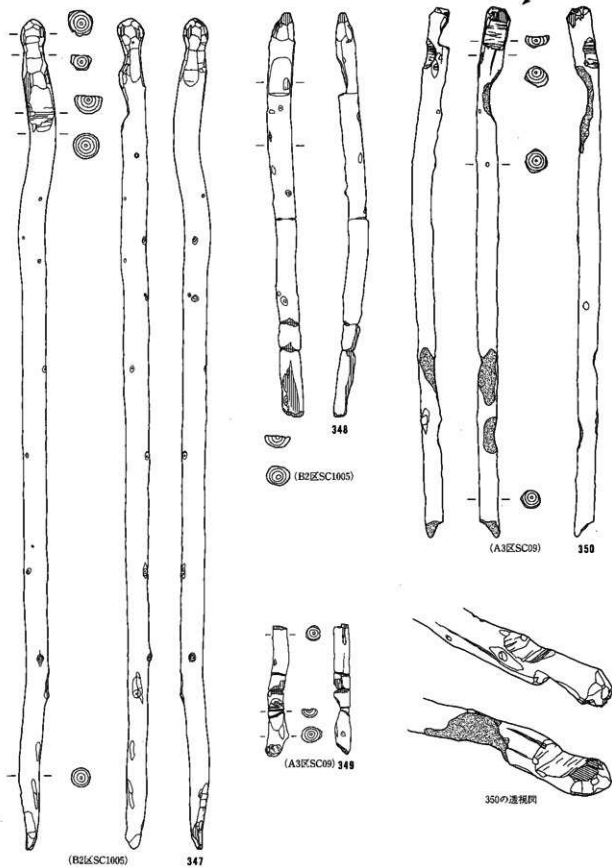
木製品66 (建築部材 榑・蹴放材)



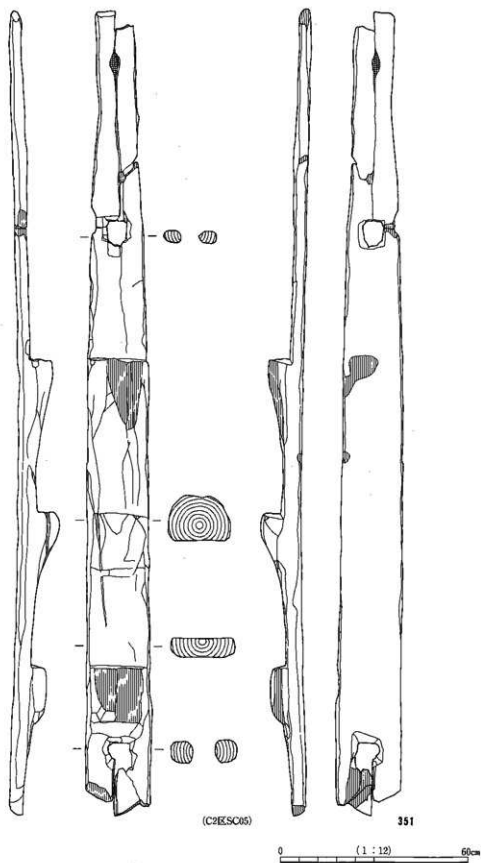
0 (1 : 12) 60m



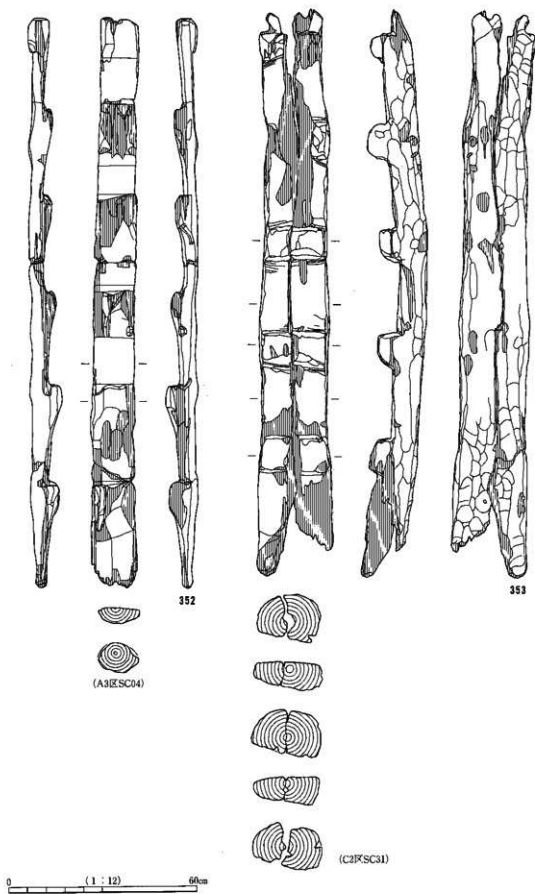
木製品68 (建築部材 屋根材)



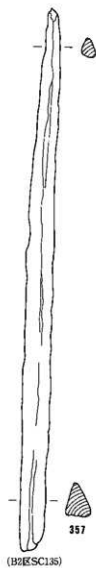
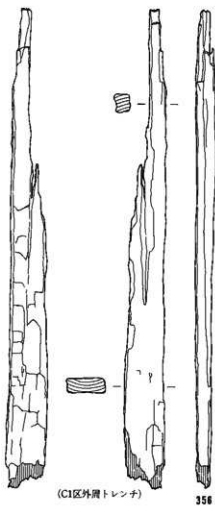
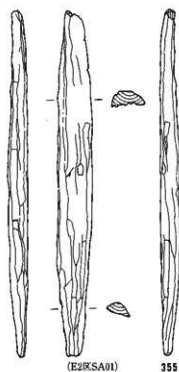
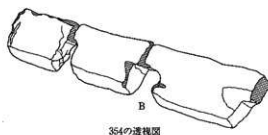
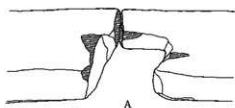
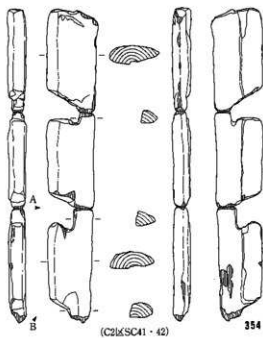
木製品69 (建築部材 屋根材)



木製品70 (建築部材 梯子)

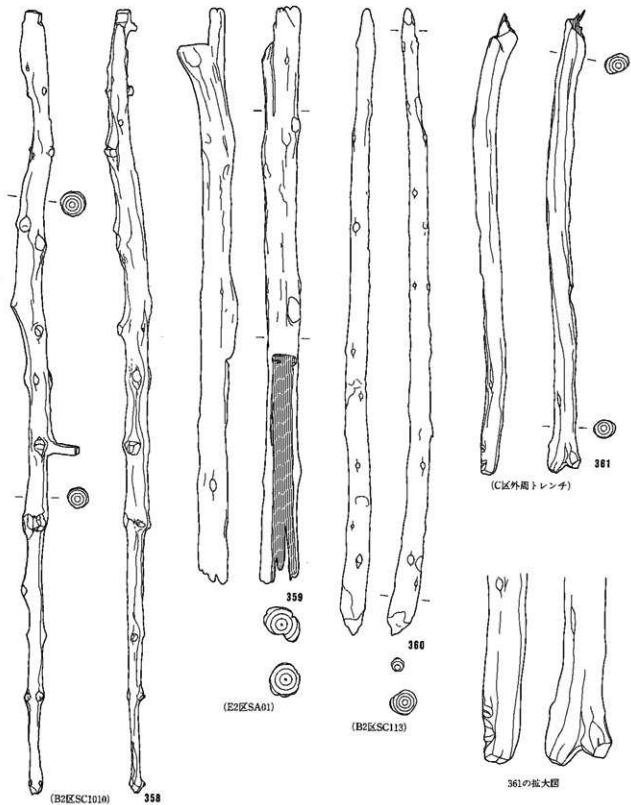


木製品71 (建築部材 梯子)



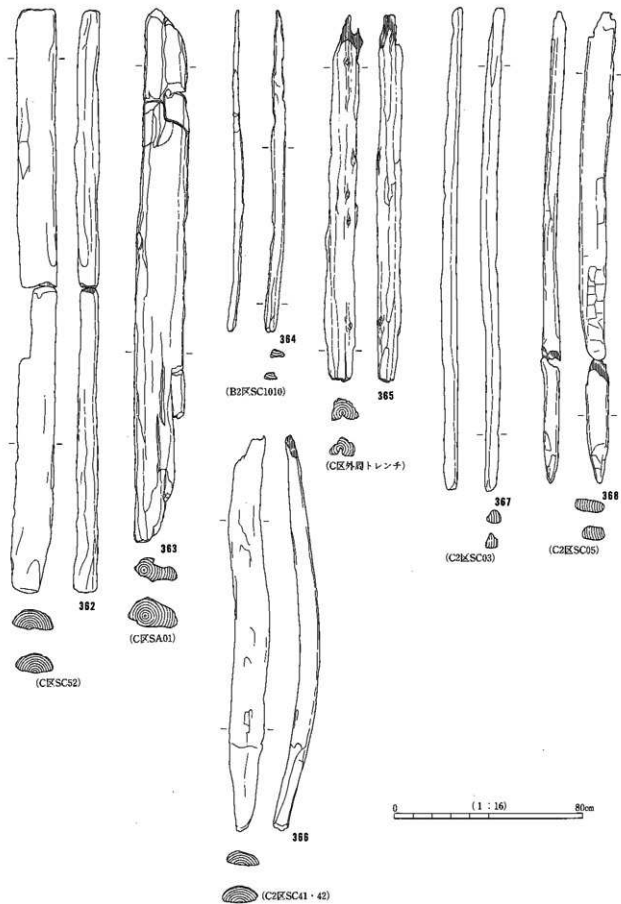
0 (1:12) 60cm

木製品72 (建築部材・加工材 マセ柱)

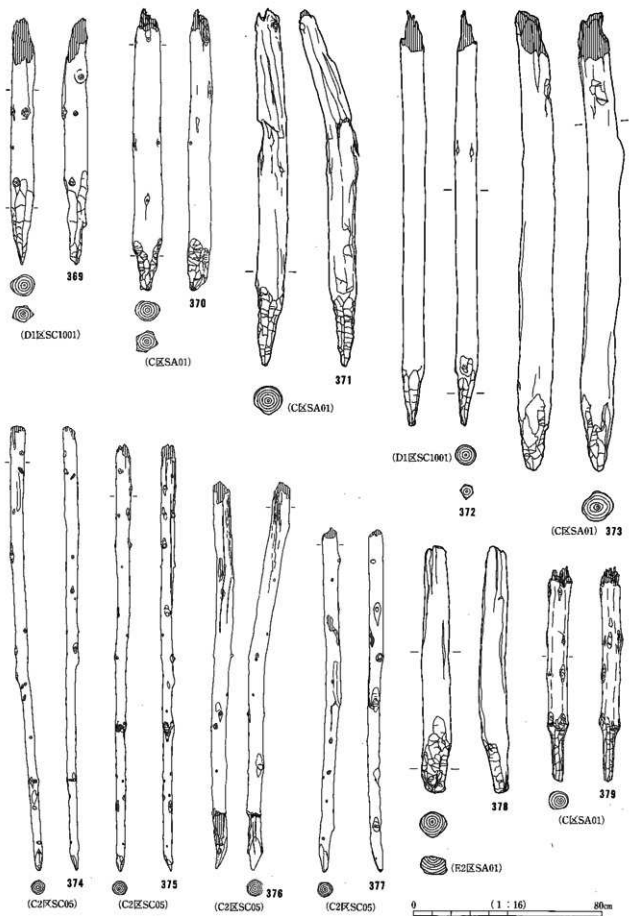


0 (1:16) 80cm

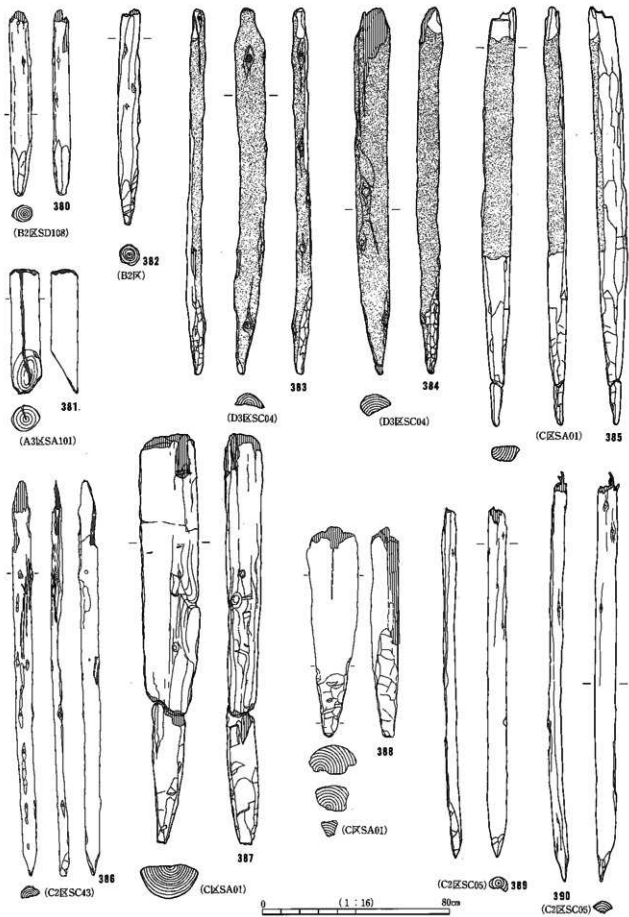
木製品73 (加工材)



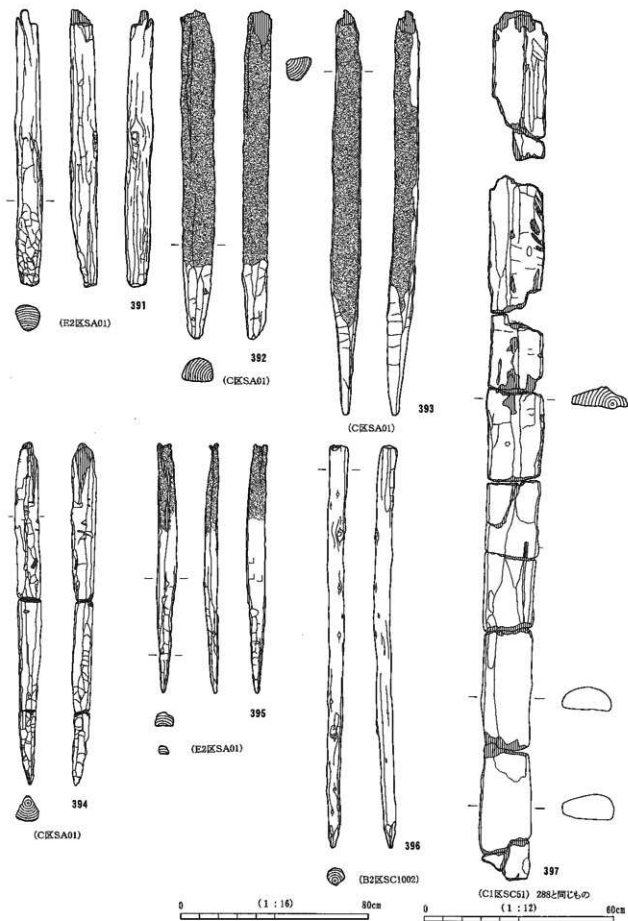
木製品74 (加工材)



木製品35 (有孔棒状木製品・有孔板状木製品他)



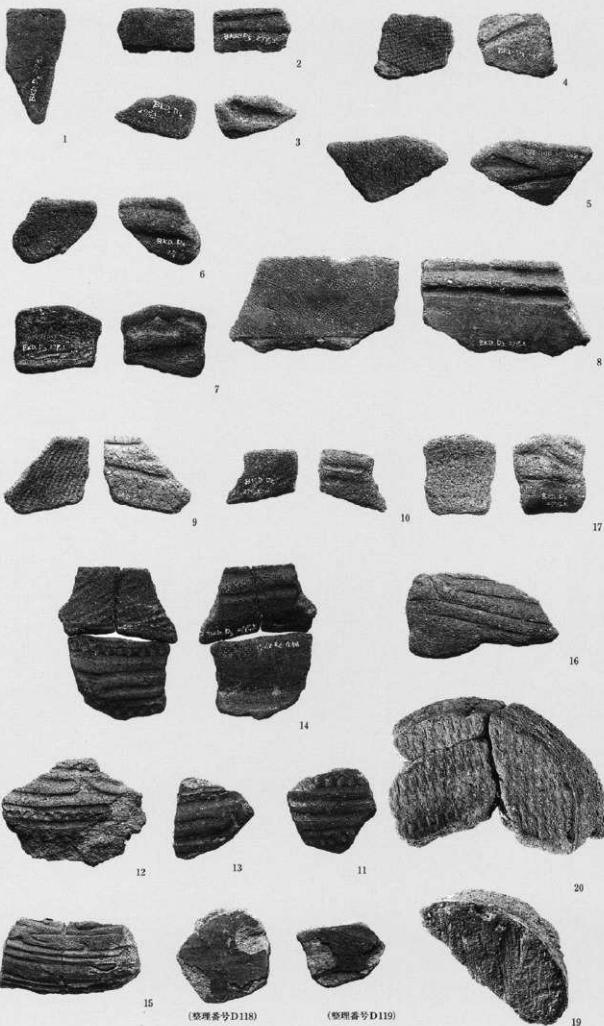
木製品76 (杭)

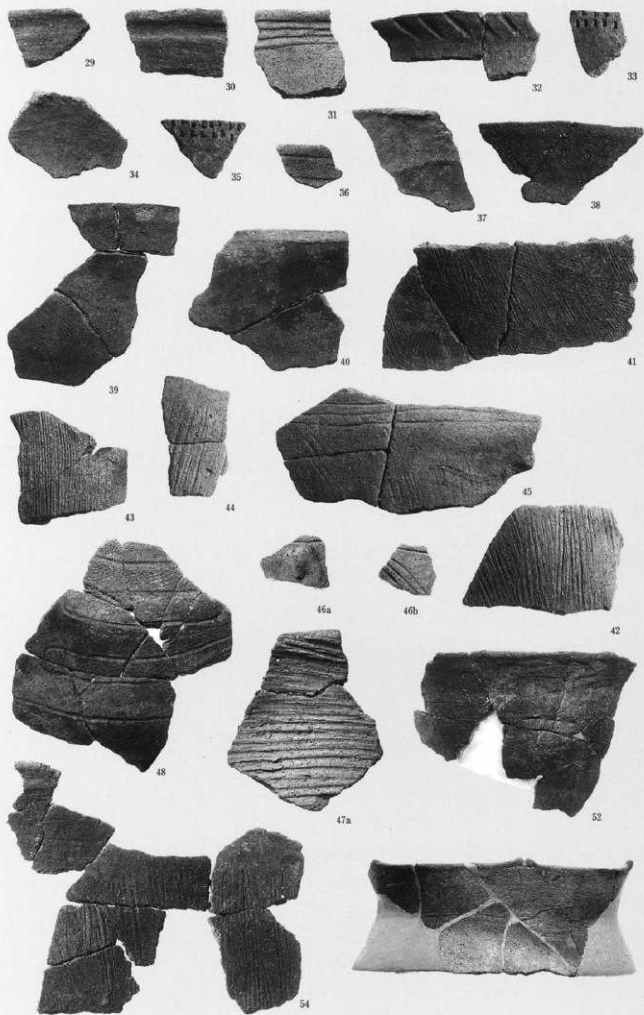


木製品77 (杭他)

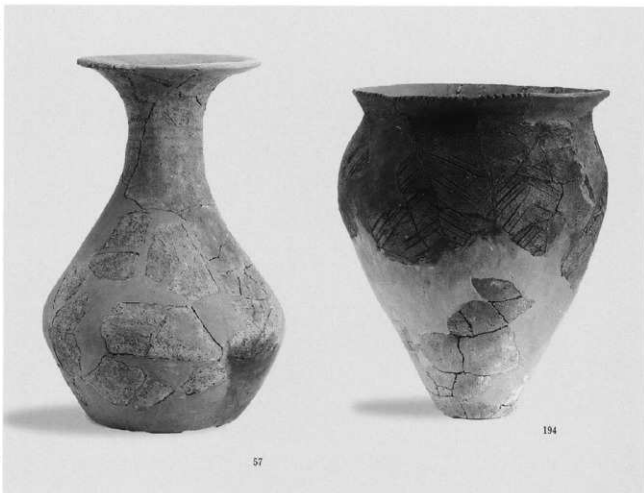
写 真 图 版

D地区
晩期土器



A地区
晩期土器

弥生時代中期

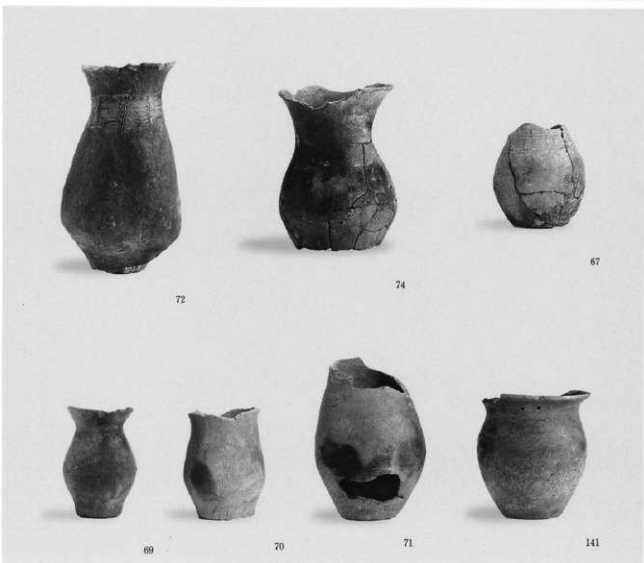


S \approx 1/4

67

194

弥生時代後期



S \approx 1/4

69

70

71

141

72

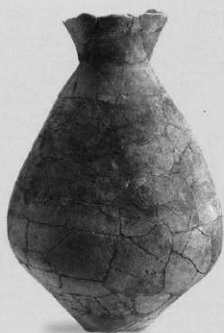
74

67

弥生時代後期



99



104



105



112



128

S ≈ 1/6
(128のみ1/4)

弥生時代後期



208



221



(整理番号E15)



222



218



220

弥生時代後期



223



216



217



238



236

S 1/4

古墳時代
土師器



399



419



356



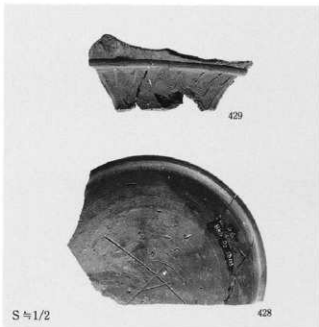
338



426

S 1/4

須恵器



S ≈ 1/2

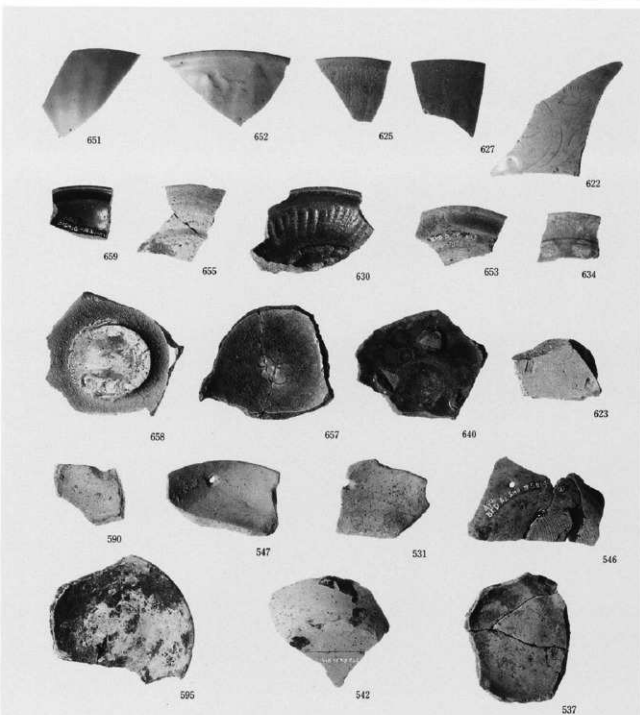
428



S ≈ 1/4

499

中世の陶磁器
カワラケ



S ≈ 1/2

596

542

537



石鏃
(S ≈ 2/3)



石鏃
二次加工がある剥片
水晶
(S ≈ 2/3)



打製石斧
(S ≈ 1/2)

磨製石包丁



66



64



65

磨製石斧



69



70



72

敲石



71



67



81

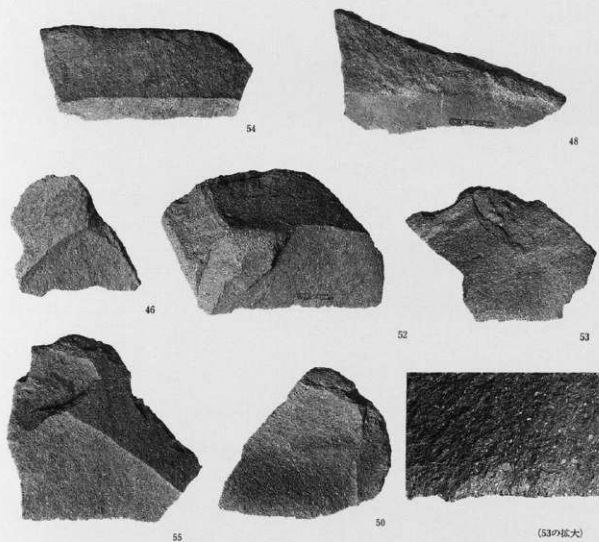


83



87

刃器

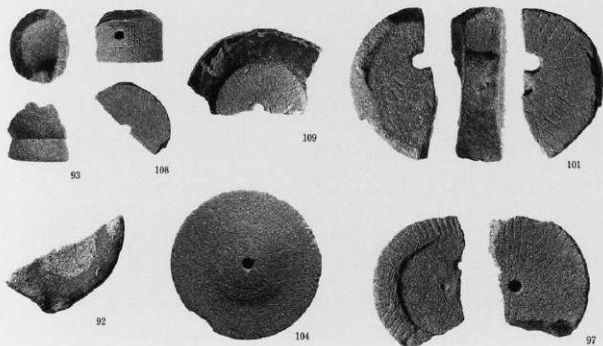


S ≈ 1/3



転石

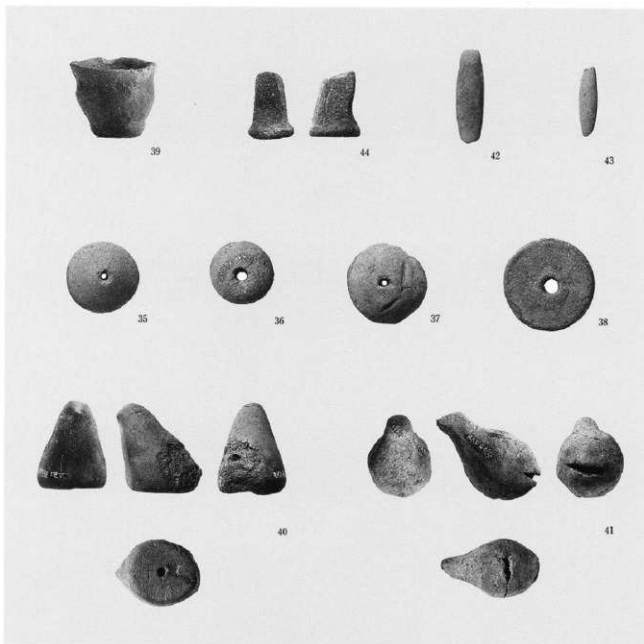
S ≈ 1/3



石鉢・石臼

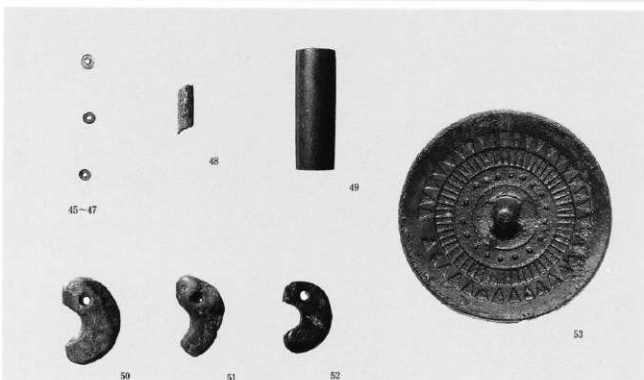
S ≈ 1/8

土製品



S 4/2
(島形土製品は2/3)

ガラス玉
管玉
勾玉
銅鏡



S 4/1